

奇譚クラブ

新しい風俗文献誌



2



奇譚クラブ

1970.2

作・六・鬼 団

好評の傑作集大成第四弾刊行!!

花と蛇

特集号

定価 五〇〇円 略号 「花」

団鬼六作長篇サディズム小説『花と蛇』は、昭和37年8月号の奇譚クラブ誌上より現在まで引続いて連載し圧倒的人気で満天下のSFファンを沸かせた傑作であります。過去三回に亘って発行した特集号も悉く売切れとなる人気でありましたので、ここに新しく昭和42年1月号以降の分を一括登載、堂々三百数十頁の特集に加え四馬孝画伯筆の秀麗きわまりない口絵を添えて御覧にいたします。

四馬孝画 口絵

美女羞恥責 花と蛇 画集

- 一、恐ろしい浣腸の末排泄を強要される美女
- 一、中腰で縛られた美女の品定めする調教師
- 一、清純な美女に初めて縄掛けしていたぶる
- 一、剃毛の羞恥責めに悶える地獄部屋の美女
- 一、全裸の開股縛りで深窓の美少女を責める
- 一、俵のように縛られて宙吊りにされた美女
- 一、股間縛りの全裸責めにされる絶世の美女
- 一、足吊りで強制浣腸を施される全裸の美女

本文内容見出し

発端 美女を狙う狼たち

第一章 清純な令嬢の屈服

(カメラと令嬢・女奴隷・口惜しき陶酔)

第二章 人身御供の令夫人

(燃ゆる美体・狼の酒宴・人身御供)

第三章 深窓の美少女とズベ公

(赤いしごき・再び奈落へ・奸計)

第四章 小夜子への執拗な調教

第五章 変性色事師の登場

(二人のシスターボーイ・化物の計画・京子の哀泣)

第六章 生れかわるスター京子

(崩潰する京子・夏の民・地獄の宣誓・まんじの舞)

第七章 激しいスターへの訓練

(奈落への道・美女と白痴)

第八章 低脳男と令夫人の結婚

(奴隷の花嫁・二対一)

第九章 愛弟子を調教する静子夫人

(蛇の果・悲しき決意)

第十章 羞恥と屈辱の日本舞踊

(美花の踊り・密着と百合)

第十一章 悪魔たちの哄笑

(白い関係・調教日記・手鏡)

第十二章 地下室の羞恥と汚辱地獄

(甘い調教・挫折)

第十三章 珍芸を開陳する令夫人

(おとし穴・筆と硯)

第十四章 淫靡な時代劇ショー

(三人の風来坊・時代劇ムード・牢獄にて・フランス式)

第十五章 華々しきショーの展開

(ショーの開幕・楽屋の中・松舞台)

第十六章 野卑な妾二人のいたぶり

(珍芸・姐の上)

第十七章 ズベ公達の邪惡な責め

(美女と野獸・ある日の回想)

第十八章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち

(美女崩潰・別離)

第十九章 悪党の執拗ないたぶり

(鏡の部屋・卑劣な録音)

第二十章 文夫と小夜子の屈辱的対面

(鏡地獄・断髪令嬢・悲しき対面)

第二十一章 勝ち誇る悪党一味

(受難の姉妹)

第二十二章 中国伝来の秘法

(鬼女よりの招待・中国の秘法・羞しい唄)

第二十三章 緊縛された美女の涕泣

(三悪女の狂態)

第二十四章 新しい餌食への触手

(義兄弟)

第二十五章 苦痛と屈辱の生地獄

(肉の媒介・美津子の号泣・同志討)

第二十六章 恐怖の責め続く

(地獄の接吻・巨大な責め)

第二十七章 結末なき責めの結末

(調教柱・復讐劇・肉の拷問・京子の珍芸)

「最新版」 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円
十組十枚 一〇〇〇円
二十組二十枚 一八〇〇円
五十組五十枚 四〇〇〇円
百組百枚 七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)
2 美貌は鞭に泣く (関谷富佐子)
3 襲う影に慄く (佐々木真弓)
4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)
5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)
6 縛られて困るわ (金原奈加子)
7 私を襲わないで (左近麻里子)
8 縛られて嬉しい (中河 恵子)
9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)
10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)
11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)
13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)
14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)
15 若肌は縄に美し (長井葉津子)
16 恥らいの女体美 (中河 恵子)
17 何故私を縛るの (金原奈加子)
18 感泣する胴縛り (ローズ秋山)
19 猿ぐつわの悦虐 (関谷富佐子)
20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)
21 足指はく字に (佐々木真弓)
22 麻縄の柔肌責め (金原奈加子)
23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)
24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)
25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)
26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)
27 全裸の縄は輝く (佐々木真弓)
28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)
29 縄に喘いだ童顔 (長井葉津子)
30 出臍を晒す縛り (佐々木真弓)
31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)
32 首膝縄にあえぐ (長井葉津子)
33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)
34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)
35 高手小手の全裸 (佐々木真弓)
36 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)
37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

38 竹棒責めに悩む (大島 照代)
39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)
40 縄目に喘ぐ表情 (中河 恵子)
41 開股縛りの正面 (中河 恵子)
42 猿轡に喘ぐ緊縛 (左近麻里子)
43 縛りの肌を見て (金原奈加子)
44 私は縛りが好き (金原奈加子)
45 強烈縛りを味う (金原奈加子)
46 麗身を横たえて (左近麻里子)
47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)
48 柔肌に縄は厳し (長井葉津子)
49 柔肌に痛む麻縄 (左近麻里子)
50 全裸の女体引廻 (中河 恵子)
51 開股縛りを諦観 (左近麻里子)
52 突き出した尻 (中河 恵子)
53 あどけなき緊縛 (金原奈加子)
54 首縄股間縛の女 (長井葉津子)
55 強烈後手で括る (佐々木真弓)
56 恥しい縛り初め (金原奈加子)
57 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)
58 囁かれる緊縛女 (長井葉津子)
59 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)
60 もう虐めないで (金原奈加子)
61 畳に転す股間縛 (金原奈加子)
62 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)
63 全裸の縛を見て (長井葉津子)
64 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)
65 臀部に答は炸裂 (関谷富佐子)
66 この裸身を捧ぐ (佐々木真弓)
67 諦観の縛り表情 (長井葉津子)
68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

69 美体は縄に映る (中河 恵子)
70 逞ましき臀部晒 (左近麻里子)
71 両手吊りに喘ぐ (長井葉津子)
72 左近麻里子の裸 (左近麻里子)
73 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)
74 捧げられる女体 (中河 恵子)
75 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)
76 麗わしの肌を縛 (佐々木真弓)
77 後手縛りの連続 (ローズ秋山)
78 開股の股間縛り (大島 照代)
79 強烈な縄目の女 (川越美佐子)
80 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)
81 豊麗な裸身の美 (関谷富佐子)
82 羞らいの流し目 (佐々木真弓)
83 肌を喰い込む縄 (長井葉津子)
84 胴締縛りと猿轡 (長井葉津子)
85 投げ出された裸 (金原奈加子)
86 正面の亀甲縛り (左近麻里子)
87 開股縛りの女体 (左近麻里子)
88 後手縛りの全裸 (中河 恵子)
89 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)
90 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)
91 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)
92 美しい女の縛り (佐々木真弓)
93 股間縛りに羞う (長井葉津子)
94 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)
95 椅子坐開股縛り (中河 恵子)
96 無防備な両手吊 (関谷富佐子)
97 息づまる猿轡 (川越美佐子)
98 人身御供の乙女 (長井葉津子)
99 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)
100 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



2月号 ¥350

☆ ミキとマキの華麗な悦虐プレイ写真

九月号のカメラ・ハント「飼育の愉しみ」で始めて登場した小池美喜と十一月号のカメラ・ハント「悦虐の昼と夜」で初登場した松山真樹子の二人の美女の写真をマキの方々に紹介します。十二月号のカメラ・ハントでは小池美喜、松山真樹子二嬢のピチピチとした肢体の躍動を描写しています。

縛られた美女二人

大手札三枚一組 略号四〇〇円
小池・松山二嬢 略号八とそ
雪の如き白さの柔肌を誇るマキと若鮎の肢体に小麦色の肌のミキと対照的な二人の美女を後手に縛り上げたマキ好みの資料。

全裸の美女を連縛

大手札三枚一組 略号四〇〇円
小池・松山二嬢 略号八とそ
若さの溢れたムチムチとした全裸の肌を惜しげもなく晒して二人の美女が、それぞれ個性的な美しい肢体を緊縛にゆだねている。

松山真樹子の縛り

大手札三枚一組 略号四〇〇円
松山真樹子 略号八とそ
ぽちやぽちやとした真白い柔肌は皮下脂肪がいかにも多そうである。埋没してしまいうでである。

一糸まとわぬ柔肌

大手札三枚一組 略号四〇〇円
松山真樹子 略号八とそ
高々と後手に縛り上げられ無抵抗のまま全裸の肌をさらしたマキはその無防備感だけで異常なまでの昂奮を味ったと告白している。

開陳した華麗肢体

大手札三枚一組 略号四〇〇円
松山真樹子 略号八とそ
咲き誇ったバラの花のような華やかなマキの肢体は細い洗禮を受ける一段と美しさを増し微細な肌の皺に至るまで鮮鋭に描出する。

縄に喘ぐ諦観の相

大手札三枚一組 略号四〇〇円
松山真樹子 略号八とそ
いみじくも辻村氏が言った真樹子のポーカーフェイスが全裸に緊縛という非常事態に至っても、そのまま平静を保てるだろうか。

マキを責めるミキ

大手札三枚一組 略号四〇〇円
松山・小池二嬢 略号八とそ
真白い肌のマキに縄を掛ける小麦色の肌のミキ。二人共若やいだ。肢体を誇らかに一糸まとわぬ全裸で縛られるマキの表情が凄い。

縄に通う愛情の焰

大手札三枚一組 略号四〇〇円

抱擁する美女二人

大手札三枚一組 略号四〇〇円
小池・松山二嬢 略号八とそ
全裸の肢体を晒して誰はばからぬ二人の美女が互いに相擁してレスポスの美しいムードを最高にまで盛り上げていくのは楽しい。

柔肌と柔肌の狂態

大手札三枚一組 略号四〇〇円
小池・松山二嬢 略号八とそ
二人とも極めて若々しい白肌と小麦色肌をびっぴりと寄せ合って手と足をからめ躍動する若鹿のような肢体はまことに素晴らしい。

相愛の極致を描く

大手札三枚一組 略号四〇〇円
小池・松山二嬢 略号八とそ
カメラ・ハントで紹介されたマキとミキは相思相愛の純粋な間柄であるが、カメラを前にして燃え上った全裸の二人の狂態を描く。

塚本鉄三

十一月号で塚本氏が久方ぶりにマゾの女王関谷富佐子さんを責めた記事が「狂乱の一夜」と題して掲載したところ大変な評判で、その時のフोटを譲ってほしいとい

鞭に狂う悦虐表情

う希望者が殺到しましたので、ここに凄惨場面だけ抽出しました。大手札三枚一組 略号四〇〇円
関谷富佐子 略号八とそ
全裸で後手に緊縛された女体の臀部を力一杯鞭打てば自由にされ狂う顔と肢体の表情の美しさ。

うねる鞭打ち肢体

大手札三枚一組 略号四〇〇円
関谷富佐子 略号八とそ
定評のある彼女の表情はマゾの極致とある。強烈なムチの連打に依って絶妙の肢体を開陳する。

足吊りの被虐肢体

大手札三枚一組 略号四〇〇円
関谷富佐子 略号八とそ
両足を逆さに吊って臀部を眼前に晒して、さあいつでも鞭打つて下さいという被虐ポーズに炸裂するムチ。感泣にむせぶ妙な表情。

美しきマゾの境地

大手札三枚一組 略号四〇〇円
関谷富佐子 略号八とそ
後手に縛られた全裸のまま、打ち突出した尻を乱打された鞭に悦びにむせび泣いている。

「申込先」

真は総て直接印画紙に焼付けた極鮮明なものばかりです。お申込みは大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社宛前金にてお願いします。

本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

二、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

三、本文の内容についても、刺激の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。



奇譚クラブ 第二四巻 第二号・通刊第二六二号

(昭和四十五年) 二月号 目次

△本 文▽

扉で一言 「SMは調味料か」 H・U生	(9)
山本八郎氏に対する 「一寸一言」 義 憤 生	(10)
辻村隆ファンの反論	
体験告白「生埋めプレイ顛末記」 松山 壮吉	(14)
11月28日のことなど「無 題」 井上 雅人	(21)
創作 蒼 い 陽 堀尾 和高	(24)
私の性癖を告白する 呆殿比呂志	(33)
連載小説「大 噴 火」 千葉 青鬼	(38)
創作 魔性のもの △後篇▽ 保藤 久人	(46)
史実研究切腹百年史 △女性篇▽ 中康 弘通	(59)
マニア奮戦談 世界の「美酒」を求めて 香川 泳三	(64)
幻想の部屋 「縛られた花嫁」 井風呂秋於	(72)
女斗美小説 ふたり妻 (2) 芦浦素舞夫	(86)
11月号寸感 想像の楽しさ 矢吹 弾	(101)

自由と飢餓の混在	石井 健次
ブラウン管の収穫	野津 敏生
サロン楽我記(第六十八回)	辻村 隆
イメージ画「カマキリの餌食」	小川 茂正
一九七五年一月某日の日記	竹口三十一
イメージ画「カット」	あらいかず
私を奴隷にしてください	安沢 達子
イメージ画「黒い影」	志羽 利也
変態ということについて	井上 久雄
イメージ画「苦悦交錯」	辻 梶太郎
編集部だより	編集部
新聞記事より「見たもの」	A・Z
フォト乗馬のスイス女性	佐野 夢二
随想腰巻の思い	早木 寿
Sコレクション「奴隷候補生」	豪 城二
皆さん、今日は	木戸 悦子
短信往来「東区の女王様へ」	五木 雅樹
秋山夫妻ショーを見る	帆足 保穂
イメージ画「強引な招待」	遠藤 春一
腰掛け	赤ちやん
映画鑑賞「生れる権利」	茂野 礼
フォト「さあ、どんときな」	赤畑 修造
新年号への讃美と欲求抄	九鬼好太郎
イメージ画「木馬責め」	宮城 昌子
SM時評 雑感「鬼女」を見る	木本 良夫
縛り映画鑑賞 私の採点	岡田 康彦
イメージ画「いたぶりを待つおんな」	神戸狂四郎

青春の陥穽「現れた男」	芳野 眉美	(104)
苦痛と医療「まそひすむ・てらふていくす」	泉 一郎	(110)
連載小説『地獄ホテル』(2)	藤見 郁	(114)
不思議な小説「花と蛇」に脱帽	梶 天平	(127)
読むためのシナリオ 女緊縛師	風流極道軒	(130)
連載・アブ紳士行状記『M派交友録』	鬼山 絢策	(144)
「健康面談」より 少年のオシメ	岩手 信夫	(151)
読者の警鐘 見せる雑誌への後退?	菅原 敏夫	(153)
フェチコント『呑みてえな』	戸塚 四郎	(150)
創作ストーリー「わるいやつ」	予世場良三	(160)
懸賞告白「縄と私」	三条 和子	(167)
ルポルタージュ『妖精を鞭打つ』	塚本 鉄三	(170)
懸賞創作「パンティ・バイト」	中山 久司	(180)
男性虐待快樂術(第十一話)		
「フレンチ・キツス劇場」(後)	馬族 保	(186)
雑感Ⅱ僕の憎まれぐちⅡ	室井重砂路	(202)
SMカメラ・ハント(八川路叢子の巻)		
『あつとおどろく人妻の豹変』	辻村 隆	(205)
読者通信	編集部選	(252)
目次カット「粧い」	室井重砂路	

編集部特写初産婦若妻臨月の資料案内

昭和四十三年三月号の奇クサロ

誌上で「或る願望に托して」という告白を発表して、本誌の緊縛モデルになりたいたというM女性と加子はその希望通りに辻村氏や山本氏のカメラの前でその緊縛姿を開陳したものであった。記事に於けるように、はからずも妊娠した若妻の女体をカメラの前にさらすこととなつた。満天下の妊婦マニアの方々は勿論のこと、緊縛ファンの方々にも貴重な資料となると考へ、ここに編集部の特写を試みたので、御希望の向きは打ち切りにならないうちに、大阪市阿倍野局私書箱第十四号、天星社宛へ代金同封の上お申込み願いたい。

妊婦緊縛の部

逆吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八さめ

臨月の妊婦に対して試みられた初めの完全なる逆吊り写真。M女性としての金原奈加子の決定的な協力があつてこそ成功すること出来た稀有の妊婦資料。

両手吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八さめ

大きなお腹を前面にさらして両手を高く吊られた無防備な姿態はM女性奈加子のマゾ心をこよな

くくすぐるのであった。

若妻初妊娠の哀歎

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八さい

後手高小手に厳しく縛つた胸の縄目は脂肪のついた柔肌を容赦なく痛めつけている。可憐な素顔に、豆絞りの猿轡をかまされた顔に哀愁の表情がにじみ出る。

妊婦全裸縛り全身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八さい

小柄ながら均整のとれた肢体の奈加子であつたが、今は臨月近い太鼓腹を突き出して、その全裸の全身像は一種異様なエキセントリックの美を放ち出している。後手に縛られた初産婦の全身を見たい方にはこの集をおすすめする。

妊婦腹の緊縛側面

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八さみ

今まさにちきれそうに便々たるお腹を誇らしげにさらして、きりきりと肌に喰ひ込む縄目を甘受した若妻は、淋しくうつむきながら自分のさがを悔いている。

強烈縛り妊婦責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八さる

沢山の縄を用いて皮下脂肪の豊かな肌に埋もるばかりに一杯縛り上げた若妻の臨月腹を中心にし

て鮮鋭なレンズの目は産毛一本も余まざりとは執拗に妊婦の神秘をあばきだしてゆく。

若妻の緊縛妊孕美

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八さま

人妻となつたなまめかしさが全裸の全身にそこはかとなく漂つてはいるが、妊娠という生理的な変化は更に彼女の肉体を明らかに変化させている。その変化に對して非情な縄は女体のべールを荒々しくはぎとつてゆくのだ。

膨満妊婦乳房責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八さむ

授乳に備えて乳房のしたたるばかり膨大となつた乳房を更に強調するように縄はその周囲を無慈悲に締め上げた。飄々とした無情な手は、まるで太鼓のようにはりきつてゐるのだ。

妊婦全裸姿態の部

臨月腹全裸晒人形

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八さち

二十才の若さに溢れた女体ながら妊娠という異常な宿した女体ながら裸像を惜しげもなくカメラの前に晒して見る者の好奇心をそそぐ。縛りなしの妊婦ヌードを好まれる方は、この全裸姿態の中から選んでいただきたい。

躍動する妊婦裸像

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八さほ

胎動する胎児を宿している便々たる腹部をさらして、若々しい肢體は、指示される通りの動きを示す。粘つていカチツクの動的な動きを、その動きを追つて次々と躍動する妊婦の姿態をキャッチしていった。

妊娠という異常美

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八さへ

単なるヌードと違って、妊娠という冷徹な事実は、この可憐な少女の肢體を一躍動物的な生々しさにかした一面、それは普通では見ることの出来ない女体の美しさを見事に發揮している。貴重で稀少なこの異常美にしばし酔つて頂きたい。

見てほしい臨月腹

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八さと

恥かしげに、ときには誇らしげに、女性だけが経験することの出来る妊娠という事実を、その裸身ににじませて、異性の目で見てほしいという露出症的M性をポーズにあらわしている。

妊婦全裸全身肢體

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八ささ

妊婦マニアの中には縛りのない妊婦のヌードを好む人がある。妊婦といつても経産婦では、やはり新鮮な魅力は薄いだろう。



S Mは調味料か

未開の土人の間では三度の食事は飯と塩だけで副食物は何にも摂らないのが多い。日本でも昔は一升飯を食うといって飯だけを大喰いして澱粉以外の蛋白質や脂肪その他の栄養分も米飯からのみ摂取する風習が一部にはあった。

たしかに生命を維持するという点からだけ考えるならば、三度三度の食事に米飯だけで差支えないかもしれない。しかし現代の文明社会に於ては、単に生命を維持するということだけを考えずに、食事に対してあらゆる工夫をこらしているのが普通である。主食の米飯とかパンについてのもそうであるが副食物についてはあらゆる材料を開発し料理法を駆使して食欲を満足させようとしている。

これと同じようにセックスの面に於ても調味料として或は薬味として適当にSMを利用応用してみても如何であろう。琴瑟相和すとか琴線に触れるとかいう言葉があるが、まことに絶妙の調べが、そこに奏でられることは体験者の語るところである。ゆめゆめ忘れてはいけない。

山本八郎氏に対する辻村ファンの反論

一寸一言

義憤生

山本八郎氏は『常連作家を批評する』（昭四四・九月号）で、辻村隆氏に言及し、氏の労を多としつつも、いくつかの欠点を挙げている。即ち、

（一）SMハントは「何時、何処で、どのような女を、どんな風にして料理した……」というのを、辻村氏独特の文章で描写されているというだけに過ぎぬこと。

（二）そのためSMハントは「鬼六談義のように、人生の断面にメスを入れるという文学性が、全くないといえる」こと。

（三）辻村氏は「もう少しモデルの女に対して鋭い目を向け、作家としての視野を充分に発揮し、これをとらえるべきである」こと。

（四）SMハントは「ハントした一人の女性を料理する過程を描くだけでは、自然と文章も水増ししていかねばならなくなり、そういう欠点が、作者とモデル嬢との長たらしい会話の中に出てくる」こと。

（五）人物描写は「余り上手でない」こと。

（六）「カメラハントに登場してくる人物がすべて同じように見え、同じようなことばかりしゃべっている」こと。

（七）「殆ど関西でハントされているのに、女性がみんな歯切れのいい東京弁を使っているのが何か空々しく作りごとらしく感じる」こと。

私は奇クの人気の大部分が、辻村氏の力に負っていることを知っている。故に、山本氏の辻村評が山本氏一人のみであって「奇ク」全読者の意見でないことも推察し得る。しかし、一人の山本氏がいることは、辻村隆二十年の業績を考えると、実にさびしい思いがする。山本氏にとって、辻村氏は批評するに極めて大きすぎた。極言すれば山本氏には少しも辻村氏が理解されていないのである。「群盲象を撫す」というが、山本氏はその類だ。

私は以上のような考えから、山本氏の談を駁し、自らも群盲の一人となって、辻村隆と

いう、はかりしれない巨象を撫でてみようと思う。なお、私は辻村氏とは、お目にかかったことはない点を書きそえておく。

（一）について

山本氏はSMハントを何とお読みになっているのだろうか。氏は、あきらかに誤読されている。これは小説ではないのである。このシリーズは山本氏の言われる如く「何時、何処で、どのような女を、どんな風にして料理した」ということの報告なのである。それでよいのである。辻村氏自身からハント・シリーズの目的を聞いてみよう。

私のカメラハントの本当のテーマは、フォトでもって大体のハントのストーリーを説明し、文は従にしたかったのです。（昭四一・七月号「夫妻プレイの夜は更けて」）

辻村氏はハントが、フォトを主としたルポルタージュであることを、ここで鮮明にしている。しかし現今の悲しむべき社会状況から編集部の圧力によって、従であるべき文が主



村隆氏(右)と団鬼六氏(左)

になっちゃったのである。

故に「辻村氏独特の文章」による「描写」を読むわれわれは全くのひろい物をしているわけだ。しかし反面、氏の素晴らしいフォトを心ゆくまで見ることを禁じられているのであるから、それは代償として当然ではあるが。

私は、このシリーズがルポルタージュなのであるから、辻村氏があまりサービス精神を発揮して面白おかしくしようとはせず、もっと「何時、何処で、どのような女を、どんな風にして料理したか」の探究に徹して、それを「氏独特の文章で描写」されんことを切望する。

山本氏は、ルポライター辻村氏を小説家辻村氏と間違えているのだ。われわれは小説家辻村氏ならば、ハントシリーズ以前の輝かし

い氏の業績において堪能することができ。山本氏は先ず辻村氏のそれらの小説を読むべきであったのだ。

(二) について

(一)において記したように、このハントシリーズが女性ハントの報告書なのであるから「人生の断面にメスを入れるという文学性が全くない」という山本氏の不満が的はずれであることは、改めて言うまでもなからう。純粹のルポルタージュに文学性(山本氏の言われる文学性とは、純文学の持っている文学性のことであると解釈する)を求めるのが、そもそも、おかしいことである。もし、ルポに「文学性」があったとしたら、そのルポはルポの価値をいちじるしく失うであろう。

いや、こう書いたのは私の山本氏の説に対する誤読なのかも知れない。山本氏は「人生の断面にメスを入れる」という文学性と言われている。とすると文学性を「人生の断面にメスを入れる」という一事に限っているのかもしれない。

もしそうならば、辻村氏のハントシリーズは実に「人生の断面にメスを入れ」ていっているではないか。登場している女性の個々の告白、反応など、いずれも「人生の断面」をのぞかせているものでなくてなんであろう。

例えば、——そう、沢山あって困る程だがまあ例えば、「肉塊の蠢き」(昭四四・五月

号)の飯田カオル、「乱倫の生態」(同)の滑川幾代、「快楽の紋章」(昭四二・十一月号)の会長と芝梨枝子。等々、いずれもそうである。(以上、挙げたのは最もものぞかせているという意味でなく、例えばなのである)私はそこに「人生の断面」をはっきり見ることができ。山本氏は如何。

又、「文学性」をもっと広い意味に解釈するならば、辻村氏のこのハントシリーズは、一篇一篇、極めて文学性が溢れているといえよう。辻村氏自身、いく分かのフィクションをまじえて書いたとのことであるが(昭四一・四月号「友あり、遠方より来たる。亦、愉しからず哉」)そのまじえたフィクションの部分に、小説家辻村隆が、おどり出ているのである。故に「ハント」は、その内容もさることながら、その文学性の故に一気に読了することができ。われわれは何時しか、辻村氏と共に氏の運転する自動車に乗って不安と期待を抱きながらハントの女性に会い、レストランへ行ってビールを飲んで肉を食べ、そしてホテルへ急ぐのである。これこそ辻村氏の文学性の故でなくて、なんであろう。私はハントの各篇において、部分部分にはめこまれた文学性を非常に価値あるものと思う。私が辻村氏の文章に、いやその文学性に一番酔ったハントは「悦虐のカルテ」(昭和四三・九月号)の最後のところである。



立川談志師匠(右)と飲談の辻村氏

『プレイのあとを反芻するように、私は甘い夜の外気を大きく吸って、カロコロ下駄をならしながら、ひなびた鵜沼の夜道を当てもなく歩いた。

フト見上げる彼方に、黒く聳える白帝城の中天高く月は煌々と冴えわたり、眼下に流れる木曾川の激流が、月影を岩にくぐり、白く散っていた。

私の悦虐のプレイカルテに、こうして又今宵新しく、一人の女性の名が書きこまれていった』

山本氏、これでもいけませんか。

(三) について

山本氏の意見で、一番不明瞭な所である。「モデルの女に対して鋭い目を向ける」とか

「作家としての視野を充分に発揮し、これをとらえる」とは、如何なることを意味するのであろうか。辻村氏の筆が生ぬるいということか。或いは、もっとモデルを責めよということか。しかし、いずれにせよ、辻村氏対モデルは人間対人間ということである。故に、そこには加害者と被害者の関係でなく相互に人間的情味が交流していなければならない。そして、その時、辻村氏の人格が浮かび上がってくる。氏は決して相手の女性に対して「鋭い目」を、向けることができないのである。

氏は「女性は、みんな可愛いもの」(昭四四・六月号「女の肌の燃えるとき」と言っている。そして氏は、可愛くてたまらない女性を、まるで、こわれ物でも扱うように、愛しつづけている。氏にあっては「縛りの心は愛心」なのである。しかも、その場合アイ・ラブは辻村氏の夫人への裏切りとなるため、いかなる時でもアイ・ライクで止めてしまう。

(昭四二・五月号「縄は知っている」)

これは決して、あのいまわしいサディストの姿ではない。一人の真の紳士ともいうにふさわしい男性の、男性的対女性感情である。実に健康的ではないか。氏自身、自分をサディストだと誤信されているらしいが、辻村氏は決してサディストではない。その理由は別の機会に述べよう。

かかる人格の所有者辻村氏が、なんでサデ

ィストのように女に向かって暴れまわることができよう。

辻村氏は冷然と死体を解剖する科学者ではない。ロマンティックな文学者である。ハントシリーズは一人一人の女を料理しているのではなく、実は辻村氏自身が辻村氏を語っている文章なのだ。時間にきびしい辻村氏、運転のうまい辻村氏、ビールの好きな辻村氏、女性に時々ふられる辻村氏、愛妻家の辻村氏等々。われわれは敬愛すべき一人の男の姿をここにみる。

(四) について

山本氏が評される「作家とモデル嬢との長たらしい会話」は、たとえてみれば水墨画における余白のようなものである。もし、いきなり女を縛りの、吊しの、というのでは、まるで一枚のカルテを読むようで、実に殺風景であろう。又私は、この辻村氏とモデルとの対話の過程に、山本氏が辻村氏にたりないといわれた「人生の断面」をみるのである。故に辻村氏のルポは少しも「水増し」したところがない。「水増し」など氏の人格が許さないであろう。

又、山本氏は「書かなくてもいいことを長く書いてある処があり」といわれるが、これは思うに辻村氏が女性とホテルに行く前のこと、例えば、レストランでビールを飲んだり町を散歩したり、ドライブしたりすることを

さすのであろうが、これらのことが必要な理由は(三)の反駁で書いた。故に、これは私にとっては「書かなければならないことを少しの無駄もなく書いてある処」なのである。

(五) について

一体、何と行って反駁したらよい一寸、迷ってしまう。あまりにもバカバカしいことだからだ。辻村氏が如何に人物描写にたくみであるかは、辻村氏の小説をどれでもよいから一読なさるとよい。

私は、あの「奇譚三十九夜物語」はいうまでもないが「お天狗松シリーズ」の「七化小僧出現」(昭三十・十月号)、「木曾の野郎間」(昭三十・四月号)や、「非情の部屋」(昭三三・七月号)、「妖異人肌人形」(昭三三・十二月号)、「ハイド侯爵夫人」(昭三五・四月号)などが印象に残っている。

いずれも人物描写が実にうまい。特に「ハイド侯爵夫人」は、芥川竜之介の開化物を読んでいるような、文学的にもすぐれた作品であった。

山本氏は「いや小説でなく、ハントにおける人物描写だ」といわれるかもしれぬ。それならば、こう言いたい。ハントの女性とは、どれをとっても、実に女臭く描写されているではないか。みな、女の「業」にもだえ、温かく丸く、そして柔らかい。私は、そう思うのだが、果たしてどうだろう。



撮影所で賀川雪絵(右)と辻村氏

(六) について

これは当然ではなからうか。モデルは皆、人間なのである。女なのである。そして、この狭い日本で皆、同じような生活をしているのだ。しゃべることも同じようになるのは不思議ではなからう。しかし、その同じような女たちに一人一人違った女臭さを感じさせる辻村氏の描写力に、私は注目したい。

四十四年十二月号の編集部だよりによると最近では外人のモデル志願者もいる由。日本人の女と違って、どんなことを言うか、山本さん、一しよに楽しみにしていきましょう。

(七) について

女性が皆、東京弁を使うのが空々しく作り

ごとを感じさせるとのことであるが、果たして、そうだろうか。これには辻村氏は、ハントは全国の人を読むのであるから共通語を使っている、言われていたが、確かにそうすべきである。

ともあれ、浅学の私が、ここで、くどくど言うよりも、泉鏡花、あの詩のような文章で知られる泉鏡花の言葉をひこう。

『小説中の会話は、成るべく、東京言葉を以て、統一したいと思ひます。統一と言へば少しむづかしくなりますが、田舎言葉では、到底一般の読者に意味が通じませんからね』(『会話・地の文』明四二・一)

私がこの雑文を投稿したのは、辻村氏二十年の努力の反響が、山本氏の意見で代表されるものであるならば、実に辻村氏が気の毒だからである。そして辻村氏が怒って、パイとわれわれの眼前からいなくなってしまうことを恐れたからである。しかしそう思いながらも一方では「奇クへの提言」(昭四四・十二月号)の三条剛氏のように私も近頃の辻村氏の健康をハラハラしている者の一人である。毎月、辻村氏のハントを読みたい。しかし辻村氏のお体のために、毎月というノルマをはずすべきだ、という矛盾した思いをいだいている。辻村さん。どうか、くれぐれもお体をお大切に。

— 体験告白 —

生理めプレイ

顛末記

松山壮吉



カット・春川ナミオ

私の結婚当初は、ごく平凡なものであったが、やがて、夫S妻Mでのプレイを楽しむようになり、時折、夫M妻Sと、役割を交代して、工夫を凝らして妻に加えた責めが、そのまま私の体に返ってくる味を楽しんでいるうちに、いつか、夫M妻Sで固定することになった。

私の場合、わりに自然に、抵抗の少ない形で、最も好ましい結果を得たわけだが、はじめから、そういう予定なり見通しなりがあったわけではない。たまたま、私の性向によく

適合した形が実現した幸運を、幸せとするのみである。

夫M妻Sの形に固定してから、ずいぶん、さまざまなプレイを試みて来た。子供が出来るまで二人だけの期間が大分あったし、住居その他の条件にも恵まれていたし、私の心中には、やれるところ迄やってみたいという、一種の情熱があり『清教徒的情熱と義務感をもって』フリーセックスならぬ、SMプレイに精進した感があった。しかし、子供が出来てからは、よほどペースが落ちていたので、

もう二、三年も二人だけのくらしを続けていたら、多少は資料的価値のある告白も出来るようになっていたろうと、残念にも思っている。

もっとも、如何に住居条件が良いといっても、近隣には気配も気取られまいとすると、本格的な鞭打ちプレイは家ではやりにくく、適当な場所を求めて遠出することになり、家では鞭打ち以外の、あまり音のしないプレイを、さまざまに工夫して行なった。

当時のプレイのうちで、印象の深いものの

一つ、生理めプレイの顛末をここに記してみよう。これは失敗記といってもよい、一回きりで終ってしまったプレイであるが、私にとっては忘れ難いものであり、条件を整えて繰返してみたい気持ちも次第に強まっているからである。

自然的にといっても、やはり私なりの苦心育成の甲斐あって、妻の女王様振りも、すっかり板につき、暇を作っては、せっせとプレイに励んでいた時期のことである。

夕食の時、庭の桜桃の樹の下に、朝にはなかったのに、深さ一メートル位の四角な穴が出来ているのを見て、ふとM的な直感があって妻を見た。妻は澄まして垣の修理に来て貰った律気な日傭取の老人が、塵芥類を埋めて植木用の堆肥を作るよう掘ってくれたのだと説明し、「もっと隅の方が良いって言ってたけど、桜桃のこやしになるからといって無理にあそこに掘って貰ったのよ。別の事に使う時に茶の間から見えた方が良いと思って」と意味あり気な流し眼をする。「フン」という顔をしてみせたが、実は妻が積極的にプランを出してくれるのは常に歓迎するところで、その夜の寝物語に生理めプレイについての詳細な案を練り上げて、早速実行の段取に移す

こととなった。

寝物語に案を練ること自体が適当な刺激にもなり、夫婦相和するチャンスにもなるので広義のSMプレイは既にその段階から始まっているのである。

押入改造の監禁室や、物置やトイレを利用してのプレイで、二四時間、四八時間等の拘束経験を積んでいるので、今度のプレイも四八時間で計画する。

こういう長期拘束プレイの時、M側はじっくり被虐感が楽しめるが、S側は手持無沙汰になる恐れがある。せっかくの休日に夫と話もしたい。街にも出たいと思っているのに、夫の希望で夫を拘束監禁してしまい、所在な一日を送るのでは、形は加虐でも実は被虐者であり、これではM側としても心から楽しむ事は出来ない。そこで私は通常に行なわないうフレンチキスを、こういう長期プレイの時にはふんだんに行なう事にしており、私を監禁室に拘束した時など、妻は気の向き次第何度でも私を引出して、奉仕をさせる事を楽しみにしている次第だ。

長期の拘束監禁プレイをより有効に、刺激に富んだものにする為には、妻の楽しみの相手になる第二の男(或はLの女)の存在が有

益であろう。拘束監禁されて二人のお楽しみの気配をじっと聞いている。或は更にそれに奉仕するという処にMの楽しみの真骨頂があると思う。ただし私の場合は、思うだけでそこまでは実行しておらず、もっぱら妻に女どうしの交際を奨励し、クラス会その他グループの集まりに家を提供したり、妻の妹達を泊りがけで遊びに来させたりして、妻に幾分の生活の変化を楽しませ、そういう折をプレイと合わせる様に心がけたのである。

今度も例の通り、私の出張で淋しいからということにして、妹たちに泊りがけで遊びに来るよう里に電話させる。家では厳しく禁止されている花札や、時には麻雀などもさせて貰えるので、連中は何時でも喜んでやって来るのである。

その一方で私は穴の様子を点検して入念に準備する。深さ大きさは妻が監督して作らせただけあって丁度良い。手足を拘束して上から土をかければいい筈だが、長時間の拘束はよほど念入りでないと緩みがちだし、気分的にも絶対に緩まない条件を作っておく事が望ましい。

そこで、左官が足場を組むのに使った丸太や道具が、そのまま物置に保管してあったの

を利用して手頃な杭を作り、杭の上端がほぼ地表と揃うまで穴の端の方にうちこむ。縛りつけるべき高さにそれぞれ杭の横に釘を打って、夜間でもすぐ分かる目印とする。穴の傍らに盛上げてある土に鍬をいれて土塊を砕き石を去除く。

押入を改造して監禁室にしたり、物置に手を入れたり、椅子等を改修したりして馴れぬ大工仕事に骨折ったこともあり、自分の縛られる場を作るために汗を流して勤勉に働くのもマニアならではのことで、我ながら御苦労な次第である。

本当は地面から生えた首を茶の間から眺めて貰いたい。太陽に曝され、夜露にうたれ、トイレ代りにしてネクターもかけて貰いたいのだが、義妹を招いている以上はそうもいかない。頭より二周り位大きい、古い漬物桶を地表に出ている首にかぶせ、その上に大きい盆栽の鉢を置いて、妹たちの眼を避けることとする。

桶は古くて板の間に多少隙間があり、まだ蚊蚊の出る季節なので古い蚊帳の布を裏一面に貼って、蚊の侵入を防ぐこととする。蚊責めというのも、ごく有効な責めだと思うが、蚊に喰われて凸凹になった顔面は皮膚を走る

鞭痕とは違って甚だ美観を欠くので避けたいのだ。

スコップや大工箱など必要な道具類は木陰に置いてカバーをかけ、穴にも筵をかけて杭が目につかぬようにすると、これで準備万端整ったのである。

プレイ開始の日は、夕方から高手小手に縛られて、ネクター以外の夕食は与えられず、夜のふけるまであれこれとプレイを楽しんだ後、一旦縄を解いてもらい、裸にゴムガードル（ニューポートの製品で生ゴムの半股引様のもの）をつけ、その下端に巾広のゴムバンドをはめ、手首足首はサポーターで保護してそこに鎖無しの腕輪足輪をつける。鎖なり南京錠なりで連結すれば、たちまち手錠足錠になる物である。

そこで改めて、思いきり小手を上にあげ、前かがみに背を丸めた姿勢になる。所謂猿縛りという厳しい高手小手、首縄付きに縛りあげられ、妻がはき通して存分に汚れたパンティの、さいぜんからのプレイで十分に味わってねとねとになったヤツを改めて口に含み、綿ロープを齒の間に噛ませる原始的なきつい猿轡と、日本手拭による目隠しをされ、縄尻を取られて、わざと遠廻りの勝手口から庭へ

下りる。妻は軽装にレーンシューズで足ごしらえをし、片手に笞、片手に縄尻を持って私を追い立てるのである。

全く無防備な裸身に夜の外気を感じ、裸足で土を踏むのは、何度経験しても不安で、かつ被虐の快感がある。勝手は知りきった狭い庭だが、目隠しをされると大変不安である。町内の目隠し競争などでは、結構さっさと走る人もあるのだから、私は特別臆病なのであろうか。おそろおそろ数歩進むともう何かにぶつかりそうで、どうにも足が前に出ず、立止まったところを力いっぱい尻を蹴とばされる。大きくよろめいた拍子に首縄が締め、ゲーツとなって目を白黒する。

首縄を緩めて貰い、思い切ってさっさと歩き出すと、たちまち裏庭から表庭へ廻る曲り角を行き過ぎてしまい、ぐいと縄を引かれた上、ふくらはぎを蹴とばされる。「この次は注意するのよ」と小声ながらきつく警告されたのに、勘が鈍いのであろう、次の角を通り過ぎて、罰としてレーンシューズの踵で足の甲を踏みつけられる。加減して踏んでくれているのだろうが、或は力いっぱいかも知れぬ。とにかく痛い。

どうやら穴の傍に到着すると縄を解かれ、

猿轡も目隠しも外して貰って、早速に自分の手で、穴の中に自分を拘束する作業にとりかかる。

まず、杭の釘で目印とした四カ所に短い綿ロープを結びつけ、次に穴の底にあぐらをかいてすわり、両足首の重なる所で両方の足輪を南京錠で連結する。杭に結んだロープで下腹部と上腹部をしっかりと杭に縛りつける。そこまで自分でやって、杭を後に抱くようにして手を後ろに回すと妻が両手首の腕輪を南京錠で連結して、後手錠杭繋ぎの形としてくれる。南京錠の鍵穴には土が入らぬよう、あらかじめセロテープを貼ってある。

手首をもう一度鎖で巻いて、その鎖をしっかりと杭に巻き、末端を釘にかけて釘の頭を斜めに叩き込んで鎖を固定してもらう。鎖の途中にも二本、釘をうって同様に固定。これでどうあがいても一センチも手を上下させる事は出来ない。

次は、杭に縛りつけてくれる。妻が穴に入り、レーンシューズで私の太腿を踏まえた姿勢で、ぐっと力をいれてロープを締めると、思わず、ウムと唸るほどこたえる。胸よりも太腿にこたえるのである。

妻は、こうして首から下はほとんどビクと

も動かぬよう固定すると、次はスコップで土をいれる。腹部まで埋まると、穴に入ってトントンと踏み締め、胸元まで埋まると又踏み締める。土がザラザラと体にかかる感触、踏み締められる圧力、眼の前をスカートとレーンシューズが上下する。シューズの先で胸許を軽くなぶられ、ひどく感じて思わず声を出す。興味を持ったらしく、しゃがんでゴム手袋の手で胸許を軽くもんでくれる。いたぶりに反応する受感が、ぐっと高まるのが、はっきり分かる。

だがほんの二、三度の軽いもので中止してしまい、もう少し、と云った気持ちで思わず哀願する眼の色になってふりあおぐのを構わずザラザラと土を掛けて、首まで埋めたところでもう一度念入りに踏み固め、「さあ御馳走よ」と口に押しつけてくれるレーンシューズの爪先を一生懸命になめる。ゴムと土の味が少し苦いが、「おいしい？」と問われて、「ウン」と答えると、「では口を開いて、ハイ、サービスよ」と土の塊を一つ口中に入れられ、愛用のマルゴ製の革轡（首輪つき）をつけられ、さらに自転車のチューヴから作ったゴムバンドで上からしっかりと締められる。土の味が口中に広がって来る。

いつもの監禁プレイの際には、黒のゴム全頭マスクで眼も見えない様にするのだが、この度はゴムマスクはしない。妻は桶をかぶせ桶の下端を移植こてを使って少し埋めるようにし、上に鉢を置いて、簡単には桶を動かさないようにした上で、桶の隙間から「では時間まで来ませんかね。ごゆっくりお楽しみなさい」とささやいて立ち去って行く。

その後は一応予定通りの進行である。翌日は早くから妹達が出来て来て、勝手な料理を作ったり、花札をしたり、おしゃべりしたりで夜半まで賑やかし、二日目は午後揃って遊びに出て外で夕食をとり、帰宅する妹達を駅迄見送ってから妻が帰って来ると、木戸から入ってまっすぐやって来て、靴先でトントんと桶を蹴る。猿轡の奥から呻き声で返事するのを確認してから家に入り、テレビなど見ている、深更に掘出しに来てくれるまで、丁度、四八時間のプレイであった。

桶の隙間から見ると庭の印象は全く新鮮で、一寸した草も大きく見えること。狭い庭なのに夜中は意外によく虫が鳴いており、草の根方で私も虫になったようであったこと。翌日妹達が庭に出て盆栽がどうの松の枝振りがどうのと、分かりもせぬ生意気を言っているそ

のすぐ足元で、私の存在など夢にも気づかれぬまま、桶の板の僅かな隙間から義妹の足を見ていると、江戸川乱歩の世界といった妖しい被虐感が起こってくる。狭い隙間を通してすぐ眼の前にある、女子大在学中の義妹の、かかともサンダルをひっかけた爪先も、奇妙になまめかしく、美しく、私の足フェチを強めてしまったこと。土でおさえられて出難い小用をやっと出すと、ゴムガードルの下にじっとり広がっていった尿の感触。土の圧力とはだざわりと冷たさ。口中がカラカラになり、おまけに土でザラザラになって往生した。度重なるプレイで拘束緊縛の方法は上手になっているのだが、長時間になるとやはり局部的に痛くなり、やがてしびれてしまふこと。賑やかな室内と対照しての被虐の味。そのくせ途中で苦しくなり、身悶えしてますます苦しくなり、後悔して泣きそうになること。これらは何れもいわば予想通りなのだ、予想をオーバーしたのは、実は快樂にあらず苦痛であった。

その主要原因は、翌日の夕方（つまり拘束後一八時間位）から深更まで、温帯低気圧の余波で相当量の雨が降ったことである。雨自体は、これも変わった感じで良いのだ。ところ

が、ごく僅かの高低の関係で庭の中に流れが出来る。私の埋まっていた穴はその流れの途中にあたり、埋め余って盛上った土で流れを塞いでしまっていたのである。首の周りは少し高く盛ってあるので水は来ない。穴の左手になる所は余った土が山になっている。しかし桶を囲んで三方が暫くの間の溜となり、その水が踏み締めたとはいえ本来の地盤よりよほど軟らかい、穴を埋めた土に吸収されてしまったのである。

裸の皮膚を圧迫している土は、水を含んで冷えきり、体の熱を奪う。杭にきつく縛りつけた綿ロープもぐっしりと濡れてさらにきびしく体に食いこんで来る。革を噛んでいる歯がガチガチと鳴りそうなほど冷えこんで来て、遂に下痢を催す様になった。土とゴムとおさえられていて出ないような感じであるのが、しぼるような痛みと共に水のような下痢が噴き出し溢れ出す。油汗が顔を伝う。ようやくほんの心持だけ腰を動かして作った、あるか無きかの隙間に、生暖かいものが尻から太腿にべったりと広がり、冷たくなっている。猿轡の奥ながら思わず呻き声をあげそうになったが、怪まれてはならないと、何度も何度も心をひきしめて、のどの奥で呻きを噛

み殺さねばならなかった。うとうとする間に唸り声をあげて義妹達に怪まれては一大事と思うと、仮眠する救いもない。うとうとしではハッととなり、心をひきしめひきしめ、十分に苦痛を味あわされた。四八時間のプレイのうち、後半二四時間は相当に苦しい時間になってしまったのである。

二日目の晩、妹達を見送って来た妻が傍に来て、靴先で桶をノックしてくれた時は嬉しかった。ところがノックだけで妻は立去ってしまった。それ以後の数時間は最も苦しかったが、もう拘束期間はめどがついたという余裕もあり、苦痛の中で、じっくりと苦痛を味わった。Mの醍醐味のある時間だったようにも思われる。

二日目の深更、やっと解放の為に来てくれてほっとする。懐中電灯で照らしてみると私は顔面蒼白で油汗を流しているから、妻はびっくりしたらしく早速掘出しにかかったが、これが案外手間がかかる。やたらにスコップや鍬を使うのは大怪我のもとであるから、ごく慎重に、難しいところは両手で土をかい出さねばならぬ。打ち込んで鎖を止めた五寸釘を一本ずつペンチで抜き、何本ものロープを解き、鍵穴のセロテープを剥いで南京錠を開

き、妻も泥に汚れながらやっと解放してくれ
る。ガードルから滲み出した下痢便のひどい
臭いが立ち昇ってくる。

しびれきった足でようやく立ち上り、勝手
口から廊下に敷かれたゴムシートを伝って浴
室に入る。ゴムバンドをとり、ゴムガードル
を脱ぐ。溜った物がどっとタイルの上に散ら
ばって悪臭が充満する。ざっと湯で流し、体
を洗い流し、湯に入って全身を温める。妻は
腕まくりしてタイルを清め、ゴムガードルを
手早く洗う。とんと落盤事故の犠牲者を救出
して、処置に奔走しているようなあわただし
いムードで、享樂的な雰囲気など縁遠い事にな
ってしまった。

湯の中で全身を暖め、全身のしこりをほぐ
すと、上って熱いお茶を飲み、下痢止めをの
んで床に入り、カイロで腹部を暖めていると
間もなく腹痛はおさまってぐっすり眠ってし
まったが、下痢が完全におさまるには、薬を
のみ、白粥と白身の魚と梅干だけで養生しな
がら、なお三、四日かかったのである。太腿
のバンドの痕が見えなくなるにはもっとかか
った。太腿は体中で最も痕のつき易い部分で
あるようだ。

長期の拘束プレイでは、期間中ずっと感興

の高まりを保持する事は困難だが、始め、中
終りにそれぞれの高まりが無くてはならない
こんな終り方では、このプレイは失敗であっ
たと言わざるを得ず、それに、プレイに対す
る私の耐久性を信頼していた妻が、このプレ
イだけには少なからぬ不安の念を持ったこと
もあって、以後、二度と生理めプレイを繰返
すことはなかったのである。

しかし第一回での失敗は認めざるを得ない
ものの、私は条件さえ整えば、このプレイは
決して危険なプレイではなく、むしろ特殊な
味のある面白いプレイだと考えている。

今の私の頭の中には、なるべく晴天の候を
選ぶとともに、土地の高低をよく見て、雨が
降ってもすぐ流れ去るような乾いた場所をト
することであるという教訓が強く残っている
が、これさえ注意すれば、地表一尺下は夏涼
しく冬暖かい恒温圏だというし、佐藤信淵の
地熱の説はあまり信用しないとしても、何か
私のMにふさわしい場所に思えてならないの
である。

妻が庭を眺めた場合にも、顔面は露出して
いた方が面白いだろうし、桶などで隠すのは
感心しない。ああいう状況で已むを得ないと
しても、朝と晩くらいは様子を見てほしいも

のだが、私が解放を懇願しても、客観的に大
丈夫と判断出来れば解放拒否をしてほしいと
思う。主観的には苦痛の極限と思い、弱音を
吐く。そこを否応なく通過させられてしまう
その先にこそ、私のMの醍醐味が存在するの
だから……。

ただし平常のプレイは、寒い季節は避けて
二四時間位が適度だと思う。それ位位なら
私の健康状態に気を配って貰う必要もなく妻
としても気楽にプレイ出来るだろうからだ。

プレイが長びく時には朝夕にネクター一杯
位いは、飲ませてもらうと思っている。猿
轡のまま長時間たつと、口中が乾いて意外に
苦しいのである。ゴムガードルは着用せず、
排出物は自然に土に滲ませる様にしたいと思
う。さらに私の青写真では、このプレイの効
果を楽しむ為の、さまざまな変化を描いてい
る。

顔の前に女王様に腰を下ろしてもらい、色
々といたぶってもらったり、猿轡だけ外して
もらって犬としての奉仕をする事が出来る。

妻が土に腰を下ろす事を避けようと思えば私
の頭が出る位の穴を開けた敷物を使えば良い
し、涼しい夏の木蔭で私の奉仕を楽しみなが
ら昼寝するのも寝台と奴隷のプレイの応用に

過ぎないが、Sの妻としては一寸、面白いだろう。

昔の刑罰に、罪人の首だけ出して埋め、通行人にまで挽かしたという「鋸挽」の刑があったそうだ。罰となると陰惨でイヤな感じだが、これをプレイとしてアレンジすれば、いろいろ楽しいものに変化させることも可能だろう。たとえば、粘土や絵具を使って顔の造作を変えて気ままに遊んでもらうことも出来るだろうし、鋸の代りにS女性の手や足で挽き廻してもらえたらいうことはない。

或はトイレの代りにして貰うという楽しみ方も考えている。首の周囲の地表が少し黒くしめり、そこはかかない香の漂う物蔭に埋められているのも、奴隷としては贅沢な楽しみだろう。

断食療法も、二日目位が最もつらいと云う。埋められて、ネクター以外は口にしない二日目の夕方位に、庭でバーベキューパーティなど催し、口中に唾がいっぱい湧いている時、猿轡を除いて、「ホラ、これをやるよ」とよく焼けた肉を火箸ではさんで唇にくく位い迄持ってこられ、食いつこうとするとヒョイと遠ざけられる。おいしそうな食残しを、顔のすぐ前に積んでみせつけられる。

私は一センチも動けないのだからどうにもならない。さんざん匂いがかがされた後で、犬を連れて来て全部食べさせられてしまい、私の口の中には、使用済みのナプキンなどを突っこまれて、又猿轡をされてしまうなどの状況も思い浮かぶのである。

現在の私の立場で、最も強烈にこのプレイを楽しめそうに思うのは、ワイルドパーティとの組み合わせである。Mの私としては、対等にパーティに加わるのではなく、妻と他のメンバーとの戯れに奉仕し、さらに彼等の手で鞭打たれ、責められるのが望ましい。そのようなプレイの後、私は庭に引き出されて埋められる。彼等は寝室に入って、快楽に富んだ睦しい一夜をすごし、私は庭面の闇の底で、ひたすら寝室の窓をみつめ、嫉妬に身を焦すのである。

やがて、朝が訪れ、昼の楽しみが訪れても私は庭前の一個のシャボテンと同じく、屋内の生活には何の関係もない、間の抜けた存在にすぎない。

二四時間位以後にやっと掘出して貰い、解放されると、解放者の泥靴にくちづけして御礼を申し上げ、雑布を与えられて洗足用の庭の蛇口で体を洗い、屋内に入ると再び厳しい

緊縛と鞭打ちで責めつけられる。大分つかれて根気がなくなっているの、たまりかねてヒュー泣くかも知れない。

私の生理めプレイの想念は、このようにいろいろと変化が考えられるのだが、このプレイは終日食卓の脚に繋がれて食事のこぼれ物だけで過ごしたり食事の女王様に食卓の下から奉仕をしたりするプレイと同様に、子供が家に居ては絶対に出来ないプレイである。といって、ホテル等に場所を求めるというのもこのプレイの性質上、困難である。簡単なよう、なかなか難しい条件を必要とするプレイなのである。

以前、辻村氏が紹介された御婦人のように広い庭のある邸で、大人だけの自由なくらしをされているような方が、奴隷を公募し、生理めプレイの耐久限界をテストする実験でも試みて下されば、資料的な価値のある、興味深い記録を得る事も出来よう。そういう時には、おそらく数少ない経験者の一人として、早速奴隷として参加させて貰いたいと思っているのである。

——(おわり)——

× × × × × × × ×



今日は、久し振りに早く家へと戻る。思ったよりも、仕事がスムーズに捗ったためだ。帰るなり、ゆきつけのフロ屋へと、足を運ばせる。未だ四時を廻ったばかり。中はガランとしていて、うすら寒い。

湯舟の中に体をしずめ、思い切り手足をのばす。こうすれば又、寿命も延びるとか、CMにあったっけ。秋深し——である。夜も長

10月28日のことなど

無

題

文 と 写 真

井 上 雅 人

い。さてと、今夜は妻をどうしてかわいがってやろうか等と考えながら浴びる湯は、全くいい湯だね……である。

濡れた体をタオルでごしごしとこすりながら、脱衣場へ戻る。アレ、こりゃ何だ？

『11月4日11PM出演・初代残酷ショウ・秋山夫妻登場・××ミュージックホール』

まっ赤なフチ刷りのされたこのポスター、

11月1日——10日までとある。残念ながら、電車に乗る勇気も出なかったが、咄嗟に思い出したのが、あの11PMでの出来事である。

着替えもそこに家へ帰った。たしかカメラの中には、T・Vのブラウン管を撮ったフィルムが、あったはずだ。仕事が忙しくてすっかり忘れていたが、夕食の仕度を始める妻の声にも耳をかさずに暗室に入る。

ひんやりと肌寒く、湯ざめをしたようだ。期待は見事に裏切られた。かんじんのフィルム現像はしたものの、ブラウン管の画面は横ジマが各所に入り、全く見られたものではなかったからだ。

妻は、くすりと笑った。こんちくしょう！今夜は、どうするか覚えておけよ。

よく、あいつは言う。私の縛っていじめている時の顔つきは、時には人とは思えぬ程に恐ろしく、冷たい表情になり、そして、ある時は逆に、子供のように無邪気だと——今の私の顔は、よほど一番、大事なオモチャをとられた子供のように見えたのかも知れない。

あの日（と言っても、ポスターにあった11月4日は、10月28日の誤りであったが）、私は、はずかしがる妻をテレビの前に後手にくくったまま坐らせ、カメラを三脚に据えてシ



ヨウの始まるのを待ち構えた。

11PM「サド侯爵もびっくり？」は、スタートからムチを使った踊り等が入り、終始あやしげなムードがプンプン。始めのうちはブツブツ言っていた妻も、いつしかオシのようにだまったまま、テレビを見つめる。

「奇ク12月号」で、11月4日頃とあったのでついウツカリしていたが、10月28日の朝刊を手にして、フット見たテレビ番組欄には、正に「アツと驚く……」であった。

さて、いよいよ秋山御夫妻の出番である。網タイツに身を包んだ夫人が伏している。ドラムの音。マントをひるがえして現われる秋山氏。手首に素早くかかるロープ。ハッとした表情で逃げようとする夫人。狂ったように乱れ踊る長い黒髪。早掛け（秋山式でしたかね）でロープが胸を幾重にも締めつける。

全て、以前「奇ク」で紹介されたとおりの筋書きである。

責めている秋山氏の息が荒々しく聞こえてくるが、夫人の声は、やや押し殺したような、それでも何か快楽の境地で、その味を感じているような、甘いふくみを持って流れてくる。

やがて、縛られたままマットレスに横たわっている夫人を愛撫し始める。もだえる夫人の顔がアップで写る。レンズの焦点がスツとボケる——カットという所か——背後にまわり、ロープにくびれた胸に両手がかかり、白い首すじに口づけをすると、うっとりとし身をまかせる夫人。

せっかくカラーで放映しているのに、こちらの受像機が白黒では、細かな肌の色具合いや、ムードが半減されてしまうが、テレビということで、舞台とはちがい、身につけている網タイツがあるばかりに、却って襟足のあたりが悩ましく見える。

テレビの画面と、縛られている妻の顔を交互に見ながらシャッターを切る。こちらの方

まで、じつとりと汗ばんできた。

かぼそい悲鳴が起きる。髪を引き上げられやっと立ち上がる夫人。このあたりから、秋山氏の動きは活発になってくる。股間縛りをアップでとらえるテレビの画面。黒い網目に白いロープが喰い込むさまが、手にとるように見えた。「クエー」という、うめき声。かん高い叫び声。レンズの焦点は、またもやボケたが、それでも、夫人の身体を持ち上げているのが、ぼんやりと分かる。もし、手にしたロープごと吊ったとすれば、夫人の身体はすべて一カ所にかかったことになる。

あとで、藤本義一さんが言っていた。

「視聴者の人にはカメラをうまくボカしてましたが、我々は目の前でズバリ見てるわけですから、迫力がありますね」と。

言うとおりであったとすれば、これはピタリ私の推理が当たったことになるのだが……。

片足を逆エビにくくられた無残な夫人。ついで、あお向けに寝かせられて、いよいよムチ打ちである。

力のある秋山氏のかけ声と共に、夫人の胸や腹のあたりに、ビシリ！とムチが振りおろされる。肉感のある音だ。一段と夫人の声がかかる、苦しげにうめく。相当の間、ムチ



打ちが続いたように思ったが、この激しい場面に、さすがに妻は目をかたく閉ざして、パシッと音がすると、まるで自分が打たれでもしたようにふるえあがってしまった。

ショーが終り、ホッとした私。妻も、かわいそうな奴だ。辻村先生との会話が始まる頃には、もう力尽きて、後手のまま私の足元にくずれていた。

ショーの後での秋山夫妻を写し出す画面。あれだけ苦しんだあとの夫人の表情は、いかにと見てみるや、ケロツとしているのに、びっくり。一方の秋山氏の方は、ゼイゼイ・ハ

アハア。出されたおしぼりで、汗びっしょりの額をぬぐうのがやっと。いかにも、しゃべりにくそうである。

それにしても、「ショーは、あくまでもビジネスだ」と言う秋山氏と「やはり愛情なりSEXにつながるものがある」という夫人の言葉は、このショーの後の二人の表情からは逆にとれるから面白いものだ。

辻村先生のお話は「奇ク12月号」に載っていたものと、ほぼ同じようだった。私達二人のためには大変、参考になったが、この残酷合戦、どうやら大差の判定で、ナイトショーを11PMが破ったようである。

最後に、ホステス役の市川靖子が、ひょこんと口をすべらせたっけ。「私はMネー」そらみる、彼女だってMの方に共感を覚えるらしい。おまえは事実上Mの境地に入っているんだ。幸福だと思え、と、これは胸の内だけで妻を見詰めた。

この日はかりは、すっかり秋山夫妻にあてられ、結婚・SM共に間もない私達は、何と

も仕様のない形になり、カメラもテレビも放って、後手にくくったまま、互いに愛を確かめ合うだけで終ってしまった。

多忙のため「マルキ・ド・サドのジュステイヌ」も遂に見に行けなかったが、午前0時近くにある洋画の窓で、シネ・スポットだけは何回も何回も見た。T・Vでのスポットは良い所ばかりとか言われているが、映画そのものも、聞けば単なるサドとマゾを描いただけではないそうなので、残念で仕方ない。

全裸で片手をクサリで吊られ、不安気な表情の女。木を背に胸を押し広げられ、焼きゴテでMの印を谷間に烙き込まれる乙女。明かるい林の中を逃げる少女が追いかけられ、果ては豊かな乳房を剥き出しにされるシーン。両手吊りの女、等々。放映の終わってしまった今でも、はっきりと覚えている。

縛られるのは、どんなにきつくてもがまんする妻も、写真に撮られることだけは、ひどく拒む。それだけに、私の楽しみは多い。やっと先日、写真を撮ることに成功した。テレビの画面を写すことに失敗した（今まで、こんなことはなかったのだが……）代わりに、二、三枚、同封する。ご覧いただきたい。



A

街に蒼い夕陽が射していた。うすきみわるい冷たい光線を首すじに浴びながら、私は繁華街の交叉点の歩道橋の上にたたずんで、足下の車の群れをみおろしていた。高い所から眺めると、車は気ちがいのように気ぜわしく走っており、ひどく愚劣な光景にうつった。歩道橋の階段口では靴磨きが客の靴を磨いていたが、その所作の方が余程おらかな生活的な風景にうつった。やがて私は蒼い影のよ

創 作

蒼 い 陽

堀 尾 和 高

うに動いてブリッジを渡った。

路地のように狭いU通りで、私はレモンという喫茶店を探す。

白い扉に黄色いレモンの絵を描いた扉口から、目と鼻のテーブルに花井姫子の青白い顔が、眠っているような静かな美しい表情で浮かんでいた。

「来たのね……」

しやがれた、セクシーな声で美少女は言い瞬間、微笑ったが、瞳に青い火をともしして私の顔をみつめた。

「命がけだ」

椅子に掛けて、私は低く言った。

「それほど価値のある女ではないわ、私」
もの好きな男ねえ。命は、一つしかないのに、と変に大人びたせりふを少女は言う。

彼女はレモンスカッシュをとっており、私はコーヒーを注文した。席が扉口に近い目立つ場所で私は落着かなかったが、奥の席は客で埋まっていた。花井姫子は私の不安を察したらしく、うすい色のついた、おしゃれ眼鏡をかけた。すると、少女の顔はひどく好色な感じになった。

コーヒーを飲み終ると、私は彼女を促して

匆々に喫茶店を出た。

しかし、外を歩く方が、よほど危険だ。

冷たい夕陽が激んでいる通りの角で、空車のタクシーを求めてしきりと手を振りながら私は自分の車を持てない安サラリーマンの自分の境遇に腹立ちを覚えていた。

漸く一台のタクシーが停まった。ロートルの運転手だった。

私は行先に同伴ホテルの名を告げた。そして女の顔を見返ると、姫子はその形のいい口もとに、けむるような微笑を刷いた。いろ眼鏡の奥で目はとじられていた。私は姫子の美しい切長な目が見たかったので眼鏡を覗いていたが、冬の冷たい蒼い斜陽がレンズのおもてに映えていた。

B

貴山ホテルは山麓にあって、前に大きな沼があった。葦の茂ったその堤にしゃがんで、バクダンという仕掛けで鯉を釣っている男が居た。もっとも私たちは魚籠を覗いてみたわけではないから、はたしてこの腐った様な濁り沼から鯉が釣ったかどうかは分からない。釣り人も含めて、寒々しい沼の風景だった。

ホテルは明るかった。入口はことさら照明を殺しているが、上屋の電飾と紅いネオン文字が夕空の中で華やかに映った。

なるほど、ここなら余り人目につかない恰好な場所で、姫子は気がきくといいたいところだが、女がこういう連れ込みホテルに詳しいということは一種不愉快なものだ。誰と来て誰と寝たかも分からぬと気がまわる。

しかし、私は黙って白い大理石を敷いた玄関にはいった。

鏡のように光る大理石の石面に美少女の細い形のいい脚がうつった。彼女は私の背中に隠れるようにしてメイドのあとに従った。漆黒のしなやかなロングヘアが私の耳朶をくすぐった。髪の中から、かすかに甘い香水の芳香が匂った。

「暗くして……」

ベッドにはいると姫子は唇を寄せてささやいた。

「まっ暗にしなきゃあ、いや……」

私は無言で小柄な軀を抱きすくめて、枕元の紅いスタンドへのぼしかかった彼女の腕を同時に握めとった。蝶がもがくように姫子はかすかに抵抗した。私は口づけして彼女の言葉を封じた。

「趣味が悪いのねえ……」

掛布団は床に落ちて、露わなベッドの上で私は白いスリップを剥いだ。はだけた胸にブラジャーはなく、まるやかな双つの隆起を少女は両手でかこったが、

「見せろよ」

というと、意外に素直に手をどけた。総体に華奢な軀だが、乳房はみずみずしくゆたかに張り、みごとだった。紅い灯影のもとで膚が、つややかに照っていた。

C

女が去ったあとのホテルの部屋は佻しいものだ。安手の装飾が、そらぞらしく映る。

姫子は十九才だといった。SEXは淡泊な方であった。だが、女としての悦びを知っていることは、はっきりわかった。私は、かつてないほど夢中になった。それは私が姫子の若さとその美貌とに参っていた証拠だろう。

私は深い疲労を覚えた。

「疲れた顔してるわ。疲れたのなら少し休んで帰ったら？ あたしは時間がないから」

と、姫子は身づくろいもてばやく、妙にまなましい、活々とした動作で帰り仕度をし

て、ひとりで先に帰って行った。

彼女が勤めている店は、昼間は喫茶、夕方六時からスタンド・バーに衣替えする。その店の名は「胡蝶」

「胡蝶」は東亜ビルの地階にあり、私の勤める会社はそのビルの三階にある。建設機械を取扱って社歴二十年の私の会社は、元々弱少な中小企業体で、一時期は飛躍したけれど、最近経営内容がとみに悪化し、本社の地所を売却して貸ビルの三階に間借りしたような細かい状態で、経理課長である私は、会社の実情が底まで見えるので、ひとしお働く意欲を失ってしまうわけだ。ボーナスも出ず、その上、給料減額になって、カラーテレビも備えられないという不満から、妻は実家へ帰ったきり、ここ半年余り音信不通だ。私は、もう妻と別れた気である。相手も多分、いずれ正式に別れるつもりであろう――。

帰っても誰もいない市営住宅の我家の暗さ味気なさから、私は六時に会社が退けると、同じビルの地階の「胡蝶」でウイスキーの水割を飲む習慣が、いつしか身につけてしまった。というのも美少女のホステスに内心、強い興味を覚えたからだ。だが姫子の顔を見ているだけで私は一応、満足であった。三十八

才のしがないサラリーマンに、このびちびちとした美しい少女がとても靡くとは思えぬ。

また、この娘に下手にちょっかいをかけたら、物騒なことになるらしいことを、やがて私は知った。

D

その日は朝から雨であった。夏の終りの、秋の兆しを見せる白い雨が、一日中、街を濡らしていた。

三階から地階まで殺風景なコンクリートの階段を降りて行って「胡蝶」の黒い扉を押してはいると、オープンしたばかりというのにめずらしく先客があった。

一見して、やくざ者と分かる風体の男たちが五人、奥の方にかたまって陣取り、その輪の中に姫子の姿があった。彼女はゴーゴードンスを踊っていた。いや踊らされていた。

ミュージックボックスから耳を聳するようなポリウムでゴーゴの旋律がほとばしり、姫子はそのきりりとした美少年風な美しい面を汗で光らせて、なみだを流しながら、下半身裸で狂ったようなゴーゴを踊る。彼女の真っ赤なミニ・スカートは男の一人が肩

にかけており、水色のパンティは別の男がしゃれたマフラーのように首に巻いていた。

鹿皮の背広を着た、がっしりした体躯の男が、あられもない姿で踊る美少女の背後にまわると、ズボンのベルトをひきぬいて姫子の臀を撲った。

「あア――」

悲鳴をあげて姫子は床に片膝をついた。そのときまた鞭がびしん！と鋭い音で臀に炸裂した。ふたたび悲鳴がふるえた。

「かんにん、かんにんして！許して！」

二筋、赤い条線の印された白い尻をこちらにむけて、美少女は鹿皮服の男の足下にひれ伏して泣声で何か詫びを言い、床に額をすりつけるように何度も何度も頭をさげた。

「お客さん。すみませんが、お帰りになってください」

今日は休業しますから、とマダムが私に言う。四十二、三の年恰好の顔の長い女で、この場の事態に別に動揺したふうもなく、落着いた口調である。

「途中で交番なんかにお寄りにならないように……あの娘は折檻される理由があつて、あんなにされているのですから」

「しかし、どんな理由があろうと、あんなに

ひどい暴力は……」

私が小声で言うと、マダムは、せせらわらった。

「見なかったことにするんですよ。でないとあなたのためになりませんわよ」

また鞭音がひびき、尻を撲たれた姫子の悲鳴が胡弓のトレモロのようにふるえた。

マダムは黙って、じっと私の目を見据えている。やくざたちは私の姿など眼中にないようにふりむきもせず、折檻される美少女のエロティックな姿態に見入っている。

私はカウンターの椅子から立上った。ことさらにゆっくりと腰を上げたのは、いわば虚勢だ。

外に出て夕方のラッシュの人波の中を歩きながら、私は交番へ寄る気はなかった。

その日以後、四、五日、私は「胡蝶」へ行かなかった。この店の正体がどうにも、うすきみ悪かったし、マダムの、のっぺりとした長い顔を見るのが不快であった。

私は帰途、盛り場の一杯飲み屋に二、三度通って、その手伝いの女を、金を払って抱いたりした。

旅館の部屋で、まるで男のように多毛質の骨格たくましい山出し女の生地が出て、私は

その女体に幻滅を感じながらも、追い帰すことをせずに付き合い得たのは、頭の中に姫子の顔を思いうかべていたからだ。

あの華奢な美しい少女に会いたい、と私はまるで初心な青年のように、そのとき烈しく思ったことだ。

翌る日の夕、黒い扉を排して私はカウンターの椅子に坐った。客は誰も居ず、姫子がひとり二の腕まで袖捲くりしてグラスを洗っていた。

「いらっしゃい」

ふだんの表情で彼女は明るく笑った。それから不意に面映ゆ気に、

「こないだは、あんな姿を見られて羞かしかったわ……」

「マダムは？」

と私は訊いた。

「仕入れに出かけてるの……」

「どういうわけで、あんなひどい目にあわされたの？」

「訊かないでよ、そんなこと」

と、姫子は強い語気で言った。

「夜になると、ここはやくざの巢になるの。ほんとうは、いらっしゃらない方がいいわ」

「知らなかったな。そんな店だとは——君は

どうしてこんな店で働くの？」

「さあ、どうしてでしょう……」

小首を傾げて、美少女は可愛い笑顔をつくった。

その晩のことである。

夜中に玄関のベルを押す者があり、もしかしたら妻が後悔して帰って来たのではないかと思いながら、私が玄関をあけると、頭からずぶ濡れの姿で姫子が転り込んで来た。

雨が降っているのではなく、夜空は満天降るような星空だ。

折檻されて気絶したら、バケツで水をかけられたのだと、齒をガチガチ鳴らして姫子は言い、私はとりあえずその蒼い唇にウイスキーを含ませた。姫子は三杯ウイスキーを呻って、少し元気ついたところで、バスタオルで髪をぬぐいながら、家を探し当てるのに苦労したと、しゃべる。

私は、かつて姫子に自分の住所を言ったことがある。この娘はそれを覚えていたのだ。

なぜ折檻されるのか？ 私の問いに対して美少女はこのときも謎めいた微笑をうかべてごまかした。ついに理由をいわぬ。そして残り風呂のぬるま湯で姫子は身を拭くと、そのまま素裸で部屋に戻って来て、ソファの上に

横たわった。

ほとんど全身に鞭痕があり、とりわけ後ろのまるい可愛らしい双丘に鞭打ちが集中していて、紫赤色の線が交錯して、むごたらしい眺めだった。

私は終戦間際の三月あまり、軍隊のめしを喰い、衛生兵であったので、救急箱の外傷薬を姫子の膚に塗布する手つきはわれながら自信があるが、この程度の手当で、はたしていものかどうか懸念された。やわらかな尻肉に軟膏を塗りこめながら、私は上気した声で「きみ、やっぱり医者に行った方がいいんじゃないかね……」

少女は黙って首を横にふった。

この少女は、思いがけずこの私を頼って来た。そして生まれたままの姿で傷の手当をさされている……私に身をまかす意思があると読んだのは私が甘かったのだろうか。しかし、じつのところ私はそんな思考よりも、火のように昂ぶった慾情に抗しきれず、やにわに背後から姫子を抱こうとしたのだ。

「ノー！ だめよ！」

瀕死の白鳥のようであった少女が、精悍な猫のように跳ねてソファから飛びおりると、キラキラ輝く目で私の顔を見据えた。

「だめよ！」

「ぼ、僕は……」

きみを愛しているんだ、そんな一種の、きまり文句を、しかし私は真剣にどもりながら言った。残念なことだが、姫子の胸には通じなかった。

「そんな人だとは思わなかったわ」

姫子は唇を尖らして嘲けるように言った。

「信頼出来る人だと思ったから頼って来たのに、変なこと仕掛けるなんてひどいわ」

「落着いてくれ」

「落着いているわ、わたしは」

「わるかったよ」

「とにかく、わたし帰るわ」

「どこに行くんだ？ また街をうろうろしていたら危いんじゃないか」

もう変な真似はしないから、安心して今夜はここに泊って行き給え、と私は、真実に底意なく云ったつもりだ。——しかし、美少女は帰った。

E

私は気がかりになったから翌日「胡蝶」をのぞいた。気がかりになった、というより、

終日、美少女の面影を胸に抱いていて、いい齡をした男が仕事も上の空の有様で、まったく、さまになっていなかった。

店に姫子の姿は見えなかった。

私はカウンター越しにマダムの長い顔と対面して、酒を飲む気にもなれず、ミルクを注文した。

「ミルクですか？」

マダムは陰気な声で問い返して、人を馬鹿にしたように白い目をむけた。私は黙ってミルクを飲み、黙って金を払って立去った。

蒼い暮色に包まれた雑踏の中を、私は安里公園の方へむかって歩いた。のろい足どりで公園の入口まで達した時、公園の中央を一群の男たちに囲まれて花井姫子が歩み過ぎて行くのを見た。思わず凝然と私が立ちどまったとき、姫子の白い顔が蒼い陽に光ってこちらを見、私の姿をみとめたように私は思ったが姫子は二度とこちらを見なかった。気づかなかったのであらう。

美少女を擁する、やくざの一群は、公園を通りぬけて雑踏の中へ紛れ込んで行った。

姫子の、あの目のさめるような真っ赤なミニ・スカートを彼等がむしり取って、パンティを首に巻きつけ、むきだしの裸身に鞭を加

える情景を私は想像した。暴力への怒り——
 そういった感情は私の中に湧かなかった。公園の入口に呆然とたたずんで、私は烈しい妬みに胸を灼かれていた。

その夜遅くまで私は床の中で目をさましていた。折檻されたずぶ濡れの姿で美少女がまた転り込んで来るかもしれないからだ。奇妙な期待の感情で、私はそれを待っていたが、待ち呆けに終わった。

美少女は「胡蝶」に姿を現わさなかった。或る日、思い余ってマダムに消息をたずねると、

「私も探しているんですよ」という答えだ。

「家は？」

「家が分かっていれば、問題はないですけどねえ。なにせ宿なのしフーテンでしょう。探しようがありませんわ」

「いや、ほんとうはどこに居るか分かってるんでしょ？」

「失礼ねえ。なにをおっしゃるの。私はなにも知りませんわ。ことわって置きますけどねえ、私はね、個人的には何も横田組の若い者たちとも関係なしよ。彼等は店の客としてやって来るだけですから」

「しかし、あの娘と組の男たちとは何か関係あるんでしょう。店の従業員が、やくざ者に乱暴されて、それを黙って見ているのは、マダム、あんた自身、何かわけありと思わざるを得ないな」

「へらず口を叩くのねえ」

白い目が凄んだ。じーっと目をみつめられると、私は恐怖を覚えた。あながち、この女がこわいわけではない、その背景の組織の影が私を、すくますのだった。

姫子は、その日から二、三日して「胡蝶」へ戻って来た。

「いらっしゃい」

ふっくらとした白い二の腕まで捲くり上げて飾り棚を拭いていた。

マダムが居るから、私はつとめてさりげなく、軽口めかして、

「どうしてたの？ ずいぶん長くサボっていったじゃないか？」

「まあネ」

「まあネという返事があるもんか」

と、マダムが怒った声で言い「スットボケてさ、何も言わないんだからね」

美少女はマダムにとりあわず、片目をつぶって私にウインクした。

「ミルクをください」

「ミルク？」

姫子は、ぶっと噴き出した。笑いながらミルクを運んで来て、そのとき、すばやく封筒を背広の衿元に差し込んだ。

私は帰路バスの中でその封筒を取り出して中の手紙を読んだ。

次の土曜日、午後四時、U通りのレモンという喫茶店でお待ちしています——ポールペンの意外な達筆で、そう書き出してあり、私に身を許してもよいという大胆な文意であった。但し、横田組の者に見つかったら大変なことになります。それでもよかったら、レモンにいらっしゃい。と美少女の手紙は半ば煽り、半ば私をおどしているようであった。

F

貴山ホテルの裏口から、私は外に出た。裏門もごぞいますとメイドが教えてくれたからだ。客は大概、裏門から出入りするという。

私は何かふぬけたような心ざまで、夜の道を辿った。沼の方から茫と赤い狐火が一つ、浮かんで、こちらへ近づいて来て、私は東の間、全身に鳥肌立つ思いをしたが、気を鎮め

てみると提灯である。釣師が、沼から戻るところだ。鯉は釣っただろうか。それにしてもきょう日、夜道に提灯とは古めかしい。狐火と見て怯えたこちらの感覚も、いわば古めかしく、私はおかしかった。

腰の曲った老人であった。

「鯉、釣れましたか？」

立ちどまって私は訊ねた。老人は空魚籠を振って「あかなんだわ」そうひと言、答えて歩み去って行った。

私はバス通りに出ると、バスを乗り継いで家へ戻った。

誰も居ない暗い冷たい部屋に私は螢光灯をとす。そうして椅子に坐ってゆっくり煙草をふかした。私は満ち足りた思いであった。会社はいよいよ倒産寸前になっていたが、そのことも今は頭になかった。妻の実家から離婚交渉の手紙が昨日届いていたが、それも私の念頭にはなかった。

常に砂漠を抱いているような私の心が今夜は、しっとりうるおっている。私は憧れの美少女をついに抱いたのだ。椅子に掛けて、えもいわれぬ法楽の気分が私の胸にたゆたい、煙草の灰が畳に落ちるのも気づかなかった。ベルが鳴ったとき、私はまだ起きていた。

丹前をひっかけて、高机で履歴書を書いていた。机の置時計を見ると一時だ。私はペンを措き、走るように玄関へ行って戸をあけた。

「早く閉めて、追われてるの」

姫子はぜいぜい息を弾ませてそう言った。

黒いセーターの下で乳房が躍動しており、顔はうすく汗で光って、猫のようになまめかしく、野性的な感じが私の官能に迫った。

「横田組か——」

私は顔だけを外の闇に突き出した。

「ばかねえ、分かるじやないの」

「来たら叩きのめしてやる……」

震え声で私は言った。

「殺されるわ」

姫子が言うと同時に、私は戸をしめて、大急ぎで鍵をして、玄関の灯を消した。膝頭がふるえていた。

G

奇怪なことを姫子は言う。今夕、私とホテルに行ったことが発覚して、そのためにリンチされたのだという。まあそれは置いて、その発覚の端緒が、貴山ホテルの前の沼で釣りをしていた男が組の若い者で、その男に見ら

れたためだというのが、私には奇怪だ。あの釣師は紛れもなく腰の曲った老人で、決して若いやくざ者ではなかった。

「あたしたち見張られていたのよ……」

「そうか。それで、どんなリンチをされたのだ？ 裸になって見せて見ろ」

私はこの美少女の嘘を、問いつめることなく、そのままに置いて、彼女の服に手をかけた。汗っぽい肌の匂い、疲れを知らぬような黒耀石のように美しい瞳のひかりに、私は情慾をそそられていた。スカートのジッパーを一種無情な気持で私がひきおろすと、美少女はおとなしくソファに横たわった。それを私は剥いた。円い臀部が白桃のようだ。全身の肌色はしっとりとした乳白色で、どこにもリンチによる、むざんな朱い鞭痕はない。「女の牀を責めるのはいろいろあるのよ……まるで傷をつけないで、残酷な責め方だってあるのよ……」

それはどんな責め方だい、と私は言った。声がふるえ、私の舌は異様に乾いていた。

「浣……浣腸責めよ……」

むっくりと円いしりを、美少女は私の目にまざまざと示した。その責めの痕跡を……。「おしりをベルトで叩いたっていいわよ……」

リンチが面白かったら……」

「ば、馬鹿を言うな。早く寝ろ」

と、私は怒鳴りつけた。

家で一日おとなしくテレビでも見ている、この家から外に一步も出るな。私はそうかたくいましめて翌朝、会社へ出かけて行き、夕方飛ぶようにして帰宅すると、もぬけのからで、花井姫子の姿は消えていた。

私は狼狽して近くの赤電話から「胡蝶」に電話をした。姫子はまた無断欠勤しているとぞんざいな口調でマダムが答えた。

その日から姫子は、完全に行方不明になった。

H

〔伝言板〕

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます故、今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚 フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛願います。○御送金は、現金書留、小為替、定額小為替、切手代用、振替にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

完全に行方不明になった、と私がいき

るのは、私自身が足を棒にして、街の隅々まで文字どおり隅々まで探しまわったからだ。約半月の間、私は私で出来得る精一杯の搜索をした。だが私は横田組とは接触しなかった。それは、おそろしかったからだ。

私が毎日、街の路地々々をめぐって美少女の行方を探すことに疲れ果てて、胸の中に漸くあきらめが兆し始めたとき、私の会社は倒産した。

皮肉なことに、私を拾ってくれたのは、横田組の系列下にある土建屋で、私はその会社で小型ダンプの運転手として働きだしたが、人夫たちの監督をする男が、あの鹿皮服の若者だった。

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありましても最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。

○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社へ願います。

名を木村といい、横田組々長の子飼いの若い衆で、組の幹部であった。

毎日、建設現場で顔を合わせて、ぼつぼつあたりさわりのない話などかわしだすと、存外、気さくな気のいい男であった。

或る小雨の降る日、私は河原に架設中の橋の下で、思い切って花井姫子のことを木村にたずねた。

「姫子？——ああ、胡蝶に居た娘か」

木村は妙な笑い方をして、

「あいつは変態だ」

「変態？」

「やれ鞭で打ってくれろ、やれ皆の前で裸で踊らせてくれろ、浣腸してくれろ、なんて、この俺にせがみやがって、気色のわるい変態娘だ。この俺はノーマルだからな。いくらべっぴんでも、あんな変態娘とは肌が合わねえよ。振ったら、しばらくつきまといてうるさかったが、郷里に帰っちゃったようだな」

それから木村は、不意に陰気な目で私の目を見つめた。

「あんたは、あの娘とどんなつながりがあるんかね？」

「いや。私は時々胡蝶に行っていましたからね、それであの娘を知ってるんですよ。木村

さんの情婦らしいということも、うすうす察していましたよ」

私は追従の口調で言い、にやにや笑った。笑いたくもないのに笑顔を保ちつつけて、

「郷里は、どこなんですか？」

「あの交態のか？」

「ええ」

「おっさん、そんなこときいてどうする？」

え、あんた、あの交態に気があるんかね。あんな娘にちよっかい出したら、あんたまで交態だと見られちまうぜ」

「交態だというのは本当ですか？ あの娘が本当に、自分から鞭打ちや裸踊りや浣腸責めなどを望んだのですか」

「嘘じゃないぜ。疑うんなら、皆に訊いてみな。鈍な野郎だ」

「……本当ですか……なんとなくそんな気もしていましたが……」

「おい、おっさん。おめえもなんだか気色が悪いな」

木村は、うとましげに白い眼で私を見、

「寄るなよう」

と、彼は小雨の中に濡れて出て、

「教えてやらあ、あの娘の実家はな」

K市だという。

K市の「衿善」という呉服屋の二女だと、木村は吐き出すように私に言った。

古き水の都といわれる、小さな城下町であるK市を私が訪れたのは、その月の終りであった。

K市まで準急ディーゼルカーで三時間。山あいを開けた静かな、眠っているようなのかな市^{まち}のたたずまいが車窓にうつり、駅に降りる客の数もすくなかった。午^{ひる}をまわっている私は空腹だったので、駅前の食堂で食事をとり、その店のおかみさんに「衿善」を訊ねると、彼女は親切に略図を書いてくれた。

略図を見て捜すまでもなく、店は堀割に沿って白い土壁の店舗を構え、屋号を染めぬいた旗を軒に立てていたから、すぐ分かった。おそろしく古風な構えの呉服屋で、店の中は薄暗くて、店員らしい和服の男が一人、上り框近くに正座している姿が、影絵のように私の目にうつった。

私は店先を一度通り過ぎてから、また後戻って、柱の名札を読んだ。名札には家族全員の名前が書き出されており、中に、姫子、という名前が、確かに、あった。

私はそれをしっかり目に納めると、もうこの小旅行の目的は終わったと思った。別にこの

町の名所である城趾も、川めぐりも、一覽したいとは思わなかった。

私はそのまま駅へ引返すべく眼鏡橋を渡った。渡るとまた石の眼鏡橋が現われる。その二番目の橋のたもとに大きな柳の木があり、その下にコーヒールーフコートを羽織って、青いデニムズボンを穿いた、瘦形のすりとりとした若い女性が、堀割の青く澄んだ水に糸を投げていた。

釣竿の柄を、纖腰に腰溜めにして持っていた。私は息をつめて、その少女の背ろ姿を凝視した。脚はその場に釘づけになったようだった。

『あいつは交態だ』

その木村の吐いた言葉が、今私の耳殻にひびいて、それは錐のように鋭く私の胸を突き刺して来た。

私は、あきらかに心臓に痛みを覚えた。

蒼い堀割の水に、真冬の冷たい蒼い陽が射し、美少女の長い黒髪までも蒼く染め変えるようだった。

私は足音を忍ばせて、ひっそりと蒼い影のように石橋を渡って、立ち去っていた。



私の性癖を

告白する

呆殿比呂志

まで環境から結婚出来なかった故だろうか？ 私は早熟で、十才位から自慰を覚えていたのに。

十五才ぐらいの時に、円朝の「後

れ咲き榛名が梅が香」という講談本を読んで感激したが、その一節を読み返すと……

『後へ廻った草三郎、親のゆずりの盛景の一刀すらりと引抜いて、ひょいと、お歌の様子を見た。

縁側にピタリと座したお歌、西に向って手を合わし、夫の為に捨てる命、別に何とも思っていないくて、

「南無阿弥陀仏」

唱えつつ、ほつれた島田の後れ毛を掻き上げた、白い美しい頸さしのべて、目を閉

じた。いざとなると男より女が覚悟のいいようで、観念して恋しい夫の手に掛る刃を待っている。

「ええいッ！」

バサリッ！ 濡れ手拭いを、はたくような音。腕は良し、刀は良し。哀れやお歌の首は、島田鬚をくづして前に落ちました』安中草三が男の意地と領民らを助ける義侠心から、因縁の尾崎屋敷へ手土産がわりの趣意立てるために、恋女房のお歌の首を斬る章である。夫に従順に因果を聞きわけて首を斬らせた、命まで捧げた、お歌のような女を、私は好きである。

現代のモラルとしては、こんな女はいないであろうが、小説、浪曲、講談などの世界で

私は変態なのだろうか？

私はサドなのだろうか？

小説、講談、浪曲、芝居、文楽、映画などの分野に於いて、女が介錯される。つまり、首を討たれる場面や女の生首が出る場面に於いて、たちまち心身共に急変するのである。それも男や童女、老婆の首の場合は平静でいられる。ただし、熊谷が敦盛の首を討つ情景にはホモ的な気分にならないでもない。だが若い美しい女の首の場面に限るといえる。

こんなになったのは、私が身障で三十近く

は出てくるのである。ことに戦前にては、武士、俠客の世界に多い。創作の映画ではあったが、十九才ごろであろうか、無声映画で、「関八州男伊達」なるタイトルの映画を見た。主人公は国定忠治や大前田英五郎ではなく、根島の伊太郎なる旅人と、若い姐御お近の物語である。

筋書は、わらじを脱いだ伊太郎が親分の娘と、本妻がない親分の二号である、お近の二人に惚れられる。ことに、お近は積極的。言い寄る恋で道ならぬ命がけのものである。持て余した伊太郎が旅にそっと出るのを知ったお近は後を慕って旅立つのであるが、その晩に親分がライバルの親分に殺され、親分殺しの濡衣が伊太郎とお近にかかる。二人の間は伊太郎がお近を受け入れず何もない。だが、お近は伊太郎を慕って同じ宿、同じ旅、伊太郎の行く所に見え隠れについてゆく。追い帰しも出来ず困る伊太郎。この二人を親分の仇として斬りかかってきた者達によって、親分の死を知った伊太郎は舞い戻ったが、誤解と嫉妬に狂った親分の娘は、一家が落目でも伊太郎を迎えずに、やくざの掟を破った者として罵るのであった。伊太郎、心を残しながら宿場を離れた後に、悪人らが親分の娘を拐う

のである。これを宿場に戻ったお近が知る。お近は伊太郎に最初出会った思い出の川原で親分の娘の急を告げる。そこで伊太郎が濡衣と誤解をとく為に、お近を斬る決心をする。「お近姐さん。何の罪もねえお近姐さんだがやくざの掟は曲げられねえ。可哀想だがお嬢さんを助けるため、また申し開きのためだ。姐御であつたお近さんの不運とあきらめて、首になってくんねえ。覚悟っ」

「待って、伊太さん。恋しいお前さんゆえに捨てる命は、つゆさら惜しくはないが、死ぬ前に、たった一ト言、うそでもいいから、お近、好きだったと言っておくれ、お願い。そう言ってから首にして——」

「お近ねえさん、それまでにこの俺らを」

「あい」

「お近ねえさん」

伊太郎、長脇差下に、お近を抱く。

「いや、お近ねえさんと呼ぶのは。お近と呼んで……」

「お近っ！」

「あい、うれしい！」

活弁になると、越えてはならぬ愛憎峠。と結局、伊太郎は満足したお近の首を川原で斬るのである。お近に扮した女優が洗い髪姿で

長い黒髪を肩より横にして、白い項を覗かせて美しい首を討たれる場面が強く印象に残っている。合掌した女優の姿が美しいからだだったが、名は忘れた。

私は女の生首の絵を集めた時代があった。新聞、雑誌の絵などを切り抜いてコレクションしたのである。

前記の安中草三が、包みを解いて尾崎直之進の前に、ガックリ島田を落とした美しいお歌の生首を披露している場面。

新・平家物語では盛遠が袈裟御前の長い洗い髪を握って、じっと袈裟の首級に見入っている場面。

天保水滸伝では飯岡方の州崎の政吉が、義理のしがらみで斬った、わが妻子三人の首を大皿に載せて味方に見せている場面。(子供二人の首の絵には何とも思わぬが、政吉の妻のおもとが玄人上りの世帯やつれた、ほつれ毛まで描いている首の絵を見て、セックスを感じたものだ。この生首の絵も、女が夫のために斬られる首で無念らしい表情でなく、安中草三のお歌の首の絵の如く、むしろニコリ笑っているかの死顔の首で好ましかつた)

大瀬の半五郎が、兄の敵と誤解していたこ

とは必死の説明に解けたが、すでに助ける術なく、苦しませるより介錯してと斬った女郎お染の生首の、乱れた元結を掴んで、月にかざして眺めている場面。

阿波藩の物語では、上役に横恋慕された西岡重右衛門の妻、多瀬が、夫の留守中、策略にかかり、その上役、主人と一味に貞操を汚されるが、隙を見て逃げる途上で夫に出会い事情を話して、

「妾は武士の妻として、もう生きて居れませぬ。せめて、あなたのお手で御成敗を。妾の首級を持参して、主水どのに見せて、妾の仇を討ってくださいませ」

路上に座して首さしのべる若妻、多瀬。その美しい襟あしを見下して、

「よく言った、多瀬。武士の掟じゃ」

刀を抜いて、心を鬼にする重右衛門。

「覚悟はいいか」

「はい」

涙をふいてニッコリ合掌する愛妻多瀬。

「ええいッ」

無言の気合いで、美しい多瀬の首は路上にころがる。涙ながらに拾い上げ、着物の袖をちぎって包み、敵を討つべく馳せてゆく。

この場面の、多瀬の首が包まれた袖から黒髪をくずした死顔が見えるのを横抱きにかかえて夫の重右衛門が走る姿の絵がある。

こんな、いろいろな変わった絵を集めていたが、現在は、焼いたり捨てたりして、一枚もない。私は私なりに、この悪癖を矯正しようとして努力していたからだ。でも、どうにもならないのであった。が、かつての小平義雄の如く、現代に形を変えて、悪い意味の勇氣で実行する気などはない。私のこの秘密を、死んだ母だけが知っていたようだが、私を信じて、理解してしてくれたようだと書いては、私の欲目かもしれぬ。

中国（中華民国）の戦国時代の話では、諸侯の中で名君だったと言われる丁原君の逸話がある。

丁原君の若い愛妾が二階から、丁原君を慕って諸国から集まって来た浪人食客たちのうち、せむしでビッコの食客が井戸水を汲む姿を見て、おかしいと大声で笑った。この愛妾は年は十六ぐらいであろうか、箸がこけても笑う年頃であった。当然、その食客は怒って丁原君に無礼なる御愛妾の首をいただきたいと申し出るのである。丁原君は冗談とも本気とも二つに解して「承知」というが、そのま

まに月日を過ごした。すると、頼みとする浪人食客がだんだんと去ってゆき始めた。その原因がこれだと知り、信義、男の約を軽んじていたのに気がつき、その愛妾を呼び、

「士を笑う者は、死に価いするのだ。私ゆえに可哀想だが、首になっておくれ」

因果を含めて愛妾の首を討って、不具の食客に贈れば、去った浪人食客どもまた戻って来て、丁原君は一国の雄になったという。

この話、私が、その不具の食客と状態が似ているだけに興味を持った。丁原君の名声と出世の為に、若い命を温順しく首を討たれたという愛妾には、安中草三によって首を斬られたお歌の場合と相通じるものであると私は感じている。

その他に、左甚五郎の日光大難の講談で、日光の滝五郎が、甚五郎の右腕を切り、師匠の左腕を切って仲直りさせるが、そのために自分は死を覚悟する。その決意を知る妻のお春が、明日も知れぬ重病のわが子を殺し、自分も夫の足手まといとならぬよう、一足先に夫の滝五郎に自害の介錯してもらって首になる話がある。

行友李風の会津の小鉄という小説では、小鉄売り出しのくだりで、名張りの新蔵に小指

を切られた小鉄の足手まといとならぬよう、盲目の妻お吉が自害して、愛する夫、小鉄に介錯される場面がある。小鉄を励ますが故に男にしたいが故にである。

「鉄さん、新蔵一家に手土産がわりに、妾の首を、私の首を……」

斬って持って行き小指を取り戻し、男を立ててこいというのである。

「お吉っ。す、すまねえ」

「ええ、もう苦しい、苦しいわ。早く妾の首を、首を……」

催促されて、涙ながらに小鉄が恋女房お吉の首を落とす場面である。

お歌。お近。お春。多瀬。お吉。おもと。

それに丁原君の愛妾。みんな恋しい夫または男に首を斬らせている。

こんな小説、講談を読む時、私は恥かしい話だが、性的に昂ぶってしまうのをどうしようもないのである。自分が、そんな夫になつたつもりで妄想で、美しい恋女房などの首を討ち落とす。たいてい、首を斬り落としたところか、女の首の絵のところグッタリとなる。いけないと思うのだが、私のこの生首妄想は一生、不治になるのだろうか。

文学少年、文学青年を経て、文学壮年とな

る現在に、まだ一つものにならぬが、いつかは、こんな心理状態を時代小説に描こうと思っている。男は愛する女を完全に自分のものとして手折ってしまいたい、殺してしまいたい欲望が隠されているということ。

女は男に、恋する男には命まで捧げて悔いないのが、勝手ながら男の理想像に違いないが、現実には正に逆の女上位の時代である。だからこそ余計に……。

人形浄瑠璃には、女が首になる話が多い。

妹背山女庭訓で、母定香が討つ娘、雛鳥が首。弁慶上使の段では、弁慶が討つ娘、しのぶの首。玉藻前三段目では、金藤次が討つ娘桂姫の首。

その他、身代りなどで女が首になるのがあるが、みな父母、又は兄弟の手にかかるもので、私としては興味が半減する。

山田風太郎、五味康祐などの小説にも、女が首になる場面が再々あるが割愛する。

宮本幹也の小説、板割の浅太郎を主人公とした小説には、有名な伯父勘助殺しとは別にまた、幼な馴染の従妹お栄、親分国定忠治の一番若い妾であるのを、これも勘助同様に、疑われた不義の証^{あかし}を立てるために、首にする情景がある。

お栄は、実は浅太郎が好きで、浅太郎もお栄が好きであったのである。前に記した関八州男伊達の伊太郎とお近のような立場であったが、これは、お栄の寝室に踏みこんで、寝乱れ姿のお栄を、この世で添えなくともあの世では夫婦、好きだ。と言ってる浅太郎に取りすがって、死ぬ前に一度だけ抱いてくれというお栄を、ぐっと突き放した浅太郎が、承知で覚悟しているお栄の首を斬る話。

サドの男とマゾの女の、相愛の極致の物語ではなからうか。

数年前の読切クラブに、奥州平泉、衣川の館で最後を遂げる源九郎義経が、死ぬ前に北の方を抱きつつ閨房に首を掻き切るの説話があった。長い、おすべからしの北の方の髪を握って、観念して恍惚の絶頂に殺されたの如き死顔の北の方の首をさげて、自害切腹しようとしている義経。この挿画は私にとってショックであった。

この頃になって私の妻は、私の変わった性癖を知ったようだ。私が、あることでノイローゼを加味した病氣となった時、亭主の好きな赤えぼしであろうか、四十の残り香の年増の項^{うなじ}を、時々、ハツとさせるような襟の刺りあとや、カットした美しさを見せて、私の話

で、首になった女の物語りを遠い耳で聞こうとする。(私の妻は美しい女とは義理にでも言えぬが、女をほめる言葉がなかったら、襟あしをほめろという諺だか、なんだかがある) そうで、どんな女でも襟あしの線がキレイに見える時があるものである。その妻が、安中草三郎のお歌の話を聞きながら、こうかと合掌して白い首すじを見せた時、私はむしろに欲情したことを白状する。

閨房で、思わず妻の白い細くびを、手刀で

斬り落とす真似をしたら、妻は目を閉じていたがニッコリ笑った。

以後、私は病状が嵩じた感じの時には、自ら意識して妻を呼び、手刀の真似をすることした。妻はいつでも素直に応じてくれた。自分から進んで手を合わせてくれる時もある。他人からみればバカバカしいかも知れないがそれで私の気分は、ぐっと楽になった。

こんな妻の看護で私のノイローゼは治ったが、以来、これが病みつきとなり、私は手刀

新発足 態賞△告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

で妻の首を介錯する真似をすることが珍しくなくなった。妻はそれで満足して、燃えていくようだ。私は妻が生首になった姿を想像して、悦びを倍加させるのである。

妻が何かの用で外泊や留守の時には、妻の姿を臉にえがきつつ、安中草三郎に斬られるお歌のような女に見立てて、妻帯者らしからぬ行為にふけることが、他人には言えぬ話だが、私の日常の事実なのだ。私が妻の首を斬ってその黒髪を引っさげる妄想などは、昔の黒髪と、妻のパーマではイメージが一致しないことを残念に思うのである。でも、日本髪でなくともパーマでも襟あしが綺麗だと、けっこう酔い痴れ得るということを発見したのは収穫だった。

しかし、私はサド、妻はマゾでも、二人とも理性は決して失わぬつもりである。私の書いたことは創作の世界では描けても、現実の世界で実行されるとしたら大変である。私は不具者であるが、その点は、当然ながらわきまえている。小平義雄や香川県にあった女の生首持ち歩きの事件などは、私には、云う資格はないが、言語同断、許されるべきものではない。程度の問題として擲筆する。

(カットスチール・大映「手討」)

二つの瓊

水上生活者たちを押えているボス達は、彼等から欄と呼ばれて怖れられていた。昔の日本で、十手取縄をあずかりながら博奕の貸元をも兼ねていた親分衆のことを想像すれば、彼等水上生活者、すなわち蛋民たちが、如何に欄から搾取されているか多少は理解出来るかも知れない。しかし現代の親分衆は、ずっとスマートになっている。資本が彼等の十手でもあり、又、時としては長脇差ともなる。大抵、会社組織になっている、首領は社長で

ある。そしてホンコン島の高台に、瀟洒な西洋風の住宅を建てて、万事ヨーロッパ風に暮している。その柔和な微笑からは、支配階級の絶対権力を窺い知ることが出来ない。実際の仕事は、段階的に下部へ伝わるようになっていて、大勢の差配が金貸し、繫船税の徴収ホンコンフラワーの内職の世話などをするような仕組みになっている。アヘンと売春も彼等のかくれた収入源の一つである。普通、アヘン窟はアヘン窟、色街は色街と、それぞれコロニーを作って、一般の水上生活者の集団とは若干、隔離されるように配慮されているけれども、何分にも人あつてのことだし、移



第十七回

前号までII世界中から美女を誘拐している有明の組織は又、蔡樹理の指揮する反共秘密結社青幫と盟約がある。彼等は協力して麻薬シンジケートと対決している。強力な中共系麻薬組織は美女周月鏡を屈辱の中に殺した。イーラも数奇な運命から、この争いに巻き込まれ、両親もそのために自分の命を縮めてしまった。有明の部下、星恵美子は絶世の美女といわれた山本百合子を巧みに誘拐し、彼女に化けてホンコンに飛んだ。それを追うのは国際捜査官、新津謙介である。油蔴地という蛋民部落で売春をしようとする百合子を発見した新津は……。

動が激しいために、何時の間にか入り組んだ船溜りが出来上ってしまう。

油蔴地は九竜市内に近いだけに、比較的、清潔な船泊りといわれていた。従って売春船は北端の岬影に目立たないように固まっていたのである。欄の統制がよく効いているので、素人でも安心して行くことが出来た。一度、契約が成立して二人きりでカーテンをおろしてしまえば、小舟はホテルの部屋よりも隔離度の高い密室となる。ヨシズ一枚でも誰一人のぞく者はいない。どんな声や物音をたてても吾不関焉、聞こえないふりをするルールが確立しているからである。もし、その規則をやぶったら、どえらいことになる。

新津の場合は全くそれに当てはまる事件となった。

自分が探し出す使命を帯びていた山本百合子が、こともあろうに娼婦のような真似をしている。しかも、彼の視界に入った相手の男が、飛行機で一緒だったホセ・アマビスカであった。あまりのことに冷静さを失った新津はこの暗合を計算して見る余裕がなかった。それで、有明の制止するのも聞かずに二人のもつれあっているダルマ船に躍り込んだのである。

それからが大変だった。ホセの方は吃驚したのか素裸のまま棒を呑んだようになってしまったけれど、何と山本百合子と新津が思い込んでいた星恵美子こと辛愛蓮の方が、あたりはばからぬ大声でハデな悲鳴をあげはじめたのである。

附近にいた欄の手下が二人忽ち小舟を寄せてきた。このパンパン舟は、欄に一定の手数料を払っていわゆるシマを与えられていたのだから、その代りとして、何かトラブルがあると欄の仲間が娼婦たちを保護するしきたりであった。

辛愛蓮は朝鮮系の娼妓として登録されていた。福建語が下手でも何等、異とされない。その下手な言葉で星は涙ながらに、二人の男が彼女を奪い合っていると訴えた。いつの間にか有明と少年は姿を消している。こうなると言葉のわからないホセと新津は全く不利である。まして、オーブンな娼窟である。この界限では、他の舟をのぞくことすら、リンチの対象とされていた。

辛愛蓮のわめき立てるのを、尤もだという風に聞いていた屈強な男たちは、二人に自分の舟に移るように命じた。意気地のないホセは、もう慄え上って服を着ることも出来ず、

やっと下着をつけたところで、せき立てられると、服をかかえたまま男達の舟に乗り込まされた。丸い蒲鉾屋根の下に追い込まれる。そこに拳銃をかまえた男がもう一人いて、流暢な英語で、二人に衣服を脱げと言った。もうその時には、二人の男達もホセと新津の後に迫っていた。

絶対絶命である。手向かいしなかった方がよかったかも知れない。結局は同じことだったのだが、新津は逃げようとした。隙を見て左後ろの男を肘うち襲った。ギャツと叫んでツンのめる。わずかの空間を飛び上って船外へ。と、そこまではよかったのだが助かったと思った安堵感が、今度は新津のスキを作っていた。誰もいないと思っていた舳のところに、中国服を着た女が危うくぶつかりそうになった。星恵美子である。しかし、新津は未だに山本だと思っている。

「逃げましょう。こんなところにグズグズしてはいられない」

早口にいいながら手をとって、もとの船に飛び移ろうとする。後ろから態勢を立て直した男たちが迫る。

次の瞬間

「ウッ……」

とうめいて新津は甲板にくずれ折れてしまった。星の拳が、信じられない程の早さで新津のミゾオチにたたき込まれたからである。

頬を叩かれてわれに返った新津は、自分が何か甕(かめ)のようなものに押し込まれているのに気づいた。甕の口は厚い板で蓋をしてあって、首だけが外に出るようになっていた。ガラガラする土甕の内壁の感触から、全裸にされてしまったことがわかる。しかも、

後手にギリギリ縛り上げられている。

無理に首をネジ曲げてみると、ホセも同様にされて並んでいるのだ。スペイン語で、さかんにわめき叫んで、助けを求めている。

二つの大きな甕は舟の舳に並べてあった。両側にビッシリとパンパン舟が、もやっている細い水路を、甕に乗せた小舟はユックリと進みはじめた。こんなとき、見せしめのために引き廻しをする習慣になっていたのである。



両側の舟から艶めかしいスタイルの女たちが顔を出して口々に罵声をあげた。中には新津の顔にペツと唾をはきかける者もあった。もっと物好きな女は、わざわざこっちの舟に飛び込んできて、ホセのチョビひげを引っばったり、鼻をヒネリ上げたりした。このノロノロした引き廻しはタップリ三十分も続いたであろう。最後に再び

辛愛蓮のいる舟の前に戻る。

漕いでいた男が何やら早口でいうと、彼女は身軽に舷を蹴って乗り移ってきた。中国服の裾割りが、あざやかに翻えると、真白な太腿が夜目にもクッキリと浮き出して、彼女が下着なしで素肌に中国服だけを纏っていることが理解出来た。

欄の手下である三人の男がニヤニヤ笑いながら、二つの甕から首だけを出しているホセと新津の顔を投光器で照らし、口々に言い合っていた。何やら卑猥な復讐を企んでいるらしいとはわかっていても首だけを突き出している二人には如何しようもないことである。依然としてトンボ眼鏡をつけている女は、首を横にふって、なかなか男たちの言うことを聞かない。英語の出来る男が、それならというように近づいて

「ベッピンさんが、大事なところを噛まれちゃ大変だというんでねえ。フフフ」

噛みしばっている新津の口を無理矢理にコジると、クサビのような木片を押し込んで、思い切り口が開いたところで上の歯と下の歯の中央部に突っかい棒を嵌め込んでしまう。上下にU字型の切り込みがある長さ4センチばかりの棒だが、これで二人の口はアーンと

あけっぱなしになってしまった。

それを確認した女は、先ず新津の甕の上にヒラリとまたがるではないか。

はげしく狼狽して避けようとする新津の頭部を、なめらかな太腿がシッカリと締めつけてくる。

女が何かいうと、三人の男はドッと笑いかけた。

「出齒亀男よ。見たけりや、タンノウするまで見せてやろうよ」

男が英語に直したけれど、新津は両耳を女の腿がピッタリふさいでいたため、聞くことが出来なかった。

髪の毛をひっぱって上を向かせる。口が真上に開く。ドッと熱い液体が新津の顔にかかった。

ケラケラと女が洪笑した。男たちもドッと笑いくずれた。その笑い声が、隣から隣へと伝わって船だまり全体が笑いの渦になった。

はじめなのはホセと新津だけだった。

女がトンボ眼鏡をとった。いつの間にか星恵美子はスリ変わって、背恰好だけは同じだが全くちがう女になっていたものである。このことは新津にとっても驚きだった。液体が滲み込んで痛む両眼を血ばしらせて、驚きの

表情を泛かべた。彼は今の今まで、山本百合子だとばかり思っていたからである。

女は今度はホセの顔に、いたずらをはじめた。

二つの甕を乗せた小舟は娼婦たちの嘲笑を背後にして徐々に外洋に出はじめた。

「本当は糞と小便が一ぱいになるまで生かしておいてから沈めるんだが、今夜は、すき間に石でも詰め込んで、一思いに殺してやる」

英語のわかる男が、事もなげに言った。途端にホセがヒステリックに泣きわめいた。自分は何もしていない。ただ女が縛ってくれと言うので頼まれた通りにしてやっただけだとか、かかって来たのは日本人の方だから自分だけは助けてくれとか、恥も外聞もなく喋りはじめた。

「うるさいッ。黙れ。黙らないと又、口に突っかい棒をはめてしまうぞ」

英語の男が、すごんだ。その間にも他の二人は胴の間から麻袋を重そうに運んできた。中に砂利が一ぱい詰まっている。これを重石として甕の中に入れようというのだ。

丁度、砂利を詰め終わって、再び首枷のよ

うな木蓋をはめ直そうとしている時、どこからともなく一隻のモーターボートが近づいてきた。素晴しくスピードの出そうな双胴型である。

「アッ、蔡樹理様」

英語を喋る方の男が驚いたように叫んだ。

ボートの後部、プラスチックの防波覆いの蔭からヌッと立上った人影は、まぎれもない青帮の総帥である。

三人の男たちは、この夜の実力者の前に、ただオロオロペコペコするばかりである。ゆったりした寛衣の懷中から、ふくれ上った財布を出して、英語の男に渡しながら、蔡は威厳をもって言った。

「おまえ達の欄には、もうワタリがつけてある。二つの甕は私が買った。私のジャンクへ運んで貰いたい」

三人は異口同音に、叩頭でしようとするかのように承諾した。

——蔡樹理——

字を見たら、新津にはピンときたかも知れないその名前も、彼が日本語的読み方で「サイジュリ」と覚えていたため聞き逃してしまっていた。しかし、ホセの方は助かりたい一心で早くも相手が自分を呼び寄せたボスであると

わかったらしい。

「オオ私のボスよ。私はホセ・アマビスカ。あなたに招かれてアメリカから来た、ギターひきのホセですよ。よかった。あんたがきてくれたおかげで命拾いました」

と、早くも自由の身になったように、喜び勇んで言ったものである。

「あまり重すぎるから、石だけは取り除いてくれませんか」

蔡は、ホセのいうことは全く無視して、三人の男たちに言った。男たちは易々として命令に従う。

すなわち再び素裸で縛り上げられている二人を甕の中から引きずり出して、石を海中に捨てた。二人とも福建語がわからないから、助かったと思ったのも無理ではない。ところがそれも束の間で、再び甕の中へ放り込まれてしまった。

半円形にくり抜かれた分厚い木蓋を首の囲りにハメ込んで、抜けないようにクサビで固定するのである。

憤怒のあまり切歯する新津。彼は以前、有明の請いを受けて美少女林美玉を東京にいる蔡樹理のもとへ送り届けたのである。羽田ではミーティングサービスに任せたので、使い

の者をチラッと眺めた程度に過ぎぬ。東京にいた筈の蔡が、いつここへ舞い戻って来たのかもわからぬ。しかし理由はともかく、何がしかの負い目を蔡は新津に対して感ずべきではないか。

それなのに、今、目の前にいる蔡樹理という男は素知らぬ様子で、彼が甕の中に閉じ込められる作業を眺めている。

——待てよ、ひょっとすると……。

有明の一味が蔡の名をカタったのかも知れない。警察官的推理は、裏の裏まで考えねばならぬ。新津はこう思い当ると、いかにもそれが本当のように思えてきた。

局限状態におかれて、殆ど正常さを喪いつつあった思考の中で、絶望感がドス黒い煙幕のようにみなぎってくると、彼の知覚は、その真黒な渦の中に次第に奪い去られて行ったのである。

チクロバン

イーラは美しい裸身を羞恥におののかせながら、切なげに涕泣していた。今朝から、おかしいおかしいと思っていた身体の異常が今や現実のものになってしまったからである。

ここ数日、テレビカメラを前にしての拷問は遠のいてはいたけれども、依然として後手のいましめは解いて貰っていない。

小さな檻の中、獣のような生活である。嫌悪はしていても、生きる欲求は、それに馴れざるを得ない。毎朝、啞の老爺が差し入れる洗面器の食事も、口だけをつかって啜り込むようになった。そのあとで、同じ洗面器の中に用を足すことにも、それ程、抵抗する気持ちをなくしていた。まして、用のあと始末に拭く自由さえない身なのである。

ところが、今日は秘かに彼女がおそれていたことが始まってしまった。毎月のことだから——といって片づけられない今の状態である。あわてて洗面器にまたがる。ツ—と滴りが容器を染めたではないか。手さえ自由ならば、そして、適当な脱脂綿とかチリ紙さえあれば、何とか羞かしい思いはしないで済んだかも知れない。

——アア、どうしよう。

彼女は依然として腰を洗面器にあてがったまま、うずくまって泣くばかりだった。

丁度、その折も折、しばらく顔を見せなかった十五号が、いきなり入って来た。

「アッ、嫌ッ。見ないで、見ないで」

イーラは身をすくめて哀願した。しかし、そんなことを気にする十五号ではない。ズカズカと檻に近ずいて来て覗き込んだ。哀れな獣は、もはや何ものもかくすことはできなくなってしまう。

「オヤ、お客さまが来ちゃったようね」

カラカラと嘲笑する声が、イーラの心臓を鋭く、えぐる。

イーラは、ようやくの思いで泣き濡れた顔を十五号の方にむけ、悲痛な声をあげた。

「今の間だけ、オオ十五号さま。今の間だけ手をほどいて下さいませんか。そして、この汚れだけは自分で始末させて下さいませ」

できるだけ丁寧に、相手をおこらせないように言わねばならない。それだけ屈辱感は大きくなって来て、思わず嗚咽が洩れる。

「いいとも」

若い責め手は、案外アッサリとイーラの頼みを受け入れてしまった。

「あたしのペット、オランウータンのチャチャがなったとき工夫して作ったのがあるからそれを貸してやるよ。一寸、まってな」

イーラは歯をガチガチいわせて、総毛立つ思いで、この意地の悪い声を聞いた。容易な



ことで、安請け合いなどする相手ではなかった。それもその筈、十分ほどして戻ってきた十五号がブラさげているのは、ソツとするようなシロモノだったのである。

それはナントカバンドとか呼ばれる繊細な製品では勿論なかったし、衛生的清潔さなんか薬にしたくもない。むしろ、例の貞操帯といった方が適当であろう。事実、黒光りのするこの皮褌には、頑丈な錠前がついていた。

「猿は人間とちがって、折角つけてやっても喜ばない。かえって大騒ぎをして引きちぎってしまう。そうだよ。もともと素裸で暮らしていたんだもの、その方が自然だろうさ。だけど、こっちは、そうはいかない。アッチコッチ汚されては、かなわないからね。それで

コンナものが出来上ったというわけ。生憎、他に手持ちがないんだから、あきらめてこれで我慢おし」

親切めかして平気で残酷なことを言っているのがこの女の特技である。もう泣くにも泣けない。さりとって、このままで手当てもせず二、三日を過ごした

らと思うと、気が狂いそうになる。

ガチャリと檻の鍵が開いて、気味の悪い猫なで声が

「サア、キレイにしてあげるから出ていらっしゃい」

と呼ぶ。おずおずと、しかし、言うことをきかなければならない。不自由な裸身で、這うようにして狭い扉口を出る。逃げる隙もなく天井から下ったロープのフックが後手の皮紐に引っかけられる。あとはモーターの力で高くも低くも、思うままに吊り下げられている他はない。後手を引きあげられるから、どうしても尻をつき出して、前かがみの姿勢になってしまう。

「股をひろげなさいってば！」

鋭い罵声と同時に、臀部を思いっきり引っぱたかれて、ハッとわれにかえると、目の前に皮褌の内側がひろげられていた。いつ、使ったのかわからないキタナらしい青梅綿を重ねてゴムで固定してあり、まっ黒になった血痕が凝固していた。そして、いたるところに獣らしい毛がコビリついている。

「ヒイッ。いやです、コンナ、コンナもの穿かされるのは。イヤ、イヤ、イヤッ」

ありとあらゆる責め苦に馴らされて来たイーラも、全身を鳥肌にして地団駄を踏むようにして絶叫した。

「オヤ、そうかい。折角、人が親切にしてやろうとしているのに、こんどはいらないっていうのかい。いいさ、そんなら止まるまで、こうしてロープにブラさがっているがいい。そして、よごした床は、あとでキット掃除させるからね。もと通りキレイになるまで舌でなめるんだ。いいね」

苦渋の色を顔一ぱいに泛かべてイーラは、いやいやという風に首を横に振った。

「それなら、はじめからオトナしく穿いてしまえばいいのに。ホントに手数のかかるコだねえ」

いいながら、素早く皮褌を差し込む。その

膝には、もう抵抗する力がなかった。腰を周った皮バンドが前で合わされてピシッと施錠されると、イーラには、それを取り去ることが出来ない。ザラザラとコワばった感触が、一層みじめさを強調させた。

吊られたまま屈辱と不快感とで身も世もないという風に、哀れにも身もだえして嘆くイーラを見て

「今度という今度は」

と、考え込みながら責め手は、口の中でつぶやいた。

「一寸、薬が強すぎたかも知れない。売りものを狂わしては元も子もないから、そろそろ麻薬をはじめとするか」

数分後、イーラのシミ一つない左腕の柔肌注射針が突き立てられて、おぞましい毒液がその肉体に吸い込まれて行った。自由を奪われた裸身は、戦きながら責め手のなすままになるほかはない。

さて、打った薬液が有名なチクロバンだったから、たまらない。たちまち瞳孔が開き、全身にケイレンが起る。

吊りロープから外されて、やっこの思いで檻に押し込まれても、哀れな肉体は麻薬の刺

戟によって浅ましく、のたうちまわることや止めない。だらしなく開いた股間には、猿の皮帯が喰い込んでいたけれど、そのすきまから、ほとばしるように噴き出してくるものを抑えることは出来なかった。それはジワジワと太腿につたわり艶やかな内股を桃色に染めた。意志をなくした肉体は美しい獣と化し、夢にも思ったこともないよこしまな欲望を具現して行く。イーラはウメキ、叫び、裸身を弓なりにそらして薬毒の効力に翻弄され始めた。

翌朝、急に予定がついてイーラはホンコンに向けて出荷されることになった。しかも、MSA六三七便というレッキとした航空便である。その理由は、こうだ。シンガポールのリーという事務官は表向きは日本駐在の外交官だが実は麻薬シンジゲートの一味である。外交官には外交特権といって、公私一切の荷物はフリーパスとなる。つまり、出入国の官吏による検査を免れることが出来る。そうしたラゲージの一つにイーラは荷造りされたのであった。

イーラは、胎児のように四肢をまるめた状態で、トランクの中に押し込められていた。美

しい裸身には昨夜、装着された皮褌と後手縛りの皮紐がまわりついていていただけだった。

気密になったトランクには、酸素発生装置がボンベと共に内蔵されている。生まれてはじめての麻薬ショックを受けたイーラは、生ける屍のようだった。従って呼吸量は最低であろう。酸素は、それでなくても最小限しか発生しない。たれ流しの大小は、皮褌だけでは吸収しきれないだろうというので、その上からゴム製のパンツを穿かせた。三つの穴がイーラの胴と二つの太腿にピッタリと喰い込んで汚物の洩れ出しを、ふせぐ。蓋を閉じて錠をかける。その上から外交特権を記載した封印が貼られる。人間がこんな風にコンパクトに畳められるとは到底、思えない程、それは小さなトランクだった。

五個のトランクのうち四個までは人間が、しかも若くて美しい裸女が格納されていた。こうして彼等シンジゲートは女を海外市場へ「輸出」するのである。日本に置いては都合の悪い敵は、男だったら容赦なく打ち殺してしまうが、女の場合、しかもそれが若く美しければ、麻薬中毒にして海外に叩き売ってしまう。日本娘には、そうしたとき、いつも最

高値がつけられたから、結構商売になった。

厄介者を日本から追放するのと、収入源と、彼等には一挙兩得となっている。娘たちは行方不明とか蒸発したとかいって騒がれていても、絶対、足どりもつかめない。そのうち、ヤクと荒淫にすさみ果ててしまつて、昔の記憶を辿ることすら出来なくなる。中近東が、流れ流れた彼女達の終着駅となるだろうが、それまで、こうした奴隷組織は完全に女たちを捕えて脱出することを許さない。麻薬を求める女たちは、自ら好んでその組織の中に安住して逃げ出そうとしないとも言えそうである。

このようにして四人の娘たちは、イーラを含めて、恐ろしい転落の一步を踏み出すことになった。MSA六三七便は早朝九時三十分羽田空港を迂り出して行く。封印をされた四つのトランクはホンコンでクレームされることになっていた。

虫も殺さない顔で、スマートな外交官リーは、ファースト・クラスの座席にゆったりと腰をかけて、アタッシュ・ケースの中から何やら書類を出して読みはじめていた。その横顔を、反対側のシートから、それとなく看視する眼があるのを、リー事務官は全然、気づ

かなかったのである。それは日本人の女性だったけれど、たとえ気がついて恐らく彼には記憶にない顔だった。

しかし、それが変装をしていたとはいえ、怪潜水艦ネプチューン号乗組のアマゾン女兵の一人であるといえれば読者にはリー氏の運命がどんなものであるか容易に想像できるに違いない。

事実、その旅客機は無事、啓徳飛行場に到着した。外交特権を持った五つのトランクもフリーパスした。そこまではよいのだけれど出迎えたS大使館のライトバンは、リー氏と積荷もろともに行方不明になってしまったのである。

翌朝、山越えした国境近くのニューテリトリイで車は発見された。射殺された運転手の死骸があるばかりで、リー氏と五つのトランクは、あとかたもなく消え失せていた。

更に数日して、リー氏の死体が海峡で発見された。無数の鞭痕が痛々しいと報導されたが、その後、事件は迷宮に入ってしまったのである。

(未完)

× × × × × × × ×



(六)

創

作

魔性のもの

後篇

保藤久人

十分に、ふたりはいれそうな浴槽だった。

佐倉夫人は、うっとりとした表情で軽く目を閉じ、伸ばした手足でお湯と戯れていた。

甘やかな想念が脳裏をいろどり、夫人の腕は自然に、浅くまた深く泳ぎはじめる。戯れの快さが胸の奥をくすぐり、一段と熱い思いが足の爪さきから、ゆらめきたってくる。

熱いわ——つぶやいて、額の汗を拭う。

すっかり暖まった全身は芯までたわみ、快楽の余情に似たげだるさだが、その底には新鮮な嗜楽の欲望が渦を巻いていた。

今夜は最高だわ。とうとう、あのコを——

ウフツと笑う。おのずとにじみ出る快心の媚笑だ。その媚笑とともに音たててお湯を蹴った夫人は、すっと仁王立ちになった。

すばらしい美身がその全貌をあらわす。張りのある皮膚が艶やかに輝き、とても四十を過ぎた女体とは思えない健やかさだ。

ア、ア—ア、と大きなのびをひとつ、たちまち四肢の末端まで妖しい精気がみなぎる。

どういう料理にしようかな。うん——

ひとりでつぶやき、ひとりでうなづく。

料理といっても夜食の選択ではない。いろいろと苦心の術策を弄し、どうにかうまいぐあいに馴致への道筋へ追い込むことができた愛らしい仔猫、江崎順子に対する飼育料理の

方法を、さまざまに思いめぐらし、ひそかに心をみたくしているのだ。そして、みずからの創意に溺れて欲情をたぎらす。

鏡に向かい、ほしいままポーズで水滴を拭いながら、夫人は思わず、にやりとする。

裸身は磨きあげられて豊かにうるおい、鏡の中で、ひととき華麗しく魅惑的に映えた。

夫人はハサクラ商事V社長の実姉だった。

夫は早くに病気で亡くなり、そのあと実家へ戻ったりして、家庭的にはめぐまれない未亡人のひとりだが、資質的に実業家としての才能があったらしい。

弟のアシスタントをしているうちに、めざ

ましく頭角を現わし、重役連中に才腕を認められて経営陣に参加した。そして数年後にはハサクラ商事Vの専務に就任している。

仕事をするのが何よりも好きだし、実際に手並みのほどもすぐれていた。以来、実弟の社長をもちたてて実力を発揮し、女ながら、いまでは名実ともにハサクラ商事Vの有力な一員として、業界筋でも名が知れていた。

また一方では貞淑の誉れが高く、この美貌の未亡人をめざして慕い寄る男性も少なくなかった。しかし夫人には再婚の意思がない。

決して男を厭わしく思うのではないが、さしたる理由もなく、異性の存在をわずらわしいと考えるはじめていたことは確かである。

たとえ規模は小さくてもハサクラ商事Vという企業の矢面に立ち、威張っている男を口さきひとつであやつるのが割とおもしろく、そのような経歴を積みかさねているうち、男性に屈伏するも同様な夫婦という形態を、極端に忌みきらうようになってしまった。

とはいえ、よわい四十を過ぎる今日まで孤闘を保ち、心身ともに、いまやまさに爛熟期にさしかかった健やかな肉体は、快楽への欲望を自制することは、なかなかむずかしい。

欲求不満が昂じて肉欲のうずきに耐えかね

たとき、ひそかにイキのよい青年を金で買ったこともある。だが、そんなことでわびしい心身がみたされるはずはなく、さりとて、スキャンダルの種をまくような行為は、立場上厳に慎まねばならない。

「フライデー・クラブ」という妙なグループについても、プライベートな身辺だけは、あくまでも秘めごとにしておくための発案だった。表向きは物好きな有閑婦人たちのうさばらしだが、内実は気ままなおしゃべりを隠れ蓑にした、いわば安易な享楽の一種だ。そして、当初の目的は一応、達したかに見えた。

しかしその過程で、佐倉夫人の心の奥深くでは、ひとつの変化が芽ばえはじめていた。ハ金曜会Vの会合をかさねているうち、ふとしたことから、アブノーマルな嗜好の中に、かつて覚えのない悦びを見いだしたのだ。

夫人も人並、日々に衰えてゆくわが肌身への愛惜の情しきりに、執念じみた感情も交錯して、いつとき、嫉妬半ばで若い女を虐めたことがある。それが病みつきとなり、日とともに一転して倒錯の性に目覚めていった。

遠いむかしに喪失した清らかな若さや、素朴な心情に対しての感慨も新たに、感傷をこめた年令的な若さへの反逆かも知れない。

あるいは、そういった行為にまつわるムードが、夫人の血脈の中に潜在した異質のものを呼びさましたのであろうか？

自分でもふしぎなほど心理的な抵抗がうすれ、ごく自然に、レスポスの愛に関心をいだきはじめて夫人は、急にはげしく燃えた。と同時に新鮮な味覚をむさばることにある種の快感を覚え、はつらつとした美女あさりに偏執的な情熱を傾注するようになった。

佐倉夫人の嗜好は、その過程にいたぶりの甘味を加えながら、相手の若さを吸収するのが目的だ。したがって対象とする女は、みずみずしい光を放つ容姿とともに、潤い豊かに燃えあがる愛らしい肉体の持ち主でなければならぬ。きわめて個性的な、微細な感受性を全身にみなぎらせている同性——。これが欠かすことのできない必須条件であった。

同じハ金曜会Vのメンバーで常連の中のひとり、山辺夫人の口ききで、新しく会のホステス役に採用した江崎順子は、あらゆる面で夫人の嗜好を十分にみたし得る相手だった。「どうぞ、ご存分に飼育あそばせ……」

山辺夫人は意味ありげに目を細め、佐倉夫人の耳もとへ、そんなふうに吹きこんだ。

山辺夫人の夫はハTS商事Vの常務だし、

一応は商売仇だということになる。立場上、山辺常務とは、つねに一定の距離を保っていたが、夫人との交際は別問題である。

佐倉夫人は、そのような表面の現象にこだわることもなく、よろこんで山辺夫人のすすめにしたがい、一夜、江崎順子に眠り薬をのませ、全身くまなく探査して満足した。

以来、順子に対して、自分好みのペットにふさわしい馴致を試みはじめたのである。

社交界では淑徳婦人だと噂されているこの美しい未亡人も、一皮むけば、秘められた影の部分に、このような妖しい倒錯の性を、いちじるしく発展させていたのだった。

(七)

女だてらにあぐらを組んで、江崎順子は、テーブルの上で生きた置物になっていた。

後ろ手に縛った麻縄は胸の上下にも食いこみ、挟まれた乳房は絞り出された形で偏平にゆがんでいる。締めつけられて胸が苦しい。

手首の縄尻は肩越しに足首へと連なり、高々と吊りあげられた腕のつけ根は、ギシギシときしんで鈍痛を送りこむ。麻痺感がひろがり感覚は鈍くなったが、いまにも関節がもげるのかと思うほど、だるい。苦痛からのがれ

ようと自然に上体が前かがみになる。

と、もったもたさずかしい様態がいや応なしに自分の視覚に刺激を与える。空恐ろしい羞恥に耐えかね、がくんと首を上むける。とたんに全身のいたるところへ痛覚が走る。また顔を伏せ、自分を見まいとして目を閉じる。

そのような動作を、いったい何度くり返したことだろう。はかない動きの果ては苦しさが増加し、意識もうすれてゆくようだ。いまさらながら佐倉夫人の恐ろしさに戦慄し、絶望的な敗北感の中で涙を流して呻吟する。

「まあ、可哀相に。そんなに苦しいの？」

ハツとして顔をあげる。涙でおぼろな順子の視界に華美な部屋着姿の夫人がうつった。

「お、奥さま。も、もう、お、おゆるし……」

下さい。ど、どうか……おゆるしを……」

あえぎあえぎ、それだけ言うのが精いっぱいだ。言うと同時にドツと涙があふれた。

「よほどこたえたとみえるわねえ。ひどい汗だこと。背中がガラガラ、あ、流れている」

夫人は、ガーゼで順子を拭いはじめた。

「これじゃまるで、〃四六のガマ〃だわ」

ゲラゲラ笑い、夫人は有頂天になった。

「さあさあ、お立ち合い。ご用とお急ぎのな

い方は、ゆっくりと聞いておいで……」

ガマの油売りの口上が華やかに流れる。

「……舗道を歩くや、われこそは美女なりと濶歩していたガンマ先生、順子女史。まっばだかで鏡の前へわすったまでは立派だが、おのれの姿が鏡に映る。その姿を見て……」

「や、やめて下さい！ いやッ、いやです」

耐えがたい羞恥と屈辱だった。悲憤の涙をかみ締めて順子の首は、ぐらぐらとゆれる。

だが夫人は知らん顔だ。巧みに口上の文句を作り変えて、歌声のように口ずさむ。

「……ああ羞ずかしや。なんというはしたない姿であろうと、熱い油汗をば、たらりたりと流す。それをヤナギの小枝をもってふき取り……」

アラ、せっかく流した油汗を、ガ

ーゼで拭っちゃ元も子もなくなっちゃう」

なげく順子を言葉でからかい、汗を拭うというのは名ばかりで柔肌に戯れ、じつくりと弄ぶ。

「ア、アッ。やめてエー。ゆるしてエー」

「そう。ではやめます！」

「アッ。アー、いやッ。やめないで」

「あらまあ、どうすればいいのかしらね」

順子の悩乱する様を仔細に眺め、夫人はクスクスと鼻を鳴らす。戯れが愉しくてたまらないのだ。そしてみずからも燃えていく。

「だれに頼まれてあたしの持ち物を探ったのです。いい加減に白状したらどうなのッ」

「わ、私。なんにもしていません。ホントに何も知らないのです。ゆるして、下さい」

「ダメ！ 知らないとは言わせません！」

「いいえ、知りません。私は、奥さまのお召し物をそろえてただけ……誤解ですわ」

「嘘おっしゃい！ 手帳をペラペラとめくって、それも着替えの整理のうちのッ」

ウツと息をつめる順子を冷たく見据え、夫人は、あざけるように鼻のさきで笑う。

順子は打ちひしがれた思いでうなだれる。

いまさらながら、自分にこんないやな役目を押しつけた男、吉村保が怨めしい。

外貌は自分と同じ女でも、相手はハサクラ商事Vの専務という、立派な肩書きを持った実業家だ。とても齒がたつ相手ではない。

それを承知した上で実際に持物を調べていたのだから、怪しい行動の現場を押えられたいま、どのように責められても仕方がない。

とはいえ、羞ずかしい屈辱に耐えかねて、すべてをしゃべれば、それは単に吉村課長個人の進退問題にとどまらず、彼の上司ハTS商事Vの山辺常務はもとより、自分の勤務先ハミカド工業Vにも飛ばっちりが及び、会社

同士の争いにならぬとも限らないのだ。

見とがめられたのは自分の落度だし、恨むのは、むしろ自分の浅はかさだろう。いくら責められても耐えしのぶのが彼女の責任だ。

言っではいけないのよ、順子――

わが心に強く言いきかせて唇をかむ。

きびしい現実をしみじみと痛感しながら、それでもなお順子は、けなげにも自分の立場をわきまえ、必死に耐え抜こうと奮起する。

しかし、その一方、さらに深く思えば、

きみを愛している。結婚しようよ――

と、甘い言葉をささやいたしりから、スパイも同様な行為を強要する薄情な男には、なんの義理だてをする必要もなく、一日も早く別れるのが賢明な女のやり方かも知れない。

言ってみれば、吉村のような男は、女の感情をもてあそぶ鉄面皮な卑劣漢であろう。彼女には男の胸の内が痛いほど、わかるのだ。

にもかかわらず順子の心は、吉村の姿かたちの中に慈父の面影をしのび、身辺にただよう、くずれた感じに惹かれ、中年男の魅力に

胸をこがし、惨とした辱かしめの中でも、精魂つきるまで口をつぐもうとするのだった。

「黙ってないで、なんとかお言いよッ」

夫人の手が、いく筋も深い溝をつくって

る横ッ腹をつねる。鋭い爪が柔肌をかんだ。

ツウーと痛苦にうめき、それが、たったひとつ残された防禦のように、順子は髪をふり乱して大きくのけぞる。と、首筋に食いこんだ麻縄がきしみ、恐ろしい手足の痛みに耐え

かね、かみ締めた奥歯がギリギリと鳴る。

にじみ出る冷たい汗にまみれ、濡れた肌から寒々とした恐怖の実感がつきまとう。

「早くお言いッ。ホントに強情なコねッ」

ヒステリックな声音に歓喜をない混ぜ、みだりがましい夫人の責めは、目に見えないかげに隠れて、順子のたましいをかき乱す。

眉をしかめ、苦しそうな泣き顔であえぐ順子の口から、絶え間もなく声がかくぐもる。

突如、夫人の爪先に噛まれた脇腹の筋肉に鋭いけいれんが走った。全身の皮膚が狂おしく、おののく。

アウ、アアア……。う、うむむむ――

めくれあがった唇から、かみ締めた歯をむき出しにして、よだれが一筋、糸を引いて、そのまま、がくツとくずれた。

気がついたとき、床に寝かされていた。

肩越し手足の連縛からは解放されたが、まだ後ろ手に、くぐられたままだった。

放心したような表情に、あえかな意思がよみがえり順子は低い声でうめいた。からだの下敷になっている手がひどく痺れ、そのあたりから、おぞましい知覚がひろがってくる。無意識のうちに、床の上で転々とうごめく。

「おや、やっとお目ごめ？ オホホホ」

ドッキンと四肢をこわばらせ、順子は、声のするほうへ首をねじって目を見る。

雅趣豊かに、優美なシースルーの下半身が近づいてくる。光を背に受けた佐倉夫人のおしゃれ着姿は、見た目にもすがすがしく、品の良い色香がふきこぼれている。

「すごい！ ホントにすごかったわ。レディの立往生……じゃなくて生き往生かな」

「アー、イヤッ。言わないで……」

はげしい身ぶるいをひとつ、順子は羞恥の衣をまとって全身を美しく燃えたたせる。

「いやだって？ そんなことはないでしょ。」

夢うつつであたしに甘えていたくせに——

「お、おっしゃらないで、下さい……」

声といっしょに涙があふれる。悲しくて、羞ずかしくて、浅ましくて……。いや、順子の涙には、もっと違った意味があるはずだ。

「あたしね、ますます順子がかわいくなったの。もうあんな男の自由にさせないわ」

あんな男って——？ もの悲しいもだえの中で、ひとつの疑惑が脳裏をよぎり、順子はおじおじと夫人の表情を仰いだ。

優雅なたわみをつくりだし、夫人の姿勢がスツと近づく。真上から順子をのぞいた。

「順子は立派だったわよ。さ、お水！」

夫人はグラスを持っていた。白い喉をさらせて口に含んだ。グラスの中身は透明だが、順子の思ひは眠り薬の混ざったカクテルにつながり、いやな予感に、そっとおびえる。

ぬれぬれとした唇に瞳をそばだて、順子の首がかすかにゆれた。だが間近に迫ると、ふーっと目を閉じ、口移しのカクテルを甘く受け、熱い戯れに呼応して舌を差し伸ばした。異和感のないのが自分でも不思議だった。

(八)

「だいぶいいコになったようね。でも、まだまだ訊くことがあるわよ。さ、お立ちッ」

アッと息をのむ順子を冷たく見おろし、夫人は急に、よそよそしく態度を変えた。

「お仕置のつづきです。覚悟はしているでしょ。モタモタしてたら、ぶっ叩くわよ」

まなじり鋭い夫人の威嚇におびえ、順子は不自由な肢体をくねらせてよろめき立った。

「もう一度、この上へおあがりなさい！」
アアッ、と、順子は悲嘆にくれる。怨めしように羞ずかしいテーブルを見た。

「こんどは置物じゃなくて生き仏さまになるのよ。悪いことをしましたと罪をつぐない、座禅を組んで深く反省してもらいます」

「そ、そんな……。もう、赦して下さい」

膝からくずれ、順子はよよとすすり泣く。
「ダメ！ 生意気な順子の性根を叩き直してやる。さ、早く！ これ以上あたしをおこらすと大変よ。鞭でひっぱたいてやるからね」
丸はだかのまま後ろ手に縛られ、縄尻をしっかりつかまれていては逃げようがない。引ッたてられ、順子は、しおしおとテーブルの上へ這いあがって泣きじゃくる。

夫人の手さばきは非情に徹した。あぐらを組ませた脚をいっそう深くし、折れ曲った内股の隙間から容赦なく足首をつかみ出す。

順子の両足は強烈にからまり、膝頭を突っ張って動かなくなった。完全な結跏趺坐だ。

「そら、もう自分では、はずせないでしょ」

組み合わさった脚のぐあいを入念に調べ、おまけに紐までかけて、夫人はせせら笑う。

またもや無残な無防備にさらされ、順子からは、責め苦に恐怖して粟粒が立つ。

「さて、ふたりでおしゃべりをしましょう」

夫人は椅子に腰をおろした。テーブルの上に片肘をつき、妖しい目つきで順子を見る。

「お、奥さま。もう、お、おゆるしを……」

「いいえ、赦しません。これから順子の罪状を取り調べます。このテーブルが法廷で、あたしは裁判官よ。正直に答えないと、ほら、ここにいます、こわい検事さんがおこります」

いつの間に用意したのか、夫人は怪しい小物を手に取り、ひとつひとつ、順子に示す。

先のちびれた太い筆、針のようにとがった毛筆。ケース入りの化粧セットに小さな瓶。

太い木綿針まで……。どれもみな女の持物らしく、見た目には親しむ深い日用品だが、実際には陰險な毒を含んでいるのだ。

「さ、始めます。順子は何をしたの？」

夫人の指さきでキラッとする細針を見て、順子はサッと色を失う。言おうとして声もつれ、口ごもる唇が、わなわなと慄えた。

「あたしの手帳を盗もうとしたのね」

「はい。アッ、アア、いいえ！」

「だれに頼まれたの？」

「知りません。私、盗んだりしていません」

「でも、目を光らせて見ていたじゃないの」

奥さまの、ご予約が、し、知りたくて……」

「嘘、おっしゃい！ この強情者ッ」

夫人の表情に残忍な怒りが流れ、と同時に順子はウワァッと叫んで身をちぢめた。柔軟な太腿へ、ブツツと針が刺さったのだ。

「ホホホ、消毒してあるから心配ないわ」

夫人はケロッとしているが、この針責めは骨身にこたえ、順子はのけぞって泣き叫ぶ。

「白状しないと脚を針山代わりにします」

また一本、いっそう深く突き立った。

「お、おくさま、ゆ、ゆるして、ください」

イイイ、う、うむむッ、と歯をむき出し、耐えかねる激痛に、順子は息もたえだえに肩をゆるがせて身もだえる。

順子の両脚、ミルク色に沈んだ柔肌には、長短さまざま七本の針が突き刺さっていた。

「赦してほしいのなら全部、お言いなさい」

「そ、それは……。アッ、ウワァッ」

「オッホッホ。いつまで辛抱するつもり？」

針のつぎは、やわやわしい筆さきだった。

夫人にとって、順子への責め問いは単なる演出効果にすぎない。苦痛の中にひそむ悦びを教え、屈辱のうちに芽ばえてくる快感を悟らせて甘美な敗北へ導くのが目的だった。

羞恥と屈辱の入り混じる恐ろしい痛苦にの

たうち、哀切きわまりない喉笛を響かせながら、それでもなお甘い刺激を敏感にキャッチし、快いうずきに歓喜のうめき声を出す女体の夢を、順子は、身をもって表現していた。

テーブルの上に、世にも珍しい、奇怪な生きた置物が据えつけられた。

ついさっき、からだで女の屈伏を示した順子だが、心は頑強に閉ざしたままだった。

けなげな若鹿の抵抗は、夫人の心に快い刺激を与えたようだ。軽々と扱い、逆立ちに反転させて残酷なポーズに仕立てたのである。

まん丸くふくらんだ臀部をおっ立て、順子は、ふしぎな三角錐をかたどっている。額と

両方の膝頭が三角形の支点だった。左右に割れた太腿と、前に傾いた背中を稜線にして、

組み合わさった下肢のあいだと、からだの側面両方に、三角の空間が三つできている。

巨大なおむすびに似たその姿は、見るからに哀れをさそう屈辱的なポーズだ。みじめにあばかれたわが身を意識すると、おぞましい疼痛が胸芯をえぐる。全身をくるんだきびしい呵責は、たましいを粉ごなに打ち砕かんばかりの強烈さで、懊悩のうめき声を強いる。

体力は急速に衰微し、いまにも気が遠くなるほど苦しい。実際に目の前は、まっ暗だ。

だが、ひらいた膝と、クッションにうもれた前頭部が強靱な三脚となり、伸ばすことはおろか縮めることもできず。固定されたも同様、奇怪な形態をくずすことができない。

哀泣しきりに痛心の思いをこめて、順子のからだは弱々しく皮膚を慄わせ、飛びだした乳房の先端が可憐におののく。

「がんばるわねえ、順子！ その意地の強さは十分に認めましょう。でもね、あんな男のためなら、順子の努力はナンセンスだわ」

夫人は、したたる汗で粘った順子の、たわわな胸乳に戯れながら、耳もとでささやく。

「あいつはくわせ者よ。女性の敵だわ。可哀相に！ 順子はあんなくだらない男、吉村保にだまされているのよ」

順子の全身に痛烈なショックが走る。恐ろしい夫人の責めにも屈せず、最後まで口をつぐんできたのに、意外なことに夫人は吉村の名前を知っていたのだ。そんなことは露知らず、必死に耐えてきた自分が哀れだった。

「あたしが何も知らないと思っただけ大間違いよ。あたしは順子の身許調査もしたのよ」
なぶられている胸もとからせつなさがかみ

あげ、順子は気が狂いそうな自分に怯える。

「どうします、順子！ もうあきらめて降参する？ いやならこのまま放っておきます」
夫人の声には強い意志がある。本当に無残なポーズのまま放置しかねないようすだ。

息ぐるしい顔をわずかにねじって、順子の声は、とぎれとぎれにくぐもる。

「ほんとう？ 素直ないいコになって、あたしに心服するって、そう誓うのね？」

順子は考える力を失い、まともに答える気力もない。感覚のうすれた後ろ手と、汗で艶光る筋肉を可細く慄わせ、それが夫人に対する返答だった。つまりは完全な屈伏である。

佐倉夫人は、さも満足そうにうなずいた。

「ではね、この瞬間を記念して、ステキなポーズを永久に残すことにします。これから始まる今夜の儀式は、みんなフィルムに納めましょうね。順子の誓約のあかしです」

いっそう甘美的な想念が脳裏をいどり、夫人の感情は、うるおい豊かに多角的に遊飛していく。あわただしく動き、テープルのまわりへ、いろんな器具を寄せ集めた。

「順子は生まれ変わるのよ。いやらしい男のおいを洗い落とし、赤ン坊になって出直しましうね。赤ちゃんだから粗相をしても仕

方がない。ちゃんとしてあげます。その代り、そのままそこで済ますのよ」

三脚を立てて、撮影準備を整えた夫人は、言ったとおりに便器を差し込むのだった。

哀れな三角錐の順子の姿態を、角度を変えてはカメラでとらえ、ついで夫人は、クスクス笑いながら何事か耳もとへささやく。

イヤッ！ 順子の全身が真ッ赤になった。
「ダメよ。いやなら浣腸をします」

アア—— 順子は悲痛なうめきをもらす。
浣腸——。異様な語韻のそのひと声で、順

子は、すっかりおとなしくなった。歯をくいしばって羞ずかさに耐え、無情な夫人の要求に従って見せた。むろん、絶好の被写体であった。

十数分後——。順子は後ろ手に縛られたまま、床の上であぐらを組み、前かがみからだを低くして顔を突き出していた。

前の椅子には放縦な夫人の姿態があった。それが佐倉夫人に屈従を誓った江崎順子の姿だが、あれほど辱かしめられ、いたぶられた相手なのに、奇怪にも心の底にわだかまっていた夫人に対する嫌悪感がうすれ、むしろ甘えるようなしぐさで夫人に奉仕し、その行

為の中で奇体な悦びに浸っているのだ。

自分自身の変異を、いぶかる気持も強い。

だが何よりも「吉村保は女性の敵よ」と言
った夫人の言葉が気にかかるのだった。

ようやく順子は吉村を憎みはじめていた。

(九)

華やかなネオンを避けて、暗い夜の道を、
江崎順子は吉村保に会うために歩いていった。

悄然と肩を落とし、うつ向き加減の堅く唇
をかみ締めた彼女の脳裏一帯、昨夜、佐倉夫
人に教えられた言葉のかずかずが、奇体なこ
まぎれ模様になって散在している。

きれぎれに聞いた夫人の声をまさぐり、断
片を拾い集めてつなぎ合わす。すると、妖し
くもつれた情痴の終始が本体をあらわし、想
像を絶した意外性が浮きあがってくる。

それらはすべて、吉村とのあいだに深いか
わりが生じたここ半年あまり前にさかのぼ
り、しかも、彼女はその中心にいたらしい。

まったく信じられない奇怪な出来事だが、
おもんみれば、無念にも夫人の言葉は、ひと
つひとつ思い当たることばかりだった。

要するに、男にだまされていたのである。
端的に言えば、彼女は、ひとりの有閑マダ

ムの生きたオモチャ……愛玩物にふさわしい
女に馴致されたのだ。そして彼女をペット化
する飼育を引き受けたのが、吉村だという。

まさに断腸の思いがするくやしい事実だ。

あらゆることがうとましく、やりきれない
忿懣がこみあげてくる。その怒りは、凶暴な
動向を誘発させんばかりの激しいものだ。

自分自身を粉ごなに打ち砕いて、奈落の底
に沈めてしまいたい衝動にかられる。

ヒステリックに怒気満々だし、本来ならこ
ういう危険な心理状態のときにこそ、性的な
本能だけに生きる女に化身し、愛欲のほむら
をまとって官能的な愉悅に身をゆだねたい。

性の快楽には、たとえ一瞬なりとも心のう
さをきれいさっぱり押し流すうま味がある。
過激な心労に耐えかねた人間にとって、性欲
こそ、たったひとつ残された安易な逃避だ。

だが、いまの順子には、ささやかな望みや
小さな愉樂さえ約束されていない。悪らつな
吉村の行為は、絶対に許すことができない。

佐倉夫人が教えてくれた男の正体——悪
意に満ちた吉村の奸策をあばき、その真相を
確実に自分の目でとらえて糾明したいと、順
子は、強い意志を胸裏に秘めて道を急ぐ。

「はい。これ——」

「なんだい？」

「佐倉専務が持っていたメモの中身よ」

「エエッ。どうして手に入れたんだい？」

「チャンスだったのよ。ゆうべ専務は山辺夫
人に招待されたそうで、私が出たときは、
もうぐでんぐでんのへべれけ！ 私、内心し
めた、と思ったわ。それでもこわかった。冷
汗たらたら手はぶるぶるとふるえるし……。

でも、あなたのためだと思って一生懸命、本
当に命がけだったわ。ほら、見てよ！ 書い
た字がガタガタでしょ」

「——？」

吉村は、しばらくポカンとしていた。

「さ、受け取ってちょうだい。こんどは、
そっくり写してきたわよ。これで私の役目は
終わったのね。ねえ、そうでしょ？」

一瞬、鼻白んだ男の表情を見のがさず、順
子は、われとわが心にわびしく、うなずく。

「そうか！ ずいぶん苦勞をかけたね。無理
を言っすまない。お蔭で、助かるよ」

吉村の声は、言葉どおりの喜びを感じられ
ず、逆に沈んで困惑しきったふうに見える。
相手の沈痛な面持ちにおかまいなしに、順

子は、自分勝手にしゃべりつづける。

「ああ、ようやくこれで身も心もせいせいしたわ。自由ってステキね。この解放感、まったくすばらしいわよ。グツときちゃうの」

抱いてエ。と、わざと、はすッ葉に言う。

「金曜会とも縁切れねえ。このメダルも用済みでしょ。帰りに捨てちゃう。思いッきり遠くへ叩きつけてやりたい心境だわ」

「ア、ま、待てよ、すてちゃまずい！」

「どうして？ もういらないのでしょ？」

「うん、まあね。でも、それは大切な品だ。軽々しく扱えないよ。それよりも、きみね」

「なーに？」

「金曜会のこと、そんなにいやかい？」

「いやだわ。思い出してもゾーッとするの。」

だって、まともじゃない、不自然なもの」

「きみは、ぼくのこと、愛してくれる？」

「むろん！ だから身ぶるいするほどいやなことだって、じっとがまんしてきたのよ」

「だったら、もうすこしつづけてほしいな」

「いやーね。いったい、いつまでなの？」

「もうしばらく……。きみには気の毒だと、実はぼく、真剣に悩んでいるんだ。でもね、いまが一番大事なんだ。なんといったって会社のピンチだから……」

「あら、そんなに不振なの？ TS商事は」

「いいや、そんなことはない！」

吉村は、思わずすべらせた自分の軽口にあわて、力強く否定して口をつぐんだ。

「でもね、私にしたらホントにつらいのよ。」

言ってみればレスビアン・バーのホステスだもの。この気持、わかって下さる？」

「うん、わかっている。すまないと思うよ」

「だったら私に、ごほうびをちょうだい」

「ああ、それは、言われなくても……」

男は熱い唇をかさねて、女の声を封じた。

いま、女につむじを曲げられては困る。う

まいぐあいにあしらい、ホステス役の継続を素直に承服させなければならぬ。持前の技術を駆使して女の神経を狂わすのが先決だ。

吉村は、にわかに積極的になり、暖かくうるおった愛撫が順子の肌を静かに這う。

と、ふいにがくツとして、こわばった動き

が右往左往し、男は、ぼう然と息をのんだ。

「どうしたのだ、ここんとこ——？」

吉村は、目を丸くして順子を見た。

「イヤッ。羞ずかしい。お願いだからなにも訊かないで……。私、死にたいほどだった。でも……あなたのためだと……思ってた……」

顔をとおおい、身もだえはげしく、順子はよよとすすり泣く。が、その実、彼女は、腹の

なかでペロリと赤い舌を出していた。

「そ、そうか！ あのメスブタめッ。きみのからだに、こんなことまで……したのかッ」

うむ、むむむ、と吉村はうなる。いまいましそうな舌打ちをかさね、興ざめ顔で、動作まで急におろそかになった。

実は、順子のからだは、なつかしい天然のいろどりを失い、無残にもなめらかな禿山になつていたのだ。

順子は、あたしの赤ちゃんになるのよ——

と、きびしい宣告をしたあと、佐倉夫人は自分の意志をはっきりと順子に教えている。

あたしは無いほうが好きよ。だから、そのまま、がまんしなさい。これから先、いつまでもですよ——

命令です！ と夫人は冷たく言った。

無気味な感觸と限りない羞恥、みじめな自分の姿を思いみて順子の哀哭がつづいたが、そのあとの夫人の態度が、また意外だった。

あたしの趣味なの。すこし変でしょ——

そう言って、なまめいた目つきで童女に変貌した順子を、しげしげと眺め、

とってもキレイ。ステキよ、順子——

突如、激しくむさぼりついたのである。

熱狂的な夫人の情熱は、順子をして啞然と

させたものだが、噴きあげた女の情火を彼女は決して忘れないだろう。気が変になるのではないかと怯えたほどだ。

やがて夫人は、順子を鏡の前へ立たせて、キレイでしょ。そうは思わない？——

と、しきりに自分の審美感覚を強調する。

夫人との異常なデイトがつづくかぎり、こんな姿のまま、過ごさなければならぬらしい。女性にとっては恐ろしい恥辱である。

しかし讚美する夫人の暗示にかかった順子は、全身に女の哀感をにじませながら、すがすがしい自分のからだをうっとりとして見て、すすんで夫人の命に服し、決して手入れを怠りませんと、堅く誓ったのである。——

「チエッ。これじゃ、気分もでないや」

せつなく昨夜をなつかしむ順子の思いは、男の捨鉢な声によって消されてしまった。

「お願い。そんなふうに言わないでよ。私のこと、きらいになったの？ 私、あなたに尽して、こんなにされたのよ」

「じゃね、もうしばらく、ぼくの言うとおりのホステス役をつづけてくれるかい？」

「この役目がすめば、奥さまと別れて、こんな私でも結婚の約束を果たして下さる？」
「ぼくの頼みを引き受けてくれたら——」

「私の願いをかなえて下さるのなら——」

それは言葉に託した男と女の攻防だが、すでに愛は消滅している。精神的なつながりも断絶して、残りはただれた愛欲だけだ。とはいえ、おたがいになんらかの目的を持ち、いわば真剣勝負に似た闘争かも知れない。

しばらくは妙に白けた沈黙の時が流れた。と、すっかり戦意を喪失し、ぜんぜんべつな場所で冷え固まっていた男が急に反転し、動作にも積極的な意思がよみがえった。

それが吉村の新しい意図なのであろう。順子は冷たい心を抱いて呼応していく。

やはり夫人の言葉に偽りはなかったのだ。陰険な手段で人間の性を玩弄し、すこしも恥じるところのない吉村という男を、順子はこの時ほど憎々しく思ったことはない。

(十)

夜の遅いこのあたりでは、いま時分、まだ宵の口であろうか。遠いざわめきに思いを乱され、順子はポツカリと目をひらいた。

首をもたげて男のようすをうかがう。しのびやかにからだを起こし、暗然とした冷たいまなざしで、かたわらを見おろす。

吉村は、淫ら火の消火に没頭したあと、労

費したエネルギーを取り戻そうとでもするか、いぎたなく惰眠をむさぼっている。

こんなくだらない男のために、私は——
思えば思うほど自分がみじめだ。それでもつい、深沈とした感懐におちいっていく。

ゆうべ、佐倉夫人の口から、自分に関する事の成り行きをくわしく教えられたのだが、正直に言って半信半疑で聞き、むしろ夫人の言葉に嘘を感じて強く否定したものだ。

ところが今夜の経過をかえりみて思えば、男のわるだくみが歴然としてくる。

吉村が駆使する卓抜な魔術に魅入られた彼女は、惚れた弱味で、結婚しようという甘いささやきに惑わされて動き、その実、男の出世欲のために利用されていたのだ。

順子が聞いた佐倉夫人の説明は、こうだ。
実際は夫人自身が、綿密な深慮をかさねてはかりごとをめぐらし、穩密裡に、自分好みの愛らしい女を捕獲し、特異な秘書に飼育しようと思ったのが、はじまりだという。

中小企業の例にもれず△TS商事△は、このところ数年、経営不振をかこっていた。
元来が弱電気器具の専門商社なので一般の消費経済とは直接に関係がなかったが、あ

る品目ではいちじるしく購買力が低下した昨今、大企業の生産過剰にわざわざいされ、早晩業績が下降するであろうと、これが業界筋におかたの噂であった。

そのような見方にもかかわらず、どうにか無難に切り抜けられたのは、一にも二にも、より安く、よりすぐれた製品を、つぎつぎに発表するハミカド工業Vのお蔭だろう。

規模からいえば格段のひらきがあり、とるにたらぬ相手だが、日ごろからATS商事Vとハミカド工業Vとの密接なつながりを重視していたハサクラ商事Vは、この機会を見のがさず、ひそかに策動を開始した。

ともかくハミカドVの技術陣とATSVの販売網は、企業家にとって大きな魅力だ。

まず、関係者のあいだで合併機運が盛りあがってきた。ところがハサクラ商事Vの佐倉専務は、この動向に強く反発し、話し合いを拒否して独自の見解を打ちだした。

つまり、両社が合併するのでは意味をなさず、この際ATSを自社の傘下に吸収するのが得策、という強硬な意見である。

と同時に、みずから折衝を買ってでた女専務は、ひそかに内応者を物色し、その適任者にハ金曜会Vの常連、山辺夫人の夫、山辺常

務を選んで接近しだしたのだ。

実は山辺常務はATS商事Vの現社長の縁つづきで、社内を二分するほどの隠然たる力量を持ちながら、かえってそれがわざわざいとなり、不遇な閑職に追いやられていた。

佐倉専務は、このような山辺常務の心理的な憤懣に乘じ、夫人に働きかけて、併合後の責任者、つまり社長の椅子を交換条件に協力を要請し、株の買占を策したのである。

一方、この時点で、山辺夫人にもまったくべつな思惑があった。最後の段階でうっちゃられることのないよう、いざという時の用心に、佐倉専務の弱点を自分の手中におさめておく必要があると考えたのだ。

以来、山辺夫人はすすんで佐倉専務に近づき、専務の女あさり……秘められた嗜楽の性を探知すると、その趣味に迎合し、自分の勢力圏の中から三人の候補者を選出した。

十八歳から二十四歳までの未婚女性を目安に、いずれも容姿ともに佐倉専務の好みに合致した健やかな女ばかりだ。あとはペットにふさわしい特別の教導を行なえばよいのだ。

候補者が決まると山辺夫人は、さっそく夫に向かって自分の腹づもりを打ちあげた。

山辺常務は、妻の異様な野心に驚愕しながら

らもその進言を受け入れ、腹心の部下、吉村課長に対して三女性飼育の密命をさずけた。

特異なテクニックを誇り、ひそかにプレイ・ボーイだと自認する吉村保は、こうした事情のもとで、常務命令によって三人の女性を誘惑することになったのである。

常務の密命を帯びて、いわば公然と許容されたも同様な女遊びである。しかも相手はピチピチとはねまわる美しい女ばかりだ。病気の妻をかかえた道楽者の中年男にとって、こんなうまい話は、またとないだろう。

吉村は、このすばらしい天の恵みに感謝し、快的な女性誘惑の遊戯に熱中していった。

ひとり、またひとり……。巧みに試食した

吉村は、そのつど、山辺夫人に報告した。

微に入り細にわたる候補者の状態を吉村から聞いた山辺夫人は、イメージを具体化して佐倉専務の審査を仰ぎ、その結果、江崎順子が適任者だということになったのだという。

「あのひとたち、これであたくしの弱味を握ったつもりでいるのだから、ケツサクだわ。あたくしは平気よ。堂々と順子をミカド工業から引き抜いて自分の秘書にします」

佐倉夫人はケラケラと笑いとばした。

「それよりも、順子にとって肝心なのは男の

本心でしょ。愛情なんかこれッぽっちもないのよ。何事もビジネス・オンリー。ゆびさきの魔術で女の真心をもてあそぶなんて、吉村という男の人は情けを失った極悪人だわ。実は言いだしたのはあたくしだから、悪徳の張本人はあたくしかも知れない。でもね、あたくしはこれでもサクラ商事の専務です。自分の行動に対しては応分の責任をとります。たとえ倒錯的な関係でも愛の自覚を持ち、もちろん順子の将来についても保証します。それに順子だって、最初はともかく、いまなら、あたくしのそばにすることを、それほどきらってはいないはずよ。さっきは、あたくしにいじめられて、変な声を出して泣いたじゃないの」

夫人の擲^や擲^ゆが鋭く迫り、順子はうろたえた目を伏せる。

「吉村という男の正体については、順子が自分の目で確かめるのが手っ取り早い。吉村が言ったというこのメモのこと、これ、なんでもないのよ。あちらから教えてくれた株のことが記入してあるだけよ。あたくし、存外、数字には弱いものだから——」

男の真意を探るのに必要だからと言って、夫人は、順子にメモの中身を写させた。

「それを渡して、もう金曜会にかかわるのはいやだと言ってごらん。カレ、きつとあわてるから。多分、頭を下げて頼むはずよ。……なんのためにって？ オホホホ、よく考えてごらんよ。もしも泥棒猫、いや、スパイのような怪しい行動を見とがめられたら、そのときはどうなると思う？ どんな罰を受けたって文句は言えないでしょ。順子だってそんな場合の覚悟をしていただろと思うわ。あのひとたちはそこまで計算し、内心、順子の行為がバレるのを待っていたのよ。タネをあかせば、あたくしの身边や手帳を探ることも、順子を愛玩物に馴致する手段として考案された筋書きのひとつよ。つまりね、順子はたえず自分の犯した罪を意識して恐れおののき、あたくしが折檻するときに、どんなことをされても甘んじて受けるようにと、こんな奸策を含めて巧妙に仕組まれた罠だったのよ」

婉然^{えんぜん}とはころびる夫人の微笑を眼のあたりにして、順子はしばし声を失っていた。あまりにも奇怪な事実に啞然としたものである。

「どう、わかった？ あすにでも吉村に会いなさい。そして男の本心を十分に読みとるとね。それからさきことは順子の自由意思です。中年男の魅力は捨てがたいし、一生を

託しても後悔しないと思ったら吉村の愛人になればよい。あたくしは反対しません。だけど男の醜さに愛想がつきたら、その足ですぐに飛んでいらっしゃい。でもこの際はつきり言っておきます。こんど会ったら、あたくしは本気で順子を生きたオモチャにしてみます。表向きは専務秘書ですが、一步この部屋へ入ったが最後、順子はペットよ。もちろん何も着せてやらないし、もっとひどいことをするかもわかりません。たとえば首輪をはめて犬の真似をさせたり……」

ウフフと、夫人は妖しく含み笑った。

「吉村は憎い男だし、あたくしはいやらしい女！ どちらもイヤだというのなら、それでもいいのよ。自分でよく考えることね。あたくしは順子が好きよ。食べてしまいたいほどかわいいの。順子は、きつとあたくしのところへ戻ってくるわ。あたくし自信があるの」

自分の足もとで身をすくめている順子を見おろし、おしまいに佐倉夫人は、勝ち誇ったような哄笑を響かせたものだ。

翌日、順子は吉村に会ったのである。

(十一)

口争いをゴングにして始まった男女の闘技

は、いつもと違った激しい様相を呈し、人間の醜さ、情欲の卑俗的なもろさなど、そういった裏面を見せつけるような観があった。

吉村は自分の利益を心に刻み、打算的に、それに見合った努力を傾注したようだ。彼も今夜ばかりは真剣だったのかも知れない。

そして結果的には、またしても順子は、くやしい完敗を自認しなければならなかった。

吉村という男に対して、この瞬間、順子のいだいている感情は幻滅以外に何もないはずなのに、途中で意思を置き忘れていた。口惜しいことだが、彼女は、心とからだがバラバラであった。それもみな、半年にわたって馴致されたという事実の証左かも知れない。

肉体だけで愉しむ原始的な女族のように、彼女は男の翻弄に身をまかせた。すると、たちまちふしぎな甘さが鋭敏な感受性をこそぐり、あらがう理性をなだめすかしてしまう。わびしい女の性に哀感をつのらせながら、どうしようもなく、ほろぼされていくのだ。

と、その自意識は、かつてない痛切な屈辱感をさそい出す。この男を、いや、傲慢無礼な吉村保の駆使する魔手を呪い、あえなくも潰えさった自分自身に憤激する。

彼女を、わがもの顔に征服した不埒な男は

自信ありげな傲慢さで、四肢をこれ見よがしに、無造作にかたわらへ投げ出している。

順子の瞳が冷たく光った。男の腕を射るようにとらえて、そのまま凍りついた。

衝動的に、凶暴な発作が火の玉となり、突如、彼女の神経を冒したのはその直後だ。ほとんど錯乱状態で服を身につけた。

凝縮した瞳は一転して拡散し、無表情で男の四肢を見る。再び過激な衝動が襲った。

無我の境地でとっさに男の手をつかみ、そばにあったテーブルの端へ指を押しつけた。はしたなく足をはねあげ、その一瞬に満身の憎悪をこめて荒々しく踏みにじった。

傲岸な中年男の喉から、動物の咆哮ほうこうを思わすすさまじいなり声が長く尾を引き、エビのように背を丸めたまま、傷ついた手を胸にかかえて狂ったようにもだえる。疼痛に耐えかね、縮まった両方の足が、バタバタと寝台を蹴りつづけた。無意味な動作であった。

瞬間に爆発した激情のあと、順子は、自分でもふしぎなほど冷静な気持で、むなしくあがく男の苦悶を見おろしていた。

実際に、寸前の彼女は、男の手指をもぎ取ってしまいたいと思ったのである。

吉村はわめきながら痛む手を見せている。

呪詛と憎悪を凝集してふくれあがり、ふいに炸裂した女の忿懣をまともに食らった男の手は、三指が完全につぶれていた。内出血につれ、赤黒く変色して腫れあがっていく。

すでに魔性は消滅していた。もはや醜怪なひとつの物体にすぎず、やがて知覚神経から孤立し、肉体からも離脱して朽ち果て、死滅する運命にあるのだろう。

順子は、鋭利なメスで切断されたときの形態を脳裏に描いた。男の利き手は、健全なのは親指だけだ。まん中が欠けて無くなり、しなびた小指が端に垂れている。欠け落ちた三指は化石する木片さながらに捨ててあった。

あのいやらしい毒蛇は、死んだわ——
索寞さくもくとした思いのなかで、奇体な安堵感が徐々にひろがってくる。心の底まで暖まるような、妙にすがすがしい満足感があった。

「さようなら——」と、順子は言った。苦しみもだえる男の姿に、微笑を浮かべた一瞥を与え、そのまま部屋を去っていった。

この傷害事件は表ざたにならなかった。

数日後、江崎順子は、表情も明るくはつらつとした足どりで、新しい職場になった八サクラ商事Vの専務室へ入っていった。(完)

切腹百年史

女性篇

中 康 弘 通



カ
ッ
ト
・
浪
速
伸
浩
画

明治百年を迎える。近代日本になって百年は、まずはめでたい。しかし、この百年にはいろいろなことがあった。近代と云っても、まだまだ封建の遺風が残っている。「切腹」も、その一つかも知れない。

封建時代、武士は最期を切腹で飾る、という気風があった。今でも男

の腹切りは多少とも、見栄を伴うのか、人なかで立ち腹切り、などという派手なケースもないではない。

しかし、これが女の腹切り沙汰となると、終戦前後、君国に、あるいは夫君に殉じての切腹を遂げた婦人は、古武士ながらの気がまえと云ってよいが、戦前、戦後の平時のそれは、よくよく思いつめた揚句のことと思われ、また時には、衝動的な自己否定、自己破壊とも見える。

それにしても武士でも腹を切って死ぬのはなかなかむづかしい。しまいに江戸時代中ごろのように、腹を切らずに介錯を受ける、つまり、打首とも斬首とも云えるような最期をとげる武士が少なくなかった。それを非力な女の身で、殊に、介錯が自殺ほう助罪として禁止された近代に於いて決行するのはよくよくのことである。あくまで自分で自分の始末をつけるために、自からとどめを刺さねばならないからである。

そして、筆者の調べた範囲では、男性より女性の方が、切腹死の既遂率は高いようである。何とも傷ましい。その傷ましさの中でも前途幾春秋に富む娘たちの切腹くらい、傷ましい事実は、この世に類がないのではあるま

いか。

ともかく百年間に何百人の大和撫子が腹を切ってしまったか、正確な数はおそらくどうしても資料が揃うまいが、先達、壬生三郎氏（「切腹七部集」の著者）や畏友、黒部竜二、片岡政則、鳴海大介、故須藤律夫、田谷敬生氏ら、その他のご協力もあって、筆者が集め得た約二百例から、特色のある事例を記してみよう。是もまた明治百年史の一側面に違いないのだから――。

一、本所の娘腹切り

明治三十六年五月十九日の夜の事である。

東京は本所緑町の鉄屋、山○寅松方で、夕方から女房ロクと継娘のあいだに一と悶着があった。妹娘の家出がきっかけである。

長女のトキ（十九）が四才の時、姉妹は母親に死に別れ、後妻を入れたまではよいが、姉妹の成長につれ継母との折り合いがうまく行かない。そこでトキは十六才のとき麴町飯田町へ奉公に出してしまった。

ところが昨秋、寅松の姪イシ（二十五）が富山から奉公の目的で出て来て寄寓してから、一層事情が悪くなった。と云うのは、イシが寅松に口説き落とされ、ロクの目を忍ん

では密会する仲になったからである。

寅松は年が改まってから同じ区内の北二葉町で鉄屋をイシに営ませ、一とまず騒動は落ちついたが、次女のスエ（十七）がイシと親しいというので、ロクはスエを憎み、ことごとくにスエに当たる。

そこでスエもたまりかねて六日の夜、知り合いの産婆、田中ゲン方へ身を寄せ産婆修業の世話を頼んだ。ゲンも事情を察して、懇意な下谷の産婆へ内弟子入りを口添えしたが、思わしく行かぬ。落胆したスエは行先もないまま姉の奉公先へ事情を話しに行ったところトキは父親の不品行に心を痛め、ともかく意見を、と七日の夕方、スエを他へ預け、独り帰宅してみた。

折悪しく寅松は不在で、ロクはスエの無断家出をなじり寅松の乱行ぶりを並べ立てる。トキは何と云っても十九の娘、先立つものは涙ばかりで言葉なく、寅松の帰りを待つうち八時にもなった。ロクが所用で出かけた隙に娘心の思いつめたあまりか、六畳の間に入ったトキは、単衣に着かえ膝を細帯で縛ったうえ、口には紙を含んで手拭いでしばり、かねて家に秘蔵の一尺九寸余の日本刀を以って、左右の咽喉を突き更に、腹より背へと刺し貫

いて、自殺をとげてしまった。

当時「本町緑町の娘腹切」と東京日日にも報道された事件であるが、呻きを立てじ、膝も崩さじと、こまごま氣くばりした女ごころの哀しさは「いと憐れ」という新聞記事もあながち文飾ではなかったであろう。

二、赤坂の娘腹切り

前述の山○トキ（十九）の例を見ても判るように、「娘腹切り」と伝えられても、実際は日本刀を腹へ突き刺したもので、なかなか腹一文字だの十文字だのと云うわけには行かないが、妙齡の美人が腹一文字にかき切ったと伝えられる事件が、明治末期にあった。

明治四十四年十二月二十二日の夜、十一時ごろである。東京は赤坂の氷川神社近くに住居する古物商、松○勘太郎宅では、主じは長男ともども麻布へ露店に出かけ、妻のまつが風邪で臥っていた。

十八才になる娘のちかは、秋から氣うつ病いで近くの医院や東大病院の治療を受けていたが、一向はかばかしくない。そのちかが家出をした。程経てまつが、ちかの居ないのに氣づき同居人に頼んで勘太郎へ変事を知らせ、三人があわててちかの行方を探すうち、

ふと、氷川神社の社前で女が腹を切っている
と耳にしたのは、もう夜半であった。

急いで現場へ行ってみると、やはりちかである。彼女は家の簞笥から持ち出した、刃わたり一尺五寸余の脇差で腹を切り、返す刃で咽喉を突き、もはや虫の息。ほどなく運ばれた自宅で若い生命は絶えた。年ごろが年ごろゆえ、恋愛関係か何かがあったのではないかと想像されるが、詳細は伝わらず、原因も、気うつ症とのみで片付けられている。

この事件、「腹一文字にかき切り」とあるが、実際は「腹に深さ三寸、長さ一寸の切り傷」というから、腹へ突き刺したもののほとんど引き廻せず、やむなく咽喉を突いたものと見える。

はっきり原因が失恋とあるのは、昭和三年六月十八日の夜、長野県伊那町の天竜川沿いの桑畑で腹を切った、上諏訪の資産家の娘。

二十才の彼女は女学生時代、中学の教師と恋愛していたのに、男が他の女と結婚してしまったので、思いあまって家を出、夜更けを待って所持の白鞘の短刀で切腹してしまったものらしい。

そのころは丙午の女性が適齢期で、迷信から結婚難を招き、悲劇が続出したが、同じく

昭和三年十月十日午前一時、丈余の遺書に血涙をこめて、迷妄の世を呪う文字を連ねたのち、千葉県蘇我町の石〇よね（二十二才）は剃刃で悲愴にも割腹自殺をとげている。短刀と違って柄も刃も短い剃刃で、死ねるほどの切り方をしたのはずいぶん思いつめてのことと察せられ、当時としては地方には少ない女子高等教育を受けていながら、この悲運におちいった心情は全くいたましい。

三、娼妓の腹切り

戦後はいろいろの職業、階層の女性が切腹事件を起こしているが、戦前は、割合に芸娼妓が多かった。それも州崎の娼妓に多い。

まず明治三十六年六月、州崎弁天町のF―楼では、源氏名を都と呼ばれる二十一才の娼妓に、二十二才の青年が八日の夜から居つづけしていた。

彼はもと海軍に志したが、再度まで受検に失敗し、実業に転じようかと悶悶の折から都を買い馴染んだ遊客である。

十四日に一旦外出し、また戻って部屋に籠った二人へ、十五日の夕方になって新造が声をかけに行ったが応えがない。ないも道理、床の間には線香を焚き、それぞれに遺書も三

通ずつを残して、洋刀とあるから大型のナイフであろう。二人とも腹を切り咽喉を刎ねて絶命していたのである。

女は山梨県の出身。義理に責められた男に同情したものと見える。

同じ州崎弁天町で、小照という二十六才の娼妓は、昭和六年十二月十九日の未明に腹を切った。

恋人の写真を飾り、この日の為に研ぎに出してあった西洋剃刃を手にした彼女は、十六貫という肥軀ゆえに、奇蹟的に生命をとりとめたが、腹を五度六度と切り裂き、しかも呻き一つ立てず出血のため意識を失ったところを、一時間後に発見された。そのときの彼女の左手は恋人の写真をつかんでいたという。

そのほか、詳しいことは不明だが、かなり古く明治十七年八月十二日の夜半には、新吉原揚屋町の貸座敷I―で、娼妓小蝶（三十才）が、病苦に悩み、看病に郷里から出て来ていた母親の立った隙に、剃刃で腹十文字に切り咽喉を突いている。

また、四十一年七月には大阪で、古〇きく（二十三才）が、蒲鉾商を営む前夫と復縁出来ぬのを悲しみ、男の咽喉を刺し、返す刃で己が腹一文字にかき切っている。

その年の暮には州崎で未遂一件——。

大正六年八月二十二日、釜山では酌婦岡〇とよ（二十七才）が出刃包丁を布団の上に立て、その上にうつ伏して、その体重を利用して柄もとまで腹を刺したが、幸いに助かった事件もあった。

四、芸妓の腹切り

昭和五年の夏である。大阪市東区の某氏宅で、内妻の齊〇やす（三十一才）が夫不在の昼少し前、刃わたり九寸、兼光銘の白鞘短刀で腹真一文字にかき切り、返す刃で頸動脈を断って、あたかも古武士さながらの切腹を遂げた。

彼女は外地で芸妓時代に某氏と知り合ったが、内地へ帰ってみると、彼には病妻があった。やむなく大阪で旅館勤めをするうち、他の男と親しくなってしまった。

某氏は病妻の死を契機に、やすを妻として迎えたいと云ったが、彼女にしてみれば某氏にかくれて他の男と親しくなったことが恥じられてならない。事情を述べて一旦断わったが、某氏は彼女の立場を了承した上で、やはり正妻にと強く懇望した。彼女はその熱意に同居したものの自責にたえず、おのが所行を

恥じる旨の遺書をしたためたのち切腹して果てたのである。

こうして愛情に殉じた芸妓の例では、昭和十年九月十九日未明、京都の老舗旅館主で東京にも旅館経営のY氏が、経済的家庭的憂悶から、愛人R子こと荒〇富美（二十一才）もまた、主人の手から短刀を受けとり、自分も腹深く抉って主人に殉じようとした事件があった。

彼女は埼玉県出身で、新富町から出ていたが、断髪洋装のダンス芸妓という快活な氣象を主人に愛され、その恩義にR子も殉じたものであった。

殉愛のいたましさにもまして、悲運の女性 は、昭和九年四月十七日、朝六時半ごろ横浜市磯子区の自宅で割腹した、Yこと増〇くら（三十二才）。若い頃は長唄と踊りで磯子の花柳界に鳴らした美声芸妓であったが、旦那とうまく行かぬことに加えて健康を害し、とうとう西洋剃刃で我とわが腹を正中線上で縦に長く切り下げた第一創が、致命傷となったものである。

親しかった隣人が呻き声に気づいて見に行ったとき、彼女は「妾、お腰を切っちゃったのよ」と告げたと云う。

通常では横に一文字、あるいは、次いで縦に切り十文字とする切腹を、縦にのみ三創も切ってしまった、というのは珍しい事件であった。

五、上諏訪の女腹切り

上述の諸例のなかで、発作的なものは別として、衣類を改めたり何かと準備して、切腹の古作法めいた形態をとりかけている例があるのは、近代としては奇妙な風潮であると同時に、他の手段とは本質的に異なる切腹というものの特異性がある。

その、極度に復古的な例としては、仏前や墓前での切腹がある。是は元来は仏教の輪廻転生思想から来たらしく、寺院が切腹の式場に使われた戦国から江戸時代への風潮をそのままに写したもののように思われる。

たとえば大正十一年十月三十日の夜、長野県上諏訪町の資産家宮〇家では、当主の葬式が執り行なわれ、家人も寝静まったころ、未亡人となったばかりの柳子（四十五才）は、おもむろに白装束を身につけ、家宝の日本刀を携えて奥座敷の夫の位牌の前に端座した。

そしてまず腹一文字に掻き切ったのち、返す刃を更に腹深く、刃先が背を貫くまでに突

き刺したのち絶命した。

「子供に恵まれず、肉身に家を継がせられな
いのが残念」という遺書は、何か家内の事情
を暗示するようでもあるが、また夫への追慕

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)
		郵便番号 558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、
或は地方のため、入手することが出来ないとか
かいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い
目に、手に入れたたいという御寛望をよく承り
ます。そういった方々は、どうぞ是非月極御
予約下さるようお願い致します。毎月製本完
成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには
大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会
社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお
払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指
定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装
代などは、総べて当社にて負担致します。但
し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分
二十円(切手可)の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為
替、定額小為替、切手代用、振替(大阪四二

の情とも察せられる。

先にも述べたように、仏前において切腹す
るという伝統が日本人には可成り古く、鎌倉
時代から武士が、戦敗れていざ切腹ともなれ

七八三番)のいずれかをご利用願います。
現金の場合、普通郵便封入は違法ですから、
必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印
刷完成と同時に、外部から見えないように厳
重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料
三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送
金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者
の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号
から何カ月分送れとお書き願います。第一回
分発送の際、明細を雑誌に添布致します。何
月号からとお書きにならないときは、重複や
欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に
八本号にて前金切Vの判を捺印致しますから
継続お払込み願います。継続のお払込みでも
何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方
は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局
留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受
取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構
です)と受取人のお名前とをお知らせ下され
ば、当方では御指定の局留としてお送りいた
しますから、数日後その局で御受領願います
局での留置期間は十日間でその間にお受取り
にならないときは、発送人に返戻されます。

ば、持仏堂で切腹という例は少なくないし、
菩提寺で祖先の墓前に切腹する例も、江戸時
代から例あることであつた。

その伝統がごく最近も発現されて、佐賀県
下で昭和三十四年十一月六日の昼前、三十八
才の未亡人が、自宅の仏壇を前に正座、上半
身双肌ぬいで脇差を以て腹一文字に約六寸か
き切り、そのまま体の重みで刃を腹に刺し、
俯伏して死んでいる。

また昭和二十七年のうら盆の夜、広島で亡
母の墓前に於て、十七才の少女が自殺した。
新仏の母を慕う余りかららしく、木の香も真
新しい塔婆を握って刺身包丁で腹かき切った
ものであつた。

以上、新聞は主として東京日日、時事新報
東京朝日、大阪朝日、読売、中国等の各紙に
拠つたものである。

(未完)

追記Ⅱ高野原美氏へ

本誌44年11月号所収のOSミュージックフ
ォトの内、落城の五人の女性をお撮りにな
ったもの、おゆずり又はお貸し頂けません
でしょうか。何卒よろしく。お礼に同人誌
差上げます。



マニア奮戦談

世界の「美酒」を求めて

ある美食家の世界一周記

香川 泳三

友人のAが、三十八日間にあたるヨーロッパ、アメリカの業界視察と商用を兼ねた旅を終って無事、羽田国際空港へ帰ってきた。Aは、外国製のビジネスマシンの販売会社の社長で、会社はブームにのって、すごく利益をあげている。

今回の海外旅行は、シカゴ、ニューヨーク、ロンドン、パリ、ミラノ、コペンハーゲン、ヘルシンキ、モスクワと、世界一周コースでドルは、あまり充分とは言えなかったが、取引先の商社の招待による大名旅行で、費用は

大部分、先方負担。ヒルは観光とレセプションと商用、夜はクラブと、けっこう楽しかったという。

通関をすませ、出迎えの社員にトランクを渡すと、私と二人きり、身軽に帰国祝いに芝浦の料亭へ車を回させる。

長旅の疲労もなんのその、もうすぐ五十才というのに、あいかわらずタフで行動的なおところである。

料亭へおちついての第一声が、「イヤ、おどろいたよ」

であった。

なにに、おどろいたのか。

来るときの車中では、運転手の手前、あまり、二人だけに通ずる話はしなかったが、こは二人きり、いかなる会話でも、えんりよなくやれる密室である。

じつは、Aと私はKK誌のお蔭での友人なのだった。ありていにいうと、今から十年前に呼びかけがあり、応じた私は、喫茶店で名乗りあった仲である。

いらい同じ趣味—M—のおかげで、つかず

離れずの交友が続く、情報の交換や、実地探検、ときには、AとAの愛人との、他人にはみせられぬプレイの拝見と、互いに、一歩も二歩も踏みこんだ、交友なのだった。

ウマが合って、ツーカーの仲。よき友人を得たものだった。

ながい交友のあいだには、いろいろと、話題が多かった。

陽性で、明けっぴろげで、ヒミツを心のなかにしまっておけない彼は、ちよくちよく電話をよこす。

「ゆうべ、飲んじゃってねえ」

「とうとう、食ったよ。すげえ味だった。やはり、人間の食うものじゃないね」

潤達に、大声で報告をよこす。

飲んだ、といっても、サケやビールのことではない。食ったというのも、ふつうの食物では、むろんない。

そう、ご想像のとおり、それは人体のことも美酒であり、美食なのだ。

適当に飲み、適当にくらい、そして、それが、彼のバイタリティーの根源なのだ。

他にいったい、めいわくを及ぼさず、欲するものは、トコトンまで追い求める。彼は、熱っぽい、シツコイおとこである――。

M趣味――とくに、ネクタールと固体をテーマにした、交友十年の記録は、コクメイにノットしてある。Aの趣味は、徹底したマニアと呼ばれるのにちかく、私などは足もとにも及ばない。しかしAは、仕事にも人一倍熱心で、趣味のために家庭に風波をおこしたり、ビジネスをダメにするなんてことは絶対にやらない。要するに、健全な社会人なのだ。

ところで、いまは彼、Aとの交友を語るのが目的ではない。

帰国の第一声で、彼は外遊の印象を、ただ「おどろいた」と表現した。

なににおどろいたのだろうか。一言つけ加えておくが、Aも私も、共に白人女性には弱いのである。

アメリカでは、従来やかましかった、風俗関係の出版物が、法的に野放しになったことは、すでに聞いている。

れいの「プレイボーイ」誌にしろ、本国で売れるのは無修整のやつ。男女のノーマルなセックスシーンなどは、カラーでとりいれられ、本屋の店先に、堂々と並んでいるそうだが、問題は起こっていないらしい。

ストリートに立つ商売女性のなかにも、S

Mの何たるかを理解し、よく我々が手を焼く如く事前のややこしい交渉なんかには、よけいな手数をかける必要は、さらになくそうだ。万事は、手マネとマネーの、二つのマネ、(シャレではない)によって解決されるのだから、うらやましいかぎりだ。

さっきもお話したように、Aは「M」である。いわゆる飲み、かつ、くらう。これに興味をもっている。

ただし、プレイよりは、むしろ空想を好むようで、その点は、私と同じだった。でも実際に口にするのも、けっして、いとわくない。相手によりけりなのだ。だから、ポーズをとらせ、口に流してまわる直前にストップさせる場合が、全体の六割というところだろう。でも、観念的に吞ませる、吞まされるというムードを尊ぶという、ゼイタクなタイプ。しかし気がむけば勿論、完全拝受も、いとわくない。固形のほうも、また同じというところの偏執狂ではないという自負があるのだった。

「なにから話そうかな」

Aは、いった。

その口ぶりでは、三十八日間の武者修行にかなりのことをやってのけたらしい。

旅の恥はかきすてという。故国を遠くはなれた異国の夜。目色毛色の変わった女性を相手に、荒行をやったであろうことは、彼の思いだし笑いからも、うかがえるのだった。

「たっぷり呑んできたよ」

舌なめずりしながら、Aは口を切った。

ところはニューヨーク。取引先の社長と別れて、一人かえったホテルで、度胸をきめてボーイを呼んだ。さんねんながらAは、語学には弱く、せいぜいプリーズとサンキューしか使えない。

「ここで、虎ノ巻のやつが役立った」

出発前、私はAのために、何枚かのウォントカードをつくってやった。

ハガキ大のカードのウラには日本語で要旨を、表面には、その英訳をタイプで打っておく。ウォントとは「求める」という意味だ。

「郵便局は、ドコですか」

「DP店を教えてください」

「日本大使館へ行ってください」

などと、日常おのぼりさんが、必要に応じてカードをぬきだし、相手にみせれば、アルファベットなんか知らなくても、世界一周はできる。

私は、SM用のカードを特製し、事務所の

アルバイト学生に、二千円わたしてホンヤクさせ、彼のガタガタのタイプでこれを打たせて、A専用のウォントカードをつくって、これをおせんべつにした。

だから、カードには英語で

「私は……を吞みたい」

とか、

「ぜひ、食べさせて」

とか。

「それが、私の趣味なんです。サンキュー」と、まるでトルコへ行って、テレながら口にした会話が、そのままタイプされているわけなのだ。

「キミがつくってくれたウォントカードがなかったら、今度の旅行は、さぞかしつまらなかったろう」

Aは、あらためて、少々くたびれたカードをとりだした。

さて、舞台をニューヨークにもどそう。

ボーイにつかませたチップがモノを言い、

ボーイは、

「オッケー、まかしとき」

てな表情で消えた。入れかわりに、女性が入ってくる。

「美人というほどでもないが、アイキョウの

いい女だった。笑うと、すばらしいエクボなんだよ」

彼女はニコニコと、クソ度胸きめて出したカードに目をやっていたが、心もちマユをひそめて、オーケーといったという。

「かまわねえから、ノツケに、食わせろってカードだ。これが日本なら、キチガイ扱いってえことなんだが」

Aは、いう。

一メートル七〇のAより、たしかに一〇センチは高そうな、クジラのような女性だったそう。太い足、太い腕、太いうなじ。ところかまわず密生する金色の毛。そして、むせるような体臭。

やはり肉食人種は、菜食人種とは異質のよう。一瞬、恐怖すら感じたという。

「ハウマッチ？」

イクラ？ ときくところだが、とっさに、

ハウマッチを忘れてしまい、どうしても出てこない。

「めんどくさいから、ドルいれを放りだしたら、何枚かぬいて、ちゃんとドルいれは返してよこしたよ」

この大まかな取引方法が、彼女のお気に召したらしく、あとの段取りは、スムーズに運

んだのだ。

「とにかく、大女なんだよ」

でも、その女性は、みかけに反した、やさしいひとらしく、

「ほら、よくオレたちがいくトルコにトグロをまいてる、どうしようもねえメスがいますだろ」

ことわっておくが、このトグロをまいてるってえのは、レッキとしたヤマトナデシコである。たしかに、ヤマトナデシコは、菜食人種だから、日本人には合う。みかけだけは、クジラのように凄くはない。ワキガまで、菜食人種的だ。

だが、それらトルコメスの多くは、あまりにも客ズレしすぎている。客を客とも思っていない（もっとも、お客だなんておもったら口のなかに、放水なんて芸当はできまいが）

Aは、彼女の、すばらしい全身をみたときは、おそろしさを感じたそうだ。

女性は、ニコニコしながら、Aの手をとり床に横になれと、ゼスチュアを示す。

このばあい、なまじ、ことばの通じないのは、かえってテレクサくないものだ。

Aは、その白人女性を見あげながら、故国のトルコメスを思いだした。

（どうせ、こんちくしょうも、いいかげんなサービスしかしねえんだろ）と思ったのは、致し方ないことだろう。

ところが、Aの推理は完全に外れたのである。

彼女は平然と、そこでトイレへ入ったときと、まったくちがわない動作をはじめだしたのだった。

これは、ずっと前にきいた話だが、チーズとバターとビフテキの国アチラでのプレイはこちらのよりは何かオクターブも上回るもののような。アチラでは、つぎのようにやる。

パートナーを、両手縛りで天井から固定しそして、やおらエネマを加える。

そのような不安定なスタイルで、しかも、エネマが利いてきても、天井から吊されたのでは、かたんに便器をというわけにもいかず、不自由な身で、ただオロオロと「ゆるしてえ」というだけ。あくまでも、からだは不安定だ。

限界に達するところを見計って、一方は、その足もとに横たわる。

ただでさえ、苦痛の果てに、羞恥のルツボにいる彼女にとっては、たいへんな難行だろう。

う。

しかし、生理には勝てやしない。羞恥のものは、しずしずと出るしかないのだ。それを下でうけとめるのは、どんな心地のものだろうか。

——キチガイ病院の、病室でのシーンではない。宴はてれば、一人前の生活能力をもつ、社会人の二人なのだ。ただ、エネマを施す、施されるといふ、双方の意気投合、その果てのことなのだから、終了すれば、それでよいのであって、あとくされの介在する余地はなく、しかも、双方が、これをプライベートルに行なう以上、文句をつけたり、あざわらう必要は、いっさいないのだ。

さすがに、ミルクとバターの国のひとのこと、おなじエネマでも、我々とは一とケタも二たケタもちがうと思われる。

いわんや清冽なる滝の洗礼なり飲用シーンにいたっては、日常茶飯事にちかいようである。ついでに、もうひとつ余談を加える。

今東光和尚の「今昔物語入門」263ページに、

「西洋の淫本なんかには、女のウンチを食べオシッコを飲むなんていうのは、ざらですよ」（原文引用）

という、くだりがある。

しかも和尚の解説によると、そんな風習はいろいろの本に出てくるし、いまでも、現実に行なわれており、専用の金のお皿だとか、ナイフまであり、スープとして飲んでしまうそうである。

博学の和尚のいうことだから、まちがいはないだろう。

さて、そのときAは、どうなったであろうか。

ベッドのまくらもとにきりかえたスタンドからは、深い光が床まで届くか届かないか。そこへ横になれと言われて従うと、なにか穴の中へ引きずりこまれるみたいな気におそわれた。

その光線をさえぎるように、目のまえが、まっくらになり、息苦しさがおそった。

彼女が、求めに従ってポーズをとったのである。

あとは、無我夢中だった。

「オレは、空想派なんだ」

と、わがままをいい、直前に作業を中止させるような芸当は、ここニューヨークでは、許されない。

食べさせて、と、ウオントカードで求めるから、そのとおりに従ったまで——と女性はいうのだろう。

逃げようにも、重たいものが顔面を圧迫して、そむけることは不可能だし、口を開いてなければ、つままれたハナは用をなさないので、息ができなくなる。

けっきょく、女性の思うままに口をパクつかせてなければならぬ。そして彼女は、気前のよいニッポン人のために、せいじっぱいのサービス精神を発揮して、求めるものを供給するのに懸命。

Aにとっては、難行苦行の何分かがすぎたが、まだ解放してくれないのにはまいった。「とにかくサービス精神が、すげえんだよ。途中から逃げようと、身をよじればよじるだけ、相手は、まだ満足しないのか、てな調子で押しつけてくるんだ」

でも、ユメにまで憧れた白人女性の、おまけにガリバー旅行記にでてくる巨人をおもわせる巨体には、なにか心の休まるものをおぼえ、気のとくなる思いだったらしい。

何時間か、ずいぶんと永い時間、そうされていたみたいだったが、実際にはせいぜい三十分足らずのようだったそうだ。

「むこうも、なれないポーズで、足がしびれたらしいんだ。やっと立って、ベッドに腰をおろしたよ」

それから、たいへんだった。

彼女は、目をシロクロさせ、大わらわのAに、太い足をつきつけ、もめというゼスチュアをしたという。百人ちかい社員を抱えるプレジデントのする仕事ではない。

でも、Aは事のついでと、ひざまずき、けんめいにマッサージをやったそう。ゲツとやたらにくさいゲツに、むせながらであった。とたんにベッドの上の巨人は、眼で室の一隅の洗面台をさした。大型の金いろのコップと、故国でもおなじみのコルゲートのチューブ。

「きたねえから、口をゆすげというんだ」

口のなかに、妙な味が溢れていた。

思いきりよくチューブのなかみを押しだし、何回も歯を磨く。

ついでに、いままで圧迫されっぱなしだった顔をブルンと湯で洗い、ベッドに腰をおろす女性をみた。

「ワンスモア？」

カン高い声で彼女は、いった。

「もういちど、どお？」

と、さそうのは、案外、彼女のほうも、こんなプレイに、興味をもってるのではないだろうか。

ここで、Aは考えた。

ドルは少なく、前途はながい。

このビジネスライクな女性が、もういちどと誘うからには、おそらく追加の請求は、されるにきまつている。

だが、自製の心は、失われていた。

もういちど、床に横になった。

女性は、ベッドのマットの下へ手をやり、Aのドルいれを引っぱりだした。案の定、追加のマネーを抜くのだろう。

(まあ、いいや。あした、商社へ行って、ドルをねだってやれ)

先ほどのとおり、何枚かのドル札は、これだけは肌につけられていた彼女のブラジャーの内部へ消えた。

もういちど眼前が、まっくらになり、当然のように、せせらぎが、はじまる。

カーペットをぬらしては、あとがうるさいと、Aは水におよぐ金魚みたいに、ただ口をパクパクさせて、あえぎにあえいだ。

——今東光和尚の説法は、ウソではなかったのだ。

ことばもわからぬ異国で、こんな女性にめぐりあえたのは、奇跡としか言いようがなかった。

だが現実には、年来のユメが叶えられたのである。

「これだけで、はるばるニューヨークまできた甲斐があった、とつくづく思ったよ。とにかく、サービス精神のカタマリみたいな、おんなだったよ」

何枚かの、貴重なドル紙幣は召し上げられただけ、故国の妻子へのみやげは粗末になるのだが、それは致し方ないことだろう。

ニューヨークでの経験は、Aに完全に自信を与えたようだった。

ロンドンでも、パリでも、コペンハーゲンでも、例のウオントカードは、通訳以上に、よく役に立ったそう。

「はじめは、病気がこわかった。事実、バラいろの、できものが点々とある女に出会ったが、病気だけはこわいから、そのときはユビ一本ださなかったが」

そのかわり、というように、行く先々の取引商社には、よりどりみどりの、オフィスガールが居た。ウブ？　な素人さんだ。

ふだん、手紙でのやりとりで、互いに、個人名だけは知り合いだから、行く先々で歓迎される。

Aは、当ってくだけるとテレもせず、これと思う相手には、ウオントカードを披露して回ったというから大したもの。

ダメでモトモト、当たればよい旅の思い出ばかり、習慣的に当たり、くだけ、また当たり、そしてときには目的を達したらしい。

「ミラノのオフィスのコは、勇敢だった」

彼女は、はるばるやってきた日本の取引先の商社社長のAをガイドするように、と会社から命ぜられて、ハリキって迎えてくれた。

イタリアには、世界的に有名な、計算機、タイプライターの工場があり、Aの会社でもこのイタリアをすすめる会社から、年額にして少なからぬ品物を輸入している。その社にとってAは極東における、「たよりになる会社の社長」なのだ。

従って、歓迎に Netz がはいる。

出かけるとき、中級のパールを、目一杯もっていった。人によっては現金をだしては失礼になるから、と、海外旅行社からアドバイスされた、わけだった。

この真珠は、行く先々で現金以上にモノを

言った。ホテルの一室で彼は言った。

「すきなだけ、あげる」

イタリアむすめは、Aのことばに、絶句して喜んだという。

西洋人は、プレゼントには日本人のような無用なえんりよはしないというが、それは本当らしかった。

欲ふかく、手のひらに盛りあげたパールにほおずりする彼女に、なんなら、手もちのパールを、ぜんぶやっても、おしくないと思っ

た。

「そのかわり、交換条件をだした」
一しゅん、ぬけ目のない、取引を有利にみちびこうとのビジネスマンの表情で、Aは坐り直した。

「ウオントカードさ。切り札だ」

さっと、文字を追う彼女の表情が変わり、小声でなにやら、つぶやく。

どうも、ノウということらしい。

それは、そうだろう。

ノウといわれりゃ、よけい欲しくなるのは人情というものか。Aは、思いきりよく、もう一組、ネックレスを彼女の手におとした。

このへんのカケヒキは、Aの得意中の得意とするところである。

結果は、Aの勝。

イタリアむすめは、しばらくモジモジしていたが、卓上のティーテーブルにおかれた、キリコの水さしを手にとると、ツイとトイレのむこうに消えた。

そして、二分、三分。

ドアから出てきた彼女は、おこったような表情で、贈られたパールをひとまとめにバッグにつめてむと、ものもいわずに、帰っていった。

まあ、いいのだ。置いていってくれさえすりゃ、このさい、それ以上の要求は、当方にはありません。

彼女を見おくり、その足で、期待をこめてトイレをのぞく。

「あった」

キリコのジャーは、トイレの片すみに、神妙な水をたたえて、交換物はひっそり置かれていた。

そのなかみの、イタリアの名酒、チンザノのベルモットみたいな水は、Aの旅情をなぐさめるに、じゅうぶんだった。

「どうしてるかと思って、あくる日、もういちど、オフィスをのぞいたんだ」

彼女は、平然とタイプライターを叩いてい

た。ホリの深い、その横顔をぬすみみているうちに、きのうの午後にゆっくり賞味したチンザノの味が、よみがえる。

あくまでも澄んだ、ミネラル・ウォーターの舌ざわり。それは、まさに彼女そのものだったという。

ロンドンでも、パリでも、こうして土地土地の神酒なりクリームなりを、機会をとらえては味わったAの旅は、すばらしいものであったろう。

「持ちかえられるものなら、ジャーにつめてみやげに持って帰りたいかったよ」

国により、相手により、その千変万化の味は、やはり、その地で、新鮮なのを賞味するのが、いちばんなのだろうか。

「やっぱり、チーズとバターの国のは、どこがちがうようだな。オレは、ひさしぶりに、ニッポンの、菜食人間のが、ほしくなったよ」

Aはドン欲であった。

さんざん味わった西欧人のそれは、なんともいえぬ味といいながらも、一方、日本女性のそれにも愛着をもっている。

ただ、言えることは、ウオントカードを示

S.C.R. (性問題相談室) 案内

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の方の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

された相手の態度だ。

西洋の女性たちは、人情風俗のちがいがからであろうか、日本女性ほどには、羞らいをみせない。ひとたび、オーケーと言ったら、きわめてオープンに、むしろ熱心に、懸命に、どうしても、満足する分量を与えようと顔面を紅潮させてまで努力してくれるという。そして、こちらが、それをどのような方法でどうするかと、最後まで平然とみているのだそうである。

「そこが、ビフテキと湯どうふのちがいはなんだろう」

Aは、そう言いながら、コップに満たした特級酒を一気にあけるのだった。

私はAのように幸福なヒミツをもつ男を他に知らない。世界一周のついでに、土地土地の女性のプレゼントを強引に賞味した日本人は、おそらくAが最初だろう。

「口直しに、ちょっと呑んでくる」

久しぶりに、ウオントカードなんか必要のない愛人のところへ寄るといふ、Aのうしろすがたを追いながら、私は、つくづく、そう思ったのであった。



幻想の部屋

縛られた花嫁

井 風 呂 秋 於

1

彼がいなと思うと、つい育ちの悪さが出てしまう。太股を剥き出し、ソファとベッドに乗り跨ってハミングまじりで書棚に叩き^{はた}を掛けていた私は、そのとき突然、

「——なんだ！ まだそんなことをやっているのかッ」

と怒鳴られ、吃驚仰天したその拍子に、あやうくよろけ落ちそうになった。壁には手が届かず、ソファへ四つん這いの恰好になりかかる。

「やだわ！ 驚かさないでよッ」

瞬きを忘れた丸い眼でふりむくと、いつのまに入ってきたのだろう、彼が、その精悍な容貌を不満いっぱいの色でゆがめながら仁王立ちになっていた。

「かれこれ、二時間にもなるんだぜ！」

と、彼は唇をとがらせた。

「一体、いつまでモタモタやってりゃ気が済むんだ」

「嘘よ。二時間もだなんて……」

「いいや！ それぐらいにはなる」

「まあ、なんて恐い顔を……」

私もつられて唇をまるめた。

すぐにソファから飛び降りようとしたけど

吃驚させられたのと彼のその憎らしい言い草

にいまいましくなり、ツイ反抗心が起きた。

降りるのとは逆に、態勢を直してまた叩きを掛けはじめてやった。

「……なにも」

と彼はぼやいた。

「今になって急に大掃除なんかやらかすことはないだろう。俺の受け持ちの部屋はもう疾っくのうちに用意を済ませてあるのに」

「へえ。そうなの……」

「だから俺、おまえが来るのを今の今まで馬鹿みたいにジッと待っていたのだ。それなのに何だい、痺れを切らして様子を見に来るとこのザマじゃないか」

「すみません。でも、仕度に掛かる前にちょ

「とお掃除だけはさせてね……と言っておい
た筈だけど」

「バカ。なにがちよつとだ。誰もそこまでや
れとは答えてねえや」

「だって……見た眼は大層でも、もうすぐに
終わっちゃうもん」

私は平気を装っていることにした。

ソファから降りると、澄ました顔で隣室ま
で行き、掃除機クリーナーを引っぱり出して来るとスイ
ッチを入れて、これ見よがしに彼の目の前を
悠々？ と右往左往しはじめた。

「だからさ！ そんな事は止めて早く支度の
ほうに掛かれと言ってるんだッ」

舌打ちを混せて彼は喚いた。

「そうはいかないわよ」

「なぜ！」

「なぜって……あたし、お掃除を途中で投げ
出すなんて、そんな事は出来ないもん」

「へ。ご立派な台詞だ」

「本当よ、それに今夜のあたしは周りの物が
きちんと片付いていなければ駄目、落ち着い
て支度に掛かれない……ね？ この事も始め
に貴方に言っておいたでしょう」

「さあ？」

「でなければ、これからあと貴方がいくら

雰囲気たっぷりにやろうよと仰有っても、あ
たしにはそんなこと、到底駄目な話よ」

私は、喋りながらますます甲斐甲斐しく動
き廻ってやった。

——実は私、彼が突然やって来て、怒鳴った
その時まで、これでも相当、ひとり好い機嫌
となつて掃除をしていた。

先日、彼から戴いた新調の、美しいオレン
ジ色のミニワンピース。それを初めて身に着
けて、その上から少女趣味みたいな、ピンク
色の可愛いエプロンドレス。おまけに、派手
な花柄のスカーフで髪を巻いて、という健気
な？ 姿。

何と説明すればいいのだろう……

こんな大層な？ 『お掃除スタイル』になつ
たのは初めての故か、忙しく鏡にまで走って
は覗き込み、その度に新たに自分というもの
を確認しなければ気が済まない。そして掃除
と鏡覗きを繰り返しているうちに、内臓をぎ
ゅうっと攪まれるようなそんな恍惚感らしい
ものも覚えてきて、やがては楽しくって楽し
くって、ハミングのひとつも口をついて出る
ほどに心が浮き立ってしまったのだ。

鏡をのぞけば、其処に、私好みの『可愛い
女』がいる。瞳をみつめかわし、その濡れた

唇の囁きに魅き寄せられては顔を近づける。

嬉しくなり、そして女の微笑みに酔って、
間もなく頭の中が混がらがった末、この私が
家事を楽しんでいる可愛い娘に……、はがら
かに日課のお掃除にいそしんでいる若妻にと
成りきっていることに気づいて、尚も嘖き上
がるような歓びのために、とてもジツとはし
ていらなくなっていたのだった。

ともかく、どちらかと言えば『鈍重人間』
がトレードマークみたいな私が、なんと、知
る人が見たらきつと呆れてしまふに違いない
ほどの身軽さで、しかも楽しく動き廻ってい
たのだ。

「……ばか。俺がムードを出そうぜと言った
のは、なにも此処でじゃない、彼方あっちの部屋へ
行ってから、という意味だ」

とうとう頭に來たのかしら、「支度するぐ
らいにムードも糞も無いもんだろうが！」と
突然、私の引きずる掃除機を踏んまえて彼が
喚いた。

「おお、恐わ！」

「……な、焦らすなよ。早く支度のほうに掛
かれば」

「ねえ、貴方」

と、私は半分逃げ腰になって言った。

「貴方に、そんなにガチャガチャ言ってる暇があるのなら、邪魔するよりも手伝ってくれればいいじゃない？」

「なに、俺に手伝えだど？」

「そうよ。そしたらあたしも、すぐにでも貴方の、そのお望みの通りに出来るというもんよ」

「……ふンダ、夜の夜中に誰が埃なんて吸えるかい！」

「なら、そんな恐い顔して突っ立っていないで、最初の約束通りに、あたしが行くまで向こうのお部屋で温和しく待っていてよ」

むろん彼には、始めっからこの掃除を手伝ってやろうなどという気はない。案の定、彼は急にキナ臭げな表情になった。

「もう、それまでは、此処へ来ないようにしてよ」

と言ってやると、ぷいと背中を向けた。

こうなると脆いもんだ、ということをよく私は知っている。この時も呆っ気なかった。

「早くしろよ。ほんとに、もう！」

吐き捨てるように言っただかと思うと……それでも精一杯、肩肘を張った様子で、廊下へ出て行ってしまった。

私は早々にドアを閉めて、こちらこそふん

だわよ、なによ……偶にはあれぐらい怒らせてやりやアいいんだ、とつぶやいた。

大体が、この私の気持なんか理解してやろうともしないで何でもが自己本位なんだ。いつも自分の思ったように、好いたように事を運んでいく彼なのだ。そして、当然おまえにはこの俺に対しての不満なんかは無い、絶対にそうなんだ、といった調子だったから、いくら『被飼育』中の身の上の私だからといっても、時と場合によっては頭に来ちゃうことだってあるというもの。

我が強くて、することが人並み以上に荒々しくって、一旦こうと言ひ出したらこちらの申し述べなんぞ耳をかそうともしない。だからいつもこれに曳きずり廻されている側の私としちゃ、偶には遣り切れなくなる場合だってある、ということ。

そりゃ、その反面彼のそんな粗暴なところが……。いや打って変るようでお羞かしいが……大きな魅力ともなり、言ってみれば『離れ難く』、こうして月のうち一、二度は自然の成り行きで、私のほうからこの家へ押しかけしてしまう事になるんだけど――。

でも、今夜ばかりは、私は彼のそんな術にオイソレと曳きずり廻されてはいけないと思

っていたことだった。

何故？ と訊かれたら弱るけど……。

まあ、なにも無闇矢鱈と彼に屈伏しているだけが能じゃない。偶にはこの私のほうが、彼をちょっぴり曳きずってやることも面白いじゃない？

それにしても第一、彼の口癖じゃないけれど、だれがあんなに塵々と散らかっていた部屋で念入りの化粧をし、納得のいく身支度などが出来るものか。しかも、

「今夜は特別の気分でいこうぜ。それにはまず、いつにも増した美女だ……」

と、彼は私に、再三望んだのだ。

美女のほうはともかく、私にそんな念入りの化粧をさせたければまず最初、何と云ってこの部屋の雰囲気からが肝心。散らかっているものならきちんと片付けて、綺麗にしてそしてたっぷり時間を掛けさせて――この私の気分が乗らなければ駄目な話だった。もちろんそれ位の事は、いくら『厚かまし』の彼だって判っていてくれる、と思っていたのに。それを彼ったら、予定の時間がちょっと狂ったぐらいでもう時計の針みたいに細く尻を吊りあげて怒鳴り込んで来るんだから。――私は、彼が不満たらたら、戻って行った

部屋のほうにむかって思いつき、鼻柱をちぢめた赤んべえをしてやった。

もう少しで終わる筈だった掃除も、こんな訳で、あれやこれやとツイ長引いてしまい、部屋がすっかり片付いたのはそれからまた十五分ほどもしてからだった。

さいわい彼も再びやって来る様子はない。足を投げ出して坐り込むと、ついでのことに暫く憩うことにした。

——先刻、これからの私に要り用なものは、すべて、鏡台の近くに並べたり壁際に掛けたりしてあった。それらのものに視線がいくと思わず腰が浮きそうになった。が、そこはそれ、憎たらしいあの彼のことを思いうかべて意地にも憩うていることにする。

こうなると、はつきり瘖せ我慢だった。また、無用の時間を過ごしてしまった。

漸くにして立ちあがると、私は尚も、わざとした暢気な足取りで、トイレまで往復することにした。

やっこのことで、鏡台にむかったのはそれからのことだ——

スカーフを外した。エプロンを取って、ワンピースを脱いだ。あとはブラジャーとパンティだけの、あられもない姿。

で、もし彼がまた突然やって来て、幻滅を感じちゃったらいけないので、邪魔っ気になると思っただけで用心して、愛用の深紅のネグリジェを引っかけた。

鏡をひらいて覗くと、あれほど大奮斗？

したあとにもかかわらず、それほど、化粧に乱れはなかった。

パフで軽く押さえて、睫毛を……長いのと付け替えた。それから申し訳程度に口紅と眉墨をちょっぴり使ってみた。

気持としては、もうこれでおしまいとは少々呆気ない感じがしないでもなかった。とは言うものの今更最初からやり直したりしていは、それこそ彼、今度は何を言って怒鳴り込んで来ることやら……私の作戦？もこうなると度が過ぎるというもの。こんな時間となってしまうては、さほど化粧直しに凝らなくてもよかったことを、有難がらなくてはいけないかも知れない。

私は化粧の済んだ鏡のなかの女の瞳をジッとみつめながら、ヘアブラシを使った。

首をかしげたり、仰向くたびに、その女は表情が婀娜に、こまかく変化するように、見えた。すると、私にいつもの『陶醉』が襲い掛かってこようとした。ところが、いつもの

快楽を求めながら鏡のなかへと傾きはじめてのだ……あわてて、脳裡に『私』というものを取り戻す。こうしなければ『今夜の事』が進展しないことに一瞬、嫌悪感が走った。

「あなた、……」

鏡のなかで、妙な澄まし顔に変わっていく女へ、私は意味もない言葉を囁きかけながら、立ちあがって、壁際に覆いを掛けて吊るしてあったウエディングドレスをとった。

2

さて、このウエディングドレス——

一般的には春から秋にかけては薄地、秋から冬にかけては厚地のものというのが常識なんだそう。

ところでこの夜の私は、わざと薄地のドレスを選んで持ってきた。

このドレス、私が持つウエディングドレスのなかでは一番身動きが楽に出来るデザインだったから、と理由は簡単だ。言わばゆったりとしているのだが、裾にしても一番のひろがりがある。それに、これも花嫁衣裳の常識で、長袖だし……襟もとも詰まってなるべく膚を見せないようにするという、極くオーソ



ドックスな線に添うたデザインだったから。

またそれに、シルエットを保つためのアンダードレスは、ちゃんと内側に付けてある、しで手にして、つまりその量感というものが一番だったからだ。

この、花嫁衣裳の『量感』というのが、私にとってはこちらと欠かす事の出来ない点でもあった。

いくら現今の流行で、斬新さを強調し若さを謳った「軽快」なウエディングドレスが目先にチラチラしていても、一向に私は無頓着なのだ。およそ、ミニ調や袖なしや、襟もとを大きく開けっぱりのドレスなんて、私の趣味ではない。普段の服はともかく花嫁衣裳ともなると矢張りこの常識（古式？）にならったドレスに私は傾倒する。だから私は、こ

と花嫁衣裳づくりに関するかぎり、いつも大差のない同じようなデザイン物を作ってしまうのだが……

さて私はそのドレスを着た。

例によって鏡と睨めっこしながら、次にへ

ッド・ドレスをとって被った。

散々怒らせておいて虫の好い話だけど、このあたりで彼にでも手伝って貰いたかった。

しかし彼、どうやら今夜は性根を据えて？膨れてしまったものやら、全くやって来る様子も無い。だから仕方がなかった。今までのように被り工合を直すのに大分苦労しながら……それでもまあ何とか恰好だけはつけた。

次に香水をつけた。

彼は、どちらかというと単純な、植物性の香りを好む。そこを計算して、またいつものように少々子供っぽいのが口惜しいがミスバ

ルマン、フローラルブルーケタイプの香水。

そして、カシミヤの手袋をはめながら、後

退りにゆっくりと鏡から遠ざかった。

この全姿を、とは言わない。せめて、この裾ひろがりの優雅なシルエットが或る程度まで映ってくれるような、鏡が欲しい……

と今更のように思ったのだけど、なにせ、この部屋には指でちゃんと突いたら？ 引っくり返ってしまいそうな三面鏡だけしか無いときているんだから！

このひとときというものは、誰に遠慮気兼ねもなく、この自分の花嫁ぶりを確かめ見、そして酔い痴れたかったのに……これじゃア仕方ない。

私は欲求不満に身を焦がされぬうちに、早々に鏡に背を向けてしまった。

そしたら急に、背中を押し立てられてるような気持ちになって、一張羅の白絹の靴と此の夜のためにわざわざ新しく作ったコロニアル（丸型）のブーケを掴むと、廊下に出てしまっていた。

——廊下には、昼間の温もりがまだ籠っていたのだろうか、それとも、私自身がうずきはじめたものだろうか、そのときはじめて異妙な暖かさが全身をつつみはじめるのを感じとった。

しおらしく俯向いたりして、私は歩いた。靴をぶら下げているのは噴飯ものだけど、

それでも如何にもこれから式場に向かう花嫁らしく？ 或る種の怖れと羞らいに高鳴ろうとする胸をブーケ持つ手で押さえながら、静々と廊下をすすんで行った。

——彼が、もう疾っくのうちに用意を済ませて待っているという和室は、この廊下の先を曲がったところにあった。

部屋の前まで来て、

「入ってもいい？……」

と声をかけると、少し間を置いて、ドスンと何だか鈍重な響きがしてから「ああ」と、彼の惰らけたような返事が聞こえた。

まるで、寝呆けたような声。……もしそうだとすると私の折角の『苛立たせ作戦』も効果半減といったところ。しかし私は、私の声で吃驚させられた彼の表情をすぐさま想像しながら、含み笑いを小さく洩らしていた。

そつと障子をあけると、彼は右の隅に据えた三脚つきのカメラを仰々しく、その割にはやっぱり……頼りなげにふらついた身構えでのぞきこんでいた。彼のうしろに長椅子^{ソファ}があつて、何だか彼の体温でポカポカしていそうだ。

部屋を拝見すると、その半分ほどが天井だけを残して黒布地(幕)で覆われ、隙間もな

く敷きこまれてあつた。

「まあ……。用意した、したってこの事だったの？」

「そうさ。……スタジオって感じが充分しているだろうが」

「でも、こうして見ると変てこりんで、なんだか陰気で窮屈な感じもするわねえ。なぜそんなに暗いのを選んだの？」

「そりゃおまえ、これはだな。これはおまえの……白を生かすための、純黒じゃないか」ふざけたような口吻で言いながら、彼は顔をあげた。案の定、彼のその重たげな瞼——と、その瞳がジッと私をみつめてきて、それから次第に、まるくなつていった。

「ううむ……これは、綺麗だ」

そんな彼の大笑がうめきに、私の顔へいっぺんに血がのぼってしまった。ドレスのなかで膝のあたりがピクン！として、ついでにウエストのあたりがガキュ！と締めつけられたみたいになった。

だが、いけない。こんなおべんちゃらで早やデレツとしていたら、また何もしないうちから彼のペースに……いや自分のほうから巻き込まれて行き兼ねない。

そこで苦勞して、私は素知らぬ表情を決め

こんでいることに努めた。あらためて此のインスタント・スタジオ？ を見廻しながら呟いた。

「ふうん。すると今夜の撮影会の背景は、暗闇ってことなのね」

すると彼が、

「なんだ、おまえ。気に入らないのか」

がらりと変った高い声で言い、大人気もなくその頬をぷうッと膨らませた。

——『黒色』の背景の場合、こんな純白のドレス姿はどうしても浮き立ち過ぎて写る。

私は特にそう思い込んでいた。私のスタイルが小柄小肥りで一寸見栄えがしない、なんてのもいいところで、撮影ともなるとその角度やちょっとしたポーズの工合によってはまるで養豚なみに写ってしまうのを、今までに幾度も、痛いほどに思い知らされてきた。

そりゃ、花嫁姿の美しさ可憐さというものは肥満体……つまりぶくぶくスタイルのそんな姿からは望むべくもないのだ、とは言わなけれど、やはり身の程知らぬ分際としてはそんなの嫌だ。本人の願いとしては、せめて撮影の時ぐらひは『本人離れ』のするほど美しく楚々としたところを撮って貰いたいのがあたりまえ。

で、なければ、私なんか悪戦苦闘し精いっぱいポーズをとりながら自写（今までの場合）をする、その甲斐が丸つきり無いというもの。出来あがったフォトをみて私は、これまで幾度がっかりさせられたものやら――

女性・永遠の望みとしては、自分がよりスマートに、ましてや後日に残るフォトとなれば絶対実身以上に美しく写されること。言い換えればそんな望みにやがて歓びと満足感が与えられる約束の――条件の揃った場で、そして腕で撮りたいことだった。

だが、しかし。

残念無念と言うか、注文や理屈の文句をいくら胸中に渦巻かせていても、この夜の相手は別にカメラや鏡などではなかった。痾癪屋の彼ときている。うっかり話せたものじゃない。しかもこの「黒いスタジオ」は、その彼がいつに似合わず気負って率先し、装置してくれたものだった。

結局、黒い背景で写されるとは気の染まない話だったけど、なにを今更この場に及びと自分を諷めて諦めてしまうことにした。

「……いえ、そんなことは、なくてよ」

と、さりげなく言って、私は障子際に置いてあった椅子に、そっと腰をおろした。

「みるよ、こんな狭い室内で撮るんだ。黒でも赤でもさ、このように一色に張りめぐらせておくほうがカメラ・ワークに、そのう……なんだ、無限性ってやつが出てきていいもんじゃないか」

ようやく目が醒めてきた、というような顔つきで、彼は急に忙し気にやりはじめた。

カメラをいじくり、ライトの場処を変更したり、そのコードを捌いたり……

「……ねえ、まず最初、あたしはどうすればいいのよ？」

「うん。全身から始めようや。まず彼処へ行って立ってるんだ」

カメラの先を指差しながら……そして彼はふと、私の手許を見た。

「おまえ、ソレ何してんだ」

「え、これ？――靴よ」

「ばか。それは足に穿くものだ。なんで嬉しそうに手に持ってる」

「でも、畳の上でなんて、嫌な感じだわ」

「ちえ、仕様がねえな。そんな年寄りじみたこと言っていないで早く穿いちまえッ」

穿いた。

「……貴方」

「なんだ」

「貴方も一緒に……写すんでしょう？」

「え、俺が？」

「あら、すると、あたしひとり？」

「ま、そうだな」

「嫌アねえ。だって、花嫁さんひとりぽっちだなんて、恰好つかないもの」

「いいから、いいから」

「ねえ、……花婿さんになってえ」

「へ、俺が花婿に？ 冗談じゃないぜ、今夜の俺はカメラマンじゃないか」

「いいじゃないの、貴方とあたしの写真まだ一枚も無いもの……」

「俺ア、それどころじゃないね。……みる、支度もしていないしさ」

「お洋服のこと？ だったら待っててあげるわ。すぐ着換えて来なさいよ」

「こら、しつっこいな。一体おまえ、何を考えてんだ、俺たち今夜は何もそんな写真撮るため、こんな事やってんじゃねえぞ。ただ花嫁衣裳を着たおまえを、つまりその、なんだな……」

「ははあん、わかった。何かを考えてんのは

貴方のほうだったのよ。ねえ、そうでしょ。

また何か企んでいるんでしょう？」

すると彼は、下手くそな表情で、聞こえないや、といった振りをしてから、

「さあ花嫁……じゃなかったモデルさん、ぼつぼつと、撮影に掛かりましょうか！」

と、私の前へやって来て大袈裟に身を屈めて、その片掌を差し伸ばすのだった。

「うふん、誤魔化したわね……」

と言いながらも、私は彼のその掌に誘われて立ちあがってしまった。

3

はて、さて。この撮影ごっこ……これからが大変だったのだ。黒の背景すれすれのところに立てと言うもんだからその通りにして、協力的に自分からちよつとポーズをつくったとたん、

「だめ、だめ、だめ！ そんなのなっちろんワ！」

と、のっけから怒声を浴びせてきて、
「もっとこちらを向く。そしてもっと顔を上げる！ ばか。俺の言ってるのは、そんなに鯨鯨みたいに口を大っかくあけろって事じゃ

なアい！」

などと、それはもう矢継早やの叱咤だ。

頭に来て睨みつけてやっても彼は全然お構いなしだ。ホレ手の遣り場処が違う、眼の遣り場が狂つるとと散々にのたまうて、そして漸く納得がいったか、ふと安らかな表情をしたかと思うと——カメラを覗いて、

「あれ、ちよつと摩^すれてらア」

と、カメラのほうは動かさないで一生懸命ポーズをとってる私のほうを動かすんだから嫌ンなっちゃう。

そして、今度こそは……と気張ってポーズしていたら、

「やっぱり、ストロボ付けよかな」

なんて、お尻をむけて暢気にござそやり始めるんだから全くどうかしたカメラマンだった。まだある。そんなこんなでゲンナリしてしまい、駄のちからを抜いて惰^おれたとたんにパチッとシャッターをきって、
「お。このストロボ野郎め、なぜ点かないんだ？」と、まじまじみつめて唸^うってる。

「嫌よ、貴方。シャッターきるときはあたしのほうをよくみてからにしてね」

と文句をつけてやると、
「どうして？」と来た。

「どうして、もないわ。あたしこんな……恰好をしていたんだもの」

「アホ。なんで俺の振り付け通りに、ジッとしていない」

「なに言ってるんのよ、あたしだって生ま身だもん、そんなにいつまでも……」

「ま、いいや。今のは、ご破算だからな」

——フィルム巻く彼の手に、なんとかまあ、調子が出てきたのは、こんな工合で四、五枚が撮られてからだだった。

それにつれ彼のその動作が派手になり、また細かくもなっていたのは当然のこと。どいういう心理状態に至ったのやら、もう私にはあれこれ言わず固定位置のカメラから離れると、別の小型カメラを気取って構え、立て膝したり斜めになったり寝ころがったり、その恰好だけはなにやら板について——馬鹿忙しにシャッターをきりまくるのだった。

しかし、逆に言ってこの被写体である私のほうが面白くなくなっていったのも、そのころからなのだ。

たしかに、ウェディングドレスを身に着けるということは、もうそれだけで『恍惚』とはしてくる。しかし、このように、写真のためだけのポーズをとり、言わば貴方まかせに



ふと……煙草のにおいがしたかと思うと、膝のあたりに、手らしいものが触れた。

そつと目をあけると、彼が近々と屈みこんで、その掬いあげるような目で私をみつめていた。

「どう、したのよ」

あまりジツとみつめられぼってくる。思わず知らずチニールをつまんで、顔の前へ持ってきたりしていた。

「キス、してもいいか？」

彼が、ぼそりと言った。こんなこと前もつて言う彼なんて始めてだが、その感じ全体も丸つきり、いつもと違っているようだ。

「嫌……」とこたえて、私は正直にすぐ自分の唇を掌で隠した。

「どうして！」

「まだ写して……呉れるんでしょ？」

「もうどうだって、いいや」

「いけないわ。そんな……途中で止めるなんて」

「ふうん、おまえがそう言うのなら、続けた

っていいんだぜ」

「ええ、写して頂戴」

「だが、そのかわり、次からは俺の思う通りの仕方ですぜ」

はじめてここで瞬きをした彼は、私の膝をつかんだその指を曲げ、グツとちからをこめてきた。痛いッ……とさけぶ代りに私は、

「思う通りになって、ど、どういふことなのよ!?」と身をよじらせていた。

だが、勿論私はわかっていて。なんで彼が今までのような『撮影ごっこ』だけで満足するものか、と。

「さあね」と彼はとぼけてみせたが、この私とて、ドレスに顔をうずめるようにしてクスツと、わらってやったことだ。

「ねえ、どんな事をして私を写すの？」

「なあに、別にどうって事もないさ」

彼は立ち上がって、壁際へ行った。

其処には茶色の革袋が投げ出してあった。

彼がなにやら引っ張り出すのを見ていると

——案の定、縄だった。

「あら！ 貴方だったら……花嫁さんを縛ってまで写すつもりなの！」

顔を見合わせていなかったから幾らか羞しさが軽い。「縛る」という言葉をこちらから

突っ立っているだけでは矢張りこの楽しさが増すものではないのだ。かえって……この花嫁姿の自分を自分の目で確かめられないことに苛々とさえしてくる。言うまでもなく鏡が——それも目の前にあるかないかだけの問題だが……

「ね、ちょっと休ませてえ」

二十枚ほど撮られた頃だろうか、とうとう私は弱音を吐いてしまった。

「うん、そうだな」

彼の呟きを聞いて、私は早速椅子へ行き凭れこんだ。

そして、なぜか、そのころになり、照明の『赤さ』が眩しく見えてきた。私はいつしか目を閉じてしまっていた——

切り出してしまった。

今夜ばかりはオイソレと彼の言いなりになつてたまるものか……といったことも、所詮は根の緩い意気込みだ。意識していなかったにしろ先刻から私をゆすぶっていた興奮は、この縄を目にしたとたん、一瞬にそんな考えなど蹴散らしてしまつたようだった。

はたして彼は、そんな、言外に滲んだ私の『よろこび』に気がついただろうか。

「ふん、決まつてるじゃないか。あと、写すとなつたら、俺たちにはこれしかないや」

彼は不愛想に言つて、じろりと私を見た。

その目が、なんだか皮肉たつぷりの色に光つたように見えた。

「嫌。花嫁さんを縛るだなんて……第一、そんな約束ではなかつた筈よ」

「なに、花嫁つてやつを撮るには、縛り上げてこそ初めて美しいポーズも生まれるというもんさ」

彼は縄を解き捌きながら……私の願いにびつたり合わせたようなことを言つた。

しなやかな、そしてこれまで幾たびとなくこの私の汗や涙を染みこませていった縄。

その縄が、ゆらゆらと生き物のように揺れうごく、もう、いくら気張つて無関心を装

おうとしても駄目だった。まるで自分が自分でなくなつたみたい、そわそわと落ち着かなくなる。——と、この私の様子をどのような受け取つたのか、

「……どうした？ 変に黙り込んで。まさか本気で、嫌だなんて言つてるんじゃないだろうな？」

彼は睨みつけてきた。

「しかしまあ、ロープを前にしておまえのそんな風情も、満更捨てたものじゃない。おつとどっこい、おまえが何を思い悩んでいようと、俺は俺で、勝手にやらせて貰うぜ」

彼が革袋を隅のほうへ蹴り飛ばすのを見ながら「あのう」と私は心細げな声で言つた。

「どうしてもそのう、あたしを縛つて写すというのなら、それでもいいんだけど……でも貴方、縛つたら、もう写真のほうなんか忘れて、あたしを苛めに掛かるんじゃないくて？」

「さあ、なア」

「だったら、ご辞退するわ。写真を撮るだけにして、いつもみたいな事は絶対にしないと約束してくれなきゃ」

「なんと、これはまた、おまえにしては変わった注文だな」

「そ、そうでもないわ、あたしはただ、この

衣裳を着ている時ぐらひは、温和しく……静かに、このしあわせな気持ちにひたつていたいだけなのよ……」

私のずるさはこれで判つてしまふけど、それにしても普段では言えそうにない、こんな気障な文句が、この時は案外すらすらと口を出たのだから不思議だった。

するとこれはまた、彼までがその気障に気が触れたかのように、

「わからんな」と両肩をすくめ、

「ええと……俺なにかの文章で読んだ事があるんだ。……その美は、無残な被差の構図によつて著しく倍加されていったのである。そしてなおも責め立てられ加差されることによつて、彼のその痛苦の内奥から、やがて慥く陰微な悦びが醸成されていったのである。一体これは、どのように説明すべきものであろうか…… さあ、どうだろうな。日頃のおまえが、大体これにあてはまると思ふんだが」

と、上唇を舐め、目を細めるのだった。

「おお、むずかし……」

「なのにな、今夜にかぎつて、温和しく静かに幸福気分だつて？ ふざけるなよ」

「だって本当の気持だもん」

「ともかく、俺は始めるぜ」

「嫌。縛るだけ、と約束して」

「しっ、っこいな」

「ええ、そうよ」

「……じゃ、俺に、甘いキスのひとつもしてみろや」

キョトンとして、私は小首をかしげた。

「キスしたら、どうなるの？」

「案外、俺もぐんにやりしてしまっただけ、そんな気持ち起こらないようになるかも」

「嘘。それは逆じゃない？」

「だから、してみたら、と言ってるんだ」

言うまでもない、もう彼のペースだ。私はただ、その彼のペースに曳きずられながらもケチに勿体ぶっているのが精一杯だ。

と言うことは、『乗り掛かった舟』ということでもある。なんとか彼を、ぐんにやりさせるなりして、その『腹づもり』の事から逃れたいといった、みみっちい演技ではあっても必要としなければならぬ破目となっていた。私は、

「わかったわ、じゃ……貴方」

と、両手を差し伸ばすと立ちあがって、早やピンクの唇をつきだしながら彼のほうへ駆け寄った。

彼の腕の中にとびこんで、胸もとへ頬ずりするようにそっと顔をあげると、生臭い息を吐いてもう彼の唇が間近に迫っていた。

——唇が、唇で分けられた。右へ、左へと数度にじられて、やがて歯と歯が触れ合い、そして舌が強引に押し入ってきた。

思わず、逆らおうとした身動きも、すぐその熱っぽさに負けてしまった。このあたりから、私の鼻から、ちからが抜けていった。

かわりに、意志とはかかわりなく彼のその秘めやかな吸技に何とか呼応しようとするうずきが、たちまちにひろがっていった。

——ようやく。彼の一層つよく噴きつけた異臭の鼻息が私をして正気？ に立ちもどらせた。眼をあけると同時にその厚い胸を突いてやると、唇は緊い音を立てて離れた。

「はい。そこ、までネ……」 私は始末悪げに羞かしさを隠しながら、そんなことを口走って微笑った。「さあ、ぐんにやりしておいでの中に写してもらおうと……」

化粧具などをまとめて入れてある小袋は、この夜も事前に、この部屋の床の間の隅に置いてあった。私は手早やく口紅を塗り直すといさぎよく自分からカメラの前に立った。何気なしにまた胸に抱いていたブーケに気

がつくと、彼へ軽く舌を出して見せながら足許へころがした。

彼は、うっそりと近づいてきた。

チュールを透して窺った故か、その顔にどこなく『惘然』とした表情があるようだ。

私は両腕を背中へ回しながら、

「ねえ、いつもみたいな雁字搦めなんて、花嫁さんの場合には似合わないと思うわよ。なるべく……今夜はあっさりよね」

なんのことはない、彼に指図しているような形だった。

「うるせえな！」 と彼は怒鳴った。

しかし、怒鳴ったけど、先刻までのあの弾むような勢いが無い。ひょっとしたら、『毒気が毒気を』抜いてしまっているのでは——と私はちよっぴり、行き過ぎだったかも知れないことを後悔した。

4

ところが、この心配も杞憂に過ぎなかったのだ。私を縛りはじめると、彼のそんな様子は、また変った。

「う！ 痛いッ……」

二の腕を締めつけられてのけぞったとき、

真上から噛みつきそうな、もう凄まじい形相になっている彼の顔があったのだ。

私は、

「おねがい…… あ、あんまり酷く縛らないで！」

だが、そのくせ何と因業な、のけぞるほどに痛い筈のその腕を自分のほうから尚も背中へ捻じ、腋をあけて彼の縛り易いようにしているのだった。

それに応えてか？ 悪鬼の形相に相応しく彼も、縄を締めるその手に一層ちからをこめてきた。

「う、うう！」

ゆすりあげるようにして手首が吊られた。

よろよろッとする。頤があがる。と、その隙を狙っていたかのように、縄が、素早く首に掛かった。

奥歯を噛みしめて堪えながら、前にまわって来た彼をふと見ると、より紅味が増して、てらてらと、あぶらぎってさえいる。

それは堰止め^{せき}られていたものを今一気に放射しようとするような、凄味と言おうか熱気と言おうか、そんな感じの、まさに噴き出すうとしている顔だった。恐い！ と私は思った。――

縄は背中で一ト括りされたかと思うと、つづいて胸から胴をぎりぎり締めにして、お臍のあたりで団子結びをつくった。そして次には首の縄に通って、ぐいぐい引っ張られた。

私は、肩には新たな痛みが加わったけれども何とかこれで、呼吸のほうに楽になったような感じだった。が、しかし、

「ひどいわ！ ひどいわ……」

と早速、軀をくねらし、

「こんなに緊く……縛ったりして！」

恨みの言葉とともに、なお身を揉みながらその場に膝をついていった。すると彼は、私の頭の上でツ！ ツ！ と口を鳴らして、

「なにを、この場に及んで好き勝手なことを……」と 嘲笑^{わら}い、「じたばたしないです、

新婚初夜ぐらいはねえ、温和しく、黙ってされるがままにしているもんだぜ……ねえ花嫁さん！」

節を付けるような口吻で言うのだった。

そして言い終わると同時に、私は肩先を嫌というほど蹴られて横倒しとなった。

駄目よッ――とさけんだつもりが、身を干切るような縄の痛みのために、たちやあッとなってしまった。

「え、なんだ？」

「こ、こんな姿を、写真にするつもりなの？ ……それだけは、やめて！」

「へ。だれも写真にするんだなんて、言ってやしないぜ」

「え、すると何で……」

「ふん、撮影遊びなんて、糞喰らえさ」

「じゃ、あたし」

と私は、顔を包むように前に回されていたチュールを、無理無態に首を振って払いながら言った。

「もう……花嫁さんなんかじゃないわ」

「なあに、そうはいかない。可愛い花嫁さんだぜ」

彼は急に猫撫で声に変わって横へまわって来た。しかし勿論、その口吻とやる事は正反對。突然、足蹴りにして私を俯向かせた。

そして私に、ばたつかせる隙もあたえず足首をつかまえて荒々しく縛り、その縄をうしろ手に掛けて通すと無茶苦茶なちからで引き絞りながら――もう片方の足首をとらえて、ぐるぐる巻きにするのだった。

それが終わったとき、私にしてみれば――下肢を折り曲げている以上、首の縄は締まっていくことはなかったけど、それでも手首と肩に喰いこむ縄はより酷く痛みを加えていた

のだった。

「な、なんて事をするのよ！……」

さけぶうちにも、手首から先が——いや軀全体が痺れていくのがわかった。

「さ。わたくしはお嫁さんです、と言ってみるよ」

と、彼は言った。

「だ、誰のお嫁さんなのよ！」

「うふふ。俺の……に、決まってるじゃないか」

「貴方の、お嫁さんだって!」

「そう。さっきはちゃんと、記念写真だって撮ってあげた仲だもん」

「そ、そんなのってないわ。あたし嫌よッ、誰がお嫁さんにだなんて!」

「いひひ、その第一回目のご返答は、まあ聞き流してやることにする。だがな今度は、さあ、ゆっくりと考え直して……返答しろ」

「で、では、貴方のお嫁さんになる、と言ったら、ど、どうするつもりなのよ」

「あれ? その先がご心配なのかね?」

濃い毛の寝そべっている太い指が、ぼんと私の頬をたたいた。

「よし、おしえてやろう。それはだな! 斯うして、ジツクリと、夜の明けるまでも苛め

抜き、痛めつけ通して差しあげる、ってことなのさ」

身動きが出来なかった。

まして、この苦しい姿勢から逃れようと横向きなどに、なれっこなかった。

裾を乱し果たした姿、おまけに太股が勝手に割れていくそのあられもない姿を、彼の目に露呈させているのかと思うと、もうそれだけでも、私は灼熱の鉄板の上にでも転がされているような按配だった。

「どうだな? 新妻としての覚悟が決まったなら、ここで色よい返事のひとつも聞かしてくれよ!」

彼は笑いながら言い、足をつかって私を小突きまわった。

私は黙っていた。

黙って我慢していたら、ふと、彼の遠のく気配がした。途切れがちの太息を吐きながら無理し、顔をふりむけてそのほうを見る。

と、彼は、これまで役立たずの形で障子際の壁に、脚を折りたたんで凭し掛けてあった大きな座敷机を、片手で引きずるようにして戻って来た。

彼はそれを、私の顔の間近に立てたまま置いて気味悪い含み笑いをもらした。

——眼をあけているかぎり、私はそこに白く歪んで映っている女の顔を、見なければならなかった。

けっして綺麗じゃありゃしない、哀れで、陰惨で、そして瞳めていればいるほど可笑しくいらに醜い、女の表情を——

矢庭に、彼はその座敷机を私の、手首と足首とを連結してイヤでも張りつめている往復二条の縄の上に、なお立てたままドシン! と乗せた。

「ひッ!——」

これでもう、私からは化粧の工合など心配する思いは飛び散ってしまった。顔を畳にこすりつけ、逆海老の形の身を烈しく揺すって絶叫した。その畳の目が、すぐに、なみだでぼやけていった。

「か、かんにんして!」

「では、色よいお返事ってやつを、戴けますかね」

「そ、そんな事を……」

「え? なんだい? 聞こえないねえ」

「……」

「ああそうか。まだそんな返事など、する気も起こらないと仰有る……」

「……」

「じゃあ、それならそれで」

彼は私に跨ると机をゆすぶりはじめた。

まるでマラソンでもしているようなリズム

の吐息を聞かせながら、次第に腕力をこめて

机を押しつけてきた。

この腰骨をへし折ってしまいそうな情容赦

のないリズムに、反りかえった上になお反り

かえり、他人が聞いたらなんだか調子を合わ

せているかのようなだろう悲鳴を私は走らせつ

づけた。

そして。

飽きもしないで繰り返されていったこんな

責めのうちに—— やがて、私の苦痛感はず

しく満ちていって、それはいつしか、むしろ

奇妙な、混迷感にと変わっていた。

微かな、毛の先で突つかれるような……む

ろん今だに得体ののはっきりしない快感？ が

その混迷の底深くで起こりはじめて、間もな

くそれは茫洋感？ と変わって全身のすみず

みにまでひろがっていったのだった。

不思議と、縄目を受けている部分部分の直

覚的だった痛みなども、消え失せていたよう

だ。自分の軀が意志に反してぐねぐねと揺れ

動くのも、それは彼が、私を優しく優しく愛

撫してくるからだ……と思えた。

「ちくしょう！」

と、その優しい彼が呻いて言った。

足首の縄が解かれると、ぐったりして伸び

きろうとするそんな私の手首の部分をわし掴

みにつかむと、部屋の真ん中へ、ひきずり、

ころがした。

そして、ばやけていく私の視野のなかで、

さほどの間も置かずに怪物の影のような彼が

撥ねあがって、それとほとんど同時に——私

の眼は吊りあがり、「暗黒」に覆われて、す

ぐまた新たな痛苦が襲ってきた。

——（おわり）——

（掲載写真は筆者提供）

●躍進記念● 百萬元懸賞 ▲原稿募集▽

▽賞 金△

入選作品 一席	1篇	五万円	10篇
入選作品 二席	1篇	三万円	10篇
入選作品 三席	1篇	一万円	10篇
入選作品 四席	1篇	五千元	20篇

▽内容△

一、特異な風俗文藝誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新しい脱皮を企図する本誌の内容充実のため、広く読者の間から懸賞募集いたします。

一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフェー、シュ、一般、女性切腹、男性切腹、男女性、美、女相撲、女斗美、生首狂、奇風俗、妊婦嗜好、見世物、奇珍、アブラ等をはじめと俗文、その他古今東西に亘る特異風俗に關する題材を広くとりあげて下さい。

一、題材を広くとりあげて下さい。

一、歓迎します。特に従前本誌にて余り扱ってない分野の傑作をお待ちします。

▽規定△

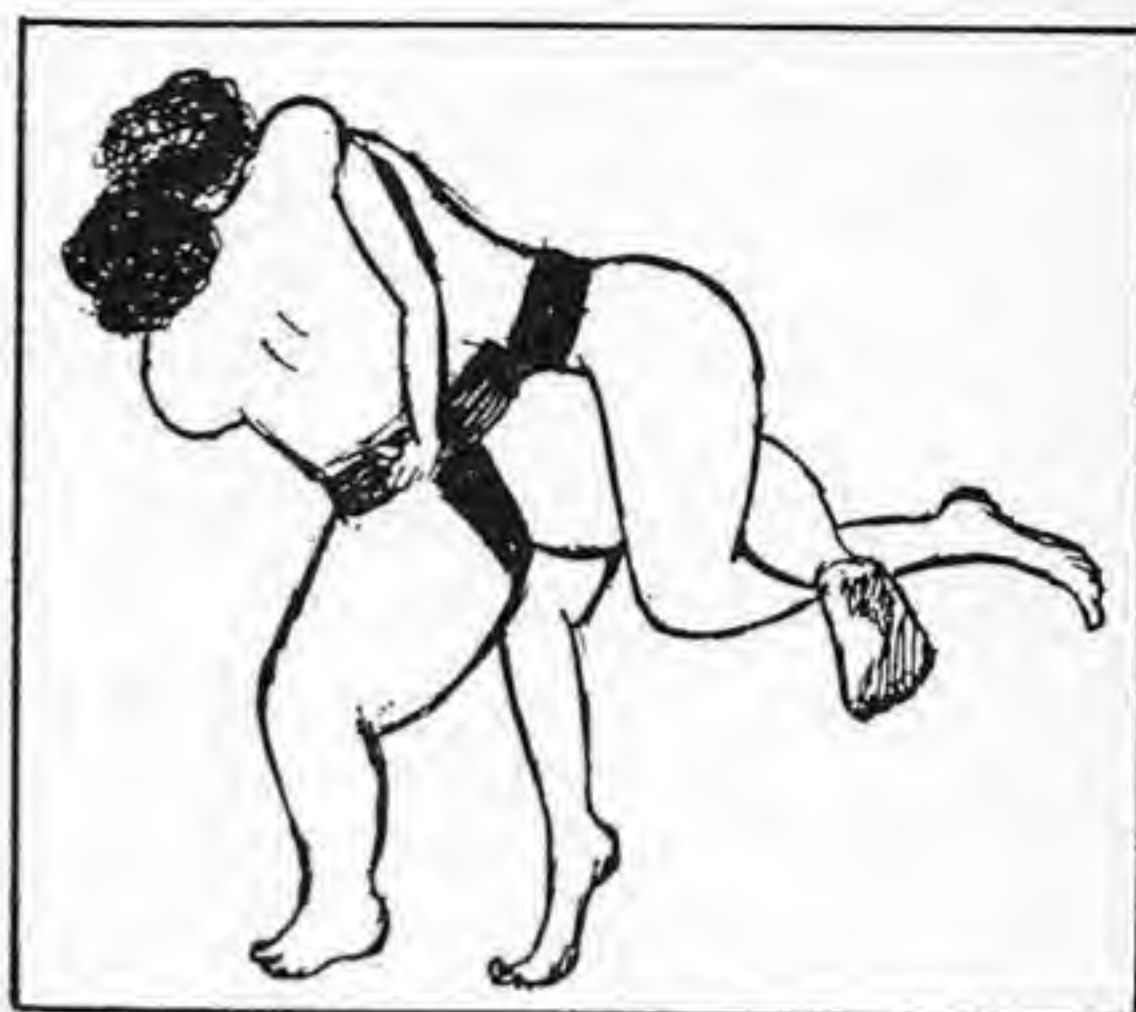
一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品に限ります。作品の中に引用部分があれば、その出処（作者、書名など）を明記願います。

一、原稿は、原稿用紙（A4）を400字詰め、縦書き、右側を綴じ、表裏を明記願います。

一、原稿の締切日は、毎月十五日です。入選作品は順次、次号の誌上に発表いたします。

一、懸賞金は、原稿の発表後、他の一般原稿と区別するため、第一頁の原稿に「懸賞」とお書き下さい。

一、返信料、原稿の送付先、その旨、必要のあるものは、函第41号の送付先、その旨、必要のあるものは、原稿募集係宛、必らず郵送（第一種郵便）によります。採否は誌上発表を以てご承知願います。



(六)

冬が去り、ようやく春がやって来た。

弓枝夫人と毬子夫人は、相変わらず好造の悪趣味の生贄として、例のハレンチな生活を強いられていたが、寒さからようやく解放されて、とに角、ホッとしたのだった。何しろ冬の間でも素裸になって相撲を取らされていたのだから、彼女たちの肉体的な苦痛は、それこそ並大抵なものではなかったのである。

だが反面、暖かくなるにつれて彼女たちのノルマが増えたのも事実だった。一日に十番

懸賞入選・女斗美小説

ふたり妻

(2)

芦 浦 素 舞 夫

(カットも)

以上、取り組まされるのも、そう珍しいことではなかった。彼女たちは、お互いの生理期間を除いては、それこそ毎日のように相撲を取らされ、お互いに勝ったり負けたりを繰り返していたのである。

やがて三月も過ぎ、四月に入った。好造の屋敷の桜も花が満開になった。まさに爛漫の春である。

そんな或る日のこと、突然、好造が花見をしようと言いだした。勿論、唯の花見ではない。満開の桜の下で、夫人たちに相撲を取らせようと言うのである。あの雪の日の女相撲

以来、好造もさすがに彼女たちに屋外で相撲を取らせるようなことはしなかったが、撩乱の春に浮かれたのか、またまた例の悪趣味が頭を拾げて来たのだ。そう言えば、去年の十月仲秋の名月の晩にも、月見と称して彼女たちに庭で相撲を取らせたことがあった。それから、あの雪の女相撲に続いて今度の花見の女相撲は、三度目の屋外相撲と言うわけである。弓枝夫人と毬子夫人にとって、誠に迷惑千万なお花見ではあった。

さて、好造は彼女たちに命じて、酒肴を庭まで運ばせ、満開の桜の下に大きな緋毛氈を

敷かせた。これが、今日の彼女たちの土俵なのだ。好造自身は、花見酒をチビリチビリやりながら、酒の肴に、彼女たちに相撲を取らせて楽しもうという寸法なのである。

弓枝夫人と毬子夫人は、好造に命じられるまま素裸に褌を締めて庭先に降り立った。

あの雪の日のように寒さに震えることはなかったが、明るい春の陽光に裸身を晒してみると、やはり羞かしさが先に立った。いくら毎日、ハレンチな事に馴らされているとは言え、そこはやはり女である。

『おい、何してるんだ。同じ野天相撲でも、今日はこの前みたいに寒くないから、思い切ってやれよ!』

羞かしそうにためらっている夫人たちに、早くも酒の入った好造がハッパを掛ける。

仕方なく弓枝夫人と毬子夫人は、緋毛氈の上に向かい合って立ち、顔を赧めながらも思い切って四股を踏みはじめる……。このように羞らいの色を見せながらやるところに、また女相撲の魅力があるのだ。だが、長い間やらされて来ただけに彼女たちの動作は、四股ひとつを見ても、なかなか堂に入っていた。長身の弓枝夫人は、すらりとした長い脚をピンと高く伸ばして美事な四股を踏めば、肥

の毬子夫人も、大根脚を思い切り大きく上げて堂々たる四股を踏む。体重があるだけにドシン! と地響きするほどである。

四股を踏み終えた彼女たちは、一旦蹲踞の姿勢で向かい合った後、立ち上り足の位置を決めて仕切りに入った。肥軀の毬子夫人は、いつものように両膝を大きく開き、腰をじゅうぶん割って両手を下ろせば、長身の弓枝夫人は、例によって両足の開きも狭く、お尻を高く持ち上げて腰高に仕切る……。

今日の彼女たちは、桜の花にあやかったピンク色の褌を締め込んでいたが、これは、好造が今日の花見女相撲のために、わざわざ新調してやったものである。因みに昨年十月の月見女相撲の晩にも、高い金をかけて特別に作らせた、夜光塗料を塗ったブルーの褌を彼女たちに締めさせたが、好造はこんなことは少しも金を惜しまない男だった。さて、今日のピンク色の褌は、毬子夫人の場合、その小麦色の肌にはちょっと不釣合な感じがしないでもなかったが、弓枝夫人の方は色白の素肌に実によく似合っている。

腰高に仕切る彼女の大きな白いお尻に締め込まれたピンク色の褌は何とも言えない妖しい魅力があった。もともと好造は、毬子夫人

の仕切りよりも弓枝夫人の仕切りのほうが好きだった。毬子夫人の低い仕切りは、彼女が太っているだけに堂々たるものがあつたが、弓枝夫人の腰高の仕切りの方が、見た目にセクシーな感じが強かったからである。

だから好造は、彼女の仕切りを見ているうちに、もうそれだけでいいような気になるとさえあつた。

弓枝夫人と毬子夫人は、緋毛氈の上に両手を下ろしてグッと睨み合ったが、一回目は型通り仕切り直しになる。今日は暖かいので、この前の雪の日のように立ち急ぐこともないのだ。それに彼女たちの場合も本物の相撲と同様、仕切りを何回か重ねて乱れた呼吸を整える必要があつた。毎日のように相撲を取らされていると言っても、やはり女である。いつも最初の仕切りの時は、胸がドキドキして足が震えるのだった。

さて、二、三回仕切り直しを重ねていく内に、彼女たちの顔がだんだん紅潮して来た。さきほどまでの羞らいの色はすでに消え去りいつものように嫉妬と憎悪に満ちた険しい表情になっている。頃は良しと見た好造は、彼女たちに時間一杯を告げた。

頷いた彼女たちは、蹲踞の姿勢から立ち上

り、意を決して最後の仕切りに入る……。立
合いと同時に素早く組みつけるように、毬子
夫人がうんと前に出て低く仕切ったのに対し
弓枝夫人はかなり後に退って腰高に構える。
彼女は一気に突っ張って出る積りらしい。

『待った無し！　油断なく見合って……』

好造は、軍配をかざして彼女たちの中に割
って入った。彼女たちは、お互いにグツと睨
み合ったが、阿吽の呼吸が合わず、なかなか
立ち上れない。彼女たちにとってハレンチな
女相撲でも、何しろ夜の生活？　が賭かって
いるのである。どちらかが一勝するとエキサ
イトして、後は直ちに取り組むのだが、いつ
も第一戦だけは、なかなか立てないのが常だ
った。

長い睨み合いを続ける彼女たちの素肌に、
春の陽光がサンサンと降りそそぐ……。

(七)

好造の軍配がかえって、両夫人はサツと立
ち上った。低く立った毬子夫人は、例によっ
て右差しを狙ったが、弓枝夫人はこれを嫌っ
て一発突き放すや、すかさず右から左と激し
く突っ張って出た！　今日は緋毛氈の上だか
ら、この前のように雪に足を取られる心配も

ない。相手の激しい上突っ張りに忽ち後退さ
せられた毬子夫人は、右に回り込んで逃れよ
うとしたが、思わず緋毛氈から左足を踏み出
してしまった。

「突き出し！」　弓枝夫人の勝ちである。

『盃をとらず』

まるで殿様気取りの好造は、勝った弓枝夫
人を呼び寄せた。彼は、一回勝負が決まる毎
に勝った方に花見酒を飲ませる積りらしい。
とすれば、少しは飲める毬子夫人はさておき
ほとんど飲めない弓枝夫人にとっては、甚だ
迷惑な褒美である。なみなみと酒の注がれた
盃を手にした弓枝夫人は、溜息をついて暫く
ためらっていたが、やがて決心したように、
眼をつぶって一気にグツと飲み干した。これ
も、彼女の勝ち気のなせる業だった。

さて二回目。今度は、毬子夫人が早く立っ
た。彼女は相手に突っ張る暇を与えず、双拳
一気に押して出た！　この鋭い出足に、みる
みる後退させられた弓枝夫人は、踏ん張って
耐える術もなく、アツと言う間に緋毛氈から
右足を出してしまった。

「押し出し！」　毬子夫人の勝ちである。どう
やら先の一番と言ひ今の勝負と言ひ、今日は
俵がないので土俵際で踏みこたえる事が出来

ず、いつもと勝手が違って、お互いにやり
くそうだ。勝った毬子夫人には、早速盃が与
えられた。彼女もちよっとためらったが、思
い切ってグツと飲み干す。

『うむ。なかなか美事な飲みっぷりじゃ』

好造は、いかにも満足そうな様子である。

さて三度目……。両夫人はパツと立ち上っ
た！　今度は弓枝夫人が素早く突っ張って出
た！　毬子夫人も負けじと突っ張り返し、こ
こに激しい突っ張り合いの応酬となった。

だが突っ張り合いでは、何と言っても弓枝
夫人の方が分がある。毬子夫人は懸命に応戦
したが及ばず、ついに緋毛氈の外に突き出さ
れてしまった。これで弓枝夫人は、得意の突
っ張りで二つ目の勝星を上げ、二対一とリー
ドしたわけである。だが好造は、彼女たちに
言った。

『おい、おまえたち。離れてばかり取ってな
いで、たまには四つに組んだらどうだ？』

事実、これまでの三番は突き押しの相撲ば
かりで、まだ四つ相撲が一番も見られないの
だ。この程度の相撲では、好造が満足する筈
がなかった。

さて四度目……。立ち合い、毬子夫人は言
われた通り四つを狙って右差しにいったが、

弓枝夫人はこれを嫌って突き放した！

弓枝夫人にしてみれば、いくら好造に言われたからといっても、自分に不利な四つ身にそう易々と組むわけにはいかないのだ。何しろ、一番、一番の相撲に夜の生活？　が賭かっているのだから……。だが、弓枝夫人は懸命に突っ張ったが、やはり好造の言葉が気に掛かったのか、突っ張りの廻転が些か鈍った隙に、相手に右差しを許してしまった。うまく右差しに成功した毬子夫人は、すかさず左上手揮をも攔む。こうなれば弓枝夫人も本意ながら組むよりほかなかった。彼女たちはお互いに両揮を引き、相手の肩に頸を埋めてガップリ右四つに渡り合った！　四回目にして初めて、四つ相撲が実現したわけである。

だがこの体勢は、やはり肥軀の毬子夫人の方が安定感があった。彼女は、太っているだけに重心が低く、身体も柔軟性があった。これに対して長身の弓枝夫人は、相手の寄りや投げを警戒して充分、腰を引いて構えているが、彼女は背が高いので、どうしても腰高の欠点は否めず、身体もまた堅かった。やはり四つ身の型は、太った毬子夫人の方が遥かに良いようである。

さて、得意の右四つに組み止めた毬子夫人

は、両揮を引きつけるや、えたりとばかりにグイッと寄って出た。弓枝夫人は懸命に寄り返そうとするが、相手に両揮を引きつけられているので頸が上っており、完全に不利な体勢である。毬子夫人がまた激しく寄って出た！　弓枝夫人はもはや防戦一方に追いやられただ廻り込んで逃れるのが精一杯だった。だが毬子夫人は攻撃の手を緩めず、肥軀を利してグイグイ寄り立てる！　長身の弓枝夫人は遂に緋毛氈の隅に追い詰められ、懸命に寄り返そうとしたが、いつものように俵に踵を掛けて踏ん張る事が出来ないで具合が悪い。止むなく弓枝夫人は、右脚を飛ばして外掛けで懸命に防ぐ！　だがこの外掛けは、相手に両揮を強く引きつけられ腰が完全に伸びているので余り効果がなかった。

委細構わず毬子夫人は、一腰入れるや、逆に長身の弓枝夫人をグイッと吊り上げた！　弓枝夫人は長い両脚をバタつかせて必死に残そうとしたが、両足が宙に浮き、もはやどうしようもない。毬子夫人は、軽い弓枝夫人を腹の上に乗せるようにして高々と吊り上げ、相手が必死にもがくのを構わず一気に緋毛氈の外に吊り出してしまった。

いくらハズミとはいえ、女にしては大した

力である。敗れた弓枝夫人は、無念そうに唇を噛みしめ、横目で毬子夫人を睨みながら、足の裏についた泥を払い落として緋毛氈の中に戻る。これで二勝二敗、対戦成績は再びタイに持ち込まれたわけである。

さて五回目……。今度は弓枝夫人の方が僅かに早く立った。彼女は、例によって激しく突っ張って出た。毬子夫人も負けずに突っ張り返し、ここに激しい突っ張りの応酬となったが、突っ張り合いでは、何と言っても弓枝夫人の方が分があった。リーチがある上に手の廻転が早いのだ。弓枝夫人は、激しい上突っ張りで毬子夫人を緋毛氈の隅に追い詰め、相手が苦しまぎれに首を巻こうとするのも構わず、右を差すや、すかさず右外掛けで攻め立てた！　毬子夫人も弓なりになりながら、柔軟な腰で懸命に耐えようとしたが、十センチ以上の身長差は如何とも仕難く、弓枝夫人に長身を浴びせられ、遂にたまたま緋毛氈の外にドシンと尻餅をついて、仰向けに倒れた。

「外掛け！」　好造の軍配が上がる。弓枝夫人の速攻の勝利である。

彼女はこれで三対二と一勝リードしたが、例によって好造から花見酒を飲まされた。

今日の相撲は、勝つのもまた大変である。

(八)

さて六度目の対戦は……。立ち合いは毬子夫人の方が一瞬、早かった。彼女は、相手が突っ張って来るより早く、左からおっつけながら、右ノド輪で押し出た！　これは、今まで散々相手の突っ張りでひどい目に遭った毬子夫人が、考え抜いた最良の対策だった。そして確かに効果があつた。

弓枝夫人は、忽ち長身をのけ反らせズルズルと後退した！　そのまま緋毛氈から足を踏み出して押し出されるかに見えたが、彼女もさすがによく残した。弓枝夫人は、左手で相手の右ノド輪を必死に外し、頭を下げて懸命に押し返そうとした。だが、毬子夫人の方が機敏だった。彼女は、相手の押し返そうとする力を利用して、いきなり左に体を開くや、左手で弓枝夫人の右肩を極めながら、右手を彼女の首筋にかけて一気に引き落とそうとした！　肩透かしである。この思い掛けない奇襲に、弓枝夫人は大きく前に泳ぎ、危うく手をつきかけたが、必死に足を送って辛うじてこれを残す。

だが、毬子夫人がこのチャンスに逃す筈が

なかった。彼女は左に廻りながら執拗に肩透かしを引き、弓枝夫人が必死に前陣を掘んで残そうとするのも構わず、なおも肩透かしを連発すれば、弓枝夫人も遂にたまらず、緋毛氈の上にバツタリ両手をついてしまった！　これで勝負が決まったのだが、夢中になっていた毬子夫人は気がつかない。彼女は、なおも右手で弓枝夫人のほっそりした首筋を力まかせに押さえつけ、ご丁寧にも左手で彼女の大きなお尻を押さえたので、長身の弓枝夫人はガククリ両膝をついて、四つん這いになってしまった。しかも、勢い余った毬子夫人は、弓枝夫人の背中におぶさるようにしてのしかかったのである。

負けた弓枝夫人が毬子夫人よりも、うんと背が高いだけに何とも滑稽なポーズだった。だが好造は、四つん這いになった長身の弓枝夫人の大きなお尻に、たまらないセックス・アピールを覚えたのである。

『肩透かし。毬子の勝ち！』

好造は、大声で叫びながら二人の傍に駆け寄った。そして、四つん這いになっている弓枝夫人の大きなお尻をポンと叩いた。

『おい、弓枝。素晴らしいじゃないか。何とも言えない恰好だぜ、エヘヘ……』

酔っている好造は、ニヤニヤ笑いながら撫で廻す。羞かしさに耐え切れず弓枝夫人は、慌てて立ち上った。

『嫌ですわ。そんな事なさって……。今のは足が滑ったんですわ』

彼女は、顔を真赤にして憤然と言った。彼女は、毬子夫人の手前、思わず負け惜しみを言ったが、本当は情けなくて泣き出したいくらいだった。

何故に、女の身で羞かしい相撲まで取らせられ、負けた揚句、こんな辱かしめまで受けねばならないのだろうか……

弓枝夫人は好造が恨めしかった。だが同時に彼女の胸には、毬子夫人に対する怒りがラムラと湧いて来た。勝ち気な弓枝夫人にはこんなぶざまな負け方をさせられた相手が許せないのだ。

一方、勝った毬子夫人の表情も、意外だった。彼女の場合、勝って当然、喜ぶべき筈なのに、その顔には弓枝夫人への嫉妬の色がありと窺われた。毬子夫人は、好造が弓枝夫人の大きなお尻に魅力を感じたのが妬ましくてならないのだ。蓋し、女心とは全く微妙なものである。

さて弓枝夫人と毬子夫人は、七度目の相撲

を取るべく緋毛氈の中央に向かい合ったが、その表情は一層、険しいものになっていた。

両夫人は、ほとんど同時に立ち上った！

立ち上るや弓枝夫人は、いきなり右手で毬子夫人の頬に力まかせに張り、手を喰わせた！先程、ぶざまな負け方をさせられた腹いせである。

「バシッ！」と凄まじい音がして、毬子夫人は一瞬、目の前が真っ暗になり、思わずヨロヨロとよろめいた。それほど強烈な張り手だった。事実、この一発で勝負がついていた。すかさず弓枝夫人は、毬子夫人を猛然と突き立て、彼女が懸命に廻り込んで逃れようとして、身体が横向きになるところ、力まかせに右からドンと突き放せば、さすが肥軀の毬子夫人もたまらず、まるでゴム毬でも転がすように緋毛氈の外に、どっと転がって倒れた。

「突き倒し！」弓枝夫人の豪快な勝ちである。毬子夫人は倒れた時どこか身体の一部を打ったらしく、しばらく起き上れなかった。彼女のように太っていると、倒れた時の衝撃も、また人一倍ひどいのだ。

毬子夫人は、痛そうに顔を顰めながら漸く起き上ったが、彼女の丸っこい右肩は、皮が

擦り剥けて血が滲み出ている。

「弓枝さん、ひどいわ！ あんな張り手を使うなんて……」

毬子夫人は憤然として抗議する。だが、弓枝夫人は謝るところか、逆に開き直った。

「フン！ 何言ってるのよ、負けたくせに。どんな手だって、要するに勝ちさえすりゃいいんでしょ！ それとも貴女、怪我したのでお相撲するのが恐くなったの？ 今日はこの辺で止ましようか？ フフフ」

長身の弓枝夫人は、毬子夫人を見下ろして冷やかに笑う。今の一番で圧勝しているのだから弓枝夫人の態度は、よけいに傲慢だった。これには、さすがの毬子夫人もカッとなり、思わず大声をたてた。

「言ったわねッ！ 絶対止めるもんですか！ 今度こそ思い切り投げつけてやるわ。さあ、早くやりましょうよ！」

興奮した毬子夫人は、激しく弓枝夫人に詰め寄った。

「いいわよ！ いくらでもお相手するわよ。今度も、さっきみたいに突き飛ばしてやるから……」

弓枝夫人もまた、昂然として言い返す。二人共、益々エキサイトして来たようである。

さて八回目。両夫人は眦を決して立ち上った。だが今度もまた、弓枝夫人が先手を取った。彼女は、右から一発、毬子夫人の頬を張り、相手の出足を封じるやすかさず、猛然と突っ張って出たのだ。毬子夫人は、何とかして組み止めようとしたが、相手の突っ張りが激しいので、なかなか飛び込めない。止むなく彼女は突っ張り返して応戦したが、突っ張り合いでは、やはり弓枝夫人には敵わない。毬子夫人は、突き負けてズルズルと後退し、思わず緋毛氈から飛び出してしまった。

勝った！ と思った弓枝夫人は、それ以上追及しなかった。が、その時だった。意外にも、毬子夫人が猛烈な勢いで組みついて来たのである。不意を衝かれた弓枝夫人は、慌てて叫んだ。

「あっ、何するの！ もう勝負は決まったじゃないの、放してよ！」

彼女は、自分の首に巻きつけてきた相手の腕を懸命に振り解こうとした。だが、毬子夫人の方が早かった。彼女は、構わず右から強引な首投げを放ったのである。これを、ほとんど立ち腰同然の弓枝夫人が残せる筈がなかった。彼女は、モンドリ打ってものの美事に投げ倒されてしまったのである。

『よくもやったわねッ!』

弓枝夫人は、憤然として立ち上った。

『毬子さん! 貴女、卑怯じゃないの! 足を出して負けてたくせに!』

弓枝夫人は、柳眉を逆立てて毬子夫人に喰って掛かった。そして好造に、自分の勝ちを頻りに主張する。

『まあまあ、いいじゃないか。毬子も夢中でやったことだ。もう一度、取り直したらいいだろう?……』

好造は、ニヤニヤ笑いながら弓枝夫人を宥めた。彼は、彼女たちに一番でも多く相撲を取らせた方が面白いわけだ。だが弓枝夫人はあくまでも自分の勝ちを主張し、取り直しに応じようとしなない。

一方、毬子夫人としては、このまま引き退るのは何としても口惜しくてならなかった。出来ることなら弓枝夫人と、もう一度相撲を取って、今日の決着を、はっきりつけたかった。そこで彼女は、相手の斗志を煽るようにわざと皮肉を言った。

『弓枝さん。貴女がどうしてもやらないうて言うんだったら、今日のところは、私の不戦勝になるんじゃないかしら?……』

負けず嫌いの弓枝夫人が、これを聞いたか

ら、たまらない。顔を真赤にして怒った。

『何ですって! 冗談じゃないわ。やるわ! だけど覚えてらっしゃいよ、今度こそコテンコテンにやつつけてやるから……』

△そう来なくっちゃ嘘だ。今度の勝負は、きつと面白くなるぞ▽

好造は一人、ニヤリと、ほくそ笑んだ。

『よし、決まった! その代り、これ一回きりだぞ。今度勝った方が今日の勝利者だ。いいね! それから、もう一つ。今度の相撲は、緋毛氈から足を出しても構わん。だから思いつきやれ!』

好造は、最後の方を特に強調して言った。もともと好造にとって、緋毛氈なんかどうでもよかったのだ。花見と言うことで一応、敷かせていたのだが、相撲を取るのには第一狭過ぎる。それに、突き出しや押し出し等のケチな相撲では面白くない。やはり彼女たちに、凄まじい投げの打ち合いをやらせ、庭一杯、暴れ廻るくらいの派手な相撲を取らせなくては、ほんとうは満足出来ないのである。

(九)

さて、いよいよ九回目。弓枝夫人と毬子夫人は最後の雌雄を決すべく、緋毛氈の上に睨

み合ったが、二人共、極度にエキサイトしており、もはや完全に冷静さを失っていた。

先程から勝名乗り代りに飲まされていた花見酒の酔いも手伝って、顔を真赤にして眼を血走らせ、今にも掴み合わんばかりの勢いだ。現に弓枝夫人などは、仕切りもせずいきなり突っ掛けようとした程である。

『おいおい、これは喧嘩じゃないんだぜ。ちゃんとした相撲なんだから、あくまで礼儀だけは怠るなよ!』

好造は、尤もらしい口調で、たしなめる。自分は散々ハレンチなことをやっていながら今さら礼儀を云々するとは……全く聞いて呆れる。だが、彼女たちは仕方なく、一旦躊躇の姿勢で睨み合った後、立ち上り足の位置を決め仕切りに入った。

と……折柄、春風に吹かれて、桜の花びらが、彼女たちの上にヒラヒラと舞い落ちた。そして、彼女たちの汗ばんだ背中や首筋にペタッと、くっついた。ことに弓枝夫人は腰高の仕切りなので、その高く持ち上げた大きなお尻にも、大きな花びらが二、三枚ペタリと貼りついたのである。

この思い掛けない添え物? に、好造が喜んだのは言うまでもない。

『おお！　こいつは、なかなか風流だ。これがホントの花見だな。そして、さしずめ君のお尻は桜餅ってとこかな……ウッヒッヒ』

好造は、卑猥な笑いをしながら、頻りに撫で廻す。彼は、長身の彼女の大きなお尻が余程好きらしい。だが弓枝夫人にとって、もはや仕切りどころではなかった。彼女は羞かしそうに顔を真赤にして急いで立ち上った。相手の毬子夫人も、仕方なく仕切りを止めて立ち上ったが、彼女の顔には、嫉妬の色がありありと窺われる。

さて、とんだ邪魔が入って仕切りが中断されたが、彼女たちは再び足の位置を決めて仕切りに入った……勿論、花ビラはつけたままである。

汗ばんだ素肌に桜の花ビラをつけて相撲を取る……いかに女相撲らしいエロチシズムが溢れているではないか！と、好造は、ゴクリと生唾を飲み込んだ。

最後の勝者、それは果たして弓枝夫人か？　或いは、毬子夫人だろうか？

一方、当の彼女たちは必死だった。もはや彼女たちの頭の中には、ただ相手を倒すことだけしかなかった。花見女相撲も遂に、そのクライマックスに達したのである。

弓枝夫人と毬子夫人は、蹲踞の姿勢からサッと立ち上るや、サガリを捌くのもどかしく、中腰のまま手も下ろさずに、パッと立ち上った！　と……次の瞬間、バシッ！　と凄まじい音がして、毬子夫人がヨロヨロッとよろめいた！　またしても、弓枝夫人が強烈な張り手を喰わせたのである。否、張り手と言うより殴りつけたと言ったほうがよかった。頭を下げて、思いつきりブチかまして出ようとした毬子夫人は、相手から力まかせに左頬を張り飛ばされて、頭がクラクラッとして思わずよろめいたのだ。

彼女が思わず怯んだ隙に「得たり」とばかり弓枝夫人は猛然と突っ張って出た！　二発三発、弓枝夫人の強烈な上突っ張りが毬子夫人の顔面に炸裂し、彼女の頬が、みるみる赤く染まる。

毬子夫人は、突っ張ってくる相手の手を跳ね上げ、何とかして組み止めようとしたが駄目だった。已むなく彼女は、懸命に突っ張り返して応戦する。しかし突っ張り合いでは、どうしても毬子夫人の方が不利だった。第一リーチが違う上に、突っ張りの廻転も、相手の方が遥かに早いのだ。しかも彼女には、相手より十センチ以上も背が低いというハンデ

イキヤップがあった。だから長身の弓枝夫人の上突っ張りが、ちょうど毬子夫人の顔の辺りに当るのである。

毬子夫人は懸命に応戦したが、やはり突き負けてずるずると後退し、逆に緋毛氈の外に突き出されてしまった！　だが先程、好造が宣告した通り、これで勝負がついたわけではない。突き倒さなくては本当の勝ちではないのだ。勢いに乗じた弓枝夫人は、長いリーチを利用して、右から左、左から、右と、めまぐるしく両手を廻転させながら、相手の顔と言わず胸と言わず、それこそ目茶苦茶に突っ張った！　左からの一発が顔面に当たり、続いて、右から力まかせに繰り出した一発が胸に炸裂した！　忽ち、毬子夫人の顔が苦痛に歪む。急所の乳房を強打された彼女は、その凄まじい衝撃に一瞬、気が遠くなりかけた。いつもだったら恐らく一たまりもなく突き倒されていただろう。だが今日の毬子夫人は、歯を喰いしばってその激痛に耐えたのだ！　恐るべき女の執念である。

だが弓枝夫人は、情容赦なく猛突っ張りを浴びせながら、なおも迫った！　毬子夫人は両腕で自分の乳房を庇うようにして相手の突っ張りを防ぎながら、何とかして組みつこう

と、頭を下げて出ようとする！　と……この時、弓枝夫人は咄嗟に体を開き、強烈な叩き込みを見せた！　毬子夫人は思わず上体が前にのめって、危うく地面に手をつきそうになったが、懸命に足を送って辛うじてこれを残す！　弓枝夫人は、再び激しく突っ張った！　そして突っ張りながら、二度、三度と強引に叩き込もうとしたが、その都度、毬子夫人は柔らかい足腰で、よくこれを残す！　だが弓枝夫人は、なおも攻撃の手を緩めず、毬子夫人を徹頭徹尾、突きまくり、そして執拗に叩いて廻った！　しかし、それでも、なお決まらない。ようやく弓枝夫人の顔に、疲れとともに焦りの色が出てきた。

だが、四つ相撲を得意とする相手に組みつかれたら不利なことは、火を見るよりも明らかである。やはり徹底的に突っ張る以外、手が無いのだ。弓枝夫人は、最後の力を振り絞って、ここを先途と必死に突っ張った！

一方、毬子夫人も、何時までも逃げ廻ってばかりいるわけには、いかなかった。彼女は敢然として突っ張り返して反撃した。リーチと突っ張りのスピードでは、なお相手に及ばなかったが、一発の威力は勝っていた。何しろ相手より力が強いのだ。太った毬子夫人の

突っ張りを肩口に喰らった長身の弓枝夫人は思わずヨロヨロと、よろめいた程である。

思い掛けない相手の反撃にカッとなった弓枝夫人は、我を忘れて目茶苦茶に突っ張って出る！　だが完全に足が流れており、手先だけの突っ張りに過ぎなかった。これを、敏捷な毬子夫人が見逃す筈がない。彼女は、突っ張ってくる相手の左手首を掴むや、咄嗟に右に体を開いて強引なとつたりを打った！　忽ち、弓枝夫人の長身がグラッと大きく前に傾いた！　これを見て好造は、一瞬ハッと息を呑んだが、倒れかけながらも弓枝夫人は、それこそ藁をも掴む思いで、懸命に右手で相手の右の太腿を掴み、必死に左足を送って辛うじてこれを残した！

とつたりが極まらないとみるや毬子夫人は素早く体勢を立て直して次の攻撃に移った。彼女は、相手の首を巻くや否や、すかさず右から首投げを打つ！　弓枝夫人は咄嗟に首を縮めて相手に空を切らせようとしたが及ばずヨロヨロと倒れかけた。だが彼女は、右手で相手の右膝を払い、足を送って辛うじてこれを残す！

しかし、こうなると毬子夫人の独壇場だった。彼女は、相手から首を抜かれないように

右腕の中に充分、巻き込み、相手の右腕も左上から強く抱え込んで、その動きを殺すや腰を捻って、首投げで激しく攻めたてた！

もはや弓枝夫人は、長身を折り曲げるようにして相手の太い腰に抱きつき、その投げを耐えるのが精一杯だった。勢いに乗じた毬子夫人は、弓枝夫人を引きずり廻すようにして二回、三回と首投げを連発し、彼女が懸命に耐えるのも構わず、今度は、自分の太い右脚を彼女の長い左脚に絡ませるや、強引な首投げを放つ！　そして、なおも弓枝夫人が必死に耐えようとするところ、毬子夫人は、両腕で弓枝夫人の首を抱え込み、右脚を大きく飛ばして彼女の右脚に掛け、二丁投げ気味の強引な首投げを打てば、さすがの弓枝夫人も遂にたまらず、その長身が弧を描くように、宙に一廻転し、次の瞬間、地響き立ててドッと投げ倒されたのである。

勢い余った毬子夫人も、弓枝夫人の首を右腕に抱えたまま折り重なって倒れた。

『首投げ！　毬子の勝ちっ！』

興奮した好造は、絶叫しながら二人の傍に駆け寄った。

だが、彼女たちの倒れた場所が悪かった。皮肉にも桜の木の根元だったのである。

“ウーン！”

倒れたハズミに後頭部をシタタカ強打した弓枝夫人は、脳震盪を起こして気を失ってしまったのである。

間もなく息を吹き返したものの、その日の勝負は四勝五敗で彼女の負け。ついにその夜の“妻の座”は、毬子夫人に奪われてしまう結果に終わった。

こうして彼女たちは、毎日のようにハレンチな女相撲を強制され、生傷の絶えることはなかったのである。

(十)

だんだん気温が上り、肌が汗ばんでくる頃になると、好造にはもう一つの愉しみが殖えてきた。それは、夫人たちの体臭を嗅ぐことだった。

もともと女性の身体は、その人によって多少の違いこそあれ、それぞれ何らかのにおいを持っているものだが、弓枝夫人と毬子夫人の場合は特に、ひどかった。それも、彼女たちの身体は、お互いに違った強烈なおいを持っていたのだ。

長身の弓枝夫人は脂足であり、肥軀の毬子夫人は腋臭だった。しかも、人並み外れた、

ひどいものだった。気温が高くなるにつれ、彼女たちの足の裏と腋の下は、いよいよ強烈なおいを発散して、好造の嗅覚を愉しませてくれるのである。好造は、弓枝夫人の足の裏に鼻をつけては、その蒸れた臭いにおいて陶酔し、毬子夫人の腋の下、の強烈なおいに痺れた。好造は、夫人たちに相撲を取らせるくらいだから、もともと変態的な男ではあったが、彼女たちの足の裏や腋の下を異常なまでに愛するに至っては、もはや完全に変態性の持ち主だと言いうことが出来た。

つまり好造は、サディストであり、女斗美マニアであると共に、フェチストでもあったわけである。好造は、夫人たちに相撲を取らせたり、彼女たちの足の裏や腋の下を嗅ぐことによって、自分の欲情をあふり立てていたのだった。最初の頃は、足の裏や腋の下を嗅いだりする好造に、ひどい嫌悪感を抱いていた彼女たちも、それが彼に愛してもらええる条件の一つと知った今では、好造から足の裏や腋の下を摸られたりすることを却って喜ぶようになっただのだ。だから、普通の女性なら自分が脂足や腋臭だったら恥かしくて、それをひどく気にするのだが、彼女たちの場合は、寧ろ、自分のにおいに自信めいたものさえ持

っていた。しかし彼女たちも、相手のにおいに対しては極端な嫌悪感を抱いていた。それが皮肉にも、彼女たちが最後の決斗にレスリングをやらされることになった時、お互いに相手の悪臭を散々嗅がされることになるのである。

好造は、弓枝夫人の脂足に最高のにおいを発散させるべく、彼女に足の裏を精一杯むれさせるようにしていた。例えば、弓枝夫人にだけは、吸湿性や通気性の悪いナイロン・ストッキングしか履かせなかった。しかも、それがどんなに汚れても、洗濯したり、新しいのと取り替えたりするのを絶対、許さなかった。つまり彼女は、同じストッキングを伝染したり穴があいたりして使えなくなるまでずっと続けて履いていなければならないのだ。また好造は、真夏でも弓枝夫人にストッキングを脱がせないばかりか、わざわざナイロンストッキングの上に、さらにもう一足、真冬によく使用する毛糸で編んだカバーまで履かせる始末だった。これには、さすがの弓枝夫人も、すっかり音を上げてしまった。

だが、レインシューズや運動靴などは、わざと素足のまま履かせていた。これは素足で履いたほうが足の裏が汚れやすいからだ。

中でも、好造が特に好んで弓枝夫人に履かせていたのは、ゴム製のズックだった。

これは総てゴムで出来ているため、通気性が全然ないので、足を蒸らすのには最も効果があり、脂足の弓枝夫人に履かせるのには正にうってつけの靴だったのである。この十文半の大きなズックは、弓枝夫人がいつも素足のまま履いているため、ひどく汚れており、中底には彼女の細長い足形がクッキリと記されていた。手を入れて指先で触ると、汗と脂でドロドロしていて気持が悪かった。また、鼻を近づけてみると、脂足特有の蒸れた臭いにおいがムツと鼻をつき、普通の人間だったら、それこそ嘔吐したくなるような悪臭を放っていた。しかし好造にとっては、まさに価値千金の素晴らしいにおいだったのである。

また好造は、どんなに真夏でも弓枝夫人にだけ、彼女が風呂に入る時以外は、足の裏を絶対に拭かせなかった。これは脂足の弓枝夫人にとっては大変な苦痛だった。

真夏の暑い日に外出から帰った時など一刻も早く汚れたストッキングを脱ぎ捨てて蒸れた足の裏を拭いてサッパリしたいところだが彼女にはそれさえ許されないのだ。汗と脂で蒸れ放題の臭い足においては、いくら自分

の足とは言え、鼻をつまみたくなることがあった。こんな時の弓枝夫人は、自分の脂足がつくづく恨めしくてならなかった。

だが好造にとっては、何よりのお土産だった。弓枝夫人が帰って来るのを胸躍らせて待っていた好造は、彼女がストッキングを脱ぐのももどかしく、彼女の足の裏にムシャぶりついた。好造は、弓枝夫人の十文半の大きな足を押し戴くようにして、汗と脂で蒸れ放題に蒸れた臭いにおいを、鼻腔をひらいて思いつきり嗅ぎまくる。それは、彼にとって、高級なチョコレートの香りにも似た、まったく素晴らしいにおいだったのである。

好造は、その芳香を充分、満喫したところで、今度はその美味を嘗味するのだ。まず、足指から嘗めはじめる。好造は、弓枝夫人の細長い足指を口に入れて、一本一本、丁寧にしゃぶってやるのだ。足指の股も丹念に嘗めてやった。この部分は、足の裏で最も汚れやすく、また一番臭くなる所である。しかし、汗と脂でドロドロした塩辛い味も、好造にとっては、山海の珍味にも勝る素晴らしい味だった。

こうして好造は、弓枝夫人の十文半の細長い足の裏を、足指から順々に、土踏まず、足

の踵まで、ペロペロ嘗め廻すのだった。そして全体を嘗め尽す頃は、さしも赤黒く汚れていた彼女の足の裏も、すっかり汚れが拭い去られて、綺麗なピンク色になっているのである。

最初の頃は弓枝夫人も、こんな好造の変態的な行為にゾツとするような嫌悪感を覚え、彼を軽蔑しきっていたのだが、毎日毎日好造から足の裏を嘗められている内に、いつの間にか不思議な官能の疼きを覚えるようになったのである。

もともと女性の身体には、至る所に性感帯があるとされているが、足の裏もその一つなのだ。弓枝夫人の場合は、好造の舌先の魔術によって、足の裏の性感帯が特に鋭敏な反応を示すようになったのである。

弓枝夫人は、だんだんに、好造に足の裏を嘗めさせるのは、肉体的な快楽であると同時に、心理的にも秘かな愉悅を感じるようになっていった。と言うのは、日頃、毬子夫人と相撲を取らされるなど、好造の変態的な欲望に虐げられていた彼女にとって、この僅かな間だけでも優越感を回復することが出来るからである。事実、長身の弓枝夫人の足元に跪き、彼女の足の裏を嘗める好造の姿は、まさに女王

に奉仕する奴隷の姿だった。

だが、好造がマゾになるのは、弓枝夫人の足の裏を嘗めている間だけだった。嘗め終ると、忽ち、いつものサディスティックな彼に戻るのだ。

すなわち、足の裏を嘗められた弓枝夫人が身悶えはじめると、好造自身も彼女の脂足のおいに酔い痴れて、真っ昼間だろうが何だろうがお構いなしに弓枝夫人に挑み掛かるのである。そして、その行動は、また極めて加虐的だった。好造は、自分より背の高い弓枝夫人を押えつけ、彼女の首をグイグイ締め上げ、汚れたストッキングで彼女の口や鼻を塞いで散々苦しめながら、自分自身もその臭いにおいを一緒に嗅いで、欲望を満たすのだった。

このように好造は、弓枝夫人に対してはサディスティックに振舞っていたが、毬子夫人に対しては、まったく逆だった。例えば、彼女の腋臭のにおいを嗅ぐ時でも、ちょうどレスリングのヘッド・ロックのように、自分の頭を毬子夫人の腕の中に抱え込ませて、グイグイ締めつけてくれるように頼み、その臭いにおいをクンクン嗅いで、喜んでいた。そんな時の彼は、床についても女性上位時代をその

まま、地で行っていた。つまり好造は、自分よりも遥かに体重の重い毬子夫人に、わざと組み敷かれ、自分の首を彼女に太い腕で巻かせてグイグイ締めさせ、彼女の六三キロの重圧に押し潰されて散々苦しめられることによって、快楽に浸っていたのである。もっともこの方法は毬子夫人には余り欲ばれないようではあったが……。

以上のように好造は、サドとマゾ、それにフ・エチの入り混った、極めて変態性の強い男だったのである。

(十一)

日常生活においても、好造は夫人たちに変な事ばかりさせていたが、廊下の拭き掃除もその代表的なものだった。

この宏大な屋敷に住んでいるのは、好造と弓枝夫人と毬子夫人の三人だけだったので、炊事、洗濯、掃除の家事一切に関しては、どうしても彼女たちがやらなければならなかった。好造は、その役目も当然のように彼女たちの毎日の相撲の勝負によって決めていた。つまり彼女たちは、相手に勝ちさえすれば、相手に家事一切をやらせておいて、自分は何もせずに悠々としていられるのである。

ただし、廊下の拭き掃除だけは別で、これだけは勝負に関係なく、毎日、彼女たち二人にさせていたのだ。それがまた、好造の楽しみでもあったわけである。

一口に廊下の拭き掃除と言っても、同じよそこの家の場合とは違う。宏大な屋敷なので、その廊下もべらぼうに長いのだ。この長い廊下を拭き掃除させられるのは彼女たちにとって、かなりの重労働だった。しかも横に並んでスピード競争させられるのである。

今さら言うまでもなく、好造は、彼女たちの雑巾掛けをするポーズを見て楽しんでいたので。彼女たちがお尻を振り振り長い廊下を雑巾掛けする姿は、好色な彼を喜ばせた。

殊に弓枝夫人の場合、長身の彼女が四つん這いになって、大きなお尻をムクムクさせながら雑巾掛けをするポーズは、彼女が相撲の肩透しで敗けた時のポーズと同じく、好造には、たまらない魅力となって映るのである。

また好造は、彼女たちの足の裏を見るのが楽しみだった。好造は、彼女たちが雑巾掛けを始める前に、先ずスタートの位置に並ばせる。そして彼女たちに両手と両膝をつかせ、踵を立てさせて、四つん這いのポーズをとらせる。こうすれば彼女たちの足の裏が、はっ

きり見えるからだ。こうしておいてから好造は、彼女たちの背後に廻り、彼女たちの足の裏を具さに観察するのである。

後ろから見ると、彼女たちの足の裏の型の相違が一目瞭然だった。長身の弓枝夫人の足の裏は細長く、肥軀の毬子夫人の足の裏はズングリとして短かった。何しろ、十文半と九文半だから、その長さの違いがハッキリしている。と共に横幅の違いも一目で分かった。

だがそれにもまして著しい違いは、彼女たちの足の裏の汚れ具合だった。毬子夫人の方は大して汚れてもいないのに比べ、脂足の弓枝夫人の方は実にひどかった。彼女の細長い足の裏は、汗と脂と埃でベツトリと赤黒く汚れているのだ。それこそ好造が思わずシャぶりつきたくなるような全く素晴らしい色をしていた。こうして好造は、彼女たちが羞かしがってモジモジするのも構わず、その足の裏を飽きもせず何時までも眺めて楽しむのである……。

彼女たちが雑巾掛けすると足の裏が濡れるので、その足型が廊下にクッキリとつく。好造は、それを見比べるのもまた楽しみの一つだった。弓枝夫人の足型は、足の外側が小指から踵まで真直ぐに伸びており、土踏まずの

部分も深く、くびれていた。細長いスマートな足型だったが、彼女の性格そのまま、何かしら取り澄ました感じを受けるのである。

一方、毬子夫人の足型は横に広くポツテリとした感じで、土踏まずの窪みも少なく、どちらかと言えば扁平足に近かったが、短い足指が、ちょうど豆を並べたようで、とても可愛かった。好造は自分も、わざわざ素足になって彼女たちの足型の上に乗せて見るのだが、彼は男のクセに足が小さいので弓枝夫人の大きな足型の中にスッポリ入ってしまう。

横幅は、まあまあだが、縦は、足指の付け根のあたりまでしかなかった。毬子夫人の場合も同様で、長さは好造の方が幾分か長かったが、横は、うんとハミ出しているのだ。

また好造は、彼女たちの足型を見比べるだけではなく、彼女たちに実際に足の大きさを比べさせた。先ず、お互いの足を並べさせ、それを上から眺めて見比べた後、今度は、彼女たちに足の裏同士をピッタリと合わせさせる。こうしておいて好造は、手に取って綿密に見比べるのである。

顔を近づけただけで、プーンと臭いにおいが鼻をつく。言わずと知れた弓枝夫人の足のおいである。足の裏の長さは、弓枝夫人の

方が遙かに長く、彼女の足指の部分は完全に縦に、はみ出ている。だが足の裏の横幅は、逆に毬子夫人の方が、うんと広く、ちょうど彼女の小指の分だけ横に、はみ出していた。

好造の検査があまり長引くと、片脚だけで立たされている毬子夫人は、ついよろめいて思わず弓枝夫人の肩に掴まりそうになることがあった。そんな時、弓枝夫人は邪慳に、その手を払い除けるのである。もっとも、憎しみ合っている仲なので無理もなかった。毬子夫人としても、こんな事をするのは本当は嫌だった。脂足の弓枝夫人の足の裏はベトドトしていて、実に気持が悪いからだ。だから、それが済むと、直ちに自分の足の裏を雑巾でゴシゴシ拭うのだった。それを弓枝夫人は悔しそうに唇を噛んで眺めていたが、彼女には足の裏を拭くことは許されていないのだ。だから濡れた足の裏に、さらに埃がくっついてますます汚れるのである……。

また好造は、彼女たちの足占いも、よくやっていた。彼は、足占いの大家だと自慢するだけあって、その道にかけては、なかなか委しかった。足相など、その典型的なもので、好造が特に好んでやっていた占いだ。彼は、彼女たちを畳の上に腹這いにさせて、わ

ざわざ天眼鏡まで使って調べていたのだ。

好造先生に言わせると、まず弓枝夫人の場合、彼女の細長い足の裏は、足の外側が踵まで真直に伸びており、土踏まずの部分が深くくびれている。そして、土踏まずの内側から太いスジが一本出ており、足の裏の真ん中に花模様のようなスジがあった。これは彼女が社交性に富み、派手好きな女である証拠だそう。また毬子夫人の場合、彼女の巾広い足の裏は、土踏まずの部分の括れが少なく、どちらかと言えば扁平足に近かった。そして踵の内側から太いスジが一本出ており、足の裏の中央に小さな丸い輪のようなスジがあった。これは、彼女の円満な忍耐強い性格を、よく物語っているようだ。

また足指だが、弓枝夫人の方は全体的に細長く、しかも第二趾が親指よりも長いのが特徴だった。一方、毬子夫人の方は総体的に短く、特に親指は丸っこくって太かった。これなども彼女たちの性格の相違を、よく表わしているそうである。また足指は、健康状態もよく分かるそうで、弓枝夫人の場合、親指が上に反り返っており、第二趾がマムシの首のようにふくらんでいるのは、彼女が胃腸や肝臓が弱い証拠だそう。また毬子夫人の場合

親指が充実しているの、食欲旺盛で健康な証拠だそうだが、唯、便秘になりやすいタチだそうである。

最後に脚線についてだが、これはセックスの強弱を判断する上で、好造にとっては重大な問題だった。まず弓枝夫人だが、彼女の脚はすらりと長くスマートではあったが、ふくら脛に肉が少なくあまりにも細過ぎるので、その場合にスタミナに欠ける憾みがあり、また毬子夫人の足は大根脚なので、恰好は悪いが非常に強い。だが、不器用なので単調過ぎるさらいがある……等々。何から何まで、すべてピタリと的中している。さすがに好造は足の専門家だけあって、まったく恐れ入った観察力だった。

(十二)

好造は、彼女たちが生理の間だけは、さすがに相撲を休むのを許していたが、その代り彼女たちに腕相撲や足相撲をやらせていた。いつも何かをやらせていないと頭の芯が疼くのである。

腕相撲は、毬子夫人の方が圧倒的に強かった。弓枝夫人も顔を真赤にして、その細い腕で必死に頑張るが、やはり最後には毬子夫人

の太い腕に押し伏せられてしまうのだった。だが足相撲の方は、逆に弓枝夫人の方が強かった。彼女の方が脚が長いせいでもあるが、足相撲はお互いに足を相手の鼻先に突きつけるようにして斗うので、毬子夫人は相手の臭い足の匂いに閉口して、わざと負けていたのかも知れなかったが……。

このほか好造は、日常のちょっとした動作でも、彼女たちに変わった事ばかりさせていた。例えば、わざと高い所に品物を置いて、彼女たちに取らせるのだ。それも、背の高い弓枝夫人が背伸びしてさえも、手の届かないような高い場所にある。そして、それを取るのに踏み台は絶対に使わせない。だから彼女たちのどちらかが、踏み台の代りにならねばならなかった。実はこれが好造の本当の目的だったのである。

そしてその踏み台の役目は、いつも背の高い弓枝夫人がやらされていた。四つん這いになって、背中に毬子夫人を乗せるのだが、何しろ相手が六三キロの体重の持ち主だからたまったものではない。弓枝夫人の細い身体は忽ちペシャンコに潰れてしまうのだ。

止むなく彼女は、毬子夫人を背負ってその品物を取らせていたが、これさえ楽な仕事で

はなかった。よほど両足を踏ん張っていないと腰が砕けてしまうのだ。

また時には、好造自身も加わって彼女たちと遊ぶことがあった。これは蹴り馬、または暴れ馬と言って、昔、子供達が寒い時によくやっていた遊びである。二人が組になり、馬子になった方が、相手の頭を抱え込み、掌で眼覆しをする。馬になった方は腰を折り曲げて、両手で相手の腰に抱きついて構える。こうしておいてから、乗り手になったもう一人が、二人の隙を見て馬になった方の背中に飛び乗るわけである。それを乗せまいとして、馬子になった方は、眼の見えない相手を誘導して相手に両足で盛んに蹴らせながら、部屋の中をグルグル廻るのだ。もし乗り手が蹴られたら、代って馬にならねばならないのである。

だが好造は、いつも乗るばかりで、蹴られても絶対馬にはならない。だから彼女たちは交代で馬の役目をしなければならなかった。

毬子夫人の場合は腰が強いので好造に飛び乗られてもビクとしなかったが、弓枝夫人の方はそうはいかなかった。もともと腰の弱い彼女は、飛び乗られるとモロくも潰れてしまうのである。そしてこの時は、三人共一緒に

折り重なって倒れるが、好造にはこれがまた面白くてたまらない様子だった。しかも、その馬は、ちょうどレスリングでヘッド・ロックで締められているのにソックリだから、好造が喜ぶのも当然だった。

また弓枝夫人が足で蹴って防ごうとする姿は、アフリカのライオンとシマ馬の話を連想させて、好造をよりサディスティックな気分にし立てた。か弱いシマ馬は、ライオンに襲われると、仲間同士で円陣を作り後脚で蹴って必死に防ぐのだ……。

好造は、弓枝夫人の必死の抵抗を突破して飛び乗るのに、たまらない快感を覚えるのだった。だがその反面、彼女の汚れた大きな足で蹴られるのも、また別の意味で快感があった。だから好造は、わざと弓枝夫人に蹴られるようにしていたが、或る時、あまりにも調子に乗り過ぎて彼女にイヤと言うほど急所を蹴り上げられ、泡を吹いてヒックリ返ったのは傑作だった。まさに天罰テキ面だった。

こうして弓枝夫人と毬子夫人は、来る日も来る日も好造からハレンチな生活を強いられていたが、遂に彼女たちも人間性に目覚める時がやって来たのである。

その頃は雨の日が続いていた。好造は或る

日、とんでもない事を夫人たちに命じたのである。雨の降っている庭で、水着一枚でレスリングをやれと言うのだ。これは、雪の日の相撲よりもまだ残酷極まる命令だった。泣く泣く彼女たちは、ドシャ降りの雨の中でレスリングをやらされたが、文字通り泥試合で顔も身体も、泥んこになって組討ちしたのだが、惨状たるや正に眼を覆わしむるものがあった。

この事があって以来、さすがの彼女たちも遂に反旗を翻したのである。

『わたくし達、もうこれ以上こんな生活を続けることは出来ません。どっちなハッキリさせて下さい。このままでは、貴男とお別れするほかございませんわ……』

長い間、好造に虐げられてきた彼女たちの精一杯の抵抗だった。好造にはまさに青天の霹靂だった。彼にしてみれば、ここでどちらに去られても困るのだ。

女斗美には絶対に二人の妻が必要なのである。

慌てた好造は、懸命に説得してみたが、彼女たちの決意は意外に固かった。

十一月号フォト寸感

想像の楽しさ

矢 吹 弾



十一月号を飾っている女性は、村田キヨ子、松山真樹子、中河恵子、関谷富佐子と、いずれ劣らぬ美女揃い。顔もいいが、それに劣らず、みんなからだもいい。中河恵子は折角の登場だが、妊婦はぼくの好みではないからおくとして、関谷富佐子はさすがにベテランだけあって、どの写真もぼくの血をカッカとさせてくれる。ひきしまった、ポリウレムのある肉体は何度、眺めてもあきない。

その見事なからだを惜しげもなくカメラにさらして、ところかまわぬ鞭の乱打に、豊満な女体はのけぞり、伏し、よじれる。両手首を背中で揃えて縛られた富佐子が、開いた足首をそれぞれ固定されて、こちらに背をむけているフォト。女ざかりの、むっちりしたポリウレムが鞭の洗礼を待ちうけている。肩までおおう豊かな黒髪が、黒と白のコントラストを強調する。

写真では、もちろんうかがい知ることができないけれども、これだけ豊かな黒髪の持主である富佐子が剃毛を……と聞くと、ぼくは異常に興味をそそられる。ぼくは、以前からこのことに特別な関心をもっているのだが、それは、その状態もさることながら、それに至る過程を想像することにサディスティック

な興奮をおぼえるからである。富佐子はどんな姿勢を強制されたのだろう、と考えることはS男性にとって実に楽しいことである。その時、富佐子は、それが女としてどんなに恥ずかしいポーズであろうと、そのポーズを崩すことは許されないのである。そして富佐子は、涙をのんでただこらえているほかはないのだ。そのようにして富佐子は完全に男の下に屈服する。男の命ずるままに動く一個の奴隷となったことを思い知らされるのである。

次なるフォト——後手縛りはそのままに両足首を別々に縛った縄で吊り上げると、うつ伏せの女体は豊かな乳房を畳に押しつけて下半身が吊りあげられ、肉付きのいい双丘が鞭打ちに格好の姿でさらされる。このポーズで鞭の乱打を浴びた女体は、やがてたえきれずにうつ伏せの姿勢から、からだをよじるようにして仰向けになろうとする。畳に押しつけられていた豊かな双の乳房が、天井を向いてさらされると、そこへも鞭は容赦なく浴びせられる。

こうしてふくよかな女体のあらゆるところに革鞭の乱打をあびせられながら富佐子がみせる悦虐の表情がこれまたすばらしい。ぼくには、苦痛にゆがむ表情とみえるなかに、し

かし陶酔と恍惚のかげが明らかに見取れるのである。

関谷富佐子が女盛りのヴェテランの味をいかななく発揮してみせたとすれば、村田キヨ子、松山真樹子の二人には、若々しさとみずみずしさがある。しかも二人ともそろってなかなかの美人だし、よく発達した肉体の持主である。

だが、真樹子の緊縛はあまりにも平凡であって、いささか拍子抜けである。若さで、はち切れそうなピチピチした女体は、もっと激しく責め抜いてやらねばならない。それに、真樹子はどのフォトでも、つんとすましたようなポーカーフェイスであって、SMフォトとしては興ざめである。

そこへいくと、キヨ子の方は、縛り方といい、ポーズといい、表情といい、申し分がない。Mの素質十分とみてとった。最初の、乳房の上下を二巻きしての高手小手という簡単な縛りにおいてさえ、被虐の雰囲気は濃厚にかもしだされている。それは縛られた女体の全体が微妙な表情をみせていることによっている。

表情というのは顔だけではない、からだ全体だということを、キヨ子は身をもって示し

ているといえる。その縛りのまま、仰向けに寝かされたキヨ子のフォトは、残念ながら下半身がカットされているが、ぼくは、からだが震えてくるほどである。この号を読んで、ぼくは、辻村氏に羨望を覚えないわけにはいかなかった。

そして、とうていその場に立ち合うことのかなわぬ一S男性として、願わくば、せめてこのフォトのカットされていないものでもじっくりと見る事ができれば、と思わずにはいられない。

それはともかくカットされているとはいえ辻村氏の記述と合わせ見ると、わがS性を十分満足させてくれる出来である。キヨ子の横にそむけた顔の表情は、羞恥に必死に耐えている乙女のものである。キヨ子のからだにあるのは乳房の上下を縛っている白いロープだけであるが、この白いロープの効果もなかなかいい。乳房を縛られているだけで、もうどうすることもできないという感じをうまく出している。右乳房の上にかかっているロープが乳首のすぐそばを通って、ちよっとくびれたようになっているところなどもなかなか演出だと感心した。

そして、もしぼくがこの場にいたとすれば

これだけでは決して許すことはせずに、恥ずかしさで狂わんばかりにもっともっと責めてやりたいと思う。責めると言っても、この場合は「ことば」を使うのが一番いい方法だと思う。キヨ子のからだには指一本ふれずに、「ことば」だけを使って、キヨ子の聞くにたえないような批評を述べ立てるのである。徹底的に、これ以上はないというような露骨なことばで。それを聞いたキヨ子は恥ずかしさでからだ中を赤くして、首を激しくふって、「ことば」から逃れ様とするにちがいない。しかし両手は背中で縛められていて耳をふさぎたくてもふさぐことはできないのである。——この想像は、ぼくをかなり満足させてくれる。

このキヨ子という女は、また、臀部が異常に発達していて、次の、うつ伏せのポーズのフォトでみると、その肉付きのいい厚みは、並みの乙女のものとは思えない。ぼくには、それは、辻村氏が言うように、鞭の洗礼による飼育の成果であるにちがいないと思われるのである。

キヨ子というかっこうのM女性を得て、辻村氏の見事なロープさばきがいかななく発揮されているのがその次のフォトである。

首縄をかけ、両の乳房はしぼり出されたようにポックリととび出してくる。この腕を強くしめつけて後手に縛りあげ、さらに、別の縄でウエストをくびれるぐらいに巻き、それに白いロープを結んで縦に通して、後手につながつている。

このフォトも残念ながら臍から下がカットされているがため、縦縄の具合などはいかかえないが、それにしても、このフォトは全く見事な出来である。ぼくの大好きな乳房強調縛りと股間縛りが両方同時に行なわれているというだけでも、ぼくにとっては大収穫である。

るのに、キヨ子のからだ、なかでもオッパイが何とも言えずいいし、顔の表情がこれまた素晴らしいときは、もうこれ以上、言うことなしである。

このポーズを側面から撮ったフォトもまた実にいい。

強い縄にしぼり出されてとび出した乳房はまるで別の生き物のようであり、顔をカメラの方に向けて目を閉じた表情には、これから始まる責めを、あきらめ待つ感じが実によく出ている。

それに前面から撮ったフォトにおいても、

キヨ子は同じ表情をみせている。まだあどけなさが残っている可憐な表情がたまらなくいい。ぼくには、このひしひしと縄がけされ、観念しきっている女体に対して、ありとあらゆる責めを空想して楽しむことができるのである。

だが、なんといっても、十一月での圧巻はこれにつづくフォトである。

縦縄がはずされ、キヨ子のからだは仰向けに寝かされる。そして両膝を折り曲げて腿と脛をたばねるように縛り、この腕の縄につながとめる。

こうして出来上がった構図は、S男性たるべくにとって、それこそ涎がたれそうなものである。

辻村氏はその構図を、キヨ子の足許に立つて上から見下ろすようにして撮られている。顔をのけぞらせているので表情はみえないが女として、これにまさる羞恥のポーズがあるだろうか。

このフォトを前にしては、もう何も言うことはない。ただぼくとしては、この女体に対して、あくことのない空想の責めを楽しめばいいのである。

カットII あらい・かず

☆奇クサロン ☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供にしましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

青春の陥穽 (3)

現

れ

た

男

芳　野　眉　美

A

男の性欲には終わりがあつた。

が、女の性欲には終わりがない。一日中、
ごろごろしている葉子には、夫の留守中が淋
しいようであつた。

真昼から捕まった勇は、いのように葉子に
罵られていた。

「だらしないねえ」

葉子は、だらしなくぐったりした勇を見降
ろしては、いまいましうに舌打ちした。若

い勇は、中年男を相手にしている葉子の敵で
はない。

「若いくせに」

勇の若さに惹かれながらも、葉子は満足し
ていないようであつた。

「お膳の上に寝てごらん」

いらいらして葉子は勇にいった。燃えさか
った火事が、なかなか消えず、ぶすぶすと、
くすぶっているような感じであつた。

勇をお膳に寝かすと、葉子はお膳の足に勇
の手足を縛りつけた。

勇の頭は、お膳の下にがつくりと垂れ、勇
の両脚は開かれ、無理に屈曲されるという、
かなりきつい姿勢であつた。

勇を荒縄で、お膳の足に縛りながら、

「こうしないと、あたいは燃えないのよ」

と葉子はいった。葉子の口癖らしかった。

勇は、かろうじて頭を上げ、血が頭に下が
るのを、ふせいでいた。こんな場面を、ひよ
っこり帰って来た葉子の夫の三田が見たら、
いったいどういう事件になるのか、考えただ
けでも、おそろしかった。



三田とは顔を合わせているだけに、姦通、いや、こんなショックな責めのシーンを見られたなら、逆上した三田に、いとも簡単に殺されてしまうかもしれない。

縛られているから逃げられない。自由を奪われていると、とんでもない空想が浮かんでくるものらしい。

これは実話だが、ある夫妻に責められた誌友の話で、誌友を縛ったまま夫妻は外出してしまい、その間、その誌友は、今にも火事が起こる不安に絶望したそうである。これも内ゲバで、一種の精神的苦痛を自分から求めているようなものである。

葉子は、裾をはしよると、一生懸命、頭をもたげている勇の顔をまたぎ、髪をつかんで両股で首を締めつけた。

「く、くるしい」

「フフ、締め殺してやろうか」

葉子は、じわじわと、両脚に力を加えてきた。かなりの力であった。

勇は頭をのけぞらせて逃げようとしたが、葉子は勇の髪をはなそうとせず、勇の体は、お膳の上で小山のように盛り上った。

「逃げられるものか」

勇の手足を縛ってあるのだから、抵抗は受

けない。葉子は安心して乱暴が出来る。

「苦しいかい」

勇ののどぼとけが突き出て、ぜいぜいいているのに、葉子は気持良さそうに笑った。

「少し……ゆるめて……」

「だめだよ」

「助けて」

「なさない声をだすんじゃない」

葉子は、なおも勇の首を締め上げていく。勇はこのまま本当に締め殺されるのではないかという恐怖に襲われたのに違いない。顔が醜く、ゆがんでいた。

「あたいに、こうして殺されるのなら本望じゃないのかい」

葉子の口から、盛んに殺すという言葉が吐かれ、遊びだと思ふものの、勇はこわくなった。

両脚で首をはさんでいただけだったのが、少しずつ近づいてきた葉子の両掌が、鼻に触れた。

首を締めたあとは、鼻口を密閉して、勇を窒息させようとする魂胆のようであった。

勇の顔が、すっぽりと包まれて見えなくなった。

「うっ」

勇の頭が、もうれつに動きだした。苦しいのである。死にそうな声を、はりあげた。

勇が頭を振り、顔をのけぞらせ、首をのばしたり、ひっこめたりして、あばればあばれるほど、葉子の顔は恍惚としてきた。

「あばれたければ、どんなにあばれたっていいんだよ。たんと、もがくんだね」

勇は死物ぐるいに顔を振り立て、わずかな指のすき間から空気を盗み吸った。

葉子は、そんな勇のものがき方を楽しそうにくり返させては、面白そうに声をたてた。

急に呼吸が楽になった。勇がほぅと大きく息をついて怖々薄目を開けてみるとギラギラと異常に光る葉子の眼が見降ろしている。

「は、ほどいて下さい」

舌なめずりする葉子は、まさしく牝狼であった。

「ほどいてほしいのかい」

「もうフラフラです」

本心であった。すでに勇の感覚は麻痺しきっていたのである。

「あたいは、まだ堪能してないんだよ」

「そ、そんな……」

あとは声にならなかった。葉子のお尻が、首の骨を折りそうな勢いで落ちてきたからで

ある。

「あうッ」

勇は呻いた。気が遠くなりそうになった。

「だらしないねえ、若いくせに」

葉子は舌打ちした。いったい、どこまで勇をなぶり続ければ気が済むのだろう。

勇の、まえにも増した苦しみが再開され始めた。今度こそ殺される。勇は息苦しさの中で、そう思った。

突然「あっ」と葉子が叫び声をあげ、圧迫が消えた。

「誰か覗いた」

勇の肺に空気と共に驚愕がとび込んだ。

「誰か庭にいるわ」

「えっ」

勇の頭にひらめいたのは、葉子の夫の三田のことであった。個人タクシーであれば、自由な時間に帰宅出来るわけであり、不意に帰って来ても少しもおかしくはない。

「御主人でしょうか」

泣きそうな声で勇は葉子にいった。殺す殺すといわれたことが、本当になりそうな、いやな予感がした。

「まさか」

半信半疑で葉子は庭を見つめていた。人通

りの少ない辺鄙なところであれば、雨戸を完全に閉めているわけではなく、白昼の情事だというのに、平気で雨戸を一枚分、開けたままだったのである。

部屋の障子は閉めてあるが、真中に長方形のガラスがはめこまれてあり、覗こうと思えば庭から覗けるわけであった。

「ダンツクだったら、車の音がするはずよ」

「早く、ほどいて下さい」

「そうね」

すばやく勇の手をほどいたが、

「ちょっと待って。ほどいたら逃げるつもり

じゃないの」

「逃げませんよ」

「信用出来ないわ」

「とにかく、ほどいて下さい」

葉子は勇を、お膳の上に起こしたが、

「だめだめ。やっぱり縛っておくわ。手を、うしろにまわしなさい」

勇の手を背中に握じり、くるくるっと縛ってから、足をお膳の脚から、ほどいた。

「さあ、押入れに入って」

勇の尻をけとばし、布団をだしたあとの、あいている押入れに勇を押し込んだ。

「様子を見てくるから、おとなしくしている

んだよ」

戸を閉めようとして、何を思ったのか、着ていた長襦袢を脱いで勇の頭からすっぽりかぶせると、まるでテルテル坊主をつくるみたいに、ぐるぐる巻きにして勇の頭をピシヤリとたたいた。

素肌に着ていたせいか、長襦袢から葉子の脂粉のまじった強烈な体臭と、男とからみあった汗とが匂って勇を悩ませた。

その男が、もし葉子の夫の三田だったとしたら、どうやって葉子は勇を逃がすつもりなのだろう。

しかし、三田だとしたら、葉子と勇の姦通の現場を見てだまっているはずはない。覗いた男は三田ではないのかもしれない。

いや、三田は奇妙な性癖を持っている。葉子が浮気をしていても、見て見ぬふりをするかもしれない。三田は葉子に惚れている。葉子を怒らせることはしないだろう。葉子もそれを承知で、堂々と自宅で浮気をしているのに違いない。

葉子の体臭と汗の匂いをかきながら、テルテル坊主の勇は、あれこれと考えた。これから自分がどうなることやら、さっぱりわからない。

B

葉子の笑い声がし、聞き慣れぬ若い男の声
が押入れの中の勇の耳にもとどいた。三田で
はなかったらしい。

「ちらかしているけど、おあがりになって」

と、いやに丁寧な葉子の言葉であった。

「お客様のようだから、今日は失礼するよ」

「いや。せっかくいらして下さったのに」

「でも、悪いもの」

「客じゃないのよ。見られたから白状するけど、ちょっとツマんでいたの」

「葉子さんらしいよ」

「ねえ、おあがりになって。このままではおかえし出来ないわ」

三田でなくて勇はほっとしたが、問題は葉子と話をしている男である。

ようやく男が部屋にあがったらしく、居間と台所の間を往復する葉子の足音が、手にとるようにわかった。お茶の仕度でもしているのだろう。

「今日は、まだお掃除もしていないの」

「葉子さんの家らしくていい」

「それ皮肉？」

「いや、本心だ」

「いやだ」

「前のアパートより、まだましだよ」

「恥ずかしいわ」

葉子の前のアパートを知っていると二人の間には、すでに、ただならぬ関係があるのかもしれない。

ふと嫉妬めいて、暗闇で勇は狼狽した。

「いや、あのときは驚いたよ」

男の口は、かなり軽い。長く会っていないなかつたようで、やっと会えたうれしさがにじみでているように受け取れた。

「アパートに遊びに来いというから、昼過ぎなら、いくらなんでも起きているだろうと思つて行ったら、まだ寝ている。女らしくおしとやかに寝ているなら別に驚かないけど、先客がいた。今日もいたけど」

フツツと笑う葉子も楽しそうであった。

「はい、お紅茶、召し上がれ」

「有難う。あのときも二人とも裸だった。先客は、ぼくにこういったよ。選手交代。ぼくの肩をたたいて、またいった。店にでる時間まで、おもりをたのむぜって」

「葉子って、とても、さびしがりやなのよ。」

とても一人じゃいられないの」

「布団のまわりは、先客の忘れ物で一杯だっ

た。まるめられた紙ばかりだ。なんでトイレに捨てないんだろうと思った」

「だって、めんどうなんだもの」

「そこで、ぼくは、どなった」

「どなったわ。葉子、びっくりしてとび起きちゃった」

「おぼえている？」

「ええ、おぼえているわよ。風呂に行つて来いって」

「葉子の体臭なら好きだけど、先客の臭いが残っているのは、いやだものな」

コップが触れ合う音がし、ビールを注ぐ音がした。話はずんで、紅茶からビールになったらしかった。

「今日も、お風呂に行かなければだめ？」

「そんな時間はない」

「なら、主人を気にしているの」

「前のアパートと違うからね」

「お電話下されば、会いに行つたのに」

「御主人が家にいるところに電話しては、まづいんでね。電話ができなかった」

「じゃ、葉子から、お電話するわ」

「そのほうがいい」

急に二人の会話が聞こえなくなった。静かになると、かえって気になりだすから妙であ

った。ビールの音がして、勇は安心した。二人は、まだ飲んでゐる。

「ねえ」

甘えた葉子の声がする。

「いいでしょう」

「選手交代か」

いきなり、お膳が倒れる音が響く、葉子の鼻にかかった声がようやく聞きとれた。二人は抱き合いでもして畳に倒れたのだろう。

「脱いで。服なんてじゃまだわ」

やはり葉子のほうが積極的であつた。

「待ってくれ。今日の先客を、どこにかくしたの」

「押入れよ」

葉子は見られたことを知ったせいか、少しもかくさずに男にしゃべっている。

「押入れ。そこか？」

「ええ」

いきなり押入れの戸が開けられ、男の哄笑が勇の頭の上でした。

「なんて恰好だ」

「うちのスケベオヤジと同じね。葉子にいいめられるのが好きらしいの」

「誰？」

「お隣の学生さん」

「二軒しかないんだから、仲良くしておいたほうが都合がいいものな」

「浮気の口封じといたいのでしょう」

勇は首ねっこのあたりをつかまれて、押入れから引きずりだされた。葉子でなく、見知らぬ男の手らしかった。葉子には感じなかった、屈辱感と羞恥心が、勇を襲った。

葉子にどんな残酷な汚辱にみちた責めを受けても、そこには甘い陶醉があつた。甘美なM的な恍惚があつた。

「床柱にでも縛りつけておこう」

見知らぬ男に縛られるのはいやだったが、勇は声がでなかった。別に猿ぐつわをさされているわけではない。

勇は、ずるずると男に引きずられた。かなり強い力で、勇のかなう相手ではなさそうであつた。

「弘さんも、悪趣味ね」

「葉子さんにしこまれたからね」

弘と呼ばれた若い男は、葉子の長襦袢を頭からかぶせられた勇を、床柱を背にして坐らせ、荒縄で柱にくくりつけた。

「このほうが刺激があつて面白い」

長襦袢の上から勇の顔をまさぐっているのは葉子らしかつた。鼻をつまみ、唇をつまむ

と、いきなり長襦袢が勇の口に押し込まれ、荒縄が口を割って、勇の頭を柱に固定した。

「あわわ」

「これで声がだせないわ。気分がのったときに、あばれられたら、さめちゃうものね」

「おい、テルテル坊主」

と弘が勇の頭をこづいた。

「そこで、おとなしく見て……いや、聞いていろよ」

「あとで、始末をさせてあげるからね」

服を脱ぐ気配がして、葉子と弘は、勇が縛られている前の、敷きっぱなしの布団に横になったようであつた。

畜生。手足が自由だったら、奴の背中にナイフをぐざりと突き通してやる、と勇は心の中で叫んだ。

「あう、あう」

「テルテル坊主が何かいっているぞ」

「妬いているのよ、きつと」

「もっと妬かせるか」

上ずった葉子の声が、連続的に勇の耳に響いた。胸をえぐられるような異様な嫉妬と興奮で勇の頭は混乱した。

夫を相手にしているときや、勇を相手にしているときと、葉子の態度が、まったく違っ

ているように思えた。

葉子にとって、三田も勇も、弘の格下に位置づけられているようであった。

殺してやる。殺してやる。勇は、煮えたぎる憤怒に身体をふるわせた。

C

弘が帰ったのは早かった。それだけ葉子の夫を気にしていたのだろうが、二人だけで会う約束は、かわされたようであった。

ようやく長襦袢がとられ、勇はひやっとした空気に触れて目をしばたいた。長襦袢を口に突っ込まれ、唾液があふれて、べとべとなのと、あごがこわばって、なかなかもとにもどらなかった。

ベビードールの透明なネグリジェを着た葉子が、勇の頬を二、三回、平手打ちして、フツと、ふくみ笑いをした。

葉子の布団は、かなり荒れていた。

短いネグリジェは、かろうじて腰のあたりまであったが、まるで着ていないのと同じであった。

「なによ、そのふくれた顔」

葉子は、また勇の顔をなぐった。

「それじゃ、止めを刺すことにするか」

弘と違って、勇にはかなり乱暴な口調であった。葉子は荒縄で勇の足首を縛ると、両股をさいて、部屋の天井近く、柱に打ちつけてある鉤にひっかけ、後手に縛ったままの勇を半宙吊りにした。

「痛い」

かなり長時間、お膳の脚に縛られたり、長襦袢をかぶされて、ぎりぎり縛られたり、その上、柱を背負わされて固定されたので、感覚はすでになくなっていたものの、柱と柱の間隔が広くて、半宙吊りにされた股が裂けそうで、勇は悲鳴をあげた。

「おや、可愛がってあげるといふのに。いいのかい？」

顔をしかめる勇に、葉子はさも愉快そうにいった。

「股が裂けそうで……」

「こんなことで裂けるものか」

犬のように舌をだし、はあはあと勇は荒い息を吐いた。夜這い、ではないが、葉子の寝室に忍び込んだばかりに、勇はまったくさんざんな目に合っている。

勇の両脚を吊るしておいて、葉子はネグリジェの裾をひるがえした。

「ほら、始末をさせてやるよ」

「うっ」

勇は顔をそむけて呻いた。

「馬鹿、誰が顔をそむけていいといった」
びしゃりと葉子の、てのひらが鳴った。

それでも勇は頑強に顔をそむけ続けた。葉子だけの時なら、それがどんなことでも平気だが、弘という男が出現した直後の今では、どうしても、がまん出来なかった。

「そうかい。いうことが諾けないんだね」

葉子も意地になったらしく、険悪な表情になった。しばらくすると、かたく眼を閉じている勇の顔の真中にべたっと生あたたかい固まりが落ちた。柔らかい固形物であった。

「あ、あっ」

「どうだ。これなら、いやおうなしだろう。」

ざまあみろ、この野良犬め」

葉子には、恋人を侮辱された怒りがあったのかもしれない。

「死んじまえ、ブタめ」

葉子の足の裏が、勇の顔の上のものを踏みつけて、ねじった。

「あうっ……」

本当に死にそうに呻く勇の顔は、もはや顔とは、いえなかった。



—— 苦 痛 と 医 療 ——

まそひすむす・
・てらぶていくす

泉 一 郎

“てらぶていくす”とは治療という形容詞である。医療行為を受けるに際してM傾向ないしはM情意をおこすことを、表題のように仮に私が命名したものである。

元来、医療行為は、診療であれ検査であれこれを受ける側、つまり患者側には、羞恥、疼痛、その他の精神的肉体的苦痛を与えるものが多い。大方の人は、より大きな病気の苦

痛を逃れるにはと思つて医療により苦痛に耐

えるのである。しかし、この苦痛も大きすぎると、医療行為そのものが円滑に行なわれなくなるため、苦痛をやわらげる、ないしは、無くする方法が考えられた。それが麻酔法である。苦痛を大げさに表現する白人と、苦痛

を耐えしのんで、表現しないのを美德とされてきた日本人では、麻酔の程度もかなりの違いがあるようである。欧米、ことに米国では一寸切開して膿を出す位のことにも大げさな

麻酔、場合によっては全身麻酔をするようである。日本では、その位のことには、局所的な麻酔さえしないで我慢させてしまう外科医

もあるくらいである。

余談はさておき、本題はこれらの疼痛、羞恥、恐怖等の苦痛を伴う各種の医療行為を好む、いわゆる『まそひすむす・てらぶていくす』（以下M・Tと略させて頂く）についてのことである。

このM・T者には時にお目にかかるのである。小なる苦痛としては、注射。やや大きくなると胃洗滌。羞恥を曝け出して見られることの好きな人は、もう治りました、明日からは来なくてよろしい、という医師の言葉にもかかわらず、何かと病苦を訴えて、せっせと婦人科の玄関をくぐるそうである。44年一月

号の読者通信に、ある読者の方が、虫垂炎の手術後、尿が出なくなり、導尿を受けた時の感激を綴っておられたが、これなどは、典型的なM・Tであろう。

それならば、毎号一つや二つの記事にお目にかかる浣腸は、代表的なM・Tではないかということになるが、私はマニア諸氏の浣腸プレイはM・Tの中には入れない。何故ならば、M・Tは医療行為による苦痛に悦楽を覚えるものであって、たとえ同等の行為であっても医療外として行なわれるものはM・Tの中に入らないと考える。それは手段の流用にすぎないからである。同じように、注射の痛みに悦楽を覚えるのはM・Tであるが、その悦楽を再び感受しようと、同じような注射器と注射針を手に入れて、自ら、或は、同好の士が集って注射プレイを楽しんでも、それはM・Tとは定義し難い。

そんなことは、どうでもいいじゃないか。現実には病院で受ける注射・浣腸も、プレイとしての注射・浣腸も苦痛は同一ではないか。いちいち、これはM・T。これはM・Tではないということもなかり、とおっしゃる方もきつとあるだろう。しかし、こういう説には同意できない。

痛みは同じ、手段も同じではある。若し、ハーディーの疼痛計で測定すれば、同じような測定値を得るであろう。しかし、行なわれる場、心理的環境、未知への不安と、予定されたプレイとの相違といったようなものは、被虐者の態度や心理、ひいては悦楽への導入に大きな違い（尤も強烈なエクスタシー状態になれば相違はなくなるであろうが医療の場合、そこに達する前に異常状態として中止されるであろう）をもたらす。そして、患者（医療の場合）又は被虐者（プレイの場合）の心理を大きく左右するのは、前者は公然と行なわれるものであり、しかも行なうものは加虐者ではなくて、S・Mとは無関係な医師や看護婦が、職業ないしは義務として行なっているのである。後者は（大てい）秘密裡に、（マニアには失礼かも知れないが）多少のうしろめたさも伴って行なわれ、しかも、プレイであるからには、手加減は当然加えられるわけである。

従って、M・Tの定義について註釈を加えれば、医療行為に伴う、羞恥・疼痛等の精神的および肉体的の苦痛を受けることにより悦楽を感じる。甚しい場合は、それを得るために、病感がないにもかかわらず再々医療を

求め、医療行為の苦痛を受けるために医師を訪れることさえある」と。このように説明すればよくわかりになると思う。つまり彼等はプレイとして「医療行為」を受けるのでは満足しないのであって、医療として「苦痛」を受けたいのである。

次にM・Tの対象となるような医療を二、三あげてみよう。

診察 この場合、診察というのは診療科目によって異なるが、内科の場合、上部衣服を脱いで胸部の聴診や打診を行ない、ついで診察台に横たわらせて腹部の触診・打診・聴診をする。外科の場合は、訴えのある場所だけを診察することが多い。たったこれだけのことがM・Tの対象になるだろうかと思われるが、衣服をとって裸身を医師の前に曝す、後から看護婦も見ているということが充分にM的になるものらしい。婦人科の場合は当然のように、パンティを脱いで診察台に上らなければならぬし、その診察も直接的なことが多い。肛門科の診察を受ける場合も似たようなものである。M・T者は診察の必要なしと思われる時でも、さっさと服を脱いでしまうことが多いようだ。

注射 日本人の注射好きは有名である。だから、注射が好きだからといって、M・T視することも出来ないだろうが、確かに痛い筈の注射をしても喜んで毎日通ってくるのは、M・Tの傾向なきにしもあらずと、感ずる材料にはなりそうである。

気腹 現在では肺結核の治療としては全行なわれてはいないと思うが、十数年前までは気胸と並んで頻繁に行なわれた療法に気腹（正しくは人工気腹術）がある。肺の下部に結核による空洞がある場合に、腹腔内に空気を注入して横隔膜を押し上げて空洞を潰そうという術である。長さ7cmぐらいの太い注気針を、腹壁を通して刺し、空気を五百ccから千ccぐらい送入、これを毎週一回行なうわけである。針先が正確に腹腔の中になければならず、また万が一、血管の中にも入れれば命取りになるわけであるから、その点は技術を要する療法である。腹部被虐マニアにはびつたりするような療法であろう。送気のための針は太くて先はあまり尖っていない。これはあまり尖っていて切れがよいと、腹の中の内臓に簡単に刺さってしまつて危険だからである。そのため、腹部の皮膚を貫く際には相当の抵抗があり、可成りの痛みもある。それで

最初のうちは、針を刺す場所の局所麻酔をするが、何回も繰返すうちに麻酔の際の針の痛さと大して変わりが無いとわかり、麻酔なしでということになってしまふ。勇敢な人は、最初から麻酔なしで針を刺す場合もある。

外科的手術 考えようによっては、これこそS・Mの極致ともいえるかもしれない。尊い命を助けようと全力を集中している外科医からは不謹慎と叱られるだろうが、体を切り開き、血を流し、内臓をつかみ出し、えぐり取るのは、プレイとしてはどうてい出来ないことである。それだけに、M・T者にとっては、最高の喜びかも知れない。しかし、こればかりは、そうそう仮病をつかつて治療を求めるわけにもいかない。もっとも、まれではあるが、開腹手術を受けた後で、手術願望がこうじて、腹部の腫瘍を訴えた人があるという。丁度、妊娠願望のあまり想像妊娠という状態になる人があり、実際に生理もなくなり腹部が膨隆してくるが、それに似た現象ともいえるだろう。しかし、このような場合、精密に検査すればわかることだから、外科医は手術をしない。M・T氏には残念ながら、ただの願望だけでは、手術を受ける快感は味わえないわけである。

浣腸・洗腸 浣腸は、乳幼児の発熱の際等に、各家庭でも行なわれ、医院・病院でなければできない、という処置ではなくなっている。成人でも、便秘の際に自分で浣腸を行なう人は、いくらでもある。浣腸は排便を目的としているが、洗腸は大腸を洗滌するのを目的としているので、注腸するものと、量が異なる。微温湯を二千CC程浣腸しては排出しこれを三回ぐらい繰返すのである。腸の手術前、後にのべる大腸のレントゲン検査の前処置として行なわれる。しばしば、浣腸マニアの記事に二千C・C・のイルリガートルで浣腸プレイをするというようなことを書かれてあるが、正しくは注腸プレイというべきであろう。なお、参考までに記してみると、どんなと注腸し、小腸までふくれあがつて大蛇がのたうつように、腹の中で動きまわるといふようなことを読んだ覚えがあるが、これは医学的にどうかと思う。小腸大腸の境界には回盲結腸弁という一方通行のバルブがあり、大腸から小腸側へは逆流しないようになってゐる。もちろん、非常な高圧をかければ逆流せぬでもないが、そのようなことをすれば後が大変である。大腸内の大腸菌を小腸へ押しこむことになり、激しい腸炎の病状をおこす

であろう。また機能的には人工的にイレウス（腸閉塞）を起こさせることになり、その苦しみは、いかにマニアでも我慢できるものではないと思われる。したがって、このような記事はフィクションとしてはマニアの血をわかせるであろうが、プレイとして実行されるには非常に危険であると申しそえておく。

注腸造影法 人体をレントゲン検査する場合、骨のようにまわりと硬さの異なる部分はそのままで撮影できるが、腹部内臓のように、同じような硬さの部分は、そのままではわからない。そこで、レントゲン線を通しにくい物質で、人体には害にならないようなものを飲むなり、或は注入・注射しておくことによつて、コントラストをつけるのが常である。

胃のレントゲン検査のために白いどろっとしたバリウム液を飲んだことのある方もいるであろう。大腸の検査では、このバリウム液を口から飲んで数時間経ってから、バリウムが大腸に達するのを待って検査する方法と肛門からバリウム液を注入する方法と二つある。この後者が注腸法である。前項で述べた洗腸と方法は大きく変らないが、バリウム液を排出後、空気を大量に注入し、バリウムの薄い膜と空気のコントラストで大腸の内面（粘膜

面）の変化をしらべる。この時の空気量は相当大量であり、かなりの腹部被虐となるようである。しかも、暗いレントゲン室で透視台の上に横たわり、腹部をあちこちと圧迫されたりしての検査であるので、M・Tマニアには相当の魅力になるようである。

導尿・膀胱鏡検査・膀胱造影術等 三つばかりの項目を並べたが、これらは、いずれも外尿道口（尿の出口）よりカテーテル（ゴム管）や器械をいれて行なうものである。その目的は、導尿は、膀胱に尿はたまっているが何かの障害（精神的な障害の場合もある）のために自然に排尿出来ない場合に、カテーテルを膀胱までいれて、それを通して人工的に排尿させることにある。それ以外にも、尿の細菌検査の必要上で尿を採取するための場合もある。これは婦人の場合に多い。膀胱鏡検査は膀胱に病変がある場合に、レンズのついた管（膀胱鏡）をそう入して直接に膀胱内を視しようというわけである。膀胱造影術というのはレントゲン検査の一種で、膀胱内にカテーテルを通じて造影剤（この場合はヨードの化合物）を送りこみ、又は空気を送入して膀胱のレントゲン写真をとるわけである。これらの処置や検査は、いずれも外尿道口を通じ

て行なうので、被検者（患者）は外陰部を完全に露出し、両脚を充分に開くという姿勢をとらされる。台上にこのような姿勢で横たわるといふ事だけでもM・Tマニアには医療以外のものを感じとれるものらしい。その上、ゴム管やら機械を使つての医療で、時には痛みもある。腹部の外科手術についてM・Tマニア向きの医療ともいえよう。しかも、手術とちがつて傷跡が残るわけでもないの、これらのものが仮病診療を求められる対象となり易いのも無理のないことかも知れない。

ざっと思いつくだけでも以上のようなM・T向きともいえそうな診療があるが、この他にも、頭の毛を全部剃ってしまった、頭蓋骨を鋸で切る頭部外科手術をはじめ、肢切断術等、はなはだサディスティックな手術があるがこれらは、その被虐性を求めて何回も治療を受けるということも出来ないし、M・Tの対象から、はずしてもよいであろう。

以上、ながながとM・T向きの医療について申上げたが、これは、実は前置きにすぎない。次回より私の経験した或るM・Tマニアのことをお話し申上げるつもりである。

連載小説

地獄ホテル

藤見郁

5

屈辱の美容室

金属製の強靱な枷具で改めて両手を背中に固定された三笠英子は、ピーターと名乗る美少年調教師の鞭に追われて、よちよちと歩きはじめた。

左右の足首にも金属製の足錠がはめられ、その足錠と足錠のあいだは、三十センチほどの長さの細い鎖につながれていた。

そのために、すこし大股で歩こうとするとすぐに前のめりになってころんだ。尻をうしろに突き出すようにして、よちよち歩くより仕方がない。そのみじめな自分の姿に、英子

は泣きだしそうになり、唇を噛んだ。

枷具と鎖のほかには、英子はなにも身につけていなかった。

「もっと早く歩けないのかしら。おねえさんて、案外にのろまねえ」

美少年の調教師は、あどけない表情のなかに、チラッといらだちを見せながらいった。

そして、右手に握っている鞭を大きくふりあげた。英子は反射的に首をすくめ、背中をまるめた。

しかし、つぎの瞬間、若々しい艶と弾力をもった英子のまるい尻に、細い鞭がしなやかに巻きついた。雪のように白い尻の皮膚は、たちまち、うす赤い鞭あとに汚された。

第二回



革のさるぐつわを口に噛まされている英子は、悲鳴をあげることができずに、ただ腰をよじって、のどの奥でうめくだけだった。その革の箆口具のちょうど後頭部にあたるところからは、細い鎖がのびていて、これもピーターの手に握られていた。

「さあ、いつまでも駄々をこねていては駄目よ。これから見学の時間が始まるんだから」鞭のさきで、英子の鼻の頭や乳首を突きなぶりながら、ピーターがいった。

見学？ 見学とはなんだろう。どこへつれていかれるのかしら？

英子には想像できなかった。想像の手がかりになるものは、彼女の過去には、なにもなかった。

しかし、この乙女観光ホテルこそ、英子にとって悪夢にも似た地獄ホテルだったのである。そして英子は、ピーターの鞭に追われながら『地獄めぐり』の第一歩をふみだしたのであった。

背後からむきだしの尻を軽くたたかれながら、その広い部屋を突っ切って十数歩いくとドアにぶつかった。あかるい若草色のドアには『第一美容室』と書かれたプレートが、はめこまれていた。

英子の目が、その文字を読んだ。

『美容室』という、やさしい華やかな内容を想像させる文字をたしかめたとき、英子の表情に、こころもち安堵の色がよぎった。

しかし、その安堵が錯覚だったことを、英子はすぐに知らされた。

ピーターはドアをあけると、英子のからだを肩から室内に押しこんだ。英子の目の前にかつて見たこともない異様な風景が忽然と現われた。

英子は呆然として立ちすくんだ。自分の目が信じられなかった。しかし、顔前に展開しているものは、すべて現実だった。

この『第一美容室』の目的は、じつは誘拐してきた女たちの心身に、羞恥と軽い苦痛をあたえて、その反応を記録しながら、彼女たちの肉体の各部を、より美しく鍛えていくことにあったのだ。

それぞれ、よりぬきの美しい容貌と肉体をもった若い女たちが、この部屋でさらに美しくなるための訓練と調教をうけているのだ。英子は部屋の入口に立ちすくんだまま、そのひとりひとりに目をやった。

室内のほぼ中央に据えてある赤いレザー張りのベッドに、ひとりの娘がきびしく固定されていた。名前は岡村可愛。二十才になったばかりの新鮮なみずみずしい肉体をもった娘であった。

可愛は一カ月ほど前に、ある一流服地メーカーのモデル募集に応じ、八百人の娘のなかから選出されて一位になった。その名のおおくり、くりくりした大きな目をもつ、色の白い可愛らしい容貌で、万人に好かれるタイプだった。

賞金百万円と、スポーツカーを贈呈され、

得意の絶頂にあるとき、彼女は『王』の配下たちの綿密な計画と大胆な行動のもとに誘拐されたのである。

東京六本木にあるマンションの部屋を、午前十一時に出た瞬間に襲われた。銀座にある服地メーカーの本社宣伝部に出勤するために部屋を出たのだったが、そのまま目かくしとさるぐつわをされて、東北ハイウェイをまっすぐに、このホテルまで運ばれてきた。

むろん、岡村可愛には、ここがどこだかわからない。

可愛にとって、この現実には悪夢としか思えなかった。つい数時間前の栄光から、あっという間に地獄の底へ突き落とされたのだ。あまりにも極端な運命の激変だった。

ピーターと英子がこの部屋にはいつてくる数分前まで、可愛は金属製ブラジャーと、金属製パンティを素肌で強制されて、電気責めをうけていたのである。

それは自尊心を根こそぎもぎとられた、屈辱にみちたポーズだった。全身の急所という急所には、一見かんたんな仕掛けだが、よく見ると、おそろしく意地のわるい効果を発揮する細工がどこにされていた。

敏感な神経を攻撃してくる電流にけいれん

しながら、可愛は透明なあぶら汗を全身の皮膚のいたるところから流し、うめきにうめいていたのである。

いまは休憩の時間だった。

可愛の全身から金属製の肌着がとりはずされ、二人の美容師がさんざんに刺激した各部分、むしタオルでいいねいにマッサージしていた。可愛は、枷具で隠した部分を除いては、むろん全裸だった。どこもかも、みごとに白くさらけだしていた。

ベッドの両脇から細い革のベルトがのびて可愛の柔軟な腹部を固くしめつけていた。そのため呼吸するのも苦しかった。休憩とはいっても、ベルトは解かれずに腹の肉にくいこみ、苦痛はつづいていた。手足のさきまでしびれていて、動かすこともできなかった。

可愛は、歯をくいしばって、悲鳴を耐えていた。

すこしでも声をあげると、顎から耳のうしろに取りつけられている金属製の防声具に、自動的に電気が流れる巧妙な仕掛けになっていた。顎を動かすと同時に、頬の内側がけいれんし、唇がしびれ舌がひきつれ、顔面一帯に不快なショックが、襲うのだった。だから声をだすことができない。

二人の美容師は、身動きのできない可愛の下腹から太腿の部分を、てのひらでつかみあげるようにして、念入りにマッサージしていた。筋肉と筋肉が触れあい、こすれあう音が妙に肉感的にひびいた。可愛の意思を示すものは、雪のように白い内腿の皮膚のわずかなけいれんだけだった。

「ひどい、ひどいわ!」

英子は耐えきれずに身をもんで、悲鳴のような声をあげた。

同じ年ごろの同性として、それは正視できない屈辱の光景だった。

「ひどいって? ちっともひどくないわ。これはおねえさまたちを、もっと美しくするためにやっているのよ」

あかるい無邪気な微笑をうかべながら、ピーターがいった。

「ひどいわ!」

英子は顔をそむけて、またうめいた。

「おねえさまも、いずれはこのベッドで、あやってマッサージをうけるのよ。おねえさまの肌が、もっともっと美しくなるわ」

「いやです!」

「いやだと言っても、もう駄目なの。あきらめたほうがいいわ。ここへつれてこられたら

もう自分のからだではないのよ」

ピーターはそういうと、英子の首につなげてある鎖をひいた。

英子の顔がのけぞった。まるい尻に鞭が鳴った。いやでも英子は、目の前に展開しているおそろしいドラマを凝視しなければならなかった。ピーターの鞭に追いつてられて、英子は、さらによちよちと鎖を鳴らして、五歩ほど前進しなければならなかった。

岡村可愛が固定されている赤いベッドから五メートルほどの間隔をおいて、同じ型のベッドが並んでいた。このベッドには緑色のレザーが張られている。

水原小百合という娘が、そのベッドに仰向けに縛りつけられ、いま、冷水点滴機の微妙な活動にうごめいていた。

水原小百合は、つい二週間前まで、東京お茶の水の、あるデザインスクールの優秀な生徒だった。小百合の志望はグラフィックデザインナーだったが、繊細で現代的な神経をもつ小百合のセンスは、教師たちのあいだでも、高く評価されていた。

都会的に洗練されたプロポーションで、スタイルのいい美人だったが、男性が実際に楽しむためには、肉づきの点で、ややものた

りないところがあった。

日本人ばなれした鋭いほどの美貌をもつだけに、その唯一の欠点さえおきなえば、ほとんど完ぺきな美人になるのである。

小百合のなめらかな皮膚には、いますみずみまでマッサージクリームがぬりこまれ、赤外線ランプの照射がおこなわれていた。ここにも女の美容師が二人つきそっていた。

冷水点滴機は、小百合のやや隆起のたりの左右の乳房へ、つめたい水滴を、ポタリ、ポタリと落としていく。

一見原始的だが、この緩慢な方法が、もっとも自然で無理のない効果を發揮するのだ。わずか一滴ずつの水しずくにすぎないが、抵抗を封じられている小百合の身にとって、これは心理的にも、針で刺されるような疼痛をもっていた。素肌の各部分を刺激した冷水は、赤外線照射ですぐに蒸発する。皮膚が乾くと、またすぐに針のような冷水が、ポタリ、ポタリと正確に目的の場所に落下する。

内腿の肉も、ややとぼしい感じである。冷水は左右の内腿を交互に刺激していくのだ。

小百合の肉体はむろん全裸で、ベッドの上に水平にあおむけに寝かせられている。しかし、四肢の自由というものは、ほとんど無か

った。

両腕は頭上にながながとのばされていた。左右の手首はひとつにされて革紐で縛りつけられている。両ひじも細い革ベルトで固定され、ベッドにくくりつけられていた。

左右の足もまっすぐにのばされ、ベッドに装着されてある革ベルトで、足首をひとつに縛りつけられていた。細い革紐はそれぞれ強い力を示して、小百合のやわらかい筋肉の急所をしめつけていた。

小百合の肉体は、一本の白い棒のように、すべての羞恥をさらしてのびているのだ。羞恥を隠す手段はなにもなかった。なめらかな起伏が、呼吸のたびにわずかにあえぐだけだった。

冷水の点滴は、しずかに正確につづけられた。左右の乳房の頂点へ、ふくよかなカーブへ、くぼみへ、確実な刺激をあたえていくのだ。

「やめて、おねがいです。たすけて、もう、やめて！」

小百合の口から、ふりしぼるようなかすれた哀願の声がでた。

彼女の唇には、なにも枷具がどこもついていなかった。しかし、すでに三十分以上もつ

づけられている赤外線放射のくりかえしで、小百合の口も、のどもカラカラにかわいていた。哀願の声は、ほとんどかすれてききとれなかった。

美容師は、ときどき小百合の唇へ、注射器のようなプラスチック製の容器で水を落とすた。しかし、その水には塩分がふくまれていたのだ。

のどのかわきに耐えかねて、小百合はむさぼるように、その塩水をのんだ。すると、数分後には、さらにのどがかわき、苦痛が増すのだった。

「おねがいです、もうやめてください。ゆるして、もうやめて！」

小百合は、美容師に目だけをむけて、きれぎれの声を発するのだ。しかし、二人の美容師は、まったく無言のまま、冷酷な表情で、その単調な作業をつづけていく。

いまは恐怖と苦痛の目の色になって、小百合はもたえるのだった。

「やめて、そんなひどいこと、もうやめてください！」

と、つぎにさけんだのは、見ているほうの英子だった。小百合の苦しみを、とても傍観していることはできなかったのだ。

英子は鎖のつながっている足を思わず二、三步、前にだして、小百合のそばに近寄ろうとした。

しかし、英子のその白い魅力的な尻に、あわてたような激しい勢いで、ピーターの鞭がとんではねかえった。あまりの痛さに、

「ひいッ！」

と、つまさき立ちしてのびあがり、英子は悲鳴をあげた。

「おねえさま、静かにして見ているのよ。こんど騒いだら、こんな鞭だけではゆるしてもらえないから。さあ、こんどは三番目よ」と、ピーターはというと、鞭のさきでその方角を示した。

その犠牲者は、立ったまま壁に背をむけて縛りつけられていた。

九条真理という娘だった。

黒い鉄の輪が、壁の上方の天井に近い位置にはめこまれ、その輪から二本の鎖が垂れている。鎖の先端には手枷があり、真理の細い両手首は、そのいかにも頑丈そうな手枷によって、頭上に吊られていた。彼女のなまなましい肌身を隠しているものは、その鎖と手枷だけだった。

九条真理もまた、自分の身にふりかかった

運命が信じられない一人だった。

自分のこの羞恥にみちた、みじめな姿を、とても自分のものとは思えなかった。頭上に吊られている両腕はすでにしびれ、肩からぬけ落ちそうになっていた。からだ全体が鉛につつまれたように重く、血液の流れがにぶくなっていた。

筋肉の各部分に鈍痛をおぼえながら、真理は妙に底のふかい睡魔のようなものに引きずりこまれようとしていた。

真理にとっては、むしろその睡魔に心身をゆだねてしまったほうが、ラクであった。すくなくとも、羞恥や不安から逃げることでできた。真理は目をとじた。

いま思えば、この悪夢は、あの丸の内劇場の豪華なステージの記憶からはじまったのであった。

6

羞恥の限界

そのときステージでは、アメリカ製のミュージカル「陽気な海賊船」の第二幕目があいたばかりであった。

海賊船の上で、色とりどりの衣裳をつけた海賊たちが、掠奪してきたばかりの女たちを

抱いて、踊りくるっていた。

あらあらしい嵐のようなダイナミックな音楽と、それに合わせた精力的な熱っぽい踊りが、ステージの上に渦巻いていた。

右眼に黒い眼帯をした女船長が、一段と高い場所に立って両手をひろげ、オレンジ色のライトを浴びながら、このミュージカルのテーマソングである「海だけがわたしの恋人」を歌いはじめた。

客席の真理は、目を舞台にむけたまま、脚をくみかえた。

長い、形のよい脚であった。こんなにすらりとした長い脚は、数年前の日本だったら、むしろ奇型とよばれたかもしれない。脚が長くて美しいことは、もちろん自慢ではあったが、自分で持てあますこともある。

この劇場は外人客も多いので、いすといすとの間隔が、はじめから余裕をもってつくられているはずである。それなのに、真理の脚にとっては、きゅうくつであった。

真理の席は通路のきわにあった。だから、組んで片方の膝の上にのせた右脚を、通路のほうへ投げだすようにしてのばすと、幾分かは、ラクになる。

行儀はわるいが、仕方がない。真理は心身

ともに、なんの束縛も受けず、のびのびと育った娘だ。たとえみじかい時間であっても、拘束されることが、なによりも嫌いだった。かなりわがままな性格ともいえる。

その、長くのばした右脚の靴の先端に、三センチほどの糸くずが一本ひっかかっているのが、おしゃれで神経質な真理の目にとまった。

舞台から一瞬視線をそらし、腕をついとのばして、靴についたその糸くずを取ろうとしたとき、客席の後方から、すべるように近づいてきたひとりの女が、腰をかがめて真理の耳もとにささやいた。

「九条真理さまでございますね？」

「ええ」

と、思わず真理はうなずき、その女の顔をみた。平凡な顔立ちの女である。うす暗いなかに、口紅の濃さだけが目についた。

「わたくし、おとうさまの病院の者でございます。じつは十五分ほど前、おとうさまが交通事故におあいになり、目黒のほうの病院に入院されました。すぐお宅へお電話したのでございますが、お嬢さまはこちらとおききましたので……」

真理の顔色が変わった。

「どこの病院なの？　すぐいくわ」

反射的に、腰が浮いた。これは当然であった。全身から血のひいていくのがわかった。

「ご案内いたします」

女は、腰をかがめたまま、一礼した。真理は、女のうしろから、劇場の外へ出た。

夜気が、きゅうにつめたく、真理の頬に触れた。しかし、いまの真理に夜気をつめたさを感じる余裕はない。足も心も宙に浮いていた。

「お車は？」

と、女がきいた。

「このミュージカルが閉演する時刻にならないうと、迎えにこないの。運転手にそう言いつけてあるから」

「さようでございますか。では、わたくしの車でまいりましょう」

女は、さきに立って案内した。

駐車場は暗かった。出入り口にもっとも近い場所に、外国製の車がおいてあった。その車のそばに、女はハイヒールの靴音をひびかせて近寄った。

「どうぞ」

と、女は車の後部のドアをひらいた。

「あなたが運転なさるの？」

と、真理はきいた。

「はい」

女の声は冷静であり、ひどく事務的だった。真理は身をかがめて、車内に片足をふみ入れた。

同時に、ぎくりとして息をのんだ。後部の座席のすみに、ひとりの男がひっそりと坐っていた。知らない顔だった。

「早く」

と、その男が低い声でいった。

「おとうさまは危篤状態なんです」

手をひかれるようにして、真理は座席に腰をおろした。ドアがしまった。女はハンドルをにぎり、車はすべりだした。

「あなたはどなた？　見たことのない方ね。」

おとうさまの病院のかた？」

と、一瞬疑惑を抱いた真理は男にきいた。

「さあ」

と、男はあいまいな微笑をうかべ、ポケットからすばやく白いハンカチをとりだすと、真理の顔におしあてた。

真理はもがいたが、男はあわてもせず、自信たっぷりの腕力で平然と真理の上半身を抱きすくめながら、なおもハンカチを顔におしあてつづけた。

小さな悲鳴をあげ、わずかにもがいたが、その声は途中で消え、真理は気を失った。

車はそのまま都内をぬけ、東北ハイウェイを突っ走って、二時間後にこの地獄ホテルにやってきたのだが、麻酔薬をかがされて失神をつづけている真理には、自分のからだがかどこに運ばれてきたのか、まったく知ることができない。

東京九段にある九条病院の院長九条勝彦のひとり娘真理は、このような経過で誘拐されてきたのであった。

英子の目にはわからなかったが、真理はいま、ただ鎖でつながれて立たされているだけではなく、同時にある特別な仕置きをうけているのだった。

それは、あまりにも反抗が激しく、命令に従わない真理に、敗北感をあたえるための処置だった。

ちょうど三十分前に、利尿剤のはいったジュースを強制的に二リットルものませられてから、両手を上に吊り上げられた真理の肉体の内部に、その仕置きは、しずかに陰湿な効果を発揮しはじめていた。

真理の呼吸がしだいに荒くなり、乳房から腹部を波のように大きくあえがせていた。長

い脚を膝から折りまげるようにして、内部から膨張してくる苦しみとたたかっていた。白くなめらかな下腹の部分が、微妙なふくらみをみせて息づいていた。

利尿剤のききめがじわじわとあらわれ、真理を意地悪く責めつけているのである。それは真理がどんなに美しく驕慢で、負けることのきらいな娘であろうと、避けることのできない当然の生理だった。

「くくくくく……」

という、すすり泣きに似た声が、真理の唇からもれはじめた。

ほとばしりでようとする勢いを、必死の思いで耐えているのだった。全神経と全筋肉を一カ所にあつめて耐えているのだった。

だが、忍耐には限界があった。生命のあるかぎり、内臓は活動をやめないのだ。

自尊心が敗れ去る最後の瞬間がきたとき、真理はみにくく口をひらき、断末魔のようなうめき声をあげた。下半身に激しいけいれんが走ると同時に、なにか布の裂けるような音がして、すさまじい勢いで液体がほとばしり出た。

「く、くうッ！」

という声が、真理ののどからふきあがり、

液体はさらに高い音をあげてほとばしった。一度あふれようと、とどまることを知らなかった。おささえることができなかった。下半身の神経はゆるみきっていた。

ようやく理性をとりもどした真理は、羞恥のために悶絶しそうになった。

おびただしい量の液体が、自慢の脚をぬらし、足もとにたまった。自尊心がつよく勝ちな娘だけに、この敗残の羞恥は強烈だった。

真理はまっ赤になり、つぎに蒼白になり、皮膚の色は植物の地下茎のようになって、こまかい、けいれんをみせていた。

両眼をかたくとじ、激しい感情を象徴するように胸の隆起をふるわせていた。内部にたまっていた液体をすべて放出しおえると、真理の全身の筋肉が投げだされたようにゆるんだ。

真理は首をうなだれ、改めて羞恥に顔を赤くそめた。自分の醜態をみつめている英子とピーターの存在に、真理はようやく気がついたのである。

その羞恥は、しかし見ている英子のほうちほとんど同じ感度でうけとめていた。

「ひどい、ひどいわ」

かみしめた歯のあいだから、怒りをまじえ

た、ひびきで低くうめいた。

はじめ英子は、目の前でおこっていることが信じられなかった。自分はなにかの幻影をみているのか、あるいは目の錯覚をおこしているのか、そのどちらかだと思っていた。

しかし、真理の足もとにたまった液体からにおいだす、かすかな臭気をかいだとき、英子はこの現実を信じた。この「美容室」の本当の意味を、英子は、さとったのだった。

英子は顔をゆがめ、前よりも高い声をあげてさけんでいた。

「ひどすぎるわ！ どうして、どうしてこんなことをするのよ！」

英子は、もうがまんできなかった。肩を激しく左右にひねり、ピーターの手から逃げるようにしてあばれだした。あばれなければ、自分の気が狂いそうだった。

いま自分の目の前に吊られ、立たされている娘と同じ運命が自分にも襲ってくるだろうというおそろしい予感に駆られていた。

「おねえさま、だめよ、おねえさま！」

ピーターが、必死になって、あばれる英子を制した。

英子はその制止にひるまず、髪をふりみだして荒れ狂った。小柄な美少年ピーターの腕

力は、英子の力いっばいの抵抗に、しばしば引きずられた。英子とピーターの格闘は、しばらくつづいた。

この部屋にも、カラーテレビのカメラが、数台とりつけられていた。それらのカメラは獲物をねらう獣のように、あらゆる角度から激しい抵抗をつづける英子の姿を克明にとらえていた。

ついには床へころがり、上になり下になりして、英子はあばれた。手枷と足枷で自由をうばわれている英子にとって、それはむなしい抵抗にすぎなかったが、心底からの怒りが英子の激情をかりたてていた。

ピーターは、ときには持てあましながら、その英子の抵抗を楽しんでいるようでもあった。

あさましい英子のポーズを、カメラは鮮明にとらえていた。英子は気づかなかったが、テレビカメラのその執拗なレンズは、そのまま、この地獄ホテルの主人である「王」の目であった。

王は自分の居間で、美容室における娘たちの訓練の情況や、それを見学している英子の反応などを、ほとんど等身大のカラーテレビの画面によって、綿密に観察していたのである。

る。

英子のこのような反応や抵抗は、当然、王の予測していたところであった。いや、英子が反抗してくれなければ、王はちょっと困るのであった。ここで英子があばれてくれなければ、彼女に加えるつぎの手段に、筋道が通らないのである。

ピーターを引きずりながら、なおも果敢にあばれまわっている英子の姿をテレビの画面で観察しながら、王は期待にみちた表情で、にやりと笑った。

こういう勇気のある、いつまでも反抗心をうしなわない娘に接すると、王はこの事業をはじめた本当のよろこびを感じるのだった。

7

恐怖の三面鏡

それは、王が自分で考案してつくらせ、いくどかの改良を加えて、ようやく完成した高性能の監禁いすだった。

材質は軽金属が多く、そのほかにプラスチック、木、ゴム、革の部分が組みこまれていた。巧妙な仕掛けがどこかされていて、王の手に握られたリモートコントロールのボタンひとつで、この監禁いすに坐った女は、否応

なく、すべてのポーズを展開させられた。

いま英子は、その監禁いすに嚴重に縛りつけられていた。両腕は左右のひじ掛けに革ベルトで固定され、両足は足首の間隔をやや広く五十センチほどにひらかせられて、これも革ベルトで、いすの脚に固く縛りつけられていた。

両腕と両足首を四本のベルトで監禁いすに固定されただけで、英子の自由は、はじめにうばわれていた。不安と恐怖が、英子の表情にぱりにひろがり、唇は死人のような色になっていた。

その英子にむかいあっている王は、豪華なアームチェアに腰を沈め、まんぞくしきった表情で、これから開始されるショウを待っていた。

王の目は半分ねむったようにとじられていたが、視線は執拗な光を放ち、自分の手にとらえた娘の、形のいい胸の隆起のあえぎをなめるように楽しんでいた。

この部屋には、ほかに王の女秘書がいた。

つめたく冴えた美貌をもつ、この女秘書は感情を殺したいつもの冷静な顔で、やや離れた位置から、王と英子の姿を見守っていた。

英子は、のどからかすかに声をあげて、な

にごとかをしきりに訴えていた。しかし、その声は言葉にならなかった。彼女の口は、これも革製の細いベルトで、むごたらしくふさがれているのだった。ちょうど馬のくつわのように、上下の歯のあいだに、一本の革紐が噛まされている。

鼻の穴を大きくひろげて、英子はなおも、なにごとかを訴えようとした。自分をこんなにも虐待する理由を説明してくれと言っているようにみえた。

「よろしい。お前の言いたいことはわかってる。そんなにムキにならなくてもいいよ。なぜお前がこんな恥ずかしいすに縛りつけられたか、もうわかってるだろうね。そうだよ、あんまりあばれたからさ。このホテルでは、お客さまがあばれたり、乱暴したりすると、すぐにこういう不思議ないすに縛りつけられることになっているのだ。おぼえておくんだね」

若い女生徒にお説教をする校長先生のように、王はいった。

そして、女秘書をふりかえると、目で合図した。

「かしこまりました」

女秘書は、うなずいた。そして、自分のデ

スクのひきだしから、さまざまな形をした小さな器具をとりだした。

それは一見して、小型の測量具だということとがわかった。それぞれこまかい目盛りがついていて、直角のものや彎曲したものや、かなり複雑な形をした計器があった。

女秘書は、それらの測量具を手にとると、ただちに英子の首から上を検査し、測定しはじめた。

両眼の大きさ、その位置。まつ毛の長さ、本数。眉の位置、眉毛の長さ、形、何本生えているかまで数えて、カードに書きこまれるのだ。また、鼻梁の高さ、長さ、鼻孔の形、唇の形も、念入りに測定された。

あきらかにこれは、王の趣味によるものであった。

耳の形、耳たぶのあつき、長さ、色、艶なども、耳専用の測量器で、ていねいに調べられる。さらに、革の簾口具がはずされ、頬の肉のまるみ、顎の形、口をあけさせて歯ならびをみる。健康な歯で、虫歯はほとんど無かった。

女秘書は、慣れた物腰で、手際よく作業をすすめていく。この女の手にかかつては、英子の端麗な顔も、単なる人形の首にすぎな

った。あるいは、この女のほうが、王よりも残忍な性癖をその内心に秘めているのかもしれないなかった。

英子の目から、屈辱の涙があふれていた。生まれてから今日まで、このような恥ずかしめをうけたことは一度もなかった。英子は全身でもだえた。しかし、監禁いすは微動もなかった。

「もうやめて。こんな侮辱には、もう耐えられないわ。うちへ帰してください！」

箆口具を解かれて舌と唇の自由を得た英子は、顔をゆがめながら王に訴えた。

王は、にぶい微笑をもらしながら、英子の哀願には、なんの反応も示さなかった。

英子の目が、女秘書にすがりついた。そしてさげんだ。

「あなたも私と同じ女じゃないの。もうそんな意地悪はしないで、かんにんして。ゆるしてちょうだい！」

しかし、美貌の女秘書は彼女自身が測量機械になったように、冷静にこのデリケートな作業をつづけるのだった。無言のままであり無表情なだけに、その動作には、どこか無気味なものが感じられた。

「おねがいです。もうかんにんして！」

英子の心身の苦悶が増してきているのを見て、王は陶然としたふくみ笑いをもらした。

「うふふふ。もうすこしだから辛抱しろ。こうして調べたサイズの結果を、箆口具製作の係りに通達して、お前専用のぴったりと顔に合った美しいさるぐつわを作ってもらおう。それから、目かくしも必要かな。うふふふ」

「いやです、おねがいです。もうやめてください！」

英子の哀願は、そのとき女秘書の手によって口のなかにさしこまれた舌の長さを計る器具によって封じこめられた。

「うふふふ、なんといいじらしい、かわいらしい顔をするお嬢さんだ。たまらない」

この測量風景は、王にとっては、ひとつのショウなのだった。王は女秘書に英子の顔の各部を自由になぶらせ、英子の反応を楽しんでいるのだった。

英子の美しくととのった顔の筋肉が異様にゆがみ、ねじまがり、のけぞり、目から涙を流すのをみながら、王の内部の感情はしだいに盛りあがり、膨脹し、高まっていくのだ。咽喉部の周囲を計ったのち、顔面各部の測量は、ようやく終了した。

女秘書は、王に一礼すると、ふたたび自分

のデスクにもどった。

英子は、乳房をふるわせ、しゃくりあげるようにむせび泣いていた。革のさるぐつわはまだ解かれたままだった。

王はアームチェアからゆっくりと腰をあげると、三步ほどあるいて、英子の顔のすぐ前まで近寄った。

「よしよし、もう終わったよ。泣くのはやめなさい。ふふふ、そうか。こんないすに縛りつけられているのは、いやなんだな。無理もない。それでは、ゆるしてやろうかね。だが、さっきのようにあばれると、すぐにまた手を縛るからね」

いいながら、王は愛情にみちた目で英子を眺めながら、その手足を監禁いすから解き放った。

自由を得た英子は反動的に膝をのばして立ちあがったが、すぐによろよろとくずれて、若草色の絨毯の上に倒れた。

屈辱にうちひしがれた英子の心身は、しばらくのあいだ起きなおることもできずに、荒い息をつきながら、絨毯の上につっ伏していた。白い裸身が、なにか、もろい草食動物のように痛々しくあえていた。

「ふふふ。さあ、そんなに悲しんではかりい

ないで、こっちをむいてごらん。ほら、この部屋のすみに、大きな三面鏡がすえつけてあるだろう。あの三面鏡は、お前の美しさをうつしだすために、備えてあるのだ。お前の美しいそのからだを、すみからすみまで眺めるといい。そして、自分の美しさをお前はもう一度、確認するのだ」

王は英子の肩に手をかけると、これれものでも扱うように、注意ぶかくやさしく抱きおこした。王が英子の皮膚に手を触れたのは、このときがはじめであった。

英子は肩をすくめるようにして抵抗のそぶりをみせたが、王のつよい腕力に片腕をつかまれると、そのまま三面鏡の前までひきずられた。

その三面鏡は、一面の鏡の幅が約一メートル、高さが三メートルほどもあり、王と英子の全身をすっぽりうつすことのできる巨大なものであった。

王は英子を抱きかかえて、むりやりに鏡の前に立たせた。鏡にうつった王と自分の裸身をみたとき、英子は羞恥と恐怖のために悲鳴をあげた。そして、反射的に鏡の前からのけぞって逃げようとした。

その英子を、王はがっちりと背後から抱き

すくめた。英子はもがいて、なんとか王の手から逃げようとした。しかし、王の両手は英子の乳房を背後からつかんで放れなかった。

「おっと、またあばれようというのかね。なかなか元気のいいお嬢さんだ。これではやっぱり、手を縛っておかなければいけないな。ふふふ。しかし、英子のからだは、どこをさ

わってもやわらかいな。おまけに赤ん坊のように、すべすべしている。ほんとうにきれいな皮膚だね。それに、とってもいいにおいがある。このにおいは、英子のどこから出てくるのかな」

王は、狂ったようにもがきまわる英子を大きく抱きすくめると、そのふくよかな胸の谷間に顔をうずめた。

「やめて、いやです。私にさわらないで！」

英子のはけぞり、首を横にふって必死にあられた。足を高くあげて王を蹴りつけた。

「ほらほら、鏡をみてごらん。そんな格好をすると、よけいに恥ずかしいポーズになるんだよ。お嬢さんが足なんかあげないほうがいい。おとなしくしていたほうが、恥ずかしい思いをしなくてすむんだよ」

王はなおも顔を近づけて、英子の乳房や、腋の下のおいをかこうとするのだ。あぶら

ぎった王の赤い鼻が、英子の腋の下にもぐりこむ。そして、犬のようにがむしゃらにこすりつける。英子はそのおぞましさに気がくるいそうになる。

「いやです、もうかんにんして。むこうへ行て！」

英子は両手で王の顔をかきむしった。もう夢中だった。王は顔をかきむしらながらも目をほそめて笑っている。よだれを流しそうな王の笑顔だった。

「これは気のつよいお嬢さんだ。なかなかおとなしくならないね。これでは仕方がないから、やっぱり手だけは縛っておこうかね」

王は英子の右手首をつかむと、じりじりと背中へねじりあげた。

「ああ、痛い！」

英子の顔がゆがんだ。思わず背中をまめると、さらけだしている乳房をかくすように前こごみになる。すると王は、英子の左手もすばやくつかんで両手首をひとつにすると、背中へねじりあげるのだ。

「ゆるして、もうやめて、痛い！」

抵抗するのだが、英子の両腕は、もろくも背後におさえこまれてしまう。

「ふふふ、駄目だよ。すぐにこの手はあばれ

だすんだから。さあ、縛るからね」

王は着ているガウンのポケットから、やや細めの縄をとりだすと、英子をうしろ手におさえたまま、手首からきりきりと縛りあげるのだった。

「痛い、ゆるしてえ！」

英子は悲鳴をあげて逃げようとしたが、王の手は意外なほど器用にうごいて、英子の手首を縛った縄を胸にまわし、乳房の上下に二巻きずつ、くいこませるのだ。

若いなめらかな肌に荒々しく巻きついた縄は、異様なほど残酷な色彩をみせて、王の目を楽しませた。

「やめて。痛い、痛い、たすけて。だれかたすけて、たすけてえ！」

縛られた英子は、前よりもいっそう黒い恐怖に襲われて、幼児のように泣きさげんだ。

王は、こんどは英子の前にまわって、その分厚い唇を、英子の白い首すじや、肩や、胸にむりやり押しつけ、きゅうに女のおいを増した英子の体臭をかぎまわった。あまくむせかえるような英子の肌のおいだった。

「ああ、やめて、やめてください！」

「すこしうるさいな。やっぱり口も縛らなければ駄目か。せっかく口を自由にしておいた

のに、騒いではかりいる。仕方がない。またさるぐつわをはめてあげよう。そうすれば、口のきけるありがたみがわかるだろう」

といいながら、王は用意しておいたガーゼのかたまりを英子の口のなかにねじこみ、その上を白い布きれでぎっちり締めあげた。

それは、簡易さるぐつわとでもいうべきもので、口をおおう部分は厚い布地でつくられていたが、後頭部の締めるところはメリヤス編みになっていて、かんたんに鉤ホックでとめる仕掛けになっている。

「ああ、むむ、むむうッ！」

英子の悲鳴はたちまちおしつぶされて、いかにも苦しげなうめき声に変わった。鼻までふさがれたのである。

そのみじめな英子の姿を、大きな三面鏡が冷酷にうつしだしていた。うしろ手に縄で縛られ、白いさるぐつわをはめられている哀れな自分の恰好を鏡のなかに見出すと、羞恥と屈辱のために、全身の血が逆流し、英子はまた気がくるいそうになった。しかし、両手を背中に縛りつけられた身では、もうあばれることはできなかった。ただ「むむう、むむ、むむうッ」と、もがきだけだった。

すると、三面鏡のなかにうつっている三人

のみじめな裸女も、それぞれ角度を変えながら「むむう、むむうッ」ともがくのだった。

王は英子を立たせるために縄尻をとって、上に引っぱりあげた。しかし英子は固く身をかがめて抵抗した。つよく縄尻をひくと、うしろ手にされているほそい手首が、肩から逆に吊りあがって、英子はいっそう前のめりになり、白い尻をうしろへ突きあげながら、苦しげな泣き声をあげた。

王はうす笑いをもらしながら、その無抵抗な、まるいふくよかな臀部を、なめるように見おろした。それはたしかに清潔で、神秘的で、そして魅惑的な眺めだった。王は凝視しながら、のどを鳴らして生唾をのみこんだ。

英子は、またさるぐつわの奥で悲鳴をあげ美しい乳房がゆれうごいた。

「ふふふ、苦しいかね。いくら苦しくとも、それはみんな、お前が悪いからだ。わたしの顔をひっかいたり、蹴とばしたりして、すこしも静かにしていないからだ。わたしは、うるさい娘はきらいだ。情緒がない。たのむから静かにしておくれ。さて、こんどは英子の全身をたっぷりとおがみたいのだが、ここで、そのまま立ってくれないかね」

英子が上半身を折って必死にかくしている

部分に、熱っぽい視線をそそぎながら王がいった。王の分厚い下唇には、よだれがたまって光っていた。

「む、む、む……」

と、英子はうつぶせのまま、うめきつづけた。王のいうことは、もう英子の耳にはいらなかった。

膝をよじり合わせ、腰をかがめて、死んだふりをする虫のようにうずくまっていた。どす黒い絶望感に英子はうちひしがれていた。

不思議に、死とか、自分は殺されるのではないか、という観念はなく、本能的に自分はこの男の玩具にされるのではないか、という直感があった。それは英子にとって、死よりもつよい恐怖だった。

両手を背後に縛りあげられ、さるぐつわまでどこされ、これから具体的になにをされるのかわからず、絶望に足腰をすくませてしまった英子に、いくら縄尻をひかれても、立つことなどできるはずはなかった。

「おや、わたしのいうことが耳にはいらぬのかな。それとも、拒否しているのかな。すなおに言うことをきいてくれないと、わたしはお前に、お仕置きをしなければならぬのだがな」

王は、絨毯の上に、ゆっくりと跪ずいて、英子の肩に手をふれながら、やさしい声音でいった。声はやさしかったが、それは威嚇にちがひなかった。

しかし、英子は胸を前に倒すようにして、のどの奥でうめき泣くだけだった。それは頑強に抵抗しているような姿勢でもあった。

「そうか、しかたがない。わたしは、かわいいお前に、こんなことはしたくないのだが」王はそういうと、あきらめたように立ちあがった。

その王の表情や動作をみると、すぐに女秘書がとんできた。そして、王のつぎの行動の手伝いをはじめた。

この女秘書は、王の心のなかの動きを、自分の心のように知っていた。そのように訓練されているのだった。

忠実な女秘書は、三面鏡の横の壁についているボタンのひとつを押した。

すると、天井からかすかな音とともに、鎖がおりてきた。鎖の先端には、ちょうど釣り糸のさきについている釣り針のように、革の首枷がついていた。

小さな金属製の飾りもついていて、それは犬の首輪に似ていた。女秘書はその首輪を手

につかむと、英子の首にはめようとした。

英子は固く身を縮めて泣いていたが、女秘書が自分になにをしようとしているかに気づくと、本能的に身をおこし、うめき声を発しながら逃げようとした。

乳房をふるわせ、尻を左右にゆすって、それでも二メートルばかり、ころがりながら肩で這って逃げた。

しかし女秘書は慣れた手つきで英子の背中をまたぐと、おしつぶすようにして膝で踏まえ、英子の抵抗を封じてから、もだえつづける細い首に、その革の首輪を巧妙にはめてしまった。

英子は、さるぐつわの奥で悲痛な声をあげ哀願するように王の顔をみあげた。

王は、首輪のはまった英子をみて、微笑しながらいった。

「ふふふ、すぐ立たないから、そんなものはめられるのだ。このホテルのなかで、わたしの命令は絶対なのだ。わたしが命じたことは、なんでも実現するのだよ」

女秘書は、あいかわらず冷酷な表情のまま英子を見おろしていたが、王が合図すると同時に、ふたたび壁のボタンを押した。

不思議な小説

『花と蛇』に脱帽

梶 天平

故火野葦平に「花と竜」という極めつきの作品がある。

奇ク誌上に「花と蛇」というタイトルを見つけた時、ずいぶんまた、おかしい題をつけたものだという気がした。似て非なるパロディにしろ、何も玉井組のクリカラモンモンをひっぱってこなくともよさそうなものだった。

軽い音がして、さがっていた鎖が、ゆるやかな速度で、天井へ巻きあげられていく。当然、鎖の先端についている首輪も上にひかれ、英子の上体は首からのけぞるように起きあがった。

「さあ、自分の足で立つのだ。そうしないと首が締まって苦しいだけだぞ」

王は、英子ののどを指さしながらいった。

鎖はなおも天井裏に巻きあげられ、首輪はじりじりと上にひかれた。

英子は膝を立て、腰をあげた。首をひかれては立たずにいられなかった。しかし、うしろ手に縛られているために、なかなかうまく立てない。

「そら、立つんだ。腰で調子をとるんだ」

王は英子の腰に手をそえて、やっと立たせた。そして、背後から英子の肩をつかむと、英子の前面を、三面鏡にむかわせた。

巨大な三面鏡の前に立たされたとき、全身が火に包まれたような屈辱に、英子は心の底

からふるえた。目がくらむような激しい羞恥に英子はよろめいた。

鎖は、なおも天井にひかれて英子は、つまさき立ちになった。そのみじめな姿が、そっくり鏡のなかにうつしだされている。

すべての羞恥をさらけだし、むきだしにした英子の裸身は、三面それぞれの方角から、その羞恥を強調されて、英子自身の目の前に息づいているのであった。(つづく)

み返してみても、はじめの印象が正しかったことがわかる。

しかし花と蛇は私の印象をあっさり越えてえんえんとつづき、相変わらず私に存在を、まず探すためにページをいそがしく繰る作業を強いさせつづけたようだ。

この一、二年、それが少し変化したようでは花と蛇を読む順序がずれて、おしまいの方に近づいてくるようであった。誌上に、ようやく花と蛇マンネリズムの声も聞かれる。

早合点でおちよこちよいの気味がある私も、他人がマンネリだといってくれた事で、ふいに何か安心したような気もちになり、「そうか、マンネリね。そうか、やっぱり」

一、二年たつと、あれあれと少し首を傾けだした。どうも奇クをめくって、まず花と蛇を読みはじめる習慣が、いつとはなしについてしまっていたからだ。

などとわかったつもりになったものだが、同作が奇クの呼びものであることの事実はいっそうに変わりが無い。

最近でも、みずから愛読おくあたわず、熱烈なラブレターのごとき文が寄せられていることは、誌上のみでも明らかだ。愛の告白を過ぎて、押しかけ女房的深情けの感すらある文もある。

となると、私もあれあれと思い、もう一度考え直し、花と蛇の、ぼう大になりつつある活字をポツリポツリ拾い直すようなことにもなってしまった。

さて、再読。早合点は早合点として、私なりに得た花と蛇の世界の眺望はこうである。結論的にいえば、私の生半可な感受性の印象をこえたあたりで本家「花と竜」をも越えてしまい、これに匹敵する作品はやがて「金瓶梅」という域に近づきつつあるのではないだろうか、という少し畏怖に近い思いがあった。

というようなことをいうと眉に唾をつける人もいっぱいいるだろうし、まず作者自身がテレ奥くなる前に、馬鹿々々しいとばかり、そっぽを向くかもしれない。

待ってもらいたい。

まず遠山静子夫人ほどの魅力ある「存在」を私たちは最近日本文学などでお目にかかったことがあるであろうか？

浅学非才の私だが、それ故かも知れないが思いうかべたところ、静子夫人の魅力に抗しきれぬ「文学的存在」を潘金蓮よりほか知らないものである。あえて、奇ともいえる「金瓶梅」を引っぱりだした由縁だ。

最近作の静子夫人の人情、世情をこえた輝かしさはどうであろうか。ほとんど神々しいまでの女体である。

現実にはありえない理想のものであろうがそんなことはどうでもよいのである。もともと花と蛇そのものがフィクション、約束ごとのものであるし、百も承知で私たちはその実在に酔うことができるのだ。どこまで行くか恐るべき境地がここにある。

もともとどんな荒唐無稽なお話しであつても、それが実在と思える場合、現実にも同質量の幸福なり悲惨なり恍惚なりがあり得ることを私たちは知っている。お話しは約束ごとであつても、その設定以前の感動すべきことにまやかしくはないのである。現実になんか得られないことは恐らく個人の怠惰か、あまりにも閉鎖的な周囲現実によるのであろう。

といって私は、なりたければあなたも鬼源になりなさいとすすめているわけではない。

鬼源以下の存在は私にとって芝居の黒子のようなもので、それが在ることの意味を認めることはできても、見る必要もまたない存在なのだ。私の幸福感は、スポットライトをあびて立っている静子夫人を見つめることによつて得られ、その分身たち（京子、桂子、また近くは珠江夫人など）の変化の妙に同化することで生じるのである。

小説・花と蛇の成立および発展も、静子夫人の魅力と同じ奇蹟的なハプニングに満ちている。作者も恐らく、はじめからこんな長い物語を書くつもりは、なかったに違いない。（はじめから団氏がこの発展を予期していたとすれば怪物だ）私も、だからはじめは、いずれどこかで終るものと思ひ、その程度のものでして読んでいた。

多分、団氏としては、あるところから、その好評から奇ク編集部に尻を突つかれて次回、次回と書きすすめるようなことにもなり爆発的な人気にそれがつづき、作者や奇クそのものを、まきこんでしまったのだろう。

こういう成りたちの小説を私は知らない。むろん商業誌や新聞などの読み物類にも似た

ような現象はあり、それなりに成立した作品もあるが、編集上の節度とか、作品を完結させる意図とか小型のせせこましいことが作用して、つまりは花と蛇を空前のものにしてしまったわけだ。何か、古代的な物語の成立を再現したようだ。三国志、水滸伝、平家物語、太平記、あるいは源氏物語（紫式部が、書斎にこもって原稿用紙に字をうめていったように筆を運ばせていったと考えることは滑稽である。ある一部が書かれ、しだいに女房の手から手へまわされ筆写され、姦しい女の口にさらされて次から次と書き継がれ、姦しさが多くアイデアを生み、物語に飛躍をあたえ、ついにはあれだけのものを、積みあげてしまったと考えるのが自然である。超人的作業もそうすればできるだろう）多くは作者名

すら不明の、時代をこえた民衆の合作ともいべき古典の成立作業を、奇クと団氏と読者がしてしまったのだ。いや、まだこれからどこまで行きつくか、さえわかっていない。すでに稀有の段階を越えつつある。

マンネリズムといい、荒唐無稽という。しかし私たちが普通、文芸作品を裁断するそれらの印象、それを助ける言葉は、実は作品評価の上においても、その成立を助ける上においても、何の意味ももっていないのではないだろうか。物語が小説になり文学になり、純文学とかいう妙なものに変わったことは、真の意味の感動を求める人たちには実は不幸なことなのではないだろうか。あるいは学になる過程で何か重要なことが忘れ去られてしまったのではないだろうか？ どうも、深刻に

ならざるをえないが、そんな気がする。花と蛇は盲めっぽう、行きあたりばったり団氏のいささかシニツクな感慨をともないながら、実は文学上の荒野のなかに忘れられた豊かさへの大道を知らず知らず歩いているのではないだろうか？

とすれば奇クが率直にして真剣なる、少し姦しい、いや多く姦しくあって欲しい読者を得ることができる限り、第二、第三の花と蛇を生みだすこともできるだろう。私の期待もそこにあり、感動は逆の意味で現実上の覚醒として生まれかわることのできるものなのであらう。

ちなみにマンネリズムということは、私たちの方があまりにも花と蛇の世界になれすぎてしまったということではないか。次から次へと湧きあがるように生まれてくる新鮮なる読者は、それを感じず、常に新鮮な感動を寄せてくるといふ事実が明らかな事を語っている。

団氏を持ちあげるつもりは少しもないが、その健筆の命長からんことをいひます。ミ―チャンハーチャンになって応援することをちかいます。

花と蛇に「脱帽」

天星社刊

△限定版グラビア写真集▽ 在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」 一部一〇〇〇円（送共）略号「美？」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集「女王様に飼育される日々」 一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。



1 鬼頭の別宅・庭

砂利の上に、ひきすえられている真理子。
湯文字いちまい。

裸身をがっちり麻縄で縛られている。
縄尻をとる安野と大野。

「正面、縁側に鬼頭。ニヤリとして立上る。
鬼頭」では、剥ぎとるぜ、真理子」

— 読むためのシナリオ —

女

緊

縛

師

風 流 極 道 軒

鬼頭の骨太の指が、湯文字にかかる。
観念したように、目を閉ざす真理子。
赤色の縄を手に、じいっと見守る豊子。

2 H市・谷口宅・座敷

黒檀の大机に、手足をひろげられて縛りつけられている恵子。

周囲で好色な眼をきらきらさせている谷口
関、辻井、北村、立町たち。

片隅に、恵子の夫・正明。

豊子、正明に近づき背広の上衣をぬがせにかかる。ワイシャツ、汗とりもと、上半身、裸となる。豊子、それに赤色の縄を、ぎりぎりとかけていく。

谷口「奥さん、御主人の許可すみですぜ。あんたも承知できたはずだ……じたばたせんとって……」

谷口、恵子のうすいショーツに、そろりと指をかける。

恵子「……ウツ……ウツ……やめてやめて、

ください」

3 角田組本部・地下倉

周囲の壁に、各種各様の縄、鎖など。あちこちに、さまざまの拷問道具。

天井から垂れた鎖に、縄尻をつながれ、両足を大きくひろげて、左右それぞれ床の鉄輪に縛りつけられている映子。

かこむように角田、西原、小山、白井、砂田以下。それに緊縛師、李珍宝。

角田「ふてえ阿魔だぜ、お前は。そのうち奥村もくる。その前で、たっぷり可愛がってやらあ。いちまいいちまい、恋人の前で剥がされて、素裸になったときのおめえの顔がみものだぜ」

映子、キツと顔をあげると、角田の顔に唾をはきとばす。

ニヤリとして、その唾をハンケチで拭いと

る角田。

角田「李！ いよいよ、お前の出番だぜ」

無表情で、黒い糸の縄を手に、映子に近よる李珍宝。

恐怖にみちた映子の顔。

4 浅草の街（タイトル・バック）

雑踏する街を、ひとり歩く豊子。ときどき自棄的な笑いがうかぶ。冷たく、美しい顔。

——タイトル——

（タイトルにかぶせて、豊子の声）

「わたしのことを、人は女緊縛師とよぶ。

女緊縛師……このような仕事は、はたしてあるのかと疑われるでしょう。が、大都会のジャングルのなかには、あなた方の知らない特殊な職業がいくつもあるのです。今夜も、わたしは、一本の電話にあやつられて、仕事にでかけるのです。生きていくために、たとえ、人から破廉恥^{はれんち}とよばれようと、恥知らず情知らずといわれようと、女ひとり、生きていくために……」

5 タイトル「第一話 妾」

6 東京郊外・鬼頭の別宅

宏荘な庭。

石灯籠、築山に、池。

うっそうとした木立の奥に、高い塀。

厳重な錠がおろされ、なかば、うかがい知ることが出来ない。

7 同・玄関

豊子、入ってくる。

豊子「こんにちわ」

大野、出てくる。

大野「畑野さんですね。お待ちしております

た。どうぞ」

廊下を歩いて行く、豊子。

8 同・奥座敷

真理子、鬼頭の肩を揉んでいる。

柱時計が、七時を打つ。

鬼頭「おまえが、ここへきて、もう何年になるかな」

真理子「三年……になりますわ」

鬼頭「ほう、三年も経ったか。早いものだな

……もう、よい」

肩を揉むのをやめた真理子を振りかえり、じっと見つめる。

鬼頭「なあ、真理子。おまえ、その三年の間

に、農以外の男と、まさかつきあっちゃ

あいないだろうな」

ハツとする真理子。

真理子「御冗談を……なんで、妾が……」

鬼頭「そうかな」

袂から一通の書状をとり出す鬼頭。

鬼頭「（急に威丈高になって）これはいった

い何だ、これは！」

書状の表書には「高倉真理子様」と書いてある。

鬼頭「一週間ほど前に、安野が見つけて、僕に知らせてくれた。半年もまえの日付けじゃあないか。誰だ、この相手の小倉というのは……」

真理子「大学、大学時代のお友達ですわ」

鬼頭「友だち、どの程度の友だちだ。第一、

逢ったのか。おい、この手紙では、一度お逢いしたいとかいてある……逢ったのか、

おい！」

真理子の肩に手をおき、ゆすぶる。

真理子「……ええ……一度だけ……お許し下さい。あなたが、お仕事で、大阪においきになってらったときに……」

鬼頭「何だって……オイッ！ あれほど、農以外の男と逢ってはならぬといっておいた筈だぜ！ 真理子！」

真理子「申し訳ありません……」

鬼頭「すみませんではすまいな。親父が倒産、自殺。あとを追うように死んでいっ

た母親。そのあと大学にまで通わしてやったのはこの僕。その僕の命令にそむいて、友だちと逢う……そこで、どこまでいった。おい、唇と唇とをよせあって、一緒に、寝っちまったんじゃないか」

真理子「とんでも、とんでもございませぬ。

ただ、御一緒に、お茶を」

鬼頭「ごいっしょだって……何が、ごいっしょだ。ねた……いっしょに、ちちくり合

ったに違いない」

鬼頭、真理子を、つきとばす。

真理子「あなた、そんな、そんな、ふしだらなことを、どうして、妾が……」

おき上ろうとする真理子の和服の裾をふんだ鬼頭。

鬼頭「どちらにしてもだ……僕のゆるしを得ずに男には逢わないといういいつけを破ったお前だ。罰は、覚悟しているだろうな。重い罰をうけることは」

真理子、悲し気にうなずく。

ニヤリと、笑った鬼頭。

鬼頭「どんな罰をうけたいか、とっくり考えておくのだな」

鬼頭、出てゆく。

9 同・客間

豊子、椅子に坐っている。

鬼頭、安野をつれて入ってくる。

鬼頭「これはこれは。女緊縛師というので、どんなこわそうな婆あがくるかと思っていきましたのに……」

なめるように、豊子を見る。

その視線を平然と受けとめている豊子。

豊子「では、お仕事を。どなたでございますか、モデルのかたは」

鬼頭「モデルとは、よい言葉ですな。いや、あなたを予約したあと、どうしても今日あいつのしっぽをつかみ、謝罪させ、ど

んな処罰も受けるといわさなきやあ、ならない。苦勞しましたわ、時間を合わせるのに。なあ、安野」

安野、ニヤリと笑う。

豊子「あいつとは、どなたでしょう」

鬼頭「いやあ、（小指をたてて）僕のこれなんですすよ」

豊子「わかりました。（無表情に）で、今日はどこで、おやりになりますの。このお部屋で」

鬼頭「なんのなんの、ちゃんとしたお白洲を、つくっておりますのじゃ。いままでも、僕を奉行に、ここにいる安野や、大野たちをつかってお芝居はしておりますのじゃ。ところが、縄をかけるってことは、なみたいていのことじゃあない。そこへ、あなたの話を小耳にはさみましてな。ひとつ、本格的な責場と、縄捌きを見とうなりましたのじゃ」（安野に）大野は」

安野、意味ありげに、奥の方に、あごをしやくる。

10 同・奥座敷

大野「奥さま。準備をするようにとの御主人からのおいいつけで参りました」

真理子「（懇願するように）どうしても、どうしてでもすの、大野さん」

大野「ハイ、いつものようにとの仰せです。

それに、今日は、ちょっと変わった試みがあるとか……」

悲しげに顔を伏せていた真理子。やがて、あきらめたように帯をとき、着物を肩からすべらせ、長襦袢姿になって、

真理子「変った試みてなんですよ……」

大野「（ニヤリとして）それは、秘密ですよ奥さま。さあ……手をうしろに」

キツと、大野の顔を見て、身体をかたくする真理子。

二度、うながされると、崩れるように、しやがみ込み、手を、背後に回す。

大野「いつもながら、よい匂いをなさってますなあ、奥さま」

大野、真理子の手首に麻縄をふたまきすると、あまった縄を、胸乳の上下へ回して、とどめ縄。縄尻をとって、

大野「おたちなさい」

真理子、縛りあげられた縄を引かれてよろよろと立ち上る。大野、うなだれる真理子の長襦袢の襟元に手をかけ、無遠慮にぐいぐいと開き、右の乳首まで露出させる。

11 同・庭

敷石の上を歩く、鬼頭の白足袋。安野の靴下。豊子の魅力的な胫とストッキング。豪華なスリッパ。

うっそうとした木立ちのなかの高い塀。嚴重な錠前。

さし込まれる鍵。

池の鯉がはねる。

真理子の顔、縄目、腰、膝、そして素足。

縄尻をとる大野。

豊子、ふり返って、真理子と始めて顔を見合わせる。

真理子、ハッとしたように鬼頭をみる。

真理子「あなた、このかたは。まさか、このかたのまえで……」

鬼頭「ハッハッハッ……お前が、よその男とちくり合った、その罪の償いとして、今日は特別に、わざわざきて頂いたってわけよ」

真理子「ま、まさか……まさか、あなたの新しい……」

鬼頭「バカ。気を廻すなってことよ。僕はこうみえても、お前とちがって浮気なんかしねえぜ。このかたは、豊子さんといつてな、女緊縛師。今日は、お前の責め役をつとめてくださる。よく挨拶しとくんだな」

真理子、唇をかみしめて、じっと豊子を見て何か考える。

真理子「……わかりましたわ。計画なさったのね。今日このかたを、突然、お招きしたのではなくて、何日も前から、計画なさっていたのね」

鬼頭「ハッハッハッ……早くいやあそうよ。

実のところは一カ月ほども前から……

さあ、そうとわかりゃあ、今日は今までにない楽しいことになりそうだぜ。（豊子に）たのみますぞ」

突然、真理子、大野の手を振りきって逃げようとする。

あとを追う大野と安野。

真理子「イヤ、イヤ！ よその人のまえではイヤ！ 許して。おねがいです。許してあなた！」

大野と安野、かまわずに二人がかりで押え込む。

鬼頭「（その光景を眺めながら）すこしくらいあばれてくれなくっちゃあ、面白くありませんやな」

縄尻をとられ、抱きかかえられるようにしながら、身をくねらせて反抗しつづける真理子。

12 豊子の回想

真理子と同じような長襦袢姿で、縛られ、逃げまどっている豊子。

面白そうにあとを追う四、五人のやくざ風の男たち。

（豊子の声——あれから、もう十年、早いものだわ。あの頃の、わたしは、初心だった……）

取り押えられる豊子。

怒りと恐怖におののく、その顔。

13 鬼頭別宅・高い塀

大野と安野に、まるで、屠殺場につれ込まれる羊のような恰好で、塀のそばまでつれてこられ扉をくぐる真理子。砂利の上を歩く、その素足。

14 同・高い塀のなかのお白洲

鬼頭が、金にあかして徳川時代の奉行所をまねってつくったお白洲。広さは五分の一くらい。

正面、奉行の座に鬼頭。そばに豊子が立って周囲を見廻している。

鬼頭「どうです、この白洲は。もっとも、実物よりは、ずうっと小さくしてあります。なにせ役人は全部で三人。女囚は、一人が多いときで二人。広くはいりませんからな」

鬼頭の目が、自慢気に周囲の高張提灯や、つく棒、さすまた、袖がらみなどを追ひ、豊子の表情をうかがう。

豊子、はじめて、ニコリと笑う。

（豊子の声——女緊縛師といわれるからには、一度、こういう所で、本格的に腕を振るって見たかった……）

大野と安野にひきすえられて、うなだれている真理子。

鬼頭「（態度をあらためて）真理子。姦通の罪によって、ただいまより拷問をくわえる。異存はないな」

キツとした顔を振り上げる真理子。

真理子「いや、いやです。そんな、そんな覚えはありません。……妾、あなたのいわれるようなことは何ひとつしては、おりませぬ」

鬼頭「（芝居気たっぷりに）何と申す。証拠はこの一通の書状、いかに弁解しようとも、姦通の事実は、うごかぬわ。（大野に）それ、裸にせい」

大野、一旦、縄をとく。

反抗する真理子。

安野が、腰紐をぬきとり、長襦袢の襟に手をかけると、ぐいっと、いつきに、脱がせて行く。

脱がされまいと必死で抵抗する真理子。

やがて――

二人の男に、左右の手をとられて、ひきすえられる。

鬼頭「湯文字もとうるか。ええ、おいッ。どうする真理子」

真理子「そ、それだけは、それだけは、お許しを……」

鬼頭「ええい！ かまわぬ。大野、とっちなえ！」

大野の手が、湯文字の紐にかかる。

真理子「許して、大野さん。そればかりは許して。ね、お願い！」

身を悶えさせて、紐をとかせまいとする真

理子。

鬼頭「真理子。じゃあな。その布いちまいだけは身につけることを許そう。代りに、罪を認めて拷問を神妙にうけるか。さあどうする」

大野「奥さま。どうなされますかな。ここは考えどころですぞ。素裸の恥を、同じ女である豊子さんの前でさらすか、湯文字一枚は許されて、神妙に拷問をおうけになるか。さあ、どうされます」

真理子の屈辱にゆがむ顔。

無表情に見守る豊子。

静寂。

真理子「あなた……お湯文字は、許してくだ

さい……」

大きく、うなづく鬼頭。

鬼頭「では、はっきりと試みて、拷問をうけますと。（安野に）教えてやれ、どういえばよいかを」

安野、何事か、きまじめな顔付で、真理子の耳にささやく。目をとじたりあけたり、顔を伏せたり、あげたりする真理子。

安野「さあ、奥さま、早く。旦那さまのお気の変わらぬうちに……早く、申し上げなさいませ」

真理子「（思いついたように）妾は……罪を犯しました。その罰として、いまからどのような……拷問も、おうけいたしま

す。お奉行さまは、申すまでもなく、大

野、安野のお役人衆、どうぞ御存分に妾の身体をな、なぶって下さい……ませ。

それに、畑野豊子さま。どうぞ、御自由に、縄をこの身体に、ごぞんぶんに……かけて下さいませ」

真赤になって、ようやくの思いでいい、うつむく真理子。

鬼頭の目くばせをうけて、しずかに立ち上る豊子。

半身で、乳房を両手でおおい蹲る真理子のまわりをとりかこむ四人。

大野「手をうしろに、奥さま」

真理子、大野を恨めしげに見上げて、そろそろと両手を背後に回す。

豊子、真理子に、本格的な高手小手縄をかけてゆく。

鬼頭、その過程を16ミリ・カメラにおさめて行く。

安野は、ボラロイドカメラで、撮影して行く。

つづいて、豊子、真理子に、菱縄をかけてゆく。安野と大野。ときどき、これをたのまれもしないのに手伝っている。

次第に興奮して行く男たち。

鬼頭、16ミリの撮影を大野にまかせ、息をこらして豊子の縄捌きを見つめている。

最初、身体をこわばらせていた真理子まで

が、協力するように手を回したり、腕をあげて縄のとおり易いようなポーズをとる。

鬼頭「これはお見事な……。その縄のかけ方を教えてもらいたい」

豊子「どうぞ」

二人で、いったん縄をとく。

ほつれをなおす大野。

鬼頭が、かけて行く。豊子が、手にとって教える。

縛りあがる。

大野「旦那さま。のちのちのために、私もならっておきとうございますが」

鬼頭「よからう。豊子さんには三万円の教授料を支払っていることだし、なっとくのいくまで、教えて頂くがいいな」

大野がすむと、安野。

次々と、真理子の肉体に、赤い色の縄がかり、とかれてゆく。

やがて、持ち出された荒むしろ一枚。

真理子が、大きく肩で息をしながら坐らされてる。

鬼頭、近寄り、残すという約束のはずの湯文字の紐に手をかける。

チラッと反抗の身ぶりを示したが、最早なされるままの真理子。安野と大野が、真理子をもち上げるようにして、鬼頭の手に、桃色の湯文字。

湯文字が、白い砂利の上にフワリと舞い、

真理子が、全裸の身をさらけ出す。

15 豊子の回想

うすよごれた地下倉。

湯文字一枚の豊子のまわりにむらがる四、五人のやくざ風の男たち。一度にどつと掴みかかり、アツというまに湯文字をはぎとられる。そのひとりが、角田平治。

（豊子の声——わたしのときは、ぞっとするほどひどかった。この女……まだ、幸福だわ）

16 鬼頭別宅・高い塀のなかのお白洲

俯瞰——

真理子を取り囲むようにむらがる鬼頭、大野、安野。

（豊子の声——この宴は、いつ果てるとも知らなかった。わたしには、次の仕事が続いている。行かなければならない。女ひとり生きてゆくために……）

○

17 タイトル「第二話 人妻」

18 H市・駅頭

豊子、汽車からおりてでてくる。

メモを見ながら、方角を定め、人ごみの中に、姿をかくす。

19 谷口善伍宅・座敷

黒檀の大机をかこんで、酒盃を交し合っている五人の男たち。

谷口「くるかな、ほんとうに。いざとなった

ら、ふんざりがつかないんじゃない」

関「きますよ。あれだけ念をおしたのだし」

辻井「そうですね、この会も、これで五回目、それを記念して、今までのように金で買われる女じゃあなく、素人の人妻をと決定したとき、じゃあ——といいだしたのは山本だし……」

立町「それに、山本さん、最近、商売がどうもうまくいっていないらしく、六万円の現金といえば、ちょっとした額ですからなあ」

北村「それに、山本さん、麻雀のかけも、たしか、四、五万、たまっていたじゃあない。奥さんを一晚位、提供しても、損はしますまいよ」

谷口「町内随一の美人の奥さんか」

関「かしらもう三十二歳ですよ。こどもがないのでびちびちしちゃあおりますが」

立町「結構々々。人妻で、素人ときちやあ、

五回目の記念に、うってつけ」

酒盃が、さかんに、いきかう。

北村「ときに、畑野豊子って女、たしかに来るんでしょ、うな、なんだか」

谷口「くるさ、必ず九時まで。東京で、角田組といえば、少しは名のおった土建業者。その親分のなかたち。その上、前金二万をおくってある。きつとくるさ」

時計の針が、七時半をさしている。

20 山本正明宅・茶の間

正明「じゃあ、行ってくれるね」

恵子「（うかぬ顔で）……でも……」

正明「行ってくれないと困るんだよ」

恵子「お金がはいってことでしょ……それに今までの麻雀で負けた分も張消しにするって……何だか、お金のためのよう……」

正明「……あのときは、行くなっていったじやあないか。面白そうだって……」

恵子「でも、いざとなると……」

正明「（両手をあわせて）頼むよ。今夜、約束を破っちゃあ、商売もできなくなる。」

谷口さんは、取引き銀行の重役だし」

恵子「立町さんや、関さんもきてらっしゃるんでしょう。いやだな、知っている人のまえでは」

正明「もうおそいよ。ちゃんと、必ず、つれていきますって、約束してしまっているんだから」

時計、八時を打つ。

21 谷口宅・座敷

谷口達、五人の男たちに、かこまれている豊子。

谷口「ようこそ来てくれました。今夜は、我々の記念すべき日でしてね」

豊子「（無表情に）で、モデルのかたは」

立町「それが、まだなのです。九時の約束な

のでして」

関「あと、二十分ですな」

22 山本正明宅・風呂場

正明「（入口でいらいらしながら）おい、早くしろよ。もう八時四十分だぜ。どっちみち裸でいじめられるんだ。おめかししても、役には立たんぞ」

恵子「……もうちょっと、もうちょっとよ」

恵子、念入りに化粧している。

恵子「女って、いつ、どんなときでも、美しく見せたいものよ」

正明「いまから、拷問されるといふときでもか……罵られると、わかっていてもか」

恵子「そうよ。女って、たとえ、暴行魔のまえでだって……美しくしておきたいの」

23 谷口宅・座敷

五人の男と、豊子がいる。

時計の針、九時十五分をさしている。

山本正明がひとりで入ってくる。

谷口「いよいよ、待ってましたぞ」

正明「おそくなりました。なにさま、女房の奴が、せいっぱいのお化粧をしております」

辻井「ハッハッハ……女心ってものはそんなものよ。たとえ、すぐ汚されるとわかっていても、綺麗に身体を洗ってくる」

一同の高笑い。正明ひとり笑わない。

谷口「して、奥さんは」

正明「いつもの部屋へ」

谷口「ひとりでか」

正明、うなずく。

谷口、真顔になって、

谷口「では、誰が、奥さまを……」

立町「それは、もう私が。今度は、私の順番になっておりますよ」

北村「たしかに、今度は立町さんの順。しかし、第五回の記念でもあるし、今までと

ちがって、相手は、素人。しかも、仲間の奥さん。いかがです。山本さんをのぞいて、抽籤ということにしては」

立町「それはひどいよ。私の順番なのだ」

関・辻井「北村さんに賛成！」

ひとり、ぼつんとすわっている正明に、豊子が言う。

豊子「なんの順番ですの」

正明、真剣な表情で、答えない。

谷口「北村さん。今回は特別。あなたの権利は権利として次回に廻し、今回は、くじ引きといきましょう」

関「それに谷口さん。今まではひとりでしたが、今回は、ひとりじゃあ」

辻井「そうですね。万一、奥さんが、あばれることも考えられる。二人、二人にしましょうよ」

谷口、うなずく。

谷口「山本さん。かまいませんか」

正明、うなずく。もうここまでできた以上は御存分にという、すてばちな表情。

谷口「では、きまった。勿論、御主人である山本さんをのぞいて、ここにいる五人のうちから二人をえらび、別室で待ってらっしゃる奥さまを、先ず、裸にして縄をかけておく」

豊子、抽籤の意味がわかり眉をひそめる。五人、抽籤。

関と、立町が、あたりくじ。

とび上って喜び、別室に消えてゆく。

正明の緊張した顔。

24 谷口宅・奥座敷

正面、床の間に向かって、身をかたくしている恵子。

襖があいて、関と立町、入ってくる。

関「奥さん……」

ふり向く恵子。瞬間、顔をあかくする。

恵子「……関さん。それに、立町さん」

立町「くじ運がよかったのですよ、私たち二人は」

関「では遠慮しませんぞ、奥さん。前々から一度、あなたのようなかたを責めてみたらと……思っていたところです」

恵子、羞恥を押えかねている。

辻井「じゃ、どうされます。おひとりで脱がれますか、それともお脱がせ申しませうか」

関「奥さん。みなさん、お待ちかね。早く」
関と辻井、恵子の両側にすわる。

恵子「……ひとりで、ひとりで……」

(では)と二人が、恵子の正面に、あぐらをかく。

たち上る恵子。

ためらい。

関「早くなさい！ 奥さん」

恵子の顔が、緊張し、ツープース・ドレスのホックに、手がかかる。

スカートの足もとにおち、純白のプリンセス型スリッパ。

そのスリッパが肩からすべり、ブラジャーと、パンティー姿になった恵子、思わず蹲まる。

関・辻井、ニヤツと笑ってたち上ると、関の手が、ブラジャーのホックにかかり辻井が、麻縄を持って近寄る。

恵子「(思わず)いや！ いや！」

ブラジャーがおち、豊満な乳房を、両手でおおう。

その両手を、二人がかりで、背後に。

恵子に縄をかけて行く二人。

25 谷口宅・座敷

谷口「(からかうように正明を見て)もう十五分たちましたな、山本さん」

正明、無言で、ぐいぐいと、ビールをあおっている。

北村「いまごろはもう、神妙に、お縄をうけておられるでしょうよ」

豊子、辻井のさす盃をぐいっとうける。

26 豊子の回想

広い座敷。正面の大ざぶとんの上に全裸で縛られている豊子。若い男が縄尻を持っている。その前で花札の会。

角田が、札をきっている。

角田「勝ったものが、この女を自由にできるんだぜ」

豊子の苦悶する姿態。

(豊子の声——こんなときも、あったのだわ……この豊子にも……もう五年もむかし……)

27 谷口宅・座敷

立町、ニヤニヤしながら入ってくる。

立町「(淫らな笑いをうかべて)やあ、お待ちたせしました。特別に上等の今宵のさかな、みなさまのお料理をまっています」

正明の顔、蒼白となる。

谷口「(豊子に)では、参りましょう」

たち上ろうとする正明。

立町「山本さんは、しばらくこちらで」

正明「そ、そんな……」

立町「奥さまからのおことづけです。主人の前では恥かしいから、こないようにと。なあに、そのうち、よびにきますから、しばらく、しばらくここで」

力なくすわり直す正明。ぞろぞろと出てゆく一同。

28 谷口宅・奥座敷

恵子、緋の絨毯の上に正座している。

関が縄尻を持って威丈高に立っている。入ってくる谷口たち。その好奇にみちた顔々々……。

恵子、顔をふせたまま。

絨毯のまわりに、それぞれ坐る一同。

谷口「関さん。では、いつものとおりに」

関、恵子の縄尻をひったくる。

関「女囚、山本恵子。みなさま方に、十分にお願いをしなさい」

恵子、やっと顔をあげる。

が——覚悟していたとはいえ、あまりの屈辱に、再び顔をふせ、肩を小刻みにふるわせる。

関「いうのだ、恵子」

パチリッと、縄をしごく。

恵子、思いきっていう。

恵子「わたくし、山本……正明の妻、恵子、今宵一夜、この……女体を、みなさまの前に、横たえ……」

関「（恵子に）たとえどのような……」

恵子「……たとえ、どのような拷問をもおうけいたします」

谷口たちの満ち足りた笑い。

恵子「わたしを、どうぞ、思う存分に翫って

くださいませ」

拍手がおこる。

関「では、みなさま、お揃いのところで、パステイを、ぬがせて見せましょう」

関、立町にめくばせして恵子をたたせる。

くるりと一回転させて、わざとゆるゆるとおろして行く。

関の手で、宙に舞う桃色の布。

身をかたくする恵子。

谷口「では、豊子さん。始めていただきましたしようか」

無言でたち上った豊子。関を助手に、赤色の縄で、恵子を縛って行く。

両手を背後に、菱縄しばりにしたあと、あまった縄を、左足首にかけ、右足首に別の縄、ぐいぐいと締めると、背後の手首へ。

豊子「人妻縄……。いちばん女が羞かしく、

精神的に苦しい縄目といえます」

豊子、次々と見事な縄捌きで、稚児縄、早縄。けん縄と、捕縄術の粋を、豊子の全裸の身体にかけて行く。

ただ、見守っている谷口たち。

29 谷口宅・座敷

ひとり、とりのこされている正明。嫉妬にもだえる顔。

やたらに酒をあおる。

正明「……恵子……恵子……」

30 谷口宅・奥座敷

恵子の縄をといっている関と立町。

豊子、ひといきいれている。縄をとかれて

両手で胸をおおい、ちいさくなる恵子。

谷口「じゃあ、こころで次の個人の縄掛け研究に移りましょう。では、この会への投資額の多い順に」

資額の多い順に」

関と、立町、恵子の肩に手をかけて、うながし、両側から、はさむように、襖をあける。

谷口「では」

襖をしめる。

——静寂。

立町の持ち込んだ酒肴を、のみ、食べ、聞耳をたてる男たち。

豊子、黙念と、酒をのんでいる。

ニヤリと笑って谷口、でてくる。

入れちがいに、北村。

北村、ニヤリと笑ってでてくる。

今度は、関と立町が、二人一緒に、襖の向こうに。

時計が、十二時を打つ。

やがて、二人でてくる。

関「では、辻井さん、しんがり」

辻井「どうでした？」

立町「言葉では表現できませんな。山本さんが、つくづくうらやましい」

辻井、そそくさと入って行く。

31 谷口宅・座敷

立って部屋中を歩きまわっている正明。ときどき、襖をあけようとして、やめて、またすわる。何度かくり返される。

32 谷口宅・奥座敷

奥の襖があいて、恵子、よろよろとでくる。一同の目がそそがれる。恵子の両手首を、がっちり大きな右掌で、驚づかみにしている辻井。

辻井「ハッハ……。みなさん、どうしましう。この女、ふろに入りたいと申しませんが……」

谷口「まあまあ。これで、一人十五分ずつ、それぞれの研究もすんだわけです。ここでもう一度、豊子姐御の縄捌きを見せて頂きましょうや」

恵子、崩れるように、うずくまる。

恵子「お願いです。そのまえに、おふろに、いかせてください」

北村「ふろだって。ぜいたくは、許しませんよ、奥さん」

恵子「でも……わたし……」

辻井「北村さん、ここが、女ごころ。わかってやっちゃあ、くださいませんか。女つてやつは、ほれ、いつでも美しく見せたいもの」

北村、うなずきながら、

北村「奥さん、辻井のいうことは、ほんとかね」

恵子「……ええ……」

北村「しかし、ふろから上ったら、また、責められ、汚されるんですぜ」

恵子「……承知してますの。それでも……」

北村たち、顔を見合わせて笑う。

辻井「私が一しよに。これは、恵子さんの御指名なので」

谷口「（思わず）ほんとですか、奥さん」

恵子、うなずく。

拍手がおこり、そのなかでふろ場に消える二人。

33 谷口宅・風呂場

辻井、せっせと、恵子を洗っている。

なされるままの恵子。

あがり場で、待っている関と立町。

あがってきた恵子。鏡に向かって、化粧する。眺める三人の男。

やがて、恵子、背後に手を回し、関が、縄をかける。

辻井「奥さん、最後の責めですよ」

恵子、力なく、微笑みをかえす。

34 谷口宅・奥座敷

豊子、恵子に女縄をかけると、天井から垂れた鎖に縄尻をとおす。

鎖がきしむ。正座から中腰になったところで、背後から、谷口が縄目を点検する。

谷口「いよいよ、御主人の御入来」

谷口の目くばせをうけて辻井でてゆく。

恵子、身悶える。

恵子「や、やめて。あの、あの人を、つれてくるのだけは、やめて。お、お願いします、谷口さん。お願い、関さん、やめてください。あの人のまえでは、イヤ！

イヤよ」

谷口、しらぬ顔で関となにやら話す。

狂乱する恵子。

襖の外から、辻井の声。

途端、恵子が全身の力を抜く。

辻井「よいですか、皆さん」

襖があいて、正明が入ってくる。

恵子、必死で、不自由な体を縮める。

谷口「だめ、だめ、奥さん。いくら、すくんでも、これから、御主人の目の前で、拷問されるんじゃないか」

問されるんじゃないか

恵子、再び反抗し、全身をピクピクと動か

しつづける。

正明の呆然とした顔。

豊子、谷口の招くままに恵子にちかよって行く。

次々と、縛られて行く恵子。

（豊子の声——こうして私は、この女をあ

け方まで、縛りつづけたのでした。かつて

妾が、そうされたように……女といういき

もののあわれさを身にしみて感じながら……

……）

……）

……）

……）

……）

35 市・駅前

ひとり、東京行きの切符を買う豊子。

36 車中

豊子、ボンヤリとして窓外の景色を眺めている。ふと

(今度は、どこだったか知ら……)
と呟き、手帳をめくる。

○

37 タイトル「第三話 私刑」

38 角田組本部地下室

奥村建次、猛烈な私刑をうけている。
皮鞭を次々にふるう西原、小山たち。

角田「裏切るってことが、どんなことか、骨の髄まで知らせてやるぜ……なあ、李珍宝……」

緊縛師李珍宝、黒いろの麻縄を持ったままで、ニヤリと不気味に笑う。

小山「それもよりによって、増川組にこっちの情報をたれながしたとはなあ、兄貴。

兄貴もガタがきたもんですぜ」

西原「おかげで、昨日の取り引きは、パアとなっちまって、二千万もの金が、水にながれた……」

しゃべりながら、二人、皮鞭を振るう。

豊子、入ってくる。

角田「豊子か。どうだった、H市の方は」

豊子、ニコリともしないで、

豊子「……次の仕事は、どこ……」

角田「(ポケットからメモをとり出して)次

は、ここだが……明日だ。明日、午後三時、姉崎与四郎の別荘、鎌倉だ……」

チラッと、李をみた角田。

角田「豊子、その前に、今夜は、ここで、この李と腕比べをやって行きな。李珍宝といやあ、関西で、ちいとは知れた名だ」

李、豊子に敵意のある目を向ける。

李「トヨコサン、タノミマスゼ」

豊子の目がキラリと光り、ふかく頷く。

二人の様子を見て、白井が、

白井「(はしゃぐように)これはこれは、面白えことになったぜ。で、親分、モデルは誰ですけえ……男じゃあ、色気ねえですぜ」

角田、ニヤリと、息たえだえの奥村の髪をわしづかみにする。

角田「おい、奥村。おめえのレコが、どうなるか、今からとつぶりのしみなよ」

奥村の顔が、苦悶にゆがむ。

奥村「……や……やめてくれ、それだけは、やめてくれ……」

角田「やめられねえな。映子は、もう、とっつかまつてる頃だ……丁度、いいカモだぜ、こいつは」

一同、高笑いする。

西原「奥村の兄貴の情婦を、素裸にできようたあなあ。俺あ、この組にきてほんによかったぜ」

角田「(笑いながら)この野郎!」

一同、再び高笑い。

39 映子のアパート

角田の乾分の砂田たち三人に、無理矢理つれ出される映子。

40 角田組地下室

小山「映子姐御のおっぱいときたら、ポインポインだからな」

白井「俺あ、一ぺんでいいから、姐御の裸を拝みたかったんだ……それが、今夜はたつぶりと……李、たのむぜ」

舌なめずりする男たち。

奥村、さかんにわめく。

41 夜の街

映子をのせた車が、走る。
後部座席で、二人の男にはさまれておびえている映子。

映子「一体、どうしたというのよ、妾を、こんな目に合わせて。いつけるわよ。親分に」

砂田「その親分の命令なんで」
映子「なんだって?」

砂田「実は、姐さん。健次の兄貴が、ドジ踏

みましてね。そいで、ちよいとばかり、姐さんの身体が、いりようになっちゃってわけですよ」

映子、がっくりと肩をおとす。

42 角田組地下室

吊るしていた奥村をおろし、縄をとき、あらためて、緊縛していく李珍宝。

ジューツと見つめる豊子。

角田「さすがは李だな。縄捌きはうめえものだぜ。なあ、豊子」

豊子、答えない。

その時、ドヤドヤと階段をおりてくる砂田たち。映子がいる。奥村、何か叫ぼうとするが、猿ぐつわで、声が出せない。両手を西原と砂田にとられる映子。

角田「映子。奥村がとり返しのつかねえことをやってくれたのでな。両腕ともに、たたきって、詫びを入れさせようと思うのだが……」

白井、匕首をぬくと、奥村の二の腕に刃をあてる。

角田「死んでもらうよりも、両腕をなくしてさんざ苦しませてやろうという寸法よ。

いいですか、映子姐御」

白井「どうなんです、映子姐さん。やりますぜ。あっしは気の短けえ方なんです」

映子「……待って……待ってよ、親分。今度のことは、車のなかできました。健次のやったことは、弁解できません……」

角田「だろう。だから、両腕を」

映子「待って……それだけは待って。代りに……何か……何か、代りに」

角田たち、顔を見合わせてニヤリとする。

西原「代りにつたって、姐さん、二千万もの大金を、今すぐ出すとでも」

映子、唇をかみしめる。

角田「じゃあ駄目だ。白井！ やんな（合点）と、白井の匕首が、右の腕を、突く。ほとばしる血。

映子「（絶叫する）や、やめて！ それだけは、やめて。代りに、私が、何でも」

西原「白井、ちょっと待ちな。情勢が変わったようだぜ。（映子に向かつて）するてえと、姐さんが、兄貴の身代りになるってんですかい」

映子、うなずく。

砂田「姐さん、よく考えてみるんですな。

裏切りもののリンチがどんなものか、十分に御存知のはず。それも、女となりゃあ、先ずは、あか裸……その上で、なぐる、けるじゃあ、すみすまいよ」

唇をかむ映子。

角田「（す・ご・ん・で）どうするんでい、映子」

映子、ひとわたり、皆をみ廻して、

映子「……しかたないでしょうよ。お受けしましょう。さあ！ この映子姐御のお身体を、なぐるなど、突くなど、勝手におしよ」

角田「よし、話はきまったぜ。李……それに豊子……十分に腕をふるいな。その前に

砂田のいったとおり、先ず、裸になってもらいましうか、姐御」

映子、西原と砂田の手を押し払うと、ラメクロースのプレーンなブラウスのバンドをはずし、脱ぐ。つづいて、ふくれ織りの黒いスカートのチャックがはずされ純白のスリップ姿になる。

むんむんする色気がたちこめ始める。

西原「次は、姐さん」

映子「がたがたするんじゃないの。たっぶり拝ませてやるんだから。それに李がいる以上、裸にして、縛りあげようという魂胆は、よめてるよ」

角田「そりゃあ、好都合というものだ、李だけじゃあなく、豊子もいるぜ」

映子、豊子に始めて目をやる。

映子「あんたが豊子なの。名前はきいてたけど、会うのは始めて。奇妙な商売を始めたわねえ……」

豊子、そ知らぬ顔。

砂田「脱ぎな、脱ぎな」

映子、スリップを肩から外す。

豊満な身体に沿って、ながれおち、足元にかさなる純白の布。

あとは、フロントホック型のブラジャーとガードル。

砂田「どっちからだい、姐御」

西原「どうでい、野球拳でもやって、きめち

「やあ」

高笑いのなかで映子、ガードルを外す。うす桃いろの縁どりのあるショーツがはちきれそうな女体をつつんでいる。

白井「ヒャアッ！」

西原「スッ頓狂な声を出すんじゃないやあねえ、次は……と」

西原、映子にちかより、ブラジャーのホックに手をかける。その手をピシャッとたたいた映子、角田をジッと見つめてから、

映子「親分。あたしが思う存分にされたあとで、健ちゃんを許さないなんていうんじゃないでしようね」

角田「安心しな……俺も、男だぜ」

映子「でも……」

西原「でもくそもあるけえ、こうなったら親分の心にさからわねえことよ」

映子、大きくうなずいてブラジャーをとり待ちうけていた西原の手にわたすと、さすがに両手で乳房をおおって蹲る。

角田「まだ一枚のこってるぜ。とりなよ……」

それとも、取ってもらいてえか」

映子、その声でたち上ると、思いきったようにショーツを脱ぎ去り、立て膝をして、蹲る。

匂うように美しい肌。女の体臭が、地下室中にただよう。

角田「李！ 先ず、お前からやんな」

ニタリと笑った李。蹲っている映子の背後に回る。

あとは、流れるような縄捌きで、菱縄をかけていく。

見守る角田たち。

二度、三度、呻く映子。

みごとに縛りあげた映子の縄尻をとり、歩かせる李。

角田「さすがは、李よ。次は、豊子、お前、やってみな」

西原「親分、姐さんの縄をとくのは、あっしにひとつ……」

洋酒のグラスをあげながら頷く角田。

西原、再び蹲る映子に近寄り、ゆっくりとその縄を解く。

豊子、赤い縄を手にして近寄る。

見上げる映子の怒りの目。

無表情に豊子、その左手首をとると、これまた目にもとまらぬ早さで、女縄をかけ、最後に、きりりと結び目をひとつ。ぐいっ

とひき締めてたち上らせる。

呆然と見つめる角田たち。

奥村健次までが、呻くのをやめて見つめている。

角田「これじゃ、甲乙つけられねえな。もう一度やんな」

白井「今度は、あっしが」

進みでて、佇んでいる映子の前から、抱き

つくようにして、縄をといていく。

身悶える映子を、背後から押える砂田。

角田「李。次、やってみな」

洋酒がまわって、異様な興奮が、地下室にただよい始める。

李が、次は、鉄砲責めに映子を縛り、立て膝にさせ、縄のかかっている両乳房を、くるくると二巻き、針金でしぼりあげる。

映子「クエツ……イタ、イタイじゃあないの……イタ！」

西原「オイオイ、これはリンチだぜ。痛いのは、あたり前だ」

角田、ひょうたんのように、くびれて突き出した乳房を爪先ではじく。

それが合図のように、どっと男たちが、映子の周囲にむらがる。

黒いけものたちのなかの小羊のように、映子が、叫び、悶え、嗚咽する。

43 豊子の回想

角田組本部奥部屋。全裸の豊子が、心死で反抗するのを、押しふせ、ねじふせ、右手を砂田が、左手を白井が、左足を西原が、右足を小山が、それぞれ持って力まかせに引きしぼる。

苦悶する豊子。

（豊子の声——妾も、あの頃は、人並みの感情があった。怖ろしかったし、とてもじゃあないけど、恥かしかった……いまでは

裸になることくらい、なれっこになってしまったけど……)

44 角田組地下室

中央の台の上に、大の字に、曝されている映子。左手と右手を別々に、それぞれの隅の鉄輪からのびた鎖に、左右の足は台の金輪に縛りつけられている。その前で、グラスをあげる男たち。

角田「ところで、李。ひとつ、お前、豊子を縛って見ねえか。緊縛師が、緊縛師を縛りあげる。こりゃあ、エになるぜ」

李、ニタリと笑うと、黒い縄をしごいて、李「トヨコネエサンナラ、シバリガイモアロウモノアルネ」

豊子、始めて、眉をひそめる。

角田「なあ豊子。せっかくの機会だ。ひとつモデルになってやれよ。お前だって骨身にしてみても、縛って貰ゃあ、ちっとは参考になろうというもの」

李「タノミマスヨ、トヨコサン」

——ご投稿下さる方へお願い——
各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に氏名を書かれずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作(イメージ画も)毎に、住所氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用縦書きと共にお願い致します。

角田「李もああいつてるんだ。それに、俺たちも、しばらくお前のはだかを拝んでいねえしな。ずいぶんと脂がのって、一段と年増の色気がでてきたことだろうよ。」

なあ、みんな」

西原たち、一斉に拍手する。

豊子、観念する。

しずかに、服を脱ぎ、スリッパをとり、ブラジャーを外す。

よろける足で、ちかよった西原。

西原「これも、じゃまっけだぜ」

と、ショーツの紐に、手をかける。

なされるままになっている豊子。

李が、ちかよってくる。

立ったまま、肉のひきしまった、こぶとりのした裸身をさらけ出しつつ、両手首をし

ずかに、背後に回す豊子。

李の顔が、淫らな笑いでいっぱいになり、あざやかに、首縄から、本格的な高手小手

縄、そして、開かせた両膝に六尺棒をとおして固定。その棒を、天井からおりた鎖に

つないで滑車をひく。

ぐいぐいと、持ち上る女体。

回転する豊子。

(豊子の声——これもまた、女ひとり、生きていくために、やらなければいけないつとめ。ほかのしごとをやるうと何度も考えた、が、ダメ。角田たちの目がひかって

おり、第一、妾のからだがもう、平凡なつとめを拒んでしまう……女……女の業……ッて……業——業——女の業……)

45 鎌倉行き電車の中

ひとり坐っている豊子。

(豊子の声——昨日は、さんざんだったわけど、奥村も映子も、生命だけは助かったのだから、まあまあ喜ばなくっちゃあ)

46 浅草近くの町

奥村健次、映子と二人で歩いている。

奥村「許してくれよな、映子。今度こそ、ああいう真似はしないから」

映子「……わたしこそよ、健ちゃん。あんな目にあつた、わたしを捨てない？」

奥村「……俺のためにだ。もう、忘れちゃおう。この腕、二本、助かったんだ」

二人、顔を見合わして微笑。

47 鎌倉駅前

駅の時計を見上げ、

豊子「さあ、働かなきあ……姉崎与四郎とい

えば大財閥。ひよっとすると、十万もく

れるかも……。早く、二百万、貯めなき

やあ……」

ニヤツと、始めて、笑顔を見せた豊子。腕

時計を見て、再び、無表情な顔付きになり

雑踏のなかに、消えて行く。

連載Ⅱ アブ紳士行状記

M 派 交 友 録

(2)

(春木俊野君の巻)

鬼 山 絢 策

安すぎる勘定

週刊誌で「髪の毛の乱れるバー」があるという記事を読んで、春木君と私は苦心さんたんして、やっとその店をつきとめた。

浅草雷門の傍の、何の変哲もない店で、カウターで飲んだ勘定が、ばかに安かった。

だが、奥には小座敷があるようで、そこから、はしゃいだ嬌声が洩れてくるし、女も何人か居るようだった。

帰ろうとした時、入ってきた禿頭の紳士に奥から出てきたグラマーの和服の美人が、かなりS的な態度で接した。

お客を足で蹴つとばし、それでも、あやまるお客を四つん這いにして、その上に跨がって、奥の座敷へ消えて行った。

一たん腰を浮かした春木君は、再び椅子に腰を下ろして飲み直す構えであった。

立っている私を見上げてニヤリと笑った。私も、心は大いに動いた。

あの「エッちゃん」なる女性は、我々M派

にとってはまさに願ってもない女性であり、あれだけの度胸と、相手の心理をよく掴んでいる女性は滅多にない。

「なかなか、やってくれますね」と私も坐ろうとして時計を見ると、10時半である。

どうにも遅い。これから30分も飲んだら、電車がなくなる。しらふの時に「昨夜は終電車に乗り遅れてタクシー代千五百円ふんだくられた」と、よく私にこぼす彼である。

「また今度、早く来ましょう」



カット・春 川 ナ ミ オ

と私が促すと、彼も納得して、ひとまず外へ出た。

「やっぱり、ほんとでしたね」

と私が言うと、彼も責任を果たしたように「奥の方は相当、凄そうですね」

と、はやくも次の日に期待をかけているようだった。

「それにしてもムヤミに安い、二人で飲んで三百六十円とはね」

「ちよっと、安すぎますね。どうしてでしょうか」

と春木君も、けげんそうだった。

「恐らく私の勘によれば、二人は刑事か何かと間違えられたんだと思いますよ、眼つきのよくないのが二人、ウッソリと入って行ったから警戒されたんですよ。だから今夜粘ったって、いいことはありませんよ」

「なるほど、そうですね。だけど鬼山さんが刑事に間違えられるのは分かるが、僕が間違えられたのは初めてだな。悪い人と一緒に行っちゃったな」

春木君は上機嫌だった。

予算システムの魔術

それから二、三日して、彼から電話が掛かってきて「実は昨夜あそこへ行ってやったんですよ。えらいめに会っちゃった。一万円、使わされちゃいましたよ」と言う。

そういう話なら何はおいても聞かなければならないと、校了間際で忙しかったが、彼がわざわざ私の居る印刷所の近くまで来てくれるというので、近くの喫茶店で話を聞くことになった。

「昨夜は早く行ったんですよ。7時半頃だったかな。一人で行ったらすぐ奥の部屋へ通されましたよ。やっぱり僕は刑事なんかに見られなかったんですね」

「奥は、どんな様子でした？」

別に変わったことはなく、平凡な四畳半ぐらゐの日本間だと言う。

春木君は週刊誌で読んだ通り、予算システムで行くことにして「とにかく二千円で遊ばせてくれ」と協定値段を提示した。

OKとなって女の子が二人、例の山出し嬢と、グラマー嬢が両脇に、はべった。

ビールが三本運ばれると、いや両嬢が飲むわ飲むわ、忽ちからになって追加。春木君は「ここでは変わったこととして遊ばせるって言うけど、どんなサービスしてくれるの？」

「いろいろあるわよ。お客さんの好みによって……」

話が佳境に入ろうとする頃、「お客さん、恰度二千円になりましたが、どうします？」

と、きた。酒豪の春木君、二人のホステスに飲まれてしまって、まだいくらも飲んではいない。

話もこれから面白くなるところだから、

「じゃ、もう二千円、頼むよ」と継続した。

「此処へ来るお客さんは大抵、年輩の人が多いようだね」

「ウン、そう」

「おもに、どんなことするの？」

「69ね」

「エッ？ そんなサービスがあるの。じゃ、僕にやってくれる？」

「フフ、そりゃ、お馴染みさんにならないとダメよ、はじめてのお客さんじゃね」

「マゾの気のあるお客さんも来るの」

「来るわよ」

「サドの方は？」

「あるけど、お断りね。妾たち、痛いことされるのイヤだもん。やってやるのは面白いけ

どさあ」

ますます話が急所にふれてくる。それと正比例してビールがどんどん運ばれ、どんどん女達は飲む。

もうそろそろ、またリミットに近づいた頃だなと思ったとき、グラマー嬢がサッと片膝立てた。もりもりとした太腿をスカートの端から覗かせた。パンティははいてないようである。

そのものズバリをちらつかせられては、たまらない。また二千円追加となる。

「春木君にしては、テンポが遅いじゃないですか」

私は、ひやかした。事実、話がちっとも進展しないので、私の方もジリジリして聞いていたのだ。四千円も飲んで、やっとスカートが捲れるとこまでしかこぎつけないのでは、ベテランらしくない。

「イヤあ、そりゃトルコのようなわけには行きますせんよ。ムードが違いますからね」

トルコ風呂などでは、初回で15分もすれば神酒拝受まで目的を達している練達の士にしては、いかにも、まどろこしい。やっぱり彼は酒が好きなのである。酒が入ると、ついノンビリしてしまって、スローテンポになるの

かもしれない。

お馬ごっこ

六千円台になって、やっと太腿にキスさせてくれるとこまで行ったそうである。

「しかしね。同じキスするにしても、やはりムードが違いましたよ。ありゃあ最高のムードでしたね」

と言うのは、山出し嬢が引込んで、春木君がお目当ての洋子という一番美人のナンバーワンがやってきたからだ。

この前、禿頭の紳士を蹴とばして馬にした女はたしか「エッちゃん」と言う女だった。

だが、今日はその「エッちゃん」は休みだと言う。

「エッちゃん」も美人でいいが、この洋子と比べたら洋子の方が断然いい。大映の宮園純子のように、男を見つめる眼にあやしいひかりがあり、魔女的なムードがある。

だが態度は明けっ放しで、もうかなり酔っぱらっている。この前に見た時には洋服だったが今日は着物で、坐るなり裾をパツと捲って、太腿まる出しの大あぐらをかいた。

「どうしたんだい、不景気なツラして。お酌

でもしろよ」

この女は言葉が男のように荒っぽい。どっちがお客かわからない。

傍で最も好きな女に見られているという点で、春木君にとって「最高のムード」となったのである。

洋子という女は、ナンバーワンというだけあって、春木君みたいなお客の扱いにはツボを心得ているとみえて、

「拝ませてもらったうえに、腿までなめさせてもらって、ほんとにトクしてるよ。安いよマリちゃん、ついでにもっとおいしいとこなめさせてやんなよ」

と音頭をとっている。

グラマーのマリは、春木君の上にドッシリと跨って、

「コラ。どうだい、もっといいところへキスさせてやろうか」

「ウン、頼む」

こんな時でも、女たちはコップを離さず、ビールを飲んでいゝ。実際この店の女は商売熱心だ。

「ついでに飲ませてくれよ」

「フッフ、飲ませるにゃ、もっと飲まなきゃね。もう二千円追加するか」

「するよするよ。二千円だって五千円だってするさ」

これは春木君が言ったのではなく、洋子が傍でビールを飲みながら言ったのだ。そのときには春木君は、返事をしたくも口がきけない状態だった。

マリという女は面白がってギューギューおしつける。

「もっと強くやっておやりよ。其奴を潰してしまつて、あとで二人でゆっくり飲もうよ。」

アハハハハ」

春木君がウンウン苦しんでいるのを、洋子は傍で笑いながらマリをけしかけ、うまさうにビールを飲んでゐる。

春木君も酔いが一ぺんに出てきた。

「この状態のときだけは、勘定のこととも忘れてますね」

と春木君はニヤニヤした。

ともかく春木君の目的が、ひとつひとつ達せられて行くのだった。

「このくらいやってやりや、鼻の下をのばしてあとを追加するだろう」

と思つていたのだろうが、どっこい春木君にも妙な意地がある。

口がきけるようになると

「よく飲むなあ。もう遅いから帰るよ」

「あら、ずるい。ひとが折角スペシャルサービスしてやったのにさ。食い逃げは許さないわよ」

とマリが怒ると、洋子も男のような太い声で

「この野郎、観音さまの鳩じゃあるまいし、このままで逃げたりしやがったら承知しないから」

と、あぐらの片膝をグイと立てた。

「洋子ちゃんがサービスしてくれたら追加してもいい」

「この野郎、ナメやがつて！」

洋子が裾をつかんで立ち上った。その拍子に、桃色のネルの腰巻がパツとめくれた。此の店の女は皆はいてないらしいのだ。

凄い見幕で、やくざのように裾を片手捲りに立ち上った姿は凄艶だった。

一瞬、春木君は殴られるのかと思つてハツとした。

別に恐がつたわけでも、嫌がつたわけでもないのだが、急にそういう気配を感じれば、本能的に身構えるのは当然だが——身構えるといても仰向けにおさえつけられていては構えようがない。心の中で覚悟したと言ふべき

だろう。

だが、さすがに暴力バーではないから、そこまでは行かなかった。

洋子は春木君の顔の前に突つ立つと

「じゃあね、妾達二人を背中に乗つけて馬になつてごらん。この部屋を三廻りできたらあとの一セットは妾達でおごつてあげる。これがほんとのサービスだよ。その代り途中で潰れたら、あんたが払うんだよ」

「面白い、OKだ」

「大丈夫かい」

「大丈夫さ」

とは言つたものの、洋子の方は中肉中背で大したことはないとしても、マリの方は、いま乗つかられたばかりで、その重量は相当なものである。

「よし、じゃあ四つん這いになれ。乗つてやるから」

洋子の口調は春木君の性向にピッタリなので、彼女に命令されるとゾクゾクと背筋がしびれてくると言つていた。

春木君とて65キロからある体躯の持ち主だから、女の二人ぐらい乗せたつて、狭い部屋の三廻りや四廻りぐらい、頑張れば廻れると思つた。

よし来い、とばかりに四つん這いになるとまず洋子が着物の裾を捲って、春木君の肩のあたりへ跨った。

「コラ、上を見るな！」

首を横に曲げるのを、横っ面をピシヤリと平手で軽く殴った。

「後部の座席を、タツプリあけてやったからね。マリちゃんの坐りいいように」

マリは肥った身体を「ヨイショッ」と声をかけて背中の中のまん中にドスンと跨り、洋子の肩に両手でつかまった。かなりの重量感が背骨にこたえる。

春木君は、一人の女性を背にした馬の経験はあるが、二人を同時に乗せたのははじめてだと言った。

「どうだ、重いだろ」

「平気さ」

「よし、じゃ歩け！」

洋子は肩の上で腰をしゃくって「行け！」と命じた。

マリは後でアハアハ笑っている。肥った身体が笑うたびに動くので、春木君は落ちはないかと心配しながら、座敷の中央に置いてあるテーブルを軸にして、そのまわりを這い出した。

スタートでは、乗り手が落ちるのを心配したぐらい馬の方に余裕があったのだが、一周した頃になると、背中にグツと重味が加わってきた。

はじめ、やわらかいゴムマリを乗せたように感じていたのが、一周してみると予想外にかなり重量を感じてきた。

それだけに春木君の楽しみも倍加したのだが、春木君の心中としては、三周を廻りきって、彼女等のおごりで、飲まれたぶんを飲み返してやるつもりだった。マゾヒストにもそのくらいのサドっ気はあるのである。

二周目に入ると

「ホラ！ もう少しだよ。頑張れッ」

と、洋子が段々前へせり出してきて、両の太腿で首を締めてきた。あたたかいフンワリとした感触は気持が快かったが、それだけ重量感は、きつくなった。

「もっと両手を突張って歩け。妾達の足が地につくようじゃダメだよ」

洋子は膝を曲げて、両腕を外側からおさえつけるようにする。歩きにくいこと、おびたらしい。

ハアハア這いながら一周半を廻る頃は、かなり息切れがしてきた。

額に汗がにじみ出てくる。それが頬の方へ流れてきて、洋子の太腿とすれ合ってジトジトしてくる。

二周目をどうにかヨタヨタと廻りきって、あと一周となると

「ガンバルわね、この野郎。いい加減に潰れたらどうなんだよ。ほんとに妾達におごらせるつもりかい」

洋子の脚に力が加わり、凄い脚力で、顔を締めつけてきた。

「畜生、厚かましい野郎だ」

腿で眼を掩われて、前が見えなくなった。勢い頭が下がる。

前を見ずに、畳の目ばかり見て歩くので、あっちにぶつかり、こっちにぶつかり、なかなか前へ進まない。

「ホラホラ、どこ向いて歩いてるんだよ。こっちだよ、こっち」

片方の腿に力が加わって、顔を捻じ向けさせられ、残酷な乗り手の指示に従ってヨロヨロと這って行く。

馬の上で乾盃

息切れがひどくなり、甚だしく苦しくなっ

てきた。テーブルのまわりに置かれてある、座布団ひとつを乗り越えるのが大儀になり、この座布団が大きな障害になってきた。

酒が入ってさえないなかったら、廻りきっていたろうが、酔いが一時に出てきて、どうにも歩けなくなってきた。

「ホラ、もう少しだよ。どうした、しっかりおしよッ、この駄馬」

だが、もうだめだ。テーブルヘゴツンと頭をぶっつけたとたんに、哀れな姿でバテてしまった。

「ウワイ、つぶれた」

マリは手を叩いて笑った。

「ざま見やがれッ、この野郎！」

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりませんの故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所など御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

洋子は倒れた春木君の首筋へ跨って、更に顔を押し潰すように圧迫した。

「サア、妾達の勝ちだぞ。マリちゃん、ビール、ジャンジャン持っといでよ。祝盃をあげようじゃないの。此奴の上でさ」

マリは、はしゃいで奥からビールを三本、持ってきて春木君の頭の前で、どっかりあぐらをかくと、洋子に酌をする。

「ああ、うまい。大きな口を叩いたってさ、やっぱり潰れちゃったじゃないか。どうだ、女の強いことが分かったか」

「分かった」

洋子は勝ちほこってマリに酌をしてやる。マリもうまそうに飲みほし、たちまち一本、からにしてしまった。

畳へ鼻をめりこませる位に、上から圧しつけられて、春木君はフウフウ言っていた。

鼻が潰れそうなので顔を横に捻じ向けた。その上に容赦ない酷烈な圧迫が加えられる。

「ああ、おいしい。お前も飲みたいか」

「飲ましてくれ」

「だめだよ、負け犬は妾の尻の下で苦しんでりゃいいんだ。ああ、うまい」

「喉がカラカラだ。少しでいいから飲ませてくれよ」

「降参したか」

「降参した」

「あんた、バカだね。こんなめに、あわされてさ。バカだろ」

「バカだ」

「何だ、この野郎。おうむみたいに、ひとの口まねばかりするな」

「すみません」

「でも、このひと素直だわね。図体の大きいわりにしてはさ」

マリは、いくらか同情を示した。洋子の方は惨酷に時々尻に重みを加えてグイグイと圧しつける。それが商売でやっているようでもある。しんから好きでやっているようでもある。そこに春木君は魅力を感じているのである。

「まあ何てったってお客さんだからね。このへんで勘弁してやろうか。それとも、もっといじめてもらいたいのか」

首筋の辺りがむずがゆくなったが、両手をおさえつけられているので掻くことさえできなかった。

「もう勘弁してくれ」

「フッフ、ほんとに参ったようね。ねえ、あんた、ケチケチせずに一本お出しよ」

一本とは一万円のことらしい。

「そしたら、もっと面白いサービスしてあげるからさ。あんたが一万出したら妾だっていちまん出す。そうすりゃキャンバンまでつき合っ
てあげるよ」

「店が終ったら、どこかへ行こうか」

「ホラ、つけ上って、すぐそういうこと言い出す。まだ初回じゃないか。図々しいよ。それは、もっと先のこと」

「間違いしちゃ困るよ。どこかへ行ったらって普通の男のように君を何とかしようというんじゃないんだよ」

「じゃ何なのさ」

「ま、此処でやってることの延長だな」

「そんなら、此処でも同じじゃないか」

「ムードが違うよ。ここでは何か君達は営業的な気持でやってるような気がするもんだからね」

「そんなことないわよ。妾は好きでやってるんだから」

「だったら初回だなんて言わないでさ。飲ませておくれよ。あんたのを」

「フフフ、バカ！ そんなに飲みたいの。まあビールで我慢しておきなよ。そのうちタップリと、ゲップの出るほど飲ませてやるか

ら」

どうもこの洋子という女は、心憎いまでに春木君のようなタイプの男の扱いに馴れている。

酔ってはいるし、春木君はこの女の扱いにすっかり翻弄された感がある。

一万円の契約が成立すると、いつの間にか洋子は居なくなり、別の女と交替してしまっ
た。

女郎がまわしをとっているのを待っているような気持で、春木君は洋子の来るのを心待ちにしていたが、売れっ子の洋子は他の座敷でも引っぱりだかどと見えて、遂にかんばんまで現われなかった。

他の女達はかなり酔っぱらって、それなりの狂態サービスをしてくれたが、勘定をはらって、店の土間へ立った時に、はじめて洋子が現われて、

「またね、こんどは飲ませてあげるから」

と、ジッと春木君を見つめたそうだが、春木君は、それは営業的なゼスチュアと解した
そうだ。

春木君は、私だからこそ、こんな話を打ち明けてくれたのである。

春木君は、一万円を使ったことに淡い悔いを見せた。

「また、行きますか」

「いえ、もう大体わかったから、もう行きませんよ。もう少しマシなのが居ればいいけど洋子一人じゃね」

「その洋子にしてからが、他の店の女に比べたら、まず普通の女ですものね。はたがブスすぎるから、眼立つけれど」

「そうなんですよ」

「でも、それだけサービスしてくれれば、まあまあしょうがないと、あきらめもつくでしょう」

「いや、あの位ならトルコへ行っただ方が、もっと安くて効果がありましたよ」

春木君には新宿、渋谷、池袋と各所のトルコに馴染みの女が居る。

トルコ嬢とのやりとりの方が、この話よりも、どぎついが、それはあまりにもビジネスライクで、話としては面白味がない。

M派実行グループの雄、春木君の片りんを今回は紹介したが、これはまだほんの序の口であることをお伝えしておく。

×

×

少年とオシメ



——（四歳になっておもらし）——

岩 手 信 夫

毎日新聞社発行（昭和41・6・30）の「健康面談」という名の本の中に「四歳になっておもらし」と題して、私にとって実に興味ある問答が載っています。少し、その要点を引用させてもらいましょう。

なったほどもです。……以下略……

……中略……

（医師）いつごろから歩きました。

（母）お誕生のころですね。歩き始めてもおもらしの回数が多く、いつもぬれているのでおシメをパンツに挟んでおりました。……以下略……

（医師）それで、一日の生活は。

（母）……中略……朝は七時半頃おきますがねがめが悪くてなかなか蒲団から離れませんが……。……中略……夕食後はまたテレビを見ますが九時半ごろ寝ます。寝るときはおシメをしておシメカバーをつけてやります。私た

ちは十一時ごろ寝ますのでその時おこします。が、ぬれていればおシメを替えるだけで済ませてしまいます。

（医師）それっきり朝までおこしませんか。

（母）はい。……以下略……

（医師）……中略……このお子さんは排尿に関しては赤ん坊のころと変わらないのです。だから、もう一度白紙に戻してしつけをする必要がありますね。その要点だけを申し上げます。まず、夜おムツとおムツカバーをするのが一番大きな誤りです。これをしている限りなおりませんよ。おムツをつけるということには、おもらしをしてもいいってことを暗黙のうちに親がみとめていることだから、始めのうちはお蒲団を汚されて大変でしょうが、今夜からすぐ取って下さい。……以下略……

私はこれを読んで、正直なところ羨ましく感じました。

何のためらいも無いかのようにおシメカバーをつけてやる親の、素直な愛情が素直な表現になったのでしょうか。治療法やしつけの方法を医師から教わろうという姿勢が、この文面から見られるでしょうか。途方に暮れているというのでもないようです。投げやりでも

（主訴）四歳七箇月の長男が生まれつき排尿の間隔が短く、自覚しないでもらしてしまいます。夜中は未だにおシメをあて、二、三度取り替えていますし、昼間も絶えずズボンまで通してぬれています。以下略……

（医師）生まれた時のことを話して下さい。

（母）……中略……一年たつと健康優良児に

ありません。こんな子を持ったのが恥かしいという気持など、全く感じられません。この両親は、わが子を誇りに思い、自分たちの育児法の正しさを信じているようで、現実を冷静に見つめ、おシメをわが子の生活の必需品と割り切り、当然のこととして使っていると見えます。

この相談を提出した動機は、現状を公表して、自他ともに認めてやりたいという気持ではないかと思えます。

たしかに医師の言うように、この親は、おもらしをしてもいいと暗黙のうちにみとめています。

普通の親は、粗相を防ぐ手を抜いて粗相を体験させ、それを勿体ぶって「許し」てやることで、子供に「貸し」を作るものです。これは教育的に立派な態度と思いますが、何かよそよそしい感じがです。一方で、この両親はおもらしを自分たちの権威づけに使わない点で、人間として魅力があります。

おもらしを取引の具に供することは私の大嫌いなことです。この両親は、おもらしの子どもにおシメをしてやり、粗相を無くした上で対等の関係をきずいています。昔、武田信玄に塩を贈った上杉謙信の人間的魅力が思い

出されます。

親がそのような良い態度を取るに至った原因は子どもの方にもあります。親がそのような態度を迷いなしに取れる背景は、子どもの方で用意しています。

それは終始一貫しているということです。

一貫していないこと、即ち、時々おもらしをするということは、深刻な悩みとなって苛立ちの原因になります。この子は、毎晩、確実におもらしをするからこそ親も落着いていられるのです。おもらしをしなくなる望みを全く抱かせない点が良い所です。三歳ごろは、親もあせったに違いありませんが、四歳七箇月の今は落着いているのです。育ち盛りのわが子について親が努力するのは、粗相の防止ということであって、おシメを外すことではありません。この年になっても毎夜二、三度取替える苦勞をいとわぬ様子からそれは推察できます。さもなくば医師の指図を仰ぐまでもなくおシメを廃し、同じ苦勞を蒲団の始末に注ぐ筈です。

ところで両親が蒲団よりおシメを選んでいる以上、この子が赤ん坊から脱けられないことは決定的です。昼間は意識的に大人の真似ができるので事態は改善されるでしょうが、

夜は本性を暴露してしまうでしょう。

ところで、現在その少年は満九歳になっている勘定です。私はその物語を、これだけでは終わらせたくありません。

○

(母) 四歳の頃は昼間ズボンまでしみ出していましたが、大きくなって恥かしがるようになりましたので、カバーにおシメを挟んで穿かせています。外出時は腿回りが二重に締った総ゴムパンツを穿かせ、中にはおシメを固く詰めてやります。ゴムが伸びますのでお手洗いでそれほど不自由を感じません。余ほど気に入ったらしく、帰宅後もなかなか脱がうとしません。可愛い感じなので私も脱がせたくはないのですが、太ももの肌を守ってやるため、仕方なく脱がせることにしています。

(医師) もらし方に特徴がありますか。

(母) 少しずつしみ出して来るのではないようです。こらえる力が弱いのと沢山貯められないために仕方なくもらすようなのです。また、何かに気を取られている時もらしてしまします。

(医師) 頻繁に排尿しますか。

(母) はい。三十分には一回はお手洗に行っ

ています。

(医師) 間違いなく遺尿症らしいですね。ところで夜はどうですか。

(母) 九時半ごろ寝ます。寝るときはオシメをつけてオシメカバーで包みます。私たちは十一時頃寝ますので、その時カバーの中を手を入れてみます。ぬれていたら二、三枚追加し、ぬれていなければそのままにしておきます。

(医師) 夜中に何回、起こしますか。

(母) 一度も起こしません。昔、起こすように言われて、しばらくは起こしてみたのですが、痛々しいので見ていられなくなり、や

めてしまいました。

(医師) 朝のめざめは。

(母) いつまでも床の中にいたがります。私がオシメをひらくのを持っているのです。オシメを外すと元気良く起き上ります。

(医師) 飲物は制限していますか。

(母) 自由に使っています。でも無関心ではありません。様子を見ていてオシメの枚数を加減しますから粗相はしません。ただし年々必要枚数が多くなって行く感じがします。主人は、成長のしるしだから喜べと言いますが洗濯するのは大変です。オシメカバーだって普通の病人さんのようなのでは不恰好で困り

ます。もっと可愛らしい感じの、それでいてどんなに寝相が悪くても粗相しないのって無いのでしょうかしら。

(医師) うちはおシメカバー屋ではありませんよ。相談料は無料にしてあげますから早々にお引取り下さい。さあ。

○

私が育てた物語はお医者様のお気に召さなかったようです。怒らしてしまうとこの次に行く時に困りますからこの辺でやめます。そして、あの子が今後、体験するであろうピンチを、いかに切抜けたらよいか考えてやることにしましょう。

見せる雑誌への後退?

菅 原 敏 夫

— 読 者 の 警 鐘 —

最近の本誌は『提言』流行^{バヤ}りで、正に『石を投げれば提言に当たる』の形容がピッタリで辟易の感さえある。

提言のなかで、もっとも風当たりの強いのは不世出の名作『花と蛇』に集中しているようだ。『提言』というカッコいい言葉を隠れ

みのに、読者諸氏は、やれマンネリだ! それ繰り返しだ! と勝手な能書きを並べているようだが、それならオマエも書いてみると、ボクは、あえて言いたい。

なぜなら、創作のジャンルが故に、無限の自由を相手に、如何に創作することの苦しさ難しさがあるかということがわかるからだ。

創作することによって、その原稿用紙のマス目を埋めていくことが、如何に苦痛を伴う困難な作業であるか身をもって知れば、超マンネリだ! などと、おこがましいことは言え

ないのではないだろうか。

また、最近号に『花と蛇』の贋作を懸賞募集し、そのなかのアイデアを抜萃……云々と提言していたのがあったが、これなど、悪意はないにせよ、これほど作者を冒瀆し、他の執筆者をバカにした暴言もないだろう。

断続的にはあるが、八年間も連載されていけばマンネリになるのが当たり前であって今更、ヤイノヤイノと騒ぐ方がおかしいと思う。今や、本誌のバックボーンであり『花と蛇』が連載されているが故に、その魅力にひかれて毎号発刊される度に何十、何百人（あるいは何千、何万人かもしれない）かの読者が愛読している現状と、過去に、これほどベストセラーになった傑作もない実情を考慮すれば、自ら価値判断が出来るのではないだろうか。

かくいうボク自身過去において『花と蛇』のファンであった事実。そして、現在に至っても団鬼六氏の大ファンの一人である。

今更、ボクの愛読歴を披瀝するつもりはないが、十数年、本誌と親しんできたその間、団鬼六氏が、まだ花巻京太郎のペンネームで寄稿していた頃からのファンであり、本誌に『花と蛇』が連載される以前は、ただ興味本

位に不定期購読していた本誌だが『花と蛇』が連載されるや俄然、購読意欲が増し、それまで漠然としていたSM概念が吹っ飛び、これこそ正しくSMの真髄だと確信し、定期的に毎号購読するキツカケとなり、それ以後、精神的に自分自身も救われた結果になった。

現在でも八年前の感激は忘れられず、毎号本誌の目次を開く度に、まるで『初恋の人』に会ったような、甘ズッパイ疼きに陶酔する『花と蛇』である。本誌が存続する限り現在のオリジナル・スタイルで永遠不滅の名作として残してもらいたいものだと思っている。

○

早いもので本誌からグラビアが廃止され五年にもなるが、その間『見る雑誌』から『読む雑誌』へと見事に脱皮し、更に『読ませる雑誌』へと発展した今日、その内容は近年まれにみないほど充実し、バラエティに富み、脱皮発展以前なら特定の執筆者でしめられていた本誌の内容だが、現在では読者ぐるみの活動で、新しい風俗文献誌として大衆を反映している。そこには、一部のエリート的な風俗文献誌としてではなく、常に読者の真実の叫びを聞き、大衆の中に生きる本誌の力強い姿勢が感じられる。

しかし、残念ながら最近の本誌の傾向としては、いささか『見せる雑誌』への逆行のきざしが多少、感じられる。

テレビでさえSM的要素の強いコマーションがボツボツ見受けられる今日この頃だが、これなど現代の世代が余りにも視覚的、刹那的表現を求める故に起こる現象かと思う。

また先日、見るともなしにチャンネルをヒネクツていたら、突然ボクの視野に強烈なムチ打ちと共に11PMのムチ打ちショーのシーンが飛び込んできた。そのまま映像を注視していると、出演者の中に本誌の双壁をなすT氏を始め、A氏夫妻を交え、ぐっぐっていたが残念なこと、その内容に至っては評論家氏の独壇上であった。

人間、誰しもこのような場に出ると弱いもので、普段、思っていることの半分も口に出ないのが常であるが、本誌の代弁者であるT氏には、その場のムードをブチ壊してでも真実のSM概念を論じてもらいたかった。しかし、その場のムードとしてはA氏夫妻の、ショービジネスにのっとった商業主義的な発言が水をさした形になった。すなわち、「私達夫婦がSM行為をショービジネス化したのはただ単に現時点で流行っているからで、商業

主義に徹している」と、A氏夫妻は語っていたが、その言葉を聞くに及んで、ボクは、すっかり不快な気分になり、番組自体が色あせて見えた。

余談になるが、何年か前のテレビ番組「プレイボーイ論」で一躍、名を売り、アツという間に小説を書き、数年後には直木賞をカッさらった野坂昭如などは例外中の例外であるが、そこには、計算されてはいるが確固たる信念のようなものが感じられた。

現在、落・ち・目・の・ズ・ロ・スと云々されているSM映画界にしても、同じようなことが感じられる。そこには確固たる信念を持った映像作家がいないことで分かるような気がする。

SMシリーズで、あれだけ騒がれた石井輝雄監督にしても、単に会社の企画と現在流行っているという理由だけで、製作を引受けたに過ぎず、それにひきかえ「好きでSM映画を製作している」と、テレビで語っていた若松孝二監督の方が、その気骨だけでも、はるかに買える存在だが、事ここに至っては、最早SM映画の衰頹、絶滅も、時間の問題のような気がする。

○

過日、フランソワ・ド・サド（通称マルキ

・ド・サド）原作『悪徳の栄え』の訳者、及び出版元に対する、最高裁の有罪判決が確定したことによって、法国家の現状では、グラビア復活にしても、内容描写にしても、まだその時期にきていないことが推察できる。

しかし、諸外国の判例をみると、内容的に芸術性（あるいは思想性）が加味されていればワイセツ罪には問われず、そこには文学書としての判例がでている。今回、最高裁の下した判決内容をみると、十三人の裁判官の内五人（実質的には六人）までが無罪の判決をだしたが、僅少差によって有罪が確定したということである。このサド裁判が数年後に開かれていたら、恐らく逆の結果になっていただろう。

本誌の内容にしても転換期に来ていることはたしかだが、ここで冒険をおかすより現行の編集方針で突き進む方が賢明かと思う。数年後に、その転換期が来たとしても、ただ単に過去に戻るのではなく過去の経験を生かして、将来を熟慮したうえで新しい風俗文献誌として、芸術性にのっとった月刊読本となってもいい。なぜなら「読み捨御免」とばかりにウワツツラをなせるだけでゴミ箱へ直行す

る昨今、流行りのマンガ本や、週刊誌のたぐい同様のものに、ひとつ間違えばなりかねないからだ。

現時点では、所詮SMはアウトサイダーであり、そこにSMの隠された神秘性があると思う。

本誌がもし又『見せる雑誌』へと逆に発展し、SMが余りにも一般化して、日常生活の中にまで

「私、Sヨ。どうぞよろしく」

「どう致しまして。私、Mなのヨ」

と、いう会話が、ささやかれたらと思うとボクにはゾツとするようなことだ。

最後に本誌存続の可能性について私見を述べるなら、従来の編集方針で臨むべきであり現状維持の線を確保すれば、将来の道はヨリ有利に開けることと思う。〈FINE〉

○ 後記 ○

ダラダラ、とりとめもないことを述べてきたが本誌の永久的存続を切望し、我が人生の伴侶とする所存の余り、いささか主観論に走ったことは否めないが、一読者の「警鐘」として御笑覧あれば幸いかと思う。



吞 み て え な

フエチコント

戸 塚 四 郎

夜になったばかりのシブヤの町は、ウィークデイなのに、たいへんな人出でした。

街頭の有線放送のスピーカーが、とっぜんにぎやかに鳴りだしました。

「いい湯だな……いい湯だな……」

誰の作曲か知らないが、いかにも浮々しちまうC調のメロディです。

栄一は、そのフシに合わせ、

「呑みてえな、呑みてえな……」

小声で唄ったら、心が晴れてきます。

呑みてえと言っても、ウイスキーやビールじゃありません。まして、ミルクや、サケではないのです。お判りですか？

栄一は、ことし二十六才。ギンザの広告代理店のセールスマンでした。

「誰か、シンミリ呑ましてくれねえか」

夜空をバックの、ハチ公の銅像を見上げて

うたうと、実感が溢れます。

「呑まして、あげようか」

ネオンの光を横顔にあてた、ゾツとするよ

うな美人ちゃんが、寄ってきました。

としは、そう若くないようですが、和服の

よく似合う、小柄な、目のさめるような美ば

うの女性です。

「うれしいや、呑ましてくれるか」

「ああ、呑ましますとも」

栄一のところを見ぬいているように、おねえさんは答えてくれます。

「ハウマツチ？」

栄一は、いくらだい？ と念のため問い返

しました。

渋谷のレディはとてもザックバランです。

相場をきいても、「マァ失礼ね、レディに

向かって」なんて、おこりません。

「あんたなら、三本だね」

案のじょう、コンピューターみたいな返事が返ってきました。

ナミダの出そうな安さでないの。

いまの時間なら、どうしても五本。学ワリ

でも四千より安いのはザラにいないのに、三

千とはナカせます。

なぜかしら。

「こんやは、イツセイなんよ」

うまいときに来合わせたもの。ぶすいでおかない人が、目を光らせてるんで、早いと

こズラかる必要がある。三千なら、マアマアというダンピングなのでしょう。

「ドヤ代は別よ」

まあ、いいでしょう。千円くらいは、このさいモンダイではないや。

栄一は、吞ませてくれるという美人ちゃん、恋人きどりで肩を並べます。

「あんたのカバン、もつわ」

会社支給のソフトケースには、金目のモノなんか入ってないのに、女性はヒヤカシのトングラをおそれてか、ていさいよく人質？みたいにケースをとりあげると、さつさと歩きだしました。

「タクシーといきたいけど、モッタイないから、歩くわ」

いうてくれますね、オッカサン。

ちゃんと、こちらの足もとをみすかしてやるみたい。

「知りあいのウチよ。シモタヤなの」

どこへでも、こうなりや、お供しますよ。

「ここよ。五百円ちょうだい」

宿代の前払いはいいけど、モノすごく安いじゃない。シラミでもいるんじゃないか、なんて気になります。

そつとカンバンをみたら、

『人事百般相談所』

なんて、ハッタリの、カマボコ板が軒にうちつけてありやがる。

「ただいまあ」

彼女は、一と声かけて、さつさと、クツをぬぐのです。

トントンギシギシとのぼる階段の、見上げる、おしりの形のよいこと！

（ああ、これで吞ませてもらえるのか。うれしいぜ）

栄一は、そのおしりに顔をくっつけんばかりに、あとに従いました。

○

「もう、張って張って、痛くてしょうがないやしない」

彼女は、うすぐらい電灯の下に、上半身をむきました。

痛々しいほどのおやせですが、二つの丘は異常な発達ぶりです。

「さあ、うんと吞んで」

話がちがう、と気がついたのは、そのときです。

「あたしのは、栄養たっぷりなんだから、三マイじゃ安すぎるぐらいなんだよ」

栄一が吞みたいのは、それじゃないんです

が、なにかのカンちがいなんでしょう。

「おや。ナード、コレじゃなかったの？」

栄一が、じぶんの希望をそっちよくに述べたら彼女は、わらいだしました。

「よしなよ、そんなもの。バイキンがいるよそれよかこれを……」

彼女は押売りに転向します。

「みてなさいよ。いま、ママが、いいことしてあげるよ」

立てひざをうごかすと、半間の押し入れに近づきました。

古ぼけた箱をあけると、中から、赤ちゃん用のケープやら、よだれかけやら、ピンクの小さなマクラやら、金魚とケロヨンのおモチヤやら、ベビー毛布やら要するに赤ちゃん用の世帯道具一式。

おっと、だいたいなモノを忘れるところだった。白いもめんのオムツと、ゴムのオムツカバー。それから哺乳びん。

どうやら彼女の眼には、栄一が赤ちゃんに見えるらしいのです。

「あたしのかわいいベビーのものなの。死んじまったけど」

この室は彼女が借りているのだそうです。そして、生まれて一年とちょっとで「ママを

のこして、アッというまにサヨナラさ。一と月前の雨の晩だったよ」……とか。

パパは？ と栄一はききかけて、口をつぐみました。カンケイないことを訊いて、叱られたら、つまらないでしょう。

気の毒なのはとにかく、栄一としてはすでに三千五百円投与しています。

栄一は、人にはあまりいいたくないが、お察し通りの願望者でした。女性にあこがれるあまりの代償行為だそうですけど、のみたくてたまらないときがあるのです。ちょうど今晚もその周期に当たっていたのでしよう。

せっかく、うまく事を運んできたのに赤ちゃん代りにされるとは、けたくそのわるい。『こうなりやあ……』栄一は、テコでも動かねえ、と改めて心にきめました。いまはやりの坐りこみをきめこんだわけです。

「アンタも、しつこいねえ。どうせ、どっちだって、あたしのカラダから湧くんだよ。甘いだけトクじゃない」

彼女も、あとへひきません。

「いい子だから、いうことをききなさい」

都合のわるいことに、もう栄一は、上衣もシャツもかなぐりすて、パンツいちまいになっちゃってました。

呑むだけなのだから、そんな格好にならなくてもいいのですが、以前に酔ったおんなのこに頭からひっかけられ、月賦を払い終つてない上衣もズボンも、グシヨぬれにされた、苦い経験があるのです。なれないコは、どうも見当をまちがえて警戒が必要なのです。

パンツいちまいで、ひっくり返った栄一を彼女は、楽しそうにみつめてましたが、いきなり「ベビーちゃん、オムツしようね」というなり、ウムをいわず、本ものの赤ちゃんにあてるみたいに、オムツをあて、カバーまで、ガッチリかけてしまいました。いや、その早いこと。

小柄で、細いヒップの栄一ですから、どうやらかけられたのでしようが、いささかキュークツです。

「それじゃ、服も着せてあげようね。フードをかぶって、おお、いいコ、いいコ」

おどろきましたね。大のおとこに、ベビー衣装一式を着せて、あやすのですから。

でも栄一は、そんなことされているうちにサイミン術にかかったみたいに、だんだんと彼女がママみたいにみえてきました。

「ボーヤ。マイベビー」

こうなりや、ものは、ついでです。

○

ママは、やっと、シコリがほぐれたらしくおちつきをとりもどしました。

「あんた、ちがうほうが欲しいのね」

ママは、きげんよくいうのです。

「この室、トイレないんよ。下までいくの、めんどうだし」

いたずらっぽく、いいながら、ころがって哺乳びんを手にとって向こうをむきます。

「へへへ。ご注文のもの」

さすがにテレくさそうに、冗談めかし、ちゃんと乳首をかぶせて渡してくれます。

おどろいたママさんもあったもの。下のトイレまでおりるのがめんどうだってんで、哺乳びんを代用にしようというのですから。でも、なれているのか、手ぎわよく三本の哺乳びんをみたしたお手並みは、おみごとです。

栄一ボーヤは、すっかりうれしくなっちゃいました。そのうえ

「赤ちゃんが哺乳びんもっちゃおかしいわ」

そういいながら、やさしく吞ませてくれようとするのだから、栄一もおとなしくならざるをえません。

「ボーヤも、お洩らししたかったら、そのままやっていいのよ。オムツしてんだから」

ママは、やさしく言いました。

ベビーは、素直に従いました。

さすがにママともなれば、ベビーの表情がわかるらしいですね。

「そうそう、その調子」

ママは、けしかけながら、哺乳びんを、しきりに、栄一の口のところにもってきます。

栄一は、すばらしく幸福でした。

いつのまにか、三本の哺乳びんは、カラになっていました。

「こんなもの、どこがいいんだろ」

ママは、不思議そうにいます。

「どこって、きかれても困るんだなあ。ただキブンなんさ」

ベビーは急速に成長したようで、生意気に口を利きます。

「ドクじゃないの？　びょうきになったら、どうするのさ」

「いいじゃないか。スキなものくらって、のびるなら本望さ」

「ボーヤ、えらいねえ。気に入ったな」

彼女は、心から感心しちゃいました。

世のなかには、いろいろな趣味家がゴロゴロしてるんだわ。そんなものにあこがれるのは案外ロマンチストじゃないかしら、という

ような気持になったのかもしれない。

「もうすこし待っててごらん。後続部隊が出るかもよ」

ママは、だんだん真剣な目つきになってきました。その言いかたには、はじめのような

カラカイの調子はありません。

「オムツはどう？　ぬれたら、きもちがわるいでしょ」

きもちがわるいどこのさわぎじゃありません。カバのなかは、ビワ湖みたいに、波音が起こってるんだ。

でも栄一は、もういちどママに甘えたくな

っちゃいました。

「哺乳びんなしでなきゃ、つまんねえや」

「ゼイタク言うんじゃないの。いくら私でも初対面から、そこまではできないわよ」

こんな会話を、だらだらつづけても意味ありません。駅から、バスで三キロも先の団地のわが家まで、マゴマゴしてたら、バスがなくなっちゃいます。

○

「またおいでよ。いつでもベビーごっこしてあげる」

うれしいことを言ってくれます。まんざら嘘でもなさそうです。

ママは、表通りまで送ってくれました。

これが、却ってわるかったのです。

スイスイと、表通りへ出ちゃったので、路地をどう曲るのか、栄一にはわからなくなっちゃった。

イヌなら、要所要所に、オシッコひっかけ

て、目印にするところですが、栄一はもっぱら貰いたいほうで、そこまで、心は回りませんでした。

あれから何回も、見当つけてさがすのだけど「人事百般相談所」のハッター看板が、どうしてもみつかりません。

くやんでも、手おくれ。あのやさしく、言うことをきいてくれたママには、それきり会えないのです。

このまちのどこかで、きっと、ママもベビーをさがしているでしょう。しかし、会えないときは会えないものです。

へ呑みてえな……

今夜も栄一は、あれいらい日課になってい

るハチ公広場の、つめたいベンチに腰をおろ

して、小声でうたいながら、ママをさがす

です。

会えるといいのですが……。



創 作

わ る い ヤ ツ

予 世 場 良 三

前からのゴタゴタなのだが、約束の期限の過ぎた近頃、相当露骨ないやがらせが向けられ始めていることは、礼次もよく知っている。

○

礼次が帰るなり浴びせられたのは「もう、わたし、いやッ!」という泣き声だった。何が「いや」なのか、礼次にはピンとくる。

「またか?」

「もう、とっても我慢出来ない」

細君のススリ泣きと、ヒステリー症状の叫声とのミックスされた訴えは、発音の明瞭さを欠いていたが、慣れている礼次の耳は、それを言語に還元して聞きとった。

問題は家の件である。もう一年ばかりも以

上下合せて五間、三十畳に余るスペー

スに炊事場、風呂場、大きくはないが裏庭もあるし、植込みぐらには十分の表仙栽を備えた一戸建。分不相応とも思えるこの家を、

礼次は十年近く以前に、前住者から格安の権利金で引継いだ。その時にも多少ゴタゴタしたが持主との話し合いは前住者がつけてくれた。貰いたての細君も当時「アナタ偉いわ」と見直したように感嘆してくれた家である。

その家が、住んでいる彼には一言のことわりもなく転売されたのだった。礼次は憤然としたが、買い主が隣家の質屋と聞いて、多少

は安心した。近頃でこそ、めったに借りることもないが、四、五年前まではちよくちよく利用したこともあるし、隣人としての交際も深くはないが普通にはしている仲だからだ。

ところが、改まって「私が譲り受けましたので……」という通告と同時に「息子が嫁を

もらいましたんでナ。なるだけ早く……」つまり明け渡しという申入れを受けたのだった。

少なからぬ引越料の匂いだけは嗅がされていた。しかしこの家は明けたくない。礼次は返答をしぶった。次に質屋のオヤジが来た時、期限付で明け渡しの約束を迫られた。引越料は倍額をチラツカせる。

以後、何度も、物柔らかな口ぶりだが、契約書を作れといってきた。彼が拒否すると、ゴリ押しはせずにくすぐり下るが、二日もすると、またやってくる。笑顔を見せての話し

りだが、そのネチツコさに根負けをした礼次は、何とかなるだろうという気持で、十カ月後に明け渡す口約束だけをした。しかし、もともとそんな当ても意志もない礼次は、契約書だけはなんのканのいって書かなかった。「こっちは居住権があるんだ。とことんまでいきやあ、勝つに決まってる」

礼次は、心配げな細君に胸をたたいてみせた。細君は頼もしげに抱きついてキスをし、細紐の束をブラブラ振ってみせた。四つになる長女が、寝床で不思議そうに眺めていた。細君はうろたえて「早く寝なさい」と、罪のない子を叱りつけた。

それが、一年余りも以前のことだった。

○

礼次は、言を左右にして居坐っていれば、質屋は裁判沙汰にするだろうと思っていた。契約書の話逃げたのも、その時の用意だ。居住問題では、住んでいる者に有利な判例のいくつかを聞き知っているから気丈夫だ。十カ月の口約束を破ってからは、質屋のオヤジが家賃を受取らなくなったので、供託というテを使っている。

ところが、早くしろと思っている裁判沙汰には一向にならず、子供が遊びに出ては何か

に驚いて泣いて帰ったり、細君が気味悪がったり、悲鳴をあげたり、ということが度々起こるようになったのである。

朝、戸を開けると、玄関のまん前に、犬のクソと思えるヤツが小山をなしている。勝手口のゴミ容器が散乱していたり、家の物ではない多量の魚の臓物などが扉に塗りつけられている。夜中に声のない電話のかかるのはしよっちゅうだし、ドンドン表戸が叩かれてとび出してみると、だれも居ない。

そういう異変のものは隣の仕業と察しはつくのだが証拠は何もない。

「アナタは会社だからいいけれど、一日中、家に居て、表へ出るのにもいちいち隣の様子を伺ってから、という私の身にもなってるよ」

もちろん、細君の気持もよく判る。

その日は、彼女が掃除していると裏庭に何か投げ込まれた様子。出てみると鼠の死骸。どうしようと思っている眼の前に、裏扉を越して犬の死骸が降って来たという。

「チクショウ、汚ねえテを使いやがって。こうなったら意地だ」と、礼次は決心した。「おまえたち、しばらく田舎へ行ったらどうだ。俺は、ひと戦争してみる」

細君は、一応は「でも」といったが、内心

はそうしたくってウズウズしていたらしい。

○

「あなた一人を残しとくのは気懸りだわ」

細君は、礼次の縄止めが済むや否や、後手から連結して深くびれを走らせている胸を大きく反らし、礼次の膝に倒れかかった。礼次は細君の顔を両掌に挟みこんで唇を合わせながら、投げ出されている細君の両足首を揃えて腰紐を巻き始めた。

「これがしばらくのお別れプレイだ。何も考えずに打込めよ」

膝を立てて、くくられた足首を太腿に繋がれながら細君は、反りかえった顎をひいてコックリと頷いた。

「う、うわき、しないでね」

縛り終えた礼次の掌におおわれ、紐に噛まれて四ツ山になった乳房が大きく波打ち始めた。礼次は、螢光灯の光に映える細君の、その被縛裸身に、無上の愛着といじらしさを覚え、心の中で誓った。

「ぜったいに、この家は守る」

いとしい肉体が、不自由なもだえをみせて礼次を招く。

「おまえだけだ。俺のこの変な要求を、全身で受けとめてくれるのは、おまえだけしか居

ないんだ！」

突き上ってくる激情が、礼次の全神経を縛り上げられた柔肌に傾倒させ、裏庭のかすかな人の気配などに気づくゆとりはなかった。

そして翌日、彼一人残しての疎開作戦は、細君の、さも済まな気なポーズと共に、敏速に実施されたのであった。

○

この悲壮な「夫婦の別れ」を、その原因たる質屋のオヤジがどうとったのか、イヤガラセによる被害はピタリと止まった。

いきごんでいただけに肩透かしを喰った感じで礼次は少々不気味だった。だが油断はせず、何か投げこまれたらすぐ飛び出せるように裏塀の切戸のこわれている錠も直さず、勤め以外の時間は出来るだけ待機した。しかし四日、五日と何事もなく過ぎた。彼は、だんだんバカくさくさ思うようになってきた。

○

「あらッ」

隣の質屋を横目に、足早に通り返けた三ツ辻の角で、あやうくぶつかりそうになった女は、礼次のすぐ眼の前で声をあげた。プーンと良い匂いが鼻をくすぐる。

「よくお会いしますわね」

礼次が口を開くまえに、女がニコリしながらいった。ゾクゾクとする艶めかしさがこぼれそうな笑顔である。二十二、三か。水商売の女ではなさそうだが化粧は少々濃厚だ。近頃の娘は大胆である。

「そ、そうですね」

礼次は、どきまぎしながら相づちを打ったものの、よくお会いした覚えはなかった。

「お帰りの時間も、いつもほとんどきまった時間ですのね」

「ハア？」

「いえ、出勤もお帰りもきまった時間の方って、いいですわ。奥様がお羨しい」

「いや、そんな……」

「何をいい出すんだ、この女。しかし美人だなあ。こんな女を一度……」

礼次のうろたえた頭の中に、十日前に別れた細君の裸形が、ありありと浮かんだ。それが目前の女とダブった。一瞬後、細君は消えて、女だけが残っていた。

「ご出勤でしょ。駅まで、よかったらご一緒にしません？」

彼の視界にチョット体をくねらせた女のしなが一杯になった。頭の中の裸女が、縄をまとって同じポーズをとった。諦めている楽し

みが、よみがえった感じだった。あの夜限りで、しばらくは忘れようと決心した感情が、俄かに火を点された想いで、顔に血が上るのがわかった。礼次は、いつもは弁当を入れているが、あれ以来は、ただ習慣で持っている空のカバンを前に廻して持ち直し、見返っている女と肩を並べた。また、良い匂いがプーンと彼を包んだ。

○

「あの女、どこで会ったんだっけ。あれだけの美人だ。会ってりゃ覚えてない筈はないんだが……」

帰宅の電車に揺られながら、礼次は今朝の女のことを想っていた。

「あんな美人を一度、思いきり縛ってみたいもんだ。さっきの映画の中の女より、きっと色っぽいポーズをとるに違いない」

彼の臉の裏に、帰っても誰もいないわびしさを思い、久し振りに見てきたピンク女優の縛られ姿と、今朝、瞬間的に連想した女のそれとがダブって浮かんだ。不思議に細君の姿は現われなかった。

○

「おはようございます」

翌朝、彼は出勤途上で声をかけられた。振

り返った視線に、昨日の美女の笑顔がとびこんできた。

「きのう、お帰りは遅くなられましたの？」

「ハア？」

「いえ、お会いしませんでしたもの」

「ああ、きのうは一寸……」

「時計の振子みたいな俺のことを、どうして知ってるのさ？」

「あたし、行き帰りに、あなたのお姿を見かけるのが普通のような気がしてましたのよ」

ますます、謎みたいなのをいう女だ。

「たまにお見掛けしないと、なんだか時間を間違えているような気がして……」

クスッと笑うしぐさも色っぽい。

「そんなにいつもお会いしてましたか」

女は、さも心外そうな眸を向けた。

「魅力のない女って哀れですわね、毎日お会いしてたのに眼にとめてもいただけない」

「そ、そんな……」

「……もっとも、あたし、大抵はあなたの後から歩いてましたけど」

「なんだ。それじゃあ……ボクは前を見る眼だけしか持ってないから」

彼の必死にしぼり出したジョークに、彼女は美しい顔を見せて笑いこけた。

きのうは乗り換えの都合といってホームで別れた彼女が、今朝は一緒の電車に乗り込んできた。礼次は、その日ほどラッシュのすし詰めを有難く思ったことはなかった。

プーンと匂う芳香が彼の全身にしみ渡り、柔らかな量感がグイグイと礼次にもたれかかり、一つの吊皮に密着している手も、重なりこそすれ逃げようとはしない。袖口からのぞく腕の白い肌が電車の揺れるに従って彼の鼻先で震え、時にはサッと触れてくれるのだ。彼の手の空の鞆は大いに役立った。

その日、彼は、会社で小さなミスを二度くり返して課長から注意された。それでも、眼先にチラツク彼女の被縛像はつきまとった。

○

「いつも後から歩いてるっていったな」

駅を出るなり、礼次はキョロキョロ前後を見廻した。居ない。彼は時間を確かめた。いつもの定刻である。一緒に降りた乗客の姿が散った。

「今日は彼女が遅れたのかな」

彼はゆっくりとタバコを取り出し、ゆっくりと火をつけ、ゆっくりと歩き始めた。たしか、次の電車は十分後に着くはずだ。定刻を守るために、食堂に寄らずにきた空き腹がグ

ーッと鳴った。

「待ってみようかな」

ものの十歩も進まぬ内に、足は停まっていた。自然に振り向いて駅の方を眺める。

と、その視線一ぱいに、つい眼の前の喫茶と書かれた扉を開けて、手招きする彼女の笑顔がとびこんできた。

「お待ちしてましたのよ。今日は、あたし、一電車、早かったものですから……」

礼次は何かいおうと思ったが、妙にのどがカラカラの感じで、声を出せば笛みたいな音になりそうな気がして、ただペコリとした。

○

「私、今日は映画を観てきましたのよ。お勤めはお昼からサボっちゃった」

喫茶店を出るなり、彼女は礼次の肩に頬をすりつけるようにして寄り添い、囁くような話しぶりを始めた。

すでに薄暗くなっているのを幸い、礼次は思いきって、寄り添ってくる女体の肩に手を廻した。「払われるかな」と一瞬思いながら……。だが、とたんにぐっと柔らかな重量感が側面にもたれかかってきた。電車で押された時とは、また違質の感触だった。

「私、ときどき、あんな映画がみたくてたま

らなくなっちゃうの」

振り払うどころか、肩へ廻った礼次の手を彼女はふくよかな手でしっかり押え、頭を倒して、それに頬を寄せてきた。

がぜん、礼次の心中が浪立つ。

「ど、どんな……映画……」

ですか、という言葉がノドにひっかかる。

まるで体まで許し合った恋人同志のようなこんなポーズを、彼女はさも当然だとでも思っているように、夢見るような眸で礼次を見上げたままポツリと云った。

「女肌地獄……ピンクものよ」

ギクツとして、思わず礼次の足が止まる。

「女がメチャメチャにいじめられるのよ。ハダカでククラレテ……」

礼次の受けた衝撃動作にも、なんらの反応も示さずにもたれかかったまま、彼女の眸が礼次をじっと見据える。ただ、今は彼女の顔の横で押さえられた形の礼次の手が、ギョツと彼女の掌に握りしめられた。

「あんなにして、ククラレたら……」

彼女が呟くようにいうのを、信じられない思いで見詰めていた礼次は、突然うめいた。

彼女が、さっと顔をひねって、握っていた礼次の手指を、キリツと噛んだからである。

○

「奥さまは、本当に今夜お帰りにはならないんですの？」

六畳の客間で向かい合った彼女は、美しい顔を、ややこわばらして念を押す。

「大丈夫。チョット訳ありで、ボクが連絡しない限り田舎に居るんだ」

礼次はガストロブの炎を全開にしながらワクワクする気持をどうしようもなかった。

この美しい女も……と思うと、人間の性の不思議さが改めて思い知らされる感じで、自分の抱く、少なからざる背徳意識が、あともたなく霧散するのを覚えていた。

「いつごろからのなの？」

彼は、ときどきする気持を押え、強いて、さり気なく訊いたつもりであった。

「ハァ？」

しおらしく、さしうつむいていた白い輝くような美貌がビクツと振り仰ぐ。

「やはり、いざとなると固くなるんだな」

帰途に見せたあの大胆な挑撥と、ゾクツとする色っぽさは姿を隠している。

『アノウ私のような女でもいいのでしたら、一度括っていただけませんか？ 私、なんだか今夜は……。でも、あなたにそんなご趣味は

ないでしょうね』

そういつて、羞しげに顔を伏せ、礼次がS Mのウンチクを傾けてやると、自らキスを求めてきた情熱はいま、あの滑らかな肌の内側に押しこめられて、パツと燃え上る口火を探し求めているに違いない。

「妙な質問は、やめとこう。とにかく希望通りに縛り上げてからのことだ」

礼次はそう思うと、さっと立ち上った。

「いや、いいんです。それよか、ぼちぼち暖くなった。もういいだろう、始めよう」

彼女はその声に、さっと頬を染めた。初秋の夜の心持ち冷え気味な空気も、スト

ーブの炎が熱気をまぜ合わせた。もう素肌にもなじむ温度である。

礼次は、別れの夜、細君の肌を噛んだ細紐を捌きながら彼女の背後に立った。郷里で待つ細君に済まないと思う気持は、いささかも湧いてこなかった。よし湧いても、数等も上廻る美女を目前にしては、細君の存在を無視したい気持になるのも無理はないかも知れない。まして自ら縄を求めてきた妖精の媚態の前ににおいておや……。

「始めようよ」

じっと、身を固くしている彼女に、わざと

乱暴気味な手を掛け、肩をぐいと引く。

かすかに頷いて、彼女がツーピースの上衣を静かに脱ぎ、ピンクのブラウスをとった。

純白のシュミーズから、輝くような艶を待つ、透き通るばかりの桜色したふくよかな肌が、心中を現わすようにかすかな慄えを見せながら露わになっていった。

礼次は思わずゴクリと固唾をのんで、その音を聞かれなかったかと、うろたえた。

そのまま、彼女はチラッと振り向いて、両手を背中に組んでうなだれた。

「さきに縛って……。後は、あなたの手で脱がせて……」

やっと聞きとれるほどの小さな声が、礼次の押えに押えていた血潮の沸き立ちを一挙にあふり立てるに充分以上の力を持っていた。

○

その柔軟な肌は、ロープの半分以上も包みこんで、張りのある柔らかさを物理的に証明していた。

彼女は後手にした手首を括り合わされるとふんざりがついたらしく、二の腕から胸にかけられる細紐の動きを眼で追いながら、固くコチコチになっていた身ごなしがグツとほぐれてきた。上半身、シュミーズの上からだが

一通りの縄掛けが終り、スカートを脱がされる時に少しまた固くなったが、脱いでしまうとずっと積極的になった。

「シュミーズは裂きとってね、そのほうが気分が出ますから……」

「すこしもったいないが……」

礼次はチラッとミミッチイことを考えたが「暴力に憧れる女の心理」に触れ得た想いがして、更に上気が激しくなった。

力をこめて裂こうとした。しかし、いかにもおやかな手触りながら、ナイロンのそれは礼次の力では歯がたたない。

苦心の試みに失敗した礼次は、ハサミを持ち出した。

○

「とても気分がのってきましたわ」

彼女はウツトリした眼付でわが姿を見降ろした。ヒッソリと立つ後手の彼女のシュミーズはズタズタに切り裂かれ、大小いくつもの切り口から、艶々しい肌がのぞけるのが一層生々しい色っぽさを増していた。

「これは、また魅力的だ。こんなことはしたことがなかったからナア」

礼次は思いがけない新発見に陶然としていた。下着を犠牲にするプレイは、彼にとって

はじめてのことなのだ。

「この調子で、ブラジャーもパンティも切り取ってやろう」

礼次はハサミを持ち直した。

「これで一度、引廻わして……」

彼女のウワズツタ声が、礼次のハサミの機先を制した。

「ずいぶんプレイ経験があるらしい」

引廻しなどもしたことの無い礼次は、その申し出に彼女のマゾ性の強さをみせつけられた想いだった。

縄尻をとった。自然にそれを上下に一振りして声が出た。

「歩け！」

ズタズタ下着を、胸を締めつける縄目で辛うじて吊り留めているという感じの美しい女囚が、うなだれてよろける足を踏み出した。

○

礼次は、その部屋だけを一巡するぐらいのつもりだった。しかし彼女は、次の間にも行くことを望んだ。引き廻わし役が、引きずられる形で次の間の六畳に灯が点った。

ヒンヤリとした空気が、女囚の肌と、礼次の頬を包みこむ。上気している二人にとっては却って気持よかったに違いない。

女囚の足はさらにシキイを踏み越した。そこは玄関の二畳の間である。引き廻し役は制止もせずに従った。縄尻をとっている礼次の手が、玄関のタタキに素足のままとび降りる女囚の後手に引かれて、グイとひっぱられる感じだった。

「スリルまで欲しいのか？」

礼次は一緒にタタキに降りた。セメントの冷たさが足裏からつき上る。ガラス戸一枚の向こうは猫のひたいほどの表仙裁である。外の大道とあまり変わりはない。

「すこし外をのぞかせて……」

女囚はキラキラと潤んだ眸を礼次に向けていい出した。

「だってきみ、外はまだ人が通ってるよ」

「ほんの少しのぞくだけでいいんです。わたし……そのほうが刺激があって……」

礼次は、彼女のマゾはいよいよ本物だと思った。ただ、女を縛るだけで満足していた自分のサド的気分など、まるで幼稚極まるチャチな戯れに過ぎないことを教えられた感じであつた。

「外からみれば、このガラスに彼女の後ろの影がうつっているかも知れないのに……」

礼次はマジマジと彼女の美しい顔を見直し

ていた。

「縛られているわたし。しかも、こんなはずかしい姿のわたしがのぞいている前を、何も知らない人が歩いて行く……それがわたしには、とっても刺激的で……」

彼女は、礼次の視線をまともに見返しながら、彼がハツとするほどの大きな声で頼みこむ口ぶりをした。

礼次は思わず頷いて、ガラス戸の鍵をはずした。半ば驚嘆しながら……。

「ほんの少しだよ」

ガラス戸が二センチ程引開けられた。彼女はその隙間に眼を近づけた。そしていきなりその戸に足をかけて引き開けた。とたんに、けたたましい叫声をはり上げたのである。

「たすけてえー！」

びっくりする礼次は、握ったままの縄尻にひっぱられ、とび出したとたんに転んだ彼女の上に倒れ込んだ。玄関の陰からサツと黒い影二つがとび出した。同時に蹴りはずした形のガラス戸が、夜の家並みに激しい反響音をこもらせて砕け散った。

ガラガラ、ガチャンッ！……と。

○

影の一つが素早く礼次を押しつけ、縛られ

たままの彼女を抱き起こした。

ガヤガヤ騒ぐ近隣の人を、ささやかな門のところできい止め、皆の注目のうちに彼女の縄目を解き、持っていたらしい大きな布を着せかけ、「一一〇番を」という声の主をなだめ、言葉たくみに追い帰したのは、礼次の家の玄関脇にひそんでいたと思えない質屋のオヤジと、その息子であった。

○

翌日の夕方、近所の人々のヒソヒソ話の中を一台のトラックが荷物を積んで、礼次の家から出発した。

そして、その翌日から大工が出入りし始めた。一カ月程して、質屋の息子夫婦が近所に挨拶に廻る姿が見られた。配り物を貰った奥さん連中が、新妻の美しさをほめて噂し合う姿がみられた。

しかし、だれも、その新妻たる女性が、あの夜の被害者？とよく似ているとは気付いていないようであった。

(おわり)

カット・野江三郎

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

私と縄



三 条 和 子

最近、私は一人で静かな時間を過ごす時、自分自身でもよくわからない気持ちになり、妙な不安感にかられます。

この三年來の、夫から受けた馴致のためなのか、それとも私本来の性癖にこういう素質があるためなのか、時とすると心からの歓喜に咽びながらも、ボーッとした意識の中で、このままだと将来どうなるだろうか、という

漠然としたものに苛立つのです。夜毎のプレイには被虐的境地に浸り、ある瞬間には、私にとってはもう、プレイ抜きは生活は考えられないとも思う反面、この不思議な世界のことなどは全く無知だったのが、こんなことを考えるようになった自分に、つかみどころのない不安を感じてしまうのです。

夫は、みかけは全くおとなしそうで、人当

りも、とても柔らかく、そんなところに惹かれて結婚したのですが、こんなに優しい感じの彼がSM信奉者だなんて夢想も出来ないことでした。

最初、奇クを一冊みせられた時、私はただ変わった雑誌ぐらいで、さして驚きはしませんでした。でも一冊を見せた彼が居直った形で、結婚後初めて解いた荷造りの箱から取り出すのを見た時には、そのおびただしい数量にびっくりしてしまったものです。

その上、彼の何やらもっともらしいSM持論とやらを聞かされ、結論として『公共の福祉に反しない限り、第三者に害悪をおよぼさず、密室での当事者間のいかなる行為も、当事者の合意の上なら許容される』などと、超飛躍的法理論を押しつけられたときには、呆れながらも、そうかも知れないという気持ちもたしかにありました。

ここに、間違い（いえ、幸福かも）のもとがあったようです。

冗談半分に初めて受けたいしめ。夫婦の愛情を楯にとって、背中に組ませられた両手首に紐が巻きつき、胸に二重三重と締めつけられる縄目に身動きのとれなくなった私は複

雑な感情で夫のなすままになっていました。

痛くて、あさましくて、情けなくて、恨めしい。三年前のことですが、今でもその気持ははっきり思い出せます。それは、現在でも日によって、そんな気持になるときがあるからなのです。

でも、それがいつの間にか、さほどいやなことではなくなっているのに気がつき、自分の気持を疑ってみるようになりました。そればかりか、彼の留守中にお掃除などしながらふと、縄目を受けて彼の前に立たされているときのことなどが思い浮かび、頭の中までがカーッと燃え上がるような気持になることがあるようになってきたのです。

たしかそういう気持が湧き始めた頃でしょうが、縄目をひしひしと感じながら、彼の眼を縄目以上の痛さで全身に意識して、いわれるままにポーズをとり、彼のいいなりになることって素敵”と、心の底から思ったのを覚えています。

「こうして縛られているキミは、ウイウイしくてなんともいえないよ」

何度も同じようなことを聞かされた耳にもその時の彼の言葉は嬉しく響きました。

「あなたさえ喜んでくれるんなら、私、いつ

でも……」

といいかけたまま、私は彼の唇に言葉を奪われ、抱き上げられました。

高手小手というのでしょうか、背中に高々とくくり合わされた両手首。胸から腕にかけて何本も走っている縄目。その上、太腿から足首までキツチリ巻きしめられている紐。

そんないましめを受けて坐っていた私が、急に抱き上げられたのですから、縄目は深く肌に食い込み、手はよじれ、痛さはとても激しいはずでした。でも、その時、私は痛いとは思いませんでした。嘘いつわりなく、心の底から、”幸福”だと思えたのです。

最初に書きましたように、私の性癖にマゾの素質があるのかと思うのは、このことから始って、徐々にですが、うとましかったはずの縄目を受けることを、待ち望む気持が強くなってきたからなのです。

彼にとって、私を調教することは、ワケのないことだったのですね。

でも、縛られるということや、縄目の痛覚というものには比較的早く慣れ、むしろ好ましく思えるようになった私のマゾも、彼のいう同じS Mプレイでも、両手吊りの操り責め

や、後手のままの逆さ吊り、竹刀やベルトの叩き責めとなると、よほど燃え上った時でない限りは、耐えきれずにネをあげてしまいます。全面的に駄目というのではありません。

ただ、何かの原因で、快楽として身を投げ出し切れない時があるのです。縄目だけなら、いつでも恍惚を感じとれるようになった近頃でも、責めとなると、あさましさを、恨めしさが、苦痛と共に頭をもたげる日があって、プレイに没入出来ないことがあるのです。

それは、きっと私自身が”こんなことを繰り返していて、将来どうなるのだろうか？”という、漠然とした気懸りに迷っているときだと思います。それが証拠に、うんと燃え上った時には、めっちゃめっちゃに責めつけてもらいたいと彼にねだっているのですもの……

それなときの私は、後で思い返してみても、どうしても信じられないほど、打たれることに悦びを感じとり、しかも、はっきりと彼の「愛の存在」を意識しているのに気がつきません。たしかに変なことでしょうね、両手首を高く吊り上げられ、顔全体はネグリジェで包まれ、両足首を竹刀の両端に結びつけられた女が、打ってくれることを願い、悲鳴をあげてのたうちながら、この悦びを失いたくない

と真実に想い、ムチ打つ夫に“愛されて”いると感じとるのですから……。

でも、これはどうしようもない、私のいつわりない気持です。

この三年間、SMプレイを色々な形を取り入れて続けて来た二人ですけれど、二人に共通して言える事は、SMプレイはあく迄、縄掛けの伴う（手錠も含む）美的なものに集約していることです。

決して、その姿を鏡に映して見てヘドの出る様な、グロテスクなプレイは行なったことはありません。よく二人で話し合うのですが、浣腸とかオムツとか、神酒などといったものに、ほとんど関心がわかないのです。と言っても、私はちよっぴり浣腸には気を惹かれる時もあるのですが、彼は全く“縛り専科”なのです。

彼は、写真を始めてからは、特に構成に興味を持ち、一枚撮影するのに半日がかりということも、ざらにあります。女性の緊縛の中には、言い様のない美が含まれているようで、ヌードでも、着衣の場合でもその妖美がある限り彼は私を縛り続けるのだそうです。

彼の最近の傾向は、夜を活かすということ

ですが、夜中の一時頃たたき起こされ、素裸で後手にくくられた上で、彼の前に正座させられ、いつもの奴隷誓言を三回復唱した後、廊下を引き廻された上で内庭へ引き出されます。ここでの暗闇の内のSMプレイが気に入ったらしいのです。だから、写真はほとんどストロボを用いたものが多いのですが、夜のしじまの中に、白く輝く光線も幻想的で、シャッターの音だけが、耳にこびり付いて離れません。

日曜日など、これもプレイでしょうが、小さなエプロンだけで家事をしるとか、ネックスの様に首に鈴を付けているとか、いわれます。

写真の時も時間は長いのですが、彼のデッサンのモデルとなると、余計に大変です。縛られて、本当にじっと、二時間もそのままの形をとらされることって、SMを通り越え、泣き出したくなるほどです。

私自身に迷いのないSMプレイの時は、どんな厳しい責めの場合でも、彼の愛情が感じられてジーンと痺れる様な快感に溺れることが出来るようになったことは前述のとおりです。

でも、厳しいいましめを受ければ受けるほ

ど、更にもっと厳しい要求を重ね、お仕置の責めが激しくなればなる程、更に激しい責めを待ち望む、私の心を、身体を、最近ではどう解釈して良いのか分からなくなって来たのです。

全くこの世界を知らなかった時代と、今の変わり身の早さに、時とすると、身が萎縮してしまふのです。

安井夫人は如何だったのでしょうか。奇クによれば、私同様に従来は全くこの世界について、ご存じなかったようですが……。やはり、御主人様の手ほどきによるものではないか。お伺い申し上げます。

マゾヒストになり切る事が恐ろしいというのではなくて、人間って、そんなに簡単に変化するものなのでしょうか。私には、それが不思議でならないのです。

こんな私の苛立ちに反し、彼は何と幸福そうなのでしょう。完全と云っていいくらいに彼の奴隷になり切っている私を、愛し、慈んでくれる事に、感謝しながらも、反面、ちよっぴり恨めしく感じる今日この頃なのです。

（同封の絵は彼が私をモデルに描いたものです。写真はまだ羞かしいので送りませんが、この絵でよければ、使って下さい）



ルポルタージュ

妖精を鞭打つ

塚本鉄三

十一月号が発売になってから一カ月もした

頃、私は関谷さんから手紙を貰った。

この種のレポートを書いて、その御本人に読まれるのが私にとっては大の苦手である。

なんととっても、その時のことは関谷さんが一番よく知っている筈である。だからその御本人からの便りとなると私にとっては、嘘を書いたと叱られそうでもあるし、誇張したと云っては訂正を求められはしないかと冷々した気持であった。

そんなわけで怖々手紙の封を切ったのであるが、文章を読んでみると、私の心配も杞

憂にすぎないものであることがわかった。

△関谷富佐子さんからの便り▽

大分涼しくなっていました。その後お元気でございまして、私もおかげさまでつつがなく暮しております。

十一月号拝見いたしました。十一月号を手にしました時に、ある種の期待が私の心の中を占めておりました。

ページをめくった時、私の写真がバツと目の中へとび込んできて、思わず本を持つ手がわなわなとふるえました。

やっぱりあの時の事が、貴方様の流暢な文

章によって詳しく書かれていました。私の心の奥底まで見すかしたような心憎いまでの文章、私の想いのままが活字となって、そこにありました。あの時の瞬間瞬間をうつしとった写真が、その活字の間にのっています。私はむさぼるように活字を追ひ、写真をくい入るように眺めました。

胸が熱くなり汗ばんでくるのが自分でもよくわかりました。あの時の激情が、ここにもう一度、再現したような気持です。

たくましい殿方に自由をうばわれて大波の上にただよう笹舟のように、ほんろうされて



いる時、私はもう自分が何処に有るのか、感じなくなっております。これがマゾの心境でしょうか。でしたら私はマゾ女性です。

可愛がられて苦しめられる喜びが最高の感じが致します。

どうか貴方様の御都合のよい時、もう一度私を徹底的にいじめて下さいませ。私は貴方様の思いのままに、身も心も捧げて悔いなしつもりでございます。

それから一つお願いがございます。足をくぐられて逆さつりでむち打ちされている写真を戴きたいのですが、御送り下さいませんかでしょうか。左記の局留にて受け取りたいと思

いますので、よろしく御願い申し上げます。

なお、貴方様の御都合のおよろしき日、いつにてもお伺い申します故、二日でも三日でも私を監禁して責めて下さいませよう心からお待ちしております。場所は甲陽園駅と私の方から指定させていただきますが、日時は貴方様の御都合のよい日をお選び下さいませ。今月中でしたら、いつでもお伺いできます。

どうか貴方様のお気のすむように責めて下さいませ。

かしこ

十一月四日

便箋にすらすらと書かれた美しい文字を読

み終ると、私は明日にでも飛んでゆきたいような気持ちに駆られた。真白い餅肌の女体が鞭の下でうねり狂うさまが眼の底に浮かんできて矢も楯もたまらない。掌を当てればはりついてしまいそうな柔肌の白さ。その肉づきのよい肌に一旦皮の鞭を揮うと、きゅうと引き締まって紅を散らす美しさ。私はそんな妄想をふり払うように、頭の中でスケジュールを慌しく繰っていた。

九月に入ってから私は急に仕事の

方が忙しくなってきた。幼稚園や学校の行事について行くような時は朝早く家を出なければならぬので宮仕えの習慣のない私にはきびしかった。それ以外の時は仕事といっても大体が午後からというのが多いので満員電車のラッシュに揺られてという事はなかったが朝は努めて早く起きるように心掛けていた。

夏は暑さ凌ぎに井戸水をかぶっていたが、ようやく秋風も冷たくなってくると、身体の鍛練のために井戸水をかぶって、その後冷水摩擦をやり、全身に活力の溢れてきたところで木刀の素振りを百回ばかりやることにしている。庭から北摂の山々が手にとるように眺めることの出来る郊外も郊外、大変な街外れなので、いくら掛声をかけても隣近所の迷惑になることもない。

しかし朝夕眺める青々とした山々が、最近では所々禿山のように赤茶けてきて、削りつた土砂を運ぶダンプカーの上げる砂ぼこりが拙宅の縁先にまで漂ってくるようになってきたので、いずれこの辺も街中になるような時代が訪れてくるかもしれない。

それはさておき、私の心ははやって、びっしり詰まっている仕事の予定は、どれもこれもキャンセル出来ないものばかりだった。

そんなわけで、関谷さんに写真を送って、日時を知らせて逢うことが出来たのは、手紙を貰ってから二週間以上も経った夕刻だった。

通勤帰りの客が一通り降りてしまおうと、この甲陽園駅はひっそりとなってしまう。それだけに待ち合わせの場所としては適当な所だろう。それに以前彼女との待ち合わせに使ったことのある懐しい場所でもあるので、私にとっては数年前のその時のことが、ほん数日前の出来事のように思われて、自分でも不思議な位、いそいそとした気持ちになってしまうのだった。

今日は彼女の希望している通り、逆さ吊りに吊り上げて思いきり全身に鞭打ちを加えてやろうと考えていたので、滑車三個に丈夫な麻縄を持参していた。

樹々の紅葉も一層美しく外気温は摂氏十二度から十三度というところなので着衣のままだったら快適だろうが裸になるのには少し寒いだろうと考えて、室内へ入るなり三〇〇ワットの写真電球二個を点灯した。夏だったら暑くてかなわないのだが、冬には案外な暖房の代用になるのだ。

彼女が入浴している間、三個の滑車を利用して吊り上げる装置をしてストロボの配置や電源からの配線も完了した。80ミリの短焦点レンズでは全身をカバーすることは出来なかったので56ミリのワイドに交換してファインダーをのぞいてみると、背後に若干のひけを残して全部が入っている。

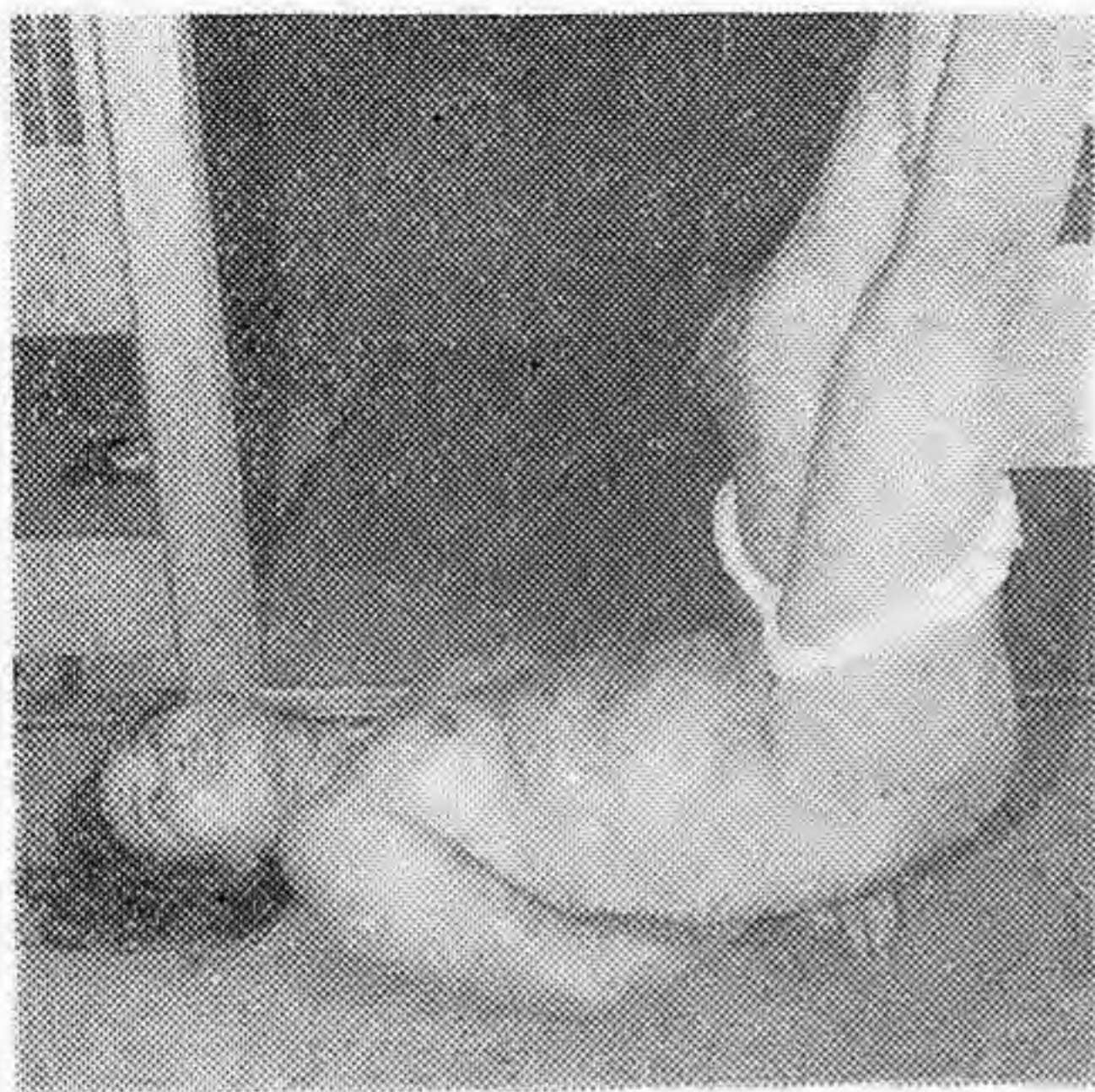
これで準備が全く整ったわけだが浴室から出てきた彼女が化粧直しをしている間、手持ち無沙汰なので、その僅かな時間を利用して私も入浴することにした。

夏はいくら部屋に冷房がきいていても入浴は汗を流す程度で長湯する気持ちになれない。それに冬はタイルの上に足を踏み入れた時の冷たさがたまらないので、時間つぶしに入浴する気にもなれないのだが、今は暑くもなし寒くもなし、ゆっくりと湯に浸っているのも乙なものである。

『貴方様のお気のすむよう思いのままに私を責め、いじめ、料理して下さいませ』と書いてきていた彼女を今宵はどのように取扱ってやろうか。逆さ吊りのまま五分も十分も続けてムチ打ってやろうか。それとも、その前にテープの悲鳴を聞かせて精神的にいじめてやろうか。そんなことをのんびり湯に浸りながら考えていた。

「今日は時間はせかなくてもいいんです。こちらの御都合さえよければ夜通しでも」という彼女の言葉に私の気持ちも至ってのんびりとしてしまつて、鼻唄まじりの流行歌でも唄ってみたい心境だった。

このような上品で美しくって、教養があつて、肌のきれいな女性を配偶者に持つことが出来た男性は、幸福だろうなと考えた。なんだかその男性が羨ましく、そして嫉ましくさえ感じられてくるのだ。淑やかな関谷さんを



惨酷に責めるファイトは、そんなところから案外、生まれてくるのだろうか。

私にとって関谷さんは、可愛くこそあれ憎いという気持は微塵もない。彼女がそれを好むからこそ私は責めるのだろうか。いや猛烈に責められている時の彼女の美しい悦虐の姿態を眺めたいから責めるのだろうか。

風呂を上って部屋へ戻ると写真電球の一灯が消えている。振ってみるとカラカラと音がしている。寿命がきたのだろうか。一灯を被写体の方へ向けて照らし、切れた電球は屑籠へ捨てた。準備万端完了「さあ、これから始めますよ」と私は言葉をかけた。辻村さんのように調子のよいプレイボーイであつたら、ここらあたりで十分な口説を最大限に活用して女性を夢遊状態に陥れるところだろうが、口下手の私にそんな芸当は出来ない。只、彼女が現われるのを待つだけである。

真白いブラジャーとパンツ、それが喰い込むように白い肌を圧迫している。その上に浴衣を羽織って心持ち羞かしそうに現われた。いつものことながら彼女は自分から素裸になつて現われることはない。ブラジャーにパタフライか、パンツをつけて、その上から持参のケープを羽織つたりして縛り役の者がそれ

を脱がす楽しみの余地を残している。

私は浴衣を剥ぎとると彼女の両手をうしろにまわして手首を括った。殊更、二の腕から胸へかけて縄を用いなかったのは、全身に限なくムチを加える際、今までの経験によると縄が大変邪魔になつたからである。両手首を背後で括り上げるだけで十分に自由を束縛することが出来るし、彼女のようにバストから腹部にかけての線の豊満でなだらかな起伏を美しく見せている女体には、かえって縄をこたごた掛けない方が美しさを阻害しなくてよいと考えた。

足首に縄を掛けただけで逆さに吊り上げて耐えられるかと何度も念を押した上で三点の滑車に縄を通した。今までの経験からすると足首に縄を巻いただけで脛とか胴体、胸などの縄に連繫させないときは、足首の部分の痛さに耐えられないのが普通だった。

木村洋子さんとか増田みゆきさんのような四十キロ足らずの軽量であつ

たら、まだまだましだろうが、関谷さんはどう見ても五十数キロはありそうだから耐えられるかどうか心配だった。しかし一応耐えられるまでやってみようと考えて裸にだけ縄が掛からないように注意して足首を揃えて縛つて準備を終った。

縄尻を引くと長く横たわっていた女体が足首を上にして次第次第に起き上ってくる。尻が浮き次に腰が浮き、やがて背中が離れた。滑車のおかげでここまでじりじりと持ち上げるのは大した力もいらぬ。女体は後手に縛られているので黒髪をたらしたまま、ずるずると無抵抗に逆さの棒立ちになつてしまつて





いる。胸のあたりがくの字に曲ってブラジャーがはちきれないように緊張して息苦しうなので、慌ててはすす。

さて愈々これからが逆さ宙吊りを敢行するために更に縄尻を引きつけることになるのだが、私が関谷さんが憎くてリンチするのでもなく又何かの罰で仕置きするのでもない。ましてや何かを白状させようとして肉体を痛めつけるのでもない。だからそこに陰惨なムードがいささかも湧いてこないのは当然だ。

キリキリと滑車のきしむ音がして全身が浮き上る寸前、急に引っぱる縄尻に重さを感じたが、今まで無言だった関谷さんが、

「痛い、痛い、許して——」

と激しい悲鳴を挙げた。揃えて括られた足首に縄がぐっと喰い込んでいるのがよく見え

声とは違う真に迫った悲鳴に私は一瞬たじろいで縄をゆるめた。

頭が下に敷いた座布団につかえると、ほっとしたように全身の緊張がゆるんで私の手元の縄の手ごたえもぐっと軽くなった。柱に縄尻を止めて関谷さんに近づいた。

「どう、辛抱出来ないのかい」

そう問いかけたが彼女は無言のまま頭を下につかえて逆立っている。両手首を縛られているので身じろぎも出来ないでいるのだ。

私はやにわに白いパンツを怪のあたりまで引き下げた。痛い痛いと呼ぶのは、まだ昂揚が足りないと考えたから、ここで鞭打ちを加えて彼女好みの雰囲気にしておいて、その上で一気に宙に浮かしてしまおうと思った。

剝玉子のように真白い臀部、それがほん目

の前にむっくりと姿を見せているのだ。私は手にした皮むちを思いきり目標物にぶち当てた。ピシッという快い手ごたえ。

「ヒイーツ」

悲鳴と共に白い女体は海老のように反って髪をふり乱した。一打また一打。

彼女の凄惨な反応、上半身が逆さになったまま右に左に揺れうごく。白い肌が忽ち真赤に染まり、その紅色が臀部から次第に他の部分へとひろがってゆく。数条の赤い線が今むち打った部分を如実に示している。

「許して、許して、お願い」

彼女の甘い悲鳴が続いているが、私は情容赦なく、むちの乱打を続けてゆく。

今はもう足首の痛さも感じないのか或はその痛さが痺れるような快感に変わっているのか強烈な一打がコマ回しの役を果たしたようにうしろ向きだった女体が髪ふり乱しながら半身になって前面をこちらへ見せた。

或は背面に降る鞭を避けて前面を現わしたのか、それとも背面ばかりか前面も打ってほしいというのか。きれいに剃毛されたあたりが私の目の前に美しく起伏を見せている。

ここで再び狂ったような鞭の洗礼。

臀部のときは力まかせに加えていたのが、

前面に対してはやはり手加減をした。用心深く一打一打狙うようにして打つ。彼女は何処を叩いても心配はないというのだが、医学の知識のない私にとっては一番安心のおける個処に鞭の焦点を置きたい気持だ。

狂うような女体の乱舞が終ると、いくら鞭を加えても反応しなくなる。いつものように私の鞭打ちも、そこで終了を告げる。

いつも思うのだが、彼女は文字も美しいが文章も中々うまい。短い手紙による判断ではあるが、もし彼女が告白を書いたとしたら素晴らしいものが出来るのではないか。

というのは、長いむち打ちの末、こうした静止状態に陥っているときの心境は、むち打っている私にとっては只想像するだけで本当のところは判らないのだ。あとになってから語る彼女の言葉を総合して判断するのだが、そのときの彼女は、広い宇宙の中を只一人だけでばかりぽかりと浮かんでいるような心境なのであろうか。

このままの状態ではっておいた方が彼女のためにいいのか、それは私にはわからなかったが、しかし私にとっては、これから逆さ吊りに吊り上げて、どの位耐えられるかの実験をする仕事が残っていた。

縄止めした縄尻を解くと力をこめて、じりじりと引き上げた。張った縄が生物のようにケバ立って緊張し、だらけたように弛緩しきっていた女体がしゃんと伸びた。

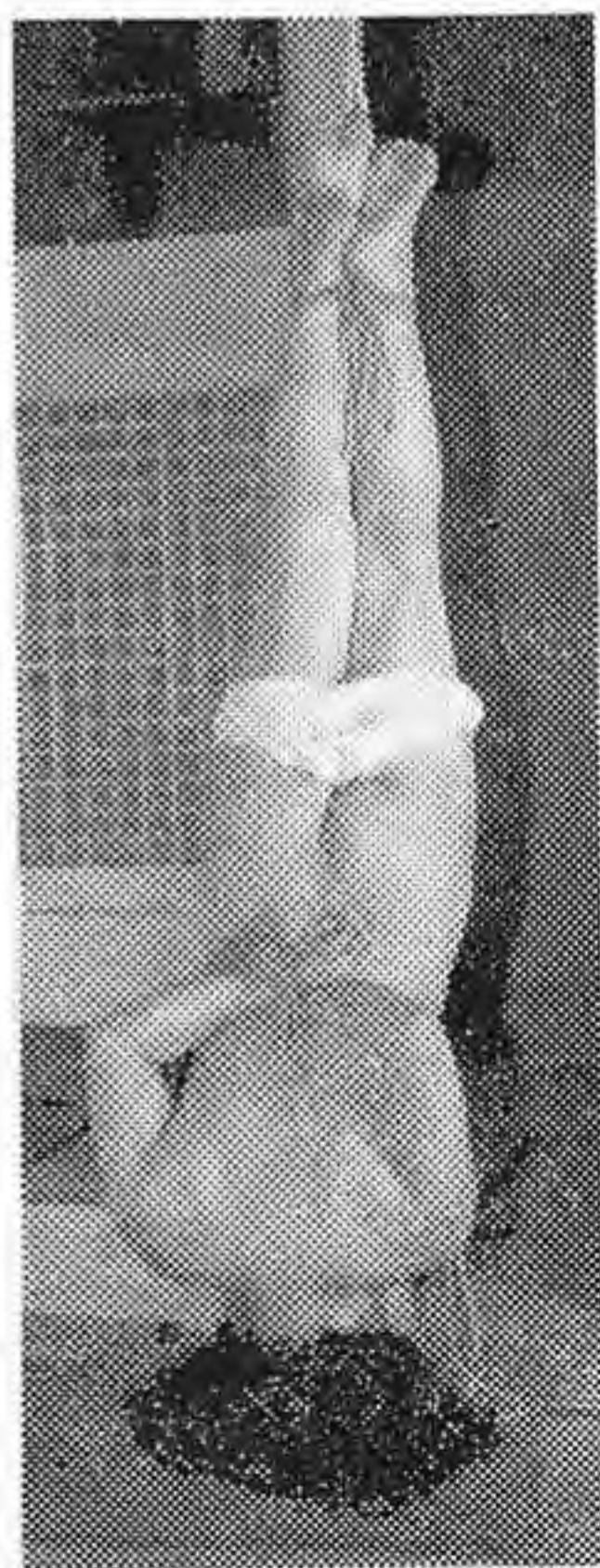
滑車が軋んで手元の縄に重量がかかる。次第に浮き上る女体。途端に今の今まで眠れるように静かだった関谷さんの口から、魂切るような悲鳴が迸った。

「やめて、やめて、痛い！」

一瞬私はたじろいで手の力をゆるめた。今までの悲鳴とは違うただならぬものを感じとったからである。でも、これはまだ吊りの序の口である。これから本格的な宙吊りを敢行する矢先であるから、止めるわけにはいかない。私は再び縄に力を入れた。

「やめて、お願い。痛いのに」

必死に懇願する彼女の悲鳴。痛いと呼ぶ語気の中に、本当に耐えられないものを感じとって頭が十厘ばかり浮き上がったところで再び手の力をゆるめた。S気の強い者なら、ここで本領を発揮したことだろうが、私にはこれ



以上の無理強いは出来なかった。

そのかわり、あれだけ吊ってほしいと言っていた彼女が、これ位のことでは悲鳴を挙げたことに対して私の心の中に不満が起った。何分位逆さ吊りのまま鞭打ちに耐えられるだろうかという実験は、これで失敗に終わった。

私は縄をゆるめた。

彼女の身体は頭を中心にぐらりと揺れながら畳の上に長々と伸びた。

痛い筈である。細引きが足首の皮肉に喰い込んで紫色に腫れ上っているのだ。

あわてて解こうにも真結びにした縄は石のように固くて爪も立たない。靴からナイフをとり出して切りほどこいた。抉った様に窪んだ足首の縄の痕、さぞ痛かったであろう。或は踝にでも縄が当たっていたのかもしれない。

しかし、伸びている女体を眺めていると、

何かしら裏切られたような怒りに似たものが私の心の中に今頃になって湧いてきたのが不思議である。

私は彼女に対して一休みも与えなかった。

汗ばんだ額にべったりと髪の毛がへばりついていて、さすがに彼女の苦痛に対する忍耐強さと十数分に亘る逆さ吊り鞭打ちの疲労を現わしていたが私の心にはささかの同情する気持ちも起こらなかった。それよりも、あの淑かで上品で、端正な顔立ちの関谷さんが汗みどろになっている様子を見ると、一種いうにいわれぬ美しさを感じるのだった。

今まさに壊れようとする最高芸術品のはかなさと美しさ。そのときの私の心境を拙い筆で書き現わすことは出来ないが、私は膝に這ずり下っている白パンツを一気に両足から抜きとってしまうことで、自分のもやもやとした気持ちを整理していた。

彼女が拒む余裕も与えぬ素早やさだったのだ、その真新しい布片は両足をするりとくぐり抜けて乱れた縄やコードの渦の中へ投げすてられていた。

今までが彼女の演出であったとしたら、いよいよ、これからが私の演出である。

ごたごたと沢山の縄を掛けられないのが好



きだと彼女は言っていたが、その点は私も賛成である。

今横たわっている彼女は、全裸で只後手に縛られているだけである。両手の自由は奪われて、他の自由である。猿ぐつわもしていないので、叫び、喚き、泣くのも自由であれば、言葉を通しての意志表示も出来る。

さて、完全なイニシヤチブを握った私は、どのような行動に出てよいだろうか。

美しいものが、今髪ふり乱している。この美しいものを、もっといじめてやりたい。

痛めつけてやりたい。乱してやりたい。

彼女の求めるものを与えながらも、彼女の求めないものも併せて与えてやりたい。

どんな反応を示すだろうか。

美しいガラスの花瓶を地面に叩きつけようとする時のような異常な心の昂ぶり。

暖房がきいてきたのか、もしくは写真電球の影響か、むんむんとする熱気が二間続きの部屋に充満している。

私はアンダーシャツをかなぐり捨ててパンツ一つになった。右手に握ったのは脂光りする鞭一本である。

ヒューッと風を切って鞭が飛ぶ。

左側面を下にして横たわっていた女体の右腰に近い臀部に第一打は炸裂した。

自分の放った鞭で女体がピクンと躍動する。ごたえは快い。それに伴奏としての悲鳴が引続いて起こってくるのだから、この一瞬の醍醐味はこたえられない。

すべての女体の動きを細大洩らさず私は見逃さない。産毛の一本一本も識別出来る明る



さを保つため、持参した写真電球を総動員して部屋を皎々と照らし出した。

熱気で口の中が、からからに乾いてくる。流れ出る汗も忽ちに蒸発してしまう熱さ。逆さ吊りに耐えられなかった女体よ、もっと泣け。そして、もがき苦しんで失神してしまふまで鞭は止めないぞ。

女体はゴロゴロと転って隣の部屋へ逃げてゆく。そこには二つの枕を並べた布団が敷い

てあるのだ。私の鞭は執拗に白い肌を求めて追いつがってゆく。

今は目標物は臀部だけではない。女体の移動によって目の前に現われた以上、足の裏であろうが、胫であろうが、お臍であろうが、乳房であろうが、私の鞭の餌食となって、焦熱地獄の中で喘ぐ運命にあるのだ。

太腿の筋肉がブルブルと痙攣している。今までにないことである。

足の指はと見ると、拇指だけがピンと反りかえり四本の指は揃えて、くの字に前曲りになっている。

乱れた髪が顔中を掩い、齒を喰いしばっているさまは、あながち苦痛を耐えている表情とばかりは思えない。

私は鞭を手にしたまま呆然として、その美しい肢体に見とれていた。

何時全裸のどこに振り下ろされるかわからない鞭を待っている、張りつめた気持が全身に漲っている様子が私にはよくわかる。同じリズムで鞭打っているのでは、そのペースに陥ってマンネリになってしまふ。このリズムを乱してしまうことで彼女を精神的にいたぶることが出来る。

そう感じて私はいつまでも鞭を待っている

彼女の全裸の肢体に見惚れていた。

体重の下敷きになっている後手縛りの両腕は赤黒く充血している。あられもなく投げ出された両肢にも、びりびりと神経が通っているようで、だらけた気配はない。

鞭を待っているのだな。

私は直感でそう悟った。意地悪く次の鞭を揮うのを待って右半身に転った彼女の前面へ回った。

青々とした剃毛のあとにも鞭が当たったのか僅かに赤味を帯びた筋が痛々しく走って妙になまめかしい。少し開いた口でハアハアと息をしているのも上品な彼女のたたずまいを知っているだけに、目の下にして立ったまま眺めるのも興味があった。

足を挙げて蹴るようにして仰向けにごろり転がした。この部屋まで鞭で追うようにして転がしてきた先程の嵐のような鞭の乱打が嘘のような静けさである。私の鞭が、一休みしたと悟った彼女は、ぐったりと全身の力を抜いて長々とのびている。光沢を帯びた白い肌がピンク色にはてって電光に映えている。

私はカメラを手にとると全裸のままのびている彼女の肢体をあらゆるアングルからピンと合わせてストロボの閃光を放った。

むち打ちプレイを始めてから二時間以上は経つていようというのに写し終えた写真は、やっと十二枚撮りフィルム一本という低調さである。鞭を使いながらカメラを操作するところが出来ないのが当然のことながら自分一人だけで眺めているのは惜しいような光景に何度もお会ってみると心残りではない。

私は彼女を抱き上げると布団の上へどさりと投げころがした。マットレスの上に敷いた布団なので大した衝撃は受けないだろうが、肢を宙に開いたあられもない恰好で弾んでいる女体は、これから受ける激しい鞭打ちに対して歓喜の叫び声を挙げているようだ。

さて、いよいよこれからカメラ抜きにした本格的な鞭打ちプレイの開始である。

『私の家の近くまで送って下さるのでしたら夜どんなに晩くなくても構いません』と言っていた彼女の言葉が本当だったら、これから二時間や三時間はたっぷり時間がある筈だ。

私は彼女の肢体がよく見えるように、電球の位置を変更して隣室との境にある襖を閉めた。これで、どんなに激しい鞭音がしても、又彼女が泣き叫んでも、この離室から外部へ洩れることはないだろう。

彼女はすでに観念した態度で潔く鞭打ちの

人身御供になろうとしている風だった。

私は、わくわくする思いでいた。鞭の雨が彼女の裸身に振り下ろされて感泣にむせび、喘いでいる時、果たして彼女の女性自身がどのような変化を示しているか、これは私にとっても大いに興味のあることだった。

今日こそは、具さにその変化を、この目でじかに確かめてみたい気持だった。

「逆さ吊りで鞭打ってほしいと願っていたのに、何故、痛い痛いと呼んで拒否したのか」というのが、私の彼女に対するこれからの責めの理由だった。

「辛抱出来ると思っていたのですけれど、実際に吊られてみると、痛くって痛くって、思わず拒否のような態度をとってしまったて申し訳ございません。どうか、お気のすむまで私を責めて下さい。私の身体を捧げて済むものでしたら、どのような取扱われても構いません。逆さ吊りの実験が出来なかった償いに、これから私がどの位鞭打ちに耐えられるかお試して下さい。そして、その時、思いきり苦しむ私の身体の状態を貴方様の目で詳しく観察してほしいと思います」

彼女の答えというのが、まことにしおらしいものであった。こうした態度をとられると

男性たる者ハッスルせざるを得ない。

うつ伏せになった彼女の両足を大きく開かせ、その両方の足の裏に私も足を開いて足の裏を乗せた。まるで馬車の馬に鞭を揮う駁者のような恰好である。不安定なのが玉にきずであるが、目標物が目の前にあるのだから、打ち易いこと、この上なしである。

先ず第一に両脚を無理にひらかせて殊更、盛り上った臀部に鞭を振り下ろした。私の両方の足の裏に彼女の足の裏の動きが、もぞもぞと伝わってくる。強く打てば強く、弱く打てば弱く、擦りたい繊動が快く響く。

力まかせに打つと、上半身をびくっと捻じめるように持ち上げ顔を浮かせた。両足は私の足で固定されているので、動かすことが出来ない。ただ自由になる上半身の躍動が今のところ活発である。膝頭の裏側、脛にムチが向くと足の裏のもぞもぞが激しくなる。

これを手初めにそれから一時間ばかり、数種の激しい鞭打ちポーズが華々しく展開されたが、最も圧巻だったのは仰向けに寝かせた彼女の両足を持ち上げて二つ折りにし、そのまま右と左へ開いて顔の両側へ押さえつけ、海老責めの恰好にしたポーズだった。

お尻を高々と掲げて自分のお臍をいやでも



た全身の主要な部分を目前に眺めることが出来るのである。その上、鞭打ちの最大の目標物たる臀部がはちきれそうな盛り上りを見せて、鞭の射程距離の中に鎮座ましましてるのであるから、まさに涎もたれるばかりの光景である。

ばしっ

びしっ

鞭が尻の頂点に当たる。

さあ、もっと走れ、走れ。鞭が痛かったら思いきり泣きながら走れ。

びしっ、びしっ。

眺める姿勢で開いた彼女の両足の裏を、それぞれ私の足で踏みつけた。括られた両手首は背中の方に回って、この不安定な姿勢の固定をはかっている。

これは余程柔軟な肢体の持主でないと苦しくて仕方がないのだが、やはり関谷さんは平常からスポーツをやっているだけあって、この困難なポーズにも耐えている。

自分の顔を挟むようにして彼女の肉づきのよい太股がぐっと伸びている。私にとって彼女の顔の表情は勿論のこと、二つ折りになっ

前屈みに皮膚が緊張しているだけにショックはきびしい。呻き声が洩れ、踏まれている両足をふりきろうともがくが、私の全体重が彼女の足の裏に掛かっているので逃げることは出来ない。

苦痛を耐えようとする必死の表情がよく見える。私のムチの手加減によって彼女の表情にも変化が生じる。彼女の全身の表情の変化も私には手にとるように見えるのだ。

私の一番気に入ったこのポーズの鞭打ちが

どの位続いただろうか。長いといえば長い時間だったし、短いといえば短い時間だったような気がする。それだけ、このひとときは私にとって極めて楽しい時間であった。

秋の夜は更けて静かであった。

しつとりと紅葉した葉が湿った地面に落ちてゆくような、そんな落葉の音がひそやかに聞こえるような静かな夜であった。

激情のひとときが終ると、淑やかな貴婦人のなごやかな表情に返った関谷さんが、にこやかに身仕度を整えて微笑んでいた。

これで、このルポルタージュを終る。この文章を終るに当たって、クライマックスに達したとき彼女が私の耳元で叫んだ言葉を、私はここに記録しておきたい衝動を押さえることが出来ない。しかし、ここが公開の市場であることを考えて思い止まった。

書いてみたいという誘惑に、抗しきれない一方の心が疼くように蠢いているのを振り払うようにして敢てペンをここで擱いた。

いずれ、その甘美な誘惑に負けて、奔放な一夜を持つことがあったなら、再び、ご報告したいと考えている。

—(おわり)—

懸賞入選創作

夜汽車の帰省

パンティ・バイト

中山 久 司

夜汽車――。

松っあんは微かな衣擦れが気になった。それは前の席で背を丸めてちぢこまって寝ている男の羽織ったコートのすれ合う音だった。松っあんには、この衣擦れの音に、幼い日のいやな思い出があるのだ。それは、彼が母に連れられて甲府へやって来て最初に住んだ二間つづきのしもた屋の二階を思い出させる。

大陸から帰った父は、彼の顔を見ずして死んだ。それからここ甲府へくるまで、保険の外交で生計をたてる母に育てられたのだ。

ある夜、いつになく尿意をおぼえた彼は、

かすかな衣擦れの音に眼をさました。それは重ねた布団がすべり落ちる時のような音だった。そして押し殺したような声。

表通りに面した隣の室からのものだった。戦後まもなく建てたガタのきたボロ家だけに建てつけも悪い。幼い彼は無意識に用心深くなっていた。音を立てずに襖に近づいて、表通りの薄明りで、ぼんやり見えた影絵に、直感的に感じとれるものがあった。彼にとって説明のつきかねることだったが、何かがわかったように思えた。

二カ月ほどして松っあんは母につれられ同じ市内にある見知らぬ家へやってきた。彼に

は、そこがこれから自分の住みつく家であるとは、わかるはずがなかったが、そこは、かの「オジサン」と母が呼んでいた人の家であることは、すぐにわかった。甲府へ来てから度々やってきたオジサンである。

その日から彼はオジサンがお父さんに変わったと教えられたが、一般にいう義父と息子の間は、仲の悪い実の親子より、むしろ好ましいほどであった。そして当時は小さかった家業の材木屋も、彼が東京の大学に入った頃には市内屈指の銘木店と呼ばれるようになっていた。



松っあんは、電話の声に話しかけた。

「上州屋さんですね。ご主人におねがいします。ハイ、中村といいます」

中村というのに不審そうだった主人の声は次の瞬間にはすぐにわかったようであった。

「ああ、君か。で、今日は？」

わかれれば話は早い。

「いいのが入ったんですが」

「いくつ？」

「二つ。ひとつは、まだのです」

「よし。で、いつ？」

「あすにでも」

これで用件は通じるのだ。こんなとき、松っあんは四方に気を配り、産業スパイにでもなったような気分になるのだが、まんざら悪い気もしない。

翌日、松っあんが上州屋に手わたしたものは、紙袋にいれた二枚のパンティーである。

この上州屋は、松っあんのアルバイト？

にとって大のお客様である。これで臨時収入三千円。月々の仕送りだけでも、彼には足りない金額ではないのだが、自分で儲けた金を使わないにしても気分のいいものだ。このようにして上州屋やその仲間との取引が月の内四、五回は下らないから、毎週映画を見、食

べたいものを食べている下宿住まいの彼だが昨年からの貯金通帳は、著実に数字を増していた。

松っあんのアルバイトとは、こうなのだ。

町で失敬してきた婦人の下着を、上州屋らに売りつけている。つまり下着泥棒なのである。彼としても悪いことは承知だが、そこに交ナリクツをつけている。需要があるから供給するまでであって、資本主義社会において当然のことである。不当な手段であっても、罪を代償として手に入れることは、商品製造と同じ価値があり、盗んだ下着であっても、それは警察に挙げられるまでは、立派な商品である、要はバレなきゃいいんじゃないか。平然とそう思っている松っあんなのである。

それでもやはり罪悪に対する不安な意識はあって、月々増えていく貯金通帳の数字を見ながら、べつに使うあてもないから、これは警察に挙げられた時の保釈金にでもするかとそんなことを考えることもある。かといってやめる気にはなれないから、困ったのだと思う。因果なことである。

○

松っあんが、こんなことをはじめたのは、一年ほど前、いや考えてみればそれ以前にも

手にしたことは幾度となくある。

山梨に移る以前、小学生の彼は小さいながらも、納豆を売り歩いたり、新聞配達をやった。人々が未だ眼をさましていない早朝の下町で、一軒一軒、新聞を配り歩くうちに奇妙な関心が湧いてきて、意識して目にとめ始めたものが、軒下に下がる洗濯物の中の婦人用の肌着であった。

冬の配達の時、附近に気を配りながら、思いついてふれたショーツの、パリッと凍っていた感じは今でもおぼえている。

あの時から引き続き、はるかに具体性を帯びているそれに対する妄想は、それを欲しが上州屋のオヤジの気持を彼に容易に理解させるのだ。松っあんの下宿は池袋、赤羽を控えた一角で、このあたりはバーへ勤める女も多く、彼の仕入れ？には、こと欠かない。

松っあんの仕入時間は夜明け前を狙うのが多い。これも、絶対に見つかってはならぬという用心からのものであったが、それだけに昨夜はあった目当ての物がなくともある。又、気分の乗り具合によって、少し危険性はあっても真昼の犯行を試み、彼は怪盗ルパンの気分を味わうこともあるのであった。

○

上州屋を知ったのは、こうだ。

松っあんの大学の友達で、バーでバイトに皿洗いをしているのがいて、そこに飲みにきていたのが上州屋のオヤジだったのだが、上州屋と一晩共にしたホステスが朝、目がさめるとオヤジの姿はなく、おまけにパンティーブラジャー、そしてストッキングまでが消えていたというのだ。それから、オヤジに対してホステス達のサービスが悪くなったらしいと、その友達に面白そうに笑いながら話すのを聞いた時、考えついたのがこの仕事だ。

そのバーへ出掛けて、教えてもらったオヤジの後をつけた松っあん、しばらくして声をかけた。

「オヤジサン、変わったものを集めるのが趣味なんだって？」

一パイ機嫌でキョトンとした様子のオヤジに追打ちをかける。

「フリルのついた刺繍入りのパンティーなどはどう？」

バカヤローとくるかと思っていると、意外にも目を丸くして「いくらだ？」ときた。千円ぐらいのことと言ってやろうかと思ったが、大奮発してふっかけた。「二千元」「買った！」と、ひと声。

翌日、何もかもおっぱり出して松っあんは金二千元也の刺繍入りフリルで飾られたパンティーを求めてさまよい歩くこととなったが以後、ずっとこの交際？ が続いているのであった。

○

松っあんは、買う気もないのによくデパートに行く。とは云ってもここで例の仕入をするつもりはない。もっぱら女店員をながめて歩き、ひやかすだけだ。

五階では季節に先がけてのバーゲンをやっているらしい。人に押されて特売場へいった松っあんの目にはポロシャツ、ブラウス、ちっちゃなパンティーなどが刺さる様に映る。

松っあんが、人混みから抜けようとした時すれちがったブロンと鼻をくすぐるような良い香り。小物売場の前に立った三十五、六の女。小肥りで、扇千景とまではいなくても普通の男ならまず見直すことうけあいのような女性である。それが何かおちつきがなく様子がおかしいのだ。

なんの気なしに横手から見ていると、左手を売場の台に置き、右手で品物を物色している。あたりをひと回ししたと思うと、サッと左手が動いた。

目のはやいのも自慢のひとつの松っあん、とたんに察しがついた。うまくやりやがったなど。しかしプロとも思えない。なにせ盗んだものが百円均一の安物だし、台の上の品物というのが財布につけるダルマだの鈴だの飾り物。

女はクルリと背を向けると階段を下りていく。犯行現場から早く去りたいのだろう。松っあんは慌てて後を追ひ、四階の踊り場で声をかけた。ビクと身をふるわせてふり返ったその女に

「僕、返してきますから。見てたんです」

目をそむけただけで逃げ出しもせずモジモジしていたが、しばらくして、袂からブツを出す。それを手にした松っあんは五階の売場に戻ったものの、目の前に置けばいいのに、どうも手をはなれない。と、後から肩を掴まれた。

気分を害して、足早にデパートの出口へ下りてくると、先程とは逆にその女性から声をかけられた。松っあんのその後の様子を逐一陰で見えていたとみえ、お茶でもと誘われた。

あれから松っあん、警備保安室へと連れていかれた。だが学生証を出し事情を話すと、素直な態度もうけたらしく、すぐ釈放にはな

った。

別に用もないので、誘いにのってその女性の住まいへとやってきたのが五時すぎ。勿論出されたものを遠慮なくパクツキながら彼女の身の上を聞き、打ち融けたからだ……。彼女が郁代。歳は聞き出せなかったが、亭主はないというのに平屋建の小じんまりとした家を見せられたとたん、「囲われ者だな」と、すぐわかった。

案内されたのが庭に面した奥の六畳。彼女すぐに茶をとり台所へと消えていった。松っあんは今日のお礼としてせめて下着の一枚でも貰っていいかな、と考える。見廻すと凝った作りの違棚。その上下には襖の入った小物入れの戸棚。上の段は女住まいにふさわしく、きちんと整理され金目のものはあるけれど、目指すものは見あたらない。下段の襖をそっとあけると、週刊誌にまじって目にとまったのが、なんと松っあん最近愛読している特殊な雑誌「K」。

いやになまめかしい女性と、「K」となれば一回かぎりは、ちと惜しいと考え直した松っあん。ことあるごとに寄ることにしようと、ひとり決めた。

下宿住まいの彼の事、次からの事も考えて

手料理に感激してみせ、あることないことしゃべりまくり、家を出たのが八時すぎ。帰りがけに電話番号をおしえてくれ、来る前に必ず電話をするようにと云う。旦那と鉢合せもまずかろうと了解して帰る。

○

いつものように取引した松っあんは、上州屋の小声でいう、月のものの浸み込んだパットを世話しろとの申入れに困惑した。

今まで通り、下着の類ならお手のもので、少々変わった物の注文にも応じないでもなかったが、アンネのパットとなれば、物干竿にひっかかっている代物でもなし、怪盗よろしくアパートに忍び込んだとしても、洗濯籠などに保管してあるという物でもなさそうだ。婦人用トイレの汚物入れぐらいしか、当てはないことはわかるのだが、手が出せそうにない。

かといって、上客である上州屋さんのこと無下に断わりもならず「なんとかやってみる事はみますがネ」と言葉をにぎしたつもりだが、オヤジさんはどう受けとったのか、一杯おごろうといい出した。松っあんは、そういうことには、とんと義理固いほうだから、先に立って相手の意志を尊重することにしたが

生々しいパットを頭に描いての酒は、あまり美味しくは思えなかった。

そんな中で、上州屋の主人がしみじみ語るところによれば、オヤジの五つ年下の女房は昔から着物ばかりでとおした、女であるそう

な。

「じゃあおたくの奥さん、名古屋城ですね」
おやじには、松っあんのしゃれが通じなかったらしく訊き返す。

「尾張名古屋は城でもつ、^{あか}緋い腰巻き紐でもつ」

おやじさん、大きく肯いた。

○

思案した松っあん、受講中に思いついて目をつけたのが我が母校。時々トグロをまきに行く喫茶店で、とも考えたが、女子大生の物のほうが、オヤジも大喜びするだろうと思つた訳。刑法理論もウワの空。前に坐った法学部にしては数少ない女子学生の、丸く健康そうな腕の出た白いブラウスのその中を、真一文字に横切っているブラジャーの線が、松っあんには女体を縛るロープに見え、やけになまめかしくていけない。

松っあんはこのアルバイト？ を始めた頃には、オヤジさんの気持はほんによくわかる

ワイ、と思った。女の下着に対する憧れというものに、松っあん自身が同調出来たのだ。ところが、それを「商品」として扱うくせがついてからは、上州屋ほどの情熱？ は湧かなくなっていた。代りに、いつの間にか訳もなく、縛られた女の姿に魅力を感じるようになっていたのだ。

敵情偵察を一日試みて、十時から昼までの間に利用者が、二十分ほど絶えることがわかり、いよいよ決行を心に決める。その日は目立たないよう、服装から靴まで変えるという用心深さで、五つほど並んだ個室のドアに立ち向かう。本日の使命は汚物入れの中身をさぐることにある。自らを励ましながら活動に入ったが、最初のボックスは不発。二つ目のボックスには、あるにはあったが陽気が災いしていた。目的物の焦茶色に変色しているのは仕方ないが、白い蛆虫がうごめく姿を眼にした時は、さすがの松っあん、逃げ帰ろうかとも思った。

しかし、不屈のアルバイト精神がものをいい、四つ目と五つ目のボックスからは、生々しい色をした、ほのかに薫る収獲をものにすることに成功。特別な感情で、持参したポリ袋へと納めた。これとて少し時間がたてば蛆

虫にとりつかれるだろうが、松っあんの眼にとまったおかげで、経済的価値をもつ立派な商品となった。逃げるようにして校門を出た松っあん、すぐにオヤジに連絡をして、義理は果たしはしたが、もうこの注文だけは受けるまいと思った。

この体験で、不思議なことに婦人用トイレは奥へいくほど繁盛するらしいことを発見。又使用済のパットも、二枚に折ればいいものをそのままの形で捨てるものらしいと知った松っあんであった。

○

下宿へもどってホッと一息すると、急に人恋しくなつて、例の郁代なる女性を思い出し早速に電話する。残念にも本日すでに予約ありとのこと。ガツカリの気持を押し隠し、いや今日のことではない、明日のことだと電話を切る。

夕飯を馳走になるには夕方がいいと、彼女の家に着いたのが四時半過ぎ。そこは抜目のない松っあんのこと、無理にリクツをつけてはいるが、やはり追われるような仕入方より彼女に頼んで大手を振っての下着の仕入れをして帰ろうと思う目算もあった。さらに気づいて、一冊の雑誌「K」を小脇にはさんで出

てきている。

七月も末のゆかたの季節。出迎えた郁代は白地に紺のゆかた姿に白粉の香が鼻をうつ。

お目当ての食事がすむと、勧められるままに湯に入ったが、持参した雑誌は、わざと無雑作に膳のそばに投げだしておいた。

案の定、湯から上ってくると、郁代は気づいて本を伏せたが、変った本をもってるのねととぼけた様子。お前だって読んでいるじゃないかと云いたいところを我慢して「ずっと前からなんだ」と云っておく。

そこまでのつもりはなかったが、彼女が、「どおせ休みなんだから今夜は泊ってらっしゃい」

と云い残して、返事も聞かずに湯へ立っていくと、さすがにドキリとしたが、すぐその気になった。

浴室の扉のしまる音を耳にして六畳の襖をそっと開けると、昨夜もそうであったろうに夜具が二つ延べてある。真新しい簞笥、音がないのをいいことに開けてみると、あるはあるは、上州屋のオヤジなら気が狂うかも？と思うほど、色とりどりの下着の数々。囲われ者の一人身からか年に似合わぬほど派手なものもある。いな、旦那が彼女に着せて楽しむ

ための物か、とても物干には干せないような代物も一つ二つあった。これで、仕入も大丈夫と安心する松っあん。

湯から出てきた郁代は、白粉の香りは消えたものの、そばに坐られると湯の香りとでもいおうか、いいにおいがする。松っあんだって二十を過ぎたい若い者。頭にカーツと血がのぼるのも無理はない。知らぬ間に彼女に抱きついていて。いや、その先は未経験な彼のこと、抱かれていたと云った方がいいような有様。

人間の運命とはわからないもの。他意はあったが、そこまでは夢にも思わなかった松っあんも、気がついた時には一人前の「男」になっていた。

さすがにチョッピリ感傷もなくはなかったが、そこは根の図太い松っあんのこと、すぐ余裕を取り戻し、下宿を出るときにひらめいた他意の一つ、雑誌「K」のことを話し出した。さっきそれを見ていただけに彼女も察していたらしく、奥の室へと導かれた彼に、郁代は「これで縛って」と天袋から取出した箱を差出して云った。中身は旦那の好みであるう、麻縄、ロープ、細引きがゴツソリ。おまけにローソク、猿轡だののたぐい。クルリと

背を向けた郁代、丸味のある両腕を背中中で組んで坐り込んだ。

それからの松っあんは、下宿の床で眠れぬ枕で幻想した思い出を総動員して縛ったのだが、なにしろ生まれて初めてのことなのだから、しっかり縛ったつもりでも自然と緩みが出てしまう。それでも郁代、相手がいつもと違うからか声にならない声をもらしている。その声はちょうど、幼かった日に衣擦れの音と共に襖越しに耳にしたのによく似ていた。

その一夜こそ、松っあんにとっては、それまでの人生で最大の祭典となった訳だが、今まで、想像の世界では色々と思いをめぐらせて遊びまわってはいいたものの、実際に行なうとなると、なにか人類の究極の悲愴感というような気持すら感じ、感激というより、おかしさが込み上げてきてならなかった。

○

その日からというものの松っあんは、旦那の出勤日だという十日、十五日、二十日、二十五日、そして月末だけは避けたものの、他の日は二日とあけずに日参するようになった。

松っあんは避けるべき日を聞かされた時、郁代に「旦那は掛取りみたいなんだなあ」と云って大笑いしたものだ。

その旦那の責め方を彼女から聞いて、負けるもんかと松っあんは大いにハッスルした。

ローソク責めやら、擦り責め。初めて眼にした、レースでふちどりされた責めパンティーを郁代にはかせ、茶袱台を立てたその上に後手に縛って追い上げ、木馬責めまでやってみた。エスカレートは日を追うごとに進行し、松っあんが気の進まなかった浣腸責めまで、郁代のしつこい望みに負けて試みた。

○

夜のしじまを汽車は突っぱしっている。あれこれと思い浮かぶ自分の生活の暴走ぶりやと思うと寝つかれず衣擦れに耳を動かす彼であった。「盗まなくても仕入は出来るが、もう下着のバイトだけでもよそう」そんなことを考えているうち、汽車は甲府の手前の山梨市に入っていた。

又、衣擦れの音がした。眼を閉じたままの松っあんの臉に母の顔が映った。しかしそれは、さき程連想した幼い頃の例の時の母の顔ではなく、自分をいたわってくれた時の懐かしい笑顔であった。

松っあんは、まだまだ早いと思ひながら、手には知らぬ間に僅かな土産物の荷物をしっかりと掴んでいた。

(おわり)

男性虐待快樂術(第十一話)



フレンチ

キス劇場

(後篇)

馬族保

(十)

詩人・千野力弥、海水浴場で
鳳マヤの傲慢美の虜となり、
謀られてマヤの出演する映画
へ、引出される破目に陥るこ
と……。

七月下旬に都市対抗野球、八月に這入ると
全国高校野球が炎天下に球宴を展げた。集中
豪雨など、まるで嘘っぱちか、ずうっと昔の
ことのように記憶から遠のくほど、毎日三十

六度のうだるような高温がつづき、太陽は、
ぎらぎらと照りつけた。一と雨くる気配さえ
なかった。

長垂海岸は河童の群れで、例年にない盛況
を呈した。まばらに点在した海端の農家の風
景は一変し、色とりどりの海の家がこれに
取ってかわった。

午後の日射しは、ことに強い。

千野力弥は、松原に腰をおろし、へ季節の
射程」という題名の詩を作っていた。

彼は、ある同人雑誌の編集同人で、詩人だ
った。彼は詩人であることに大きな誇りをも
っていた。詩は彼のいのちだと千野はいう。

孤高の精神の所産をポエムと信じ、清貧を愛
し物質を軽蔑した。彼の作品には、蛆虫がゾ
ロゾロ登場する。人間は所詮、蛆虫でしか
ない、というのが千野力弥の詩精神の根本テ
マであった。

千野力弥は目の上に垂れさがる長髪を幾度
となく、細い指で掻きあげながらへ季節の射

程に没頭していた。

思索の途中で、ふと眼をあげて海辺を見たときだ。

「おお！」

と、おもわず声に出して、一つの現象を眺めた。

つば広の白い日除け帽、サングラス、サイケ模様のビキニの水着、輝くように真っ白い豊かな肢態を、男の肩車に騎せ、長いパイプのたばこをゆっくり吹かしてくる若い女の姿が眸に映った。

「おお！」

千野は、もう一度、声をあげると、詩稿を一つつかみにして立ち上り、肩車の女性のほうへ走り寄った。

若い女——鳳マヤは、血相を変えて馳け寄る力弥の顔へ、肩車の上からサングラス越しにジロリと一瞥をくれた。紅い唇の色が、白昼の日光に冴えて、鮮烈な印象を与えた。

海辺の浴客の男も女も、マヤの桁外れの美貌と豊麗な肉体に見惚れた。肩車の役をつとめる工良房を見ている者は、一人もいなかった。

騎れる美女には、彼女の美貌を引きたてる小道具が必要だ。小道具の役など、軽蔑され

て目立たない存在だが、実際には、いないとマヤの美貌が数倍に際立ったりはしない。

いつの世にも、道化役は主役の引立役として必要であるけれども、結局は空気のような存在でしかない。

肉体美に自信のある女は、露出症である。

鳳マヤは、その気が、とくにつよい。商売柄脱ぎっぷりはいいし、私生活の上でも自慢のおっぱいを露出するぐらい、しょっちゅうであった。衣裳を身につけない、素裸の日常生活が、最高だという。彼女の寝台の壁にも、天井にも、全身を写し出す鏡が張りめぐらされていた。

マヤは時として、くるおしく彼女自身の肩にキスし、鏡の中のマヤの唇に彼女の唇を重ねて吸うことも屢々であった。

鳳マヤは、群衆の視線の中に、彼女の肢態を悠然とさらし終ると、堪能したように、良房の耳をひっぱって方向を転じ、赤と青と白のまんだらのビーチ・パラソルの憩いの場所へ帰った。

折畳み式のナイロンの寝椅子と小さなテーブルがおかれ、テーブルには飲物と果物を入れた紙籠が載っていた。

マヤは、寝椅子へ横たわる。

工良房は、マヤの身体にサンオイルをのばしはじめた。サングラスの顔を上にし、マヤは眼を閉じている。

「あのう、失礼ですが……」

長髪の詩人、千野力弥だった。マヤは眼を閉じたままである。

「何かご用ですか」

工良房が訊いた。

「ええ。間違っていたらお許し下さい。もしかしたら、その方は、東洋映画の鳳マヤさんではありませんか」

「ほう。よくわかりましたね」

「やっぱり。僕は彼女の大のファンでしてねこういう者です」

千野力弥は名刺を出した。彼の関係している同人雑誌の名前が、ずらりと並んでいた。ふけばとぶよな詩人という名の無能力者は、胸を張って名乗りをあげたのだった。

「なるほど、詩人ですか。それで、鳳マヤさんに何かご用ですか？」

「はあ」

力弥は急に声を落とし、工の耳もとに唇を寄せながら、囁くようにいった。

「鳳マヤ嬢に、詩を捧げたいのです」

「詩をね、どんな詩ですか」

「鳳マヤを讃える詩です」

眼をつむっていたマヤが、むっくり上半身を起こした。サングラスを右の指に取って、力弥の顔をまっすぐに見た。

「いいわ。わたしを讃える詩を捧げて頂くわそれには、わたしをよく見て貰いたい。四日後、お電話してよ。都合のよい日時を指定するから」

「いや。それはおよしになったほうが……」

良房がとめにかかるのを、マヤは命令口調に押えた。

「お黙り！ わかってるわ。略図を書いておやり」

しぶしぶ、マヤの家までの簡単な案内図を書いて力弥に手わたすと、

「良房、さあ、つづけて」

鳳マヤは、寝椅子にうつ伏せになって、背線と、うず隆いお臀を上に向けた。

千野は、おもわず固唾をのんだ。

夜の八時過ぎ、東京の丘眉美から電話がかかった。

「もしもし、あたい眉美」

「何か起きたの」

「ううん。今度ね、鳳マヤ主演の脚本が出来

上り、九州ロケすることになったの。姉き、どうする？」

「おピンクは、もう、いや」

「でしょう。あたい、いってやったの。もう姉きは、だめだって。でも青沼の監督さん契約は切れてないから、どうしても撮るんだと諾かないの。全巻カラーでゆく、という張り方なのよ。あたいも、出るわよ」

「全巻カラーとは、ちよいと聞き捨てにならないわね。それで、脚本のストーリーは、どんな。眉美、話してみな」

「電話料が高つくわよ」

「ケチ。いいわ。何かいいもの送ってあげるから、眉美、話してみな」

「じゃ仕方がない。話すわよ。題名はへ女王蜂の祭壇」というの。但しこれは仮題。実業家の桃井由多可は、目下、英国滞在中。若妻の桃井蘭子は、蜜を求めて集まる男どもを彼女の快樂の奴隷にして夜毎、奉仕させる。馬にしたりサンダル裏を舐めさせたり、フレンチ・キスさせたり、たん壺にしたりネクトルを飲ませたり、鞭を使う場面も何カットかあるわよ。——蘭子は、男たちが彼女のいうことなら、どんなムリな注文でも易々諾々と服従するのが、面白くてたまらないの。そ

んな魅力が彼女自身に備わっていることに蘭子は始めて気づくの。蘭子は男たちに、あらゆる醜行を命じてよろこぶ本能をもっている。良人にすまないとは少しも感じないの。身体は綺麗でいて、良人からは得られない快樂に陶醉するの。良人が英国より帰国すると今度は、奴隷たちに彼女の祭壇をつくらせ、一週に一回ずつ、その祭壇に君臨するというおはなし。どう？ 姉きの肉体美をふんだんに盛りこもうというこの企画は。——でも、姉きは、もうおピンクはいやでしょ」

「ちよい待ち。条件つけるわ。わたし演るといって」

「へエ。演るの。これは意外。条件って、何よ」

「奴隷のうち三人は、マヤが選んだ男を使うこと。おっぱいは露出しないこと。ブラジャーとパンティは金色にすること。フレンチ・キスは実演だから、蘭子の上半身を撮り大寫しは、陶醉した彼女の顔の表情だけを、角度をかえて十カット撮ること。誇張したもたえの演技は一切避けること。クライマックスは森のように静かで、蘭子のもらす声だけを顔のクローズアップに合せて録音すること。その条件なら演るわ。セットは組まなくても

いいわよ。わたしの家を使えばいい。眉美、青沼先生にそう伝えな」

「ああ、ややこしいわ。もういちどいつて」「ばかっ。もういちどいうから、メモしな」「よっしゃ。さあ、いつて」

千野力弥が電話をかけて来たのは約束どおり海水浴の日から四日目の夜であった。力弥は、もう三篇、マヤを讃える詩を作ったと告げた。

マヤは、つんつんした声音でいった。

「わたしをよく知りしないで、何が詩なもんか。今夜八時半に、わたしの家においで。本当にわたしを讃美させてやるから。詩は、それから書くのが順序だわ。いい加減な空文句だと許さないわよ」

怒られているようで、千野力弥は、ちぢみあがった。

詩人なんて、実益は何もなかった。精神的な誇りだけが、彼らの生甲斐であった。同人費を出し合い、雑誌を出版し、活字になった自分の作品を、自分で何冊かを買ひ、友人、知人の誰彼にこれを配って、声価を求める。お世辞でもいいから反響があれば、ささやかな満足感を得るのである。

詩人と称する群像の何と多いことか。

もっと滑稽なことは、詩壇は彼らとは全く無関係に見えることである。その証拠に現代詩集には、つねに明治から昭和中期までの詩人の作品ばかりで埋められている。若いやつらは所詮、へっぽこ詩人である。だから、こつこつ貯金して詩集を自費出版しても、詩壇の態勢には何の影響もおよばないというわけである。

詩人の千野力弥は、指定された時間よりも十分ばかり早く、マヤの家の玄関に立った。チャイムを押すと足音がして、三十代の男が現われた。あの日、マヤを肩車に騎せていた男だ。

「どうぞ。さあ、お上りなさい」

和室に案内された。

応接台の前に坐ったきり、お茶一つ出ないし、マヤも顔を出さなかった。五十分も放ったらかされたままであった。隣室からは、ステレオの音楽が流れていたが、応待する気配さえない。

そのとき部屋の電灯が消えて、真暗になった。しかし隣の部屋には、電灯が点っていると見えて、小さな照明の光線が一本、尾を曳いて射しこんでいた。

「馬鹿にしてやがる」

詩人は純粋であった。肚に据えかねた。何をしているのだろう。

何気なく、鍵孔に眼をあてて覗いた。

「あっ！」

力弥は小さな驚愕の声を発し、釘づけになった。

力弥の視野の真正面に、鳳マヤが銀冠をかぶり、金色のブラジャーとパンティをつけ、宝石を鏤ばめたサンダルを穿いて、虎の毛皮を敷いた大型の椅子に、錫杖を持って傲然と坐っていた。

その祭壇のマヤの爪さきに、男がひれ伏して、礼拝していた。男は何か祈りの言葉をしきりに口誦さんでいる。

水色の照明の下にさらされた鳳マヤの肉体の皮膚は、神々しいまでに神秘をふくみ、燦いて見えた。

千野力弥の心身に、たちまち異常な変化が起こる。

錫杖でボンと床をつき合図をすると、マヤは高々と脚を組んだ。

男はもう奴隷だった。うやうやしく膝行しマヤの足を靴ごと額におし頂き、それから足の甲へ顔を伏せた。

力弥の視界では、それを確認できないが、唇をつけて吸っているのがよくわかった。蝸牛のように唇が脛を匍い登ってゆく。あたまの動きで、それがわかる。

マヤは脚を組みかえる。

おなじ動作で、奴隷のうやうやしい脚接吻の儀式がつづいた。

壮嚴な女神崇拜の儀式を目のあたりにし、千野力弥は昂奮した。その昂奮を何とか鎮めようとはじめたときである。

長身の男が足音もなく力弥の背ろへ近づいて肩を叩いた。

「君は誰だ」

千野は、呼吸が凍りつくような衝撃を受けた。声も出ない。

「君は誰だよ」

石川隆作は、ドアの把手を回して、隣室に声をかけた。

「マヤ、この男は何者だ」

女神が平然と答えた。

「知らないわ。泥棒じゃないかしら。パパ、捕まえて」

「そうか。太い奴だ」

隆作は力弥の胸倉を取った。工良房も、すぐ片腕を捻じあげた。

「良房、縛りあげな」

マヤは、しゃあしゃあとして、ナイロンの縄を良房に手わたした。千野力弥の身体は糞虫のようにぐるぐる巻きに縛りあげられた。

覗かれる刺激を、マヤも良房も体験したし石川隆作は、覗く愉しみを覚えた。鳳マヤの肉体には、汲めどもつきぬ魅力が滾々とあふれてきて、隆作は飽くことがなかった。何という不思議な肉体であろう。まさしく性的魅力の塊りであった。

「おい、下郎！」

マヤは、後手に縛られ、行儀よく坐った力弥の膝を、サンダルの踵でぐっとふみにじった。

力弥の顔が、なにかを哀願するようにマヤを見上げた。

「ふん」

憎々しげに鼻を鳴らすと、今度は靴の裏をあたまのつむじにあて、数回ぐるぐる撫ぜ廻し、屈辱にゆがむ力弥の表情を愉しむのだった。

「パパ、東洋映画がマヤを主演にした映画をここで撮影するかもしれないわ。そのときはこいつに、マヤの扮する桃井蘭子という美女のたん壺で、ネクタール吸取器の役を勤めさ

せるの。パパは人間馬とマッサージ役、良房はフレンチ・キスの役、映画に出演させるわよ」

「おいおい。パパは、ごめんだな。そんなハレンチな役」

「だって、マヤ、もうOKしたもの。遅いわよ。それとも、マヤの肉体美をカラーで撮るというのに、パパは協力してくれないの」「協力は惜しまないよ。だけど映画に出るというのは困る」

「メーカーシップすれば、パパだってこと、わかりっこないわ」

「ふうん。たしかに刺激は、たまらないだろうな」

「でしよう。監督にいつて、マヤの太腿のあいだに挟み込んだパパの顔を、一カット撮らせることにするわ」

「やっぱり良房君にしてくれ。パパは遠慮したいな。馬にはなるから」

「良房はね、フレンチ・キスする役なのよよかったら、その役パパにさせたましようか」

三人は面白くてたまらないというようにゲラゲラと笑い興じた。

そんな会話を、千野力弥はポカンと、ふぬ

けた顔つきで聞いていた。

それに気づくと、マヤは、いきなり力弥の長髪に指を突っこみ、

「顔をあげな」

と、わしずかみにして顔をあおむかせた。

ぎゅうっと握った髪を、すっと立ちほだかった太腿に引き寄せ、

「おい、下郎！ わたしのやわ肌の匂いを胸いっぱい嗅いでみたいだろう。気が遠くなるほど、いい匂いだから。マヤさまの愛用する香水の匂いを、よく覚えておくんだよ。さあ息をふかく吸うんだ」

千野力弥の大きく深呼吸をくりかえす息がマヤの腿を熱くした。

マヤは、こぼれるような笑顔を隆作に向けて人差指で力弥を差し、

「こいつ、マヤのネクタールの吸取器よ。パパ、これから、とても愉しくなるわよ」

(十一)

上原篤三、立花紅子との出会いに始めてその秘密を打明けること並びに立花紅子ショーに太宰港二の同伴を許可すること

立花紅子の主演映画『赤い靴の舗道』が、いよいよ十月にクラシックインすることに本決

まりした。スケジュールは、いっぱい詰まっていた。『キャバラン歌謡大行進』が日劇で『各社花形歌手・絢爛秋の歌祭り』年末年始にかけてNHKの『大晦日恒例紅白歌合戦』スポンサー・××自動車の『民放新年歌のお年玉』というスケジュールだった。

さしあたり、九州の小倉、福岡、熊本、長崎のキャバレー出演が待っている。とにかくキャラバンレコードの上原篤三会長のスケジュールには、歌手はいつも泣かされた。上原のワンマンは有名だ。長男の英樹に社長の椅子を譲り、いちおう現役からしりぞいたかに見えたが、そうではなかった。たいへんな精力家で、仕事の鬼という定評がある。

事業欲の権化のような上原篤三に一つの秘密があった。彼はマゾヒストだった。別に特異なケースではない。権力の座にあるものには、サドとマゾが隣り合せて同居していて、弱い相手に威張り散らし虐たげる快感と、もう一つ、完膚なきまでに滅茶めちゃにして貰いたい受身の欲求が両極端に同棲している。その欲求へのあこがれは、セックスの面で現われるのが普通で、嗜みの女性にたどりつく。

上原篤三は、大胆で、やくざ気味の美女が

好きだ。

美貌・肉体美・キメの細かい白い皮膚。

立花紅子との出会いは、事業欲だけに取り憑かれた彼のストレスを解消したばかりでなく、生活のムードを一変する効用があった。後になって、篤三は紅子の肉体に耽溺したが当時十六歳だった歌手志願の一少女を、テストしてみるとなかなか素質がある。そこで篤三は紅子を引き取って養成することにした。実際は篤三も、今日の立花紅子が誕生するとは、当時夢想だにしなかったことだ。

紅子は人見しりをしない女の子だった。早熟の彼女の身体は、立派な大人の肉体に成長し、無邪気な図々しさとグラマーの全身から溢れ出るコケツツシュは、男達を悩殺するに充分であった。

紅子は、会社中の誰もがおそれ戦っている社長の篤三を、少しも怖がらなかった。

あるとき、社長室に呼ばれたことがある。

「紅子。今度、新曲を君に歌って貰うことになったよ」

といって、楽譜を見せた。平然としたまま手に取って、譜面を読みながら小さく口誦さんでいた紅子が、

「社長さん、この歌、いけるわよ」

と生意気な口を利いた。

「ほう。ヒット曲になりそうか」

「社長さん、紅子にたばこ喫わせて」

「おい紅子、君はたばこ喫むのか。歌手にたばこは禁物だというのに」

「喫わないわ。ただ、ずうっと前から、社長さんのたばこを喫ってみたいと思っていましたの。喫わせて」

社長の卓子の上の外国たばこを一本ぬいてスパスパ喫いはじめた。が、すぐ咳きこんでやめた。

「よせ、よせ。ばかなやつだ」

「でも、本望とげたわ」

「おかしな女だな、お前は。紅子、君は私が怖くないのか」

「怖い？ あらっ、どうして社長さんが怖いの。紅子、社長さん大好き！」

「こいつ、おちよくりがって」

「ううん、嘘じゃない。本当に大好きよ」

篤三は急に黙りこんで、大人とも子供ともつかない紅子の若々しい容貌を覗めた。

それ以来、篤三は紅子を誘ってよく食事に出かけた。

料理が出るたびに紅子は目をかがやかし、箸を動かして、健啖振りを示した。

ビールも三本ぐらい飲んだ。頬をポーッと紅くして、篤三が手首を握ると怒ったように引っ込め、

「紅子を誘惑しようたって、そうはいかないわ。社長さんは、助平でしょ」

「ばっか。何をいうとるか。紅子の頬の色の美しいこと、食べたいくらいだ。紅子、お前の頬っぺたにキスさせろよ」

「いや」

「ケチンボウ」

「うふふ。紅子、天下の上原篤三を誘惑しなくなったわ。こてん、こてんに骨抜きにしてやろうかな」

「生意気いいやがる。紅子は、まだバージンだろう」

あははは、と篤三は腹を揺すり、大声をあげて笑った。ここ数年、絶えてなかったことだ。男も知らないくせに、誘惑しなくなったという紅子の台詞が、腹の底からおかしかった。そんな台詞を吐きながら、当の紅子はキョトンとして、何をいったのか覚えていない様子であった。それがまた、余計おかしさを増した。

篤三は、紅子の天衣無縫の魅力に圧倒された。紅子と一緒にいるときの篤三は、社長室

の苦虫を噛みつぶしたような顔とは違って、相好を崩し、愉しくてたまらない表情であった。

姫路城が見たいという紅子のために、一泊旅行したことがある。勿論、お忍びだった。

その夜、観光ホテルに泊った。

部屋つきのバス・ルームに篤三が這入り、「紅子も一緒にどう？ お互い、流しっこしようよ」

「パパ、紅子の身体が見たいんですよ。ちゃんとわかってるわ」

「そうだ、そうだ。紅子の肉体美が見たい」「あたまがヘンになっても、しらないわよ」

お互い身体を流し合って入浴を終り、浴衣に着換えた。三面鏡を前に、長い時間をかけて化粧していた紅子が、次の間の食卓に現われたときは、匂うばかりに輝いて見えた。

「おお——」

おもわず篤三が、うなった。

「パパ、今夜は飲むわよ。紅子、とってもうれしいの」

「よからう。パパも飲むよ」

二人はビールをグイグイと飲んだ。だいが酩酊してくると、

「パパ、踊りに行きましょ」

「何いうか。誰に見られるか分らないのに。それより紅子に按摩して貰いたいな。パパの背中ゴゴゴ踊ったら、どう？」

「転んじゃうわよ」

「とにかく、くたびれた。たのむから、パパの全身を紅子の足で踏んでくれよ」

「いいわ。でも、紅子は重いわよ。五十八キロあるもの」

うつ伏せになった篤三の背中に乗ると背中からお臀へ、キヤッ、キヤッと声をたてながら、今度はお臀から背中を踏んで廻る。五、六回、往復すると、

「首すじ」

両手の甲の上に顔を伏せて、篤三が催促する。

「もっと上」

紅子の艶やかな足の下で、篤三の全身がブヨブヨと歪むのだった。

「さあ、今度は馬」と四つ這いになる。

「人間馬ね」

一瞬ひるんだようにみえたが、紅子の顔には遊戯を愉しむ表情だけが動いた。

「さあ、走れ走れ。あは、は、は」

絨緞の上を、ぐるぐると篤三馬は這い回っ

た。大きい馬が、ゼイゼイと息を切らして這いずり回る。

「もう、いやっ！」

急に怒ったように紅子が、ずっと背中から降りた。

「どうした紅子。パパは面白くてたまらないんだ。お馬ごっこを、もっと続けてくれよ」
紅子は、キラキラ光る眼差を篤三に向けて睨みつけている。

「紅子きらい。パパを馬にするなんて、いやよ」

「どうしてだい。パパは、面白くてたまらないよ。紅子なら、パパ、馬になっても構わない」

重くるしい沈黙が流れた。

「……紅子！」

篤三は、浴衣の前をはだけて、とき色のパンティの腿から下を露出した紅子のしどけない腰に、抱きついた。

「紅子！ パパはマゾヒストなんだ。パパは一度も女に惚れたことがない。理想の女性にめぐり逢わなかったからだ。パパは始めて紅子に惚れてしまった。パパをお前の奴隷にしてくれ。パパはお前の豚になりたい。お前のことなら、何でも聞く。ねえ紅子、お願

いだから、パパをお前の奴隷にしてくれないか。そのかわり、パパは他のどんな女にも、目もくれない。お前一人の奴隷になって、忠誠をつくす。わかってくれないか」

紅子は執拗に黙りこくっていた。

寝室に引揚げると、紅子は緋色のネグリジエに着換え、洋ふとんを身体に掛けて、寝台に、もぐり込んだ。熱にうなされたような篤三の口説きの言葉が、なまなましく胸に残っていた。

まだ一度も他の女に惚れたことはないのに紅子には夢中になるほど惚れてしまった。わたしを、紅子の奴隷にしてくれないか。紅子のことなら、どんなことでも聞く。紅子一人の奴隷になりたいのだ。

眼をつむりながら、紅子はゆっくり篤三の恋の文句をくり返してみる。急におかしさと性的快感が全身を擦った。マゾヒストという言葉を知らないわけではなかったが、実際には、どんなものか正体はわからない。しかし天下の上原篤三が彼女の奴隷になりたいと熱い息を吹きつけた体温は、ふわふわと雲の上を遊ぶような感覚であった。

枕もとの電気スタンドが、みどり色の光線をやわらかく放ち、部屋のなかには、ものうげ

に静かである。

どのくらいの時間が経ったのか、はっきりしないが、とろとろと睡魔に襲われたときだった。

たしかに、音もなく篤三の近づく気配がした。紅子は、ああ眠いわ、とつぶやいたような記憶がある。

彼女の片方の足に手が触った。甲の上に熱いものが重なった。ああ、拒まなくちゃいけないわ、と思いながら、一方にそれを待っている気持が動いていた。唇の体温が次第に上へ這い昇ってくる。ネグリジェの裾をめくり腿を伝いながら、指先は紅子のパンティを下へおろしてゆく。紅子は眠った意識のなかでその動作を容易にしてやるために、腰を動かしたように思う。

全身を火のような快感が走った。紅子は身ぶるいした。

神様が人間に乗り移ったような、厳肅な瞬間であった。

奥村チヨの「恋の奴隷」が忽ちヒットし出した。前後するように、太宰港二のデビュー曲「あなただけのしもべ」がキャラバンから発売されたが、レコードの売行きから比較すると

むざんな成績であった。

それでも、大阪地方から名古屋地方にかけて、相当の実績をあげたという。東京でも、銀座界隈では、喫茶店やレストランで、へあなただけのしもべ」のレコードがかけられ、ラジオの今週のベスト10にも一時は連続して上ったことがある。

とにかく、太宰港二は、立花紅子の酷しいレッスンに耐え、歌手の登竜門にも合格した。

何よりも港二をよろこばせたのは、ふたたび紅子の小姓に戻れたこと、彼女の身の廻りの一切の世話が出来ようになったことだった。港二は、それこそ小犬のように紅子の足許にまつわり、まめまめしく仕えた。

あるとき、たばこの一本を紅子の目の前で喫いつけようとし、

「港二、だめよ」

というなり、平掌がピシリッと港二の頬に弾けた。

「歯を見せてごらん」

歯並を剥いて見せると、紅子は口中のすみずみまで覗き込むように点検した。港二の歯並は真珠色に、白さが青みがかって澄み、シミ一つなく、清冽だった。紅子の表情は、な

ごんだ。

「今まで何本喫ったの」

「六本です」

「たばこは、港二が青年になるまでおあずけよ。喫んだら承知しないから。いいわね」

「はい。もうお許しが出るまで喫みません、先生！」

「そうおし」

清潔感のあふれる真白い歯は接吻の快味につながるのだ。紅子の場合、もっと本能的で肉感的だった。港二が弟子入りして一年が経っている。彼も十八才。一年の間に、港二の肉体の発育には、もりもりした逞しさが感じられるようになった。紅子は満足であった。マスコミのうるさい芸能界である。外見には色恋沙汰に超然としたふうを装わねばならなかった。

「先生！ 先生！」

食いつきたいほど透きとおる白い頬を、羞らいで真赤に染めながら、しがみついてくるときの港二の初々しさ、可愛らしさは、紅子の導くままにのたうち、骨の髄まで堪能させた。

紅子は唇を半開にし、陶醉する。

「港二、わたしの身体中のすみずみまでキス

おし」

……覆面の豚が現われると、紅子はたちまち暴君になって荒れた。

鞭で打ちのめし、サンダルの尖った踵で、背中をふみにじった。豚の身体中は、みみず腫れが浮彫りの地図を描き、踵のあとの皮膚の破れから血糊がふき出した。

豚は血達磨になって、のたうちまわり、

「紅子女王さま！」

と紅子を求めた。

紅子は豚の頭を蹴とばし、おお向けに転ばせると、その顔の上に跨り、胸の上に港二を騎せて向き合い、激しい接吻。紅子のお唇に呼吸を塞がれた豚の苦しい呻きと身悶えが刺激となって、接吻の快感を増強してゆく。

太宰港二は、豚の正体を知らない。

九州のキャバレー巡業へ立花紅子ショー

に、太宰港二を同伴させると紅子がいい出した。理由は、郷里の両親に港二を一目会わせたいというのだった。港二を同伴させることは問題なく決まった。しかし、ほんとうは、その場に港二が同席していたわけではないし紅子の口頭禅に、すぎなかったのかもしれない。両親に会わせるとなると一人息子の港二に何か異変が起こりかねない。

紅子は、始めから爪の垢ほども本気に考えるつもりはなかったのだ。

出発の前日、紅子が港二に耳うちした。

「赤坂が随行したいというのよ。経費は彼もちだから構わないけれど、お前ホテルなどの連絡をしておくれ」

赤坂九十九からは、毎月顧問手当をうけ取っている。だからといって、お礼ごろを酬いるような紅子ではない。九十九でないと勤まらない快樂が、彼女の旅行を愉しくするために待ち受けているはずであった。

(十二)

石川隆作親子、立花紅子ショーと東洋映画へ、郷里においてそれぞれ出演すること

「おばしゃん、おんしゃるとね」

おばさん、いらっしゃいますかという博多弁である。福岡市C町の石川隆作宅を訪ねたのは、近所に住む恩地東六で、末っ子の瑞穂より二つ年上だった。瑞穂とは大の仲よしでウマが合った。現在、市役所に勤めているが瑞穂が家出したあとも、週刊誌や芸能雑誌を通じて、何かと彼の消息を索していた青年である。

その東六が、広告ビラを手にして土間に突っ立っていた。

「あー東六さん、珍しかね。なんごとだすかいね。早よ上ってつかわさい」

奥から出て来た石川多津は、東六の顔を見るなり、すっかり相好を崩した。

「いいえ、ここで結構です。おばしゃん、このポスターを見てやってんしゃい。これや、瑞穂しゃんじゃなかですな。太宰港二という新人歌手だす。福岡のレコード店から一枚、やっと貰い受けたんです」

「へエ、これが瑞穂だすかいな。ほんなことよう似とりますね。だけど、こんな立派な男前じゃなかでしょ、瑞穂は……」

「出身地、福岡市ってちゃんと書いてありますけん、もう間違いはなかと思ひますがね」

「ちょっと、ちょっと待ってんしゃい。お父ちゃんに電話してみまっしょ」

多津の電話は、石川隆作に大きな衝撃をあたえた。

その頃、東京から東洋映画の撮影隊が、姪ノ浜の鳳マヤの邸宅に到着し、脚本を中心にカメラ、セット、照明、出演者の打合わせでテンヤワンの騒ぎを呈している最中であった。マヤから、すぐ駆けつけるように、矢の

ような催促の電話がかかり、今ゆくからと答えて電話を切ったところだった。

「何っ、瑞穂が見つかったって？ おお、そうか。どこにいる？」

「まだ、ハッキリしたわけじゃありません。

東六さんが、太宰港二という新人歌手のポスターを持って来て間違いないというんです」

「お前は見たのか？」

隆作の声が電話口で大きく弾んだ。

「見ましたよ。そっくりです」

「太宰港二というんだな」

「よく似ているんですけど立派すぎますよ。

いくら何でも、瑞穂があんなに立派になるなんて考えられません。他人の空似かも……」

「ばかっ。馬子にも衣裳だ。瑞穂にちがいない。ぜったい瑞穂だと思え。その他のことはわからないか？」

「出身地は福岡市です」

「おれは忙しいんだ。もっと要領よく話せないのか。このちょこすけめ。いよいよ瑞穂に間違いない。東六君に金を渡して、太宰港二のレコードを買って来て貰え。わかったな」
がちゃんと電話を切ると、隆作は顔の汗をふきふき会社の裏口から外へ出た。ブロック塀の内側に駐めた自家用車に乗ると、姪ノ浜

の方向に駛り出した。

鳳マヤの家の中は、撮影道具や雑多な荷物で埋まり、俳優・スタッフ十名が狭い家の中に、芋を洗うようにゴロゴロ雑居している。工良房や千野力弥の顔も見える。鰻井を取寄せ、食事の最中だった。

「社長さんですか。私が監督の青沼です。このたびは、いろいろお世話になります」

四十年配のベレーを冠った男が、無愛想な表情で近づき、頭を下げたような下げないような、中途半端な挨拶をした。

「いやあ。狭くくるところで、画になるかどうか心配してるんですよ。鳳マヤの美貌と肉体美を強調する映画でしたら、私も援助を惜しみません。マヤをもっと売り出してやって下さい。彼女をこのまま埋もらせることは実に惜しい。鳳マヤは、ダイヤモンドですからね」

マヤの傍に坐り、鰻をばくついていた眉美が、あきれ顔でマヤを見た。

「どうでしょ、あのマヤ呆けぶりは。ね、聞いた姉き。お父ちゃん、まったく骨までグニャグニャよ。姉きも大したものね。悪い気持はしないでしょ」

マヤは唇のまわりに微笑をうかべたまま無

言。——訊くだけヤボだといったげな表情だった。

監督の青沼のガラガラ声が答えた。

「同感です。実は僕も鳳マヤを大いに売りたい。そして東洋映画の経済的ピンチを脱出したと必死です。——そこで大変不躰で飛躍したご相談ですが、社長さんに東洋映画の社長に就任して頂きたいのです。これはスタッフ全員の一致した希望です」

「即答できませんが、あとでマヤの意見も聞いておきましょう。とにかく、発足したばかりの会社が、まだ海のものとも山のものともわからない状態ですから。……ところで、これから夜間撮影でしょう。照明に使用する電気の許可は取ってありますかな」

「パパ、それなら、わたしがちゃんと貰ったわ」

青沼が、ことばを継いだ。

「大半は、蘭子の部屋が主要場面になりますから、特殊な小道具は用意して来ましたが、装置はこのままで結構です。寝台も寝具も、それから調度品も、色彩感覚は合格。あとは配役だけです。僕が心配しているのは、鳳君の意見を採用することになりましたものの、実は……素人は素人ですからね。演技面で、や

はり心配ですね」

「そういわれると、痛いですね。マヤが勝手にひとり決めてしまったらしくて」

「パパ、大丈夫よ。わたしが決めた場面には監督さんをおやじを納得させる自信があるの。——良房、その台本取って。——シーンの6、それから53は千野の役で同じような演技でしょ。千野ここへおいで。蘭子の台詞から読むわ。」

「奴隷、その床に跪いて口を開ける。女王さまのネクタールを飲ませてあげるから。その前にワンと吠えろ」行徳仁の役、ほら、千野お前だよ」

行徳ハワン！ワン！

蘭子ハまだ、まだ。もっと吠えろ

行徳ハワン！ワン！

蘭子ハようし。飲ませてあげるよ。時間をかけて、ゆっくり飲むんだよ。きつとおいしいわよ。慌ててこぼすんじゃないよ

行徳ハワン！ワン！

「千野、いつもやってるとおり実演して見せようよ。監督さん、安心するわよ。わたしの服を脱がせて」

尻ごみしたのは短い時間だった。衆人環視の中にさらす奴隷の役に、千野力弥は性的興奮を催おした。白蛾のようなマヤの裸身の前

に平伏して、台詞と同時に演技をつけた。台本を捨てている。

一同は、あっけにとられ、固唾を呑んだ。

「おお、モーレッツ」

と眉美がつぶやく。

蘭子ハようし。飲ましてあげるよ。吠えろ

行徳ハワン！ワン！

蘭子ハ飲めっ！

マヤの眼は細まり、唇がゆがんだ。彼女の眼のふちがうすい紅を散らしたように赤らんでゆく。

「奴隷、もうよしというまで続けろ。ああ、最高だわ」

「ちょっと待った！」

青沼監督が中止を命じた。

「鳳君、このシーンは、カメラの位置を蘭子の快楽の表情に合わせるといふことらしいが僕は蘭子の脚の線をアップしながら、行徳の動きに、バックからピントを合わせたいんだがどうだろう？」

「それだと、台本を書きかえなくちゃ」

「勿論、書きかえるよ」

「でも、結局は行徳の頭をカメラはなめながら、蘭子の快楽の表情に移動し、角度をかえて撮ることになるわ」

「そうなるかな。それだと実演が最も効果的だな。石川氏のご意見を伺いたいですね」

「僕は反対意見です。映画は演技であって、実演ではない。真に迫ることも大切ですが、僕の嗜みからいえば、行徳の役は、蘭子の美貌を引立てるための演技だから、王冠をかむった蘭子、金色のブラジャーとパンティを着けた蘭子の方が、燦然と輝いていて、それは眼も眩むばかりの壮麗な美しさが出ると、おもうのです」

「なるほど」

青沼は、何か思いあたる節があるらしく、口を噤み、考えこむ。

石川隆作が青沼監督に訊いた。

「監督さん、私もマヤのために一と役買って出るんですがね。扮装するとこの顔は、僕と

いうことはわからないでしょうね」

「それやもう、別人になりますから、ご心配なく」

鳳マヤはキラキラ光る眼を、なすこともなく突っ立っている工良房に向けていたが、ピシリと平掌打ちをくわせ、

「おい、タン壺！」

ペツと床の絨緞に、つばきを吐いた。

「綺麗に吸い取って見せな」

跪坐した良房の首筋を、マヤの足がふみ敷く。あごが前にのめり、半分ひしゃげた顔は醜い歪形だ。足の重みを軽くしてやると、慣れたもので、絨緞のつばきは、ビールの泡のように良房の唇で吸い取られ、濡れたあとだけが残った。

「ホーウ！」

と一同が感嘆した。どう？ わたしの偉大な魔力は——といわんばかりにマヤが小鼻を膨らませた。

眉美が面白がって、

「あたいのも舐めてよ」

マヤを真似て、ペツとつばきを吐いた。眉美はそのときガムを噛んでいたから、つばきの量は豊富だった。

すると、むっくりと起きあがった良房の眼が、ムツとしたように眉美の顔をにらみつけた。

「おお、怖わい」

とマヤの身体に抱きついたが、その動作がおかしかったので、一同はぶっと噴き出し、ゲラゲラと笑い出した。

「こいつは、フレンチキスする役。監督さん、パパもふくめて、この三人の役者の出演料は無料よ。どう？ ずいぶん安い制作費じゃないか」

やなくて」

「ふうん！」

青沼監督は、すっかり鳳マヤの毒氣にあてられ、彼女のペースに捲きこまれて、抛なくなった。

(十三)

初対面の石川隆作と立花紅子がキャバレー・天壇で対峙し、一歩も引かぬ睨み合いをつづけること

九月二十日の黄昏どきだった。

恩地東六が那珂川べりを歩いていると、キャバレー・天壇の宣伝カーが立花紅子のヒット曲を流しながら、うしろから追いついた。東六はその日、謡曲の集まりがあって、役所を出る頃はうすい闇の色が水のように押し寄せて来て、街はすっかり夜の装いに変わり、ネオンが夜空に向かって明滅している時刻であつた。

博多駅まで徒歩で、ぶらぶら歩くのが帰路のコースである。△紅葉狩△を口誦みながらあるいていると、遠去かる宣伝カーの録音テープから、突如、若い女の声が流れ出した。「福岡市出身の新人歌手・太宰港二が当キャバレー・天壇に特別おめめいたします。福

岡市の皆さま、何とぞ太宰港二のためにご声援下さいませ。キャバレー・天壇で今宵たのしく……」

口誦さむ謡曲に聞き惚れていた耳へとびこんで来た文句を、恩地東六はハッキリ記憶していたわけではない。太宰港二——どこかで聞いた名前だった。もういちど反芻したとき東六は、はっとわれに返った。

その細い路地を左に折れ、本通りの雑沓の群に交じり、交番の前から街角を右に曲って天壇の正面へ出た。

東六は、事務所の方へ廻った。若い女の事務員二人と三十過ぎの男が、椅子に凭れて何か、しゃべっていた。

「お早よう」

ホステス達が自分のタイム・カードを抜きぬきながらタイミングを合わせる。華やかな出勤風景だ。

「太宰港二さんに会いたいのですが——」

「だいたいこうじ？ ピンちゃん、そんな人いたかな」

「ばかね。ほら、歌手の太宰港二のことよ」

「そうか。あなたは？」

「恩地東六と、いうものです。彼とは親友です。ショーが終って会いたいと伝えて下さい

ませんか」

「ピンちゃん。都合、聞いてみてくれや」

事務所の入口の道路に自動車が停まった。栗色に染めた髪をあたまのうしろで高く束ね余りを背中に垂らした女が降り立った。むらさき色に輝く耳飾りと襟を深く割った胸もとのネックレスが、大柄な肉体を引きたてて華麗であった。

「立花さん！ この人が太宰港二さんに面会したいといっています、どうしましょう」

と女事務員の一人が訊いた。

「あなた、どなた？」

立花紅子は、じろりと東六に流し目をくれた。

その美しさに圧倒されたように、東六は深くお辞儀した。

「僕は港二さんの親友で、恩地東六というものです。ショーが終ってから、港二君と会わせて頂きたいのですが、いけませんか」

「親友って、どの程度？」

「C町の家が隣同志で、瑞穂君とは大の仲良しでした」

「ふうん。——あなたにはお気の毒だけど、

港二は目下修業中で一番大事な時期ですの。

ご両親にも会わせたくないのよ。薄情のよう

ですけれど、太宰港二が一本立ちの歌手になるまで、お待ちになって下さいな」

「どうしてもだめでしたら、彼の楽屋で五分でも、十分でも結構です」

「いけないわ」

「そんな……ほんの一目だけでも……」

押問答しているところへ、二階の楽屋から電話を借りるため港二が階段を降りて来た。

東六は縋りつくように、咄嗟に港二の本名を呼んだ。

「瑞穂君！」

港二も東六の姿を認めた。

「おお、東六さん！」

思わず二人は歩み寄って、どちらかともなく握手した。久闊のなつかしさが把り合ったお互いの掌から、春の陽射しのような暖かみになって滲み出した。

紅子が酷しい声音で、叱るようにたしなめた。

「港二！ だめよ。すぐ、わたしの楽屋へおいでっ！」

とん、とんと階段を登りながら、紅子の催促する言葉が筒ぬける。

「はい！」

うらめしそうに見上げる港二の眸には暗い

翳りがあった。紅子から因果をいいふくめられていたことだし、覚悟はとうにできていたはずである。第一、彼自身も、歌手として独立するまでは、郷里に錦を飾るつもりはなかった。しかし、——わざわざ訪ねてくれた旧友との面会さえ謝絶されるのは、やはり辛いのである。

「東六さん、すみません。お元気で。——」

「港二！ 早くおいで。何をぐずぐずしてるの」

「はい、唯今！」

じいっと東六を視つめた港二の眼は、ねっとり熱っぽかった。左手をひらひら振りながら、一足とびに階段を登ってゆく港二の後ろ姿を、東六は沸るような感情を罩めて視送った。

その時刻、姪ノ浜の鳳マヤの家では、夜間撮影が続いていた。場面は、石川隆作の出演で、蘭子が人間馬を騎り廻して興ずるシーンだ。本番でNGが続出し、もう一度テストからやり直すことになり、一と息入れているところだった。

隆作は汗まみれになって、息を切らしている。拭いても拭いても、あふれ出る汗をもて

余し気味である。バスルームでシャワーを使い、ようやく汗を押えたとき電話が、かかった。

「並建です。社長ですか」

電話は、会社の総務部長からであった。

「何だ。今時分——」

「会社の方に、恩地東六という若い男が社長を訪ねて来ているようですが、何か急用があるというのです」

「その男なら知っている。急用って、何だろう」

「息子さんのことだそうです。何でも恩地君は、社長の息子さんとたった今会って来たばかりだということです。社長は忙しくて、九時過ぎでないと身体があかないと伝えましたところ、十時に東中洲の『一品香』に待っているから、ぜひおいで願いたいとのことですがどう返辞したものでしょう」

「よし、わかった。勘定は僕が持つから、酒も料理も好き勝手に取ってくれと伝えておいてくれ。……もし、もし、それから、十時までは必ず顔を出すからとな」

「はい。わかりました」

それで電話は断れた。すると、石川隆作の身内に泉のような活気が漲り出した。腰に両

掌をあてると膝を曲げては伸し、一、二、三、四と屈伸運動を始めた。吃驚して、一同の眼が隆作に集中する。

「監督さん、今度は大丈夫！ やはり本番で行きましょう」

眼をパチクリさせていた演出の青沼が、たしかめるようにいう。

「これや、驚いた。宝くじでも当たったのかな。まさかね。じゃ、本番で行くよ。用意出来たら、サインちょうよ」

各係からOKのサインが来た。

蘭子役のマヤが、金色のヘアバンド、ブラジャー、パンティ、半長靴を身につけて、隆作の人間馬の鞍に跨がり、皮の鞭をふりあげたポーズで演出の合図を待つ。

「はい本番。スタート」

カラカラとカメラが廻り出した。蘭子の皮靴が上下に大きく旋回し、馬の臀を激しく打ちすえる。騎手の蘭子は、口に啣えた馬の手綱を左手で器用に捌きながら、パチッと鞭を空中に鳴らす。そこまでが三カット。

次のカットは蘭子の勝ち誇った笑顔。

絨緞の上を走る馬。鞭を鳴らす蘭子を、横顔とバックから、四カット。

部屋中を隅から隅へ、大きく五回、駆けず

り廻ったあと馬はダウンする。声を揚げて笑う蘭子。

「はい、それまで。お疲れさん」

青沼は台本とタイムウォッチを、変形した鞍の中に押し込むと、さっさと自分の部屋に引揚げた。

堰を切ったように騒がしくなる。

石川隆作は、バスルームで扮装のドーランを洗い落とし、背広に着換えると、ネクタイを上着のかくしに突っ込み外へ走り出た。

立花紅子ショーの最終回は、十時に始まり太宰港二の特別出演もあって、終わったのは十時二十分をすこし廻っていた。支配人が楽屋に顔を現わし、帰りの自動車の用意ができた旨を告げた。舞台化粧のまま帰るから、と化粧函を整理している港二に、紅子がいいつける。

「はい。車で待っています」

紅子の化粧函と革紐つきの鞆を持って、楽屋を出た。階段を階下へ、若い足取りが軽いテムポの音をたてる。一階の床に降り立ったところで、足許を見ていた視線がまっすぐ前方を向いた。

「瑞穂！」

「あ、お父さん！」

父と子の生々しい視線が、強い感情の火花を散らしてぶつかり合った。

「お母さんが会いたがっている。一目お前の元気な顔を見せてやってくれないか。三年ぶりだ。今晚は自宅に泊ってもいいだろう？」

「――」

瑞穂の眼差しが、階段を降りてくる立花紅子の顔へ、すがりつくように動いた。

「港二だめよ。わたしが許さないわ」

階段の途中でたちどまり、屹となった紅子の鋭い声音が、落ちて来た。

「立花紅子さんですね。私は、瑞穂の父親です。石川隆作といいます。瑞穂がすっかりお

世話になったそうで、感謝しています。何も知らなかったものですから、本当に失礼しました」

「港二、ホテルに帰るわよ」

隆作には返辞もしない。

「立花さん、私には芸能界のことはわかりません。礼を失しているかもしれませんが、瑞穂のお世話になった償いは、それ相応にさせていただきます。今晩一晩、瑞穂を貸してやって下さい。この母親が、どんなに喜ぶことでしょう。お願いします」

長身の石川隆作の体が低く折れる。

「お父さん、石川瑞穂はたしかにあなたの息子でしょう。でも、太宰港二は、今がもっと

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

齋て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。

○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

載の上編集部宛お申込み下さい。報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたします。御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。

○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇ク編集部▽

も大事な時期にいる新進歌手ですわ。そんな甘やかしが、彼をだめにしたら、そのときはわたしの責任になりますのよ。太宰港二は将来有望な歌手ですわ。お気の毒ですけど外泊は許しません。気を悪くなさらないで……」

「そんな薄情な――この子の母親は、きっと泣きますよ。明朝、かならず貴女まで瑞穂の身柄を送り届けますから」

「だめですわ。わたくしは、しつこいの大嫌いですの」

「しつこい？ 失礼な」

隆作は憎悪のいろにかわった眼を、立花紅子の顔に灼きつけた。

そのときだった。

ふてぶてしいまでに落ちつき払って、見返した紅子の視線と表情に、隆作は鳳マヤの蠱惑美をみた。紅子のポリュームのある全身から迸る、しびれるような驕慢美をみた。

すると、圧倒されたように紅子の前に、むざんに崩れてゆく、隆作自身の魂の響きを、異常の興奮の谷間で聞いたのであった。

太宰港二だけが、ひとりせっぱつまった心情にふるえながら、美しい唇の色さえうしない、凝然と立ちつくしていた。

(おわり)

感 雑

僕の憎まれぐち



文 と 絵

路 砂 亜 井 室

先日、都内の特出ストリップ劇場で、頭を丸め紫の衣を着た尼僧スタイルのストリップを観たが、岡田茉莉子に似た理知的な美貌に青々と刈りあげた頭が、可憐な凛々しさがあってとても良く似合い、ちょっと感動した。この劇場は最初、秋山夫妻のショーで知ってから、三カ月に一度位の割りでのぞいてみるのだが、いつも何かの変わった趣向で楽しませてくれる。

忍妙子のショーを観たのもここだったし、

一度は、妊娠腹のストリップパーを観た事もあった。粉を吹いた様に白い肌が、何カ月位か知識が無いので不明だが、かなり目立つほど隆起して、全く無毛の地帯へ連なっている様は、陶器の名品を見たような完璧な美しさだった。場末の小屋にはめずらしいなかなかの美人で、白足袋だけの裸でライトの中にうずくまり、ジッと観客の注視を受けているポーズがたまらなく魅惑的であった。

かなり長い間、本誌を愛読しているが、僕自身は特にSだとも、Mだとも、ましてや異常性愛者だとも思っていない。気障を承知で居直れば、異常美の探求者だと思っている。ところが現在は異常ブームで、一步外を歩けば映画のポスターや、女性週刊誌の広告からTVや歌謡曲まで、サド・マゾ・ホモ・レスとアブノーマルの花ざかりである。異色作家、異色イラストレーター、異色タレントと何がなんでも異色が頭につけば、たちまちマスコミにのってスターに成り上る仕組みになっているらしい。いつのまにか異色が正統に成り変わって、正統派なんてどこを探してもみつからない異常な時代になってしまった。何とも味気ない風潮である。探求者としては正統派の異常(?)を探さなくてはならなくなり、何ともめんどろな事である。

異色雑誌の正統派である本誌について考えてみる。読者が同じ異常性愛をあつかい、写真やイラストの豊富な雑誌が店頭に氾濫しているのに、なぜそのような他の雑誌を買わずに奇クを読むのかという理由である。それを僕は、本誌のSMに対す意識の高さと、ストイックなつつしみ、そして製作者と読者が共同して作りあげているうしろめたさの雰囲気

であると考え。逆に考えると、この三つにあてはまらないものをぞいてゆけば、奇くはより面白くなると思うのである。

奇クの原稿はそのほとんどが読者からの寄稿であると思うのだが、読者である執筆者は当然その気があるわけで、つまりマニアなのである。だから、他の雑誌の正常(?)な作者がアブノーマルをあつかうと、そのモチーフの物珍しさにおぼれてしまって、たとえば女性を裸にして縛って鞭打つという事だけを目的の、下手なピンク映画のサディズムシンになったってしまうのである。

我々大多数の読者にとって、縛りや鞭打ち等はあくまでも手段であって目的ではない。こうした状態に置かれた時の、被害者の屈辱感、羞恥心等の心の動きこそが問題であり、征服と被征服の、人間存在の本質のダイナミズムと言うと大袈裟だが、会社とか、マイホームとか、水平思考とか、2DKとか、バーゲンセールとか、テレビの下取りとか、信子とおばあちゃんとか、万国博とか、チクロ騒動とか、父兄会とかの煩雑な日常性の中に埋没しかけている人間性の発見なのである。かつては性そのものがそこに繋がっていたのだろうが、性記事の氾濫によってすでにマ

イホーム化してしまっただけは神秘性の片鱗もなく、どこかで日常性を越えようとすればやはり異常なシチュエーションが必要となるのである。縛り、鞭打ち、浣腸、畜化等は、そうした日常性の連続としての性から脱出して、より大きな

解放へ向かおうとする儀式である。そこでは近代的合理主義によって作られた、自意識にふりまわされている我々が物自体として自足し、生と死が交わりそのまま自然を交感し合う。ただ縛りの為の縛り、責めのための責めを廃する所以である。

そして、ストイックな慎しみこそ、儀式に最も必要なものである。汚らしい猥せつさこそSMの最大の敵である。同じく女性を縛るのでも、ピンクのネグリジェの胸もあらわなズベ公を縛るのと、喪服に身をつつんだ貴婦人を縛るのとどちらが色っぽいか考えてみ

英米専売特許

新案 便利スロース

主特支那社推薦
定價二圓十錢

室井メリヤス店

身體の不自由な方々の為
英國の博愛者アサーデ博士
が考案された便利スロースです。
メリヤスで腰冷を防ぎ、用便の時
も取り外す必要がありません。
三錢切手込へ御目越あ
れば詳細説明書を
送呈しま
す。



ればわかることである。

ついでに横道にそれると、ピンクのネグリジェとか、ナイロンのスケスケパンティーとかビキニスタイルとか鏡のついたダブルベツドとかほど、艶消しで不愉快なものはない。何と月並な薄汚ない手垢にまみれたエロチシズムだろう。

もう一つ例をとれば、ブラジャーと晒もめの差である。ブラジャーは何といっても実用品でしかなく、乳房が入るように始めから丸くなっている。それは身体の形に媚びており近代的合理主義の産物であって僕にはすこ

S M カメラ・ハント

川路 叢子むらの巻

あっとおどろく、人妻の豹変

辻 村 隆

箕田京二氏よりの電話で、モデル志望女性、川路叢子のことをきく

八月下旬の、日は忘れたが、カメラ・ハントの原稿の催促のあった時、箕田氏が電話口で、思い出した様にこう洩らしたのである。

「あっそうそう、それから今思い出したんやけど、十日ほど前に、是非プレイしてほしいという、モデル志望者の手紙来てるんやが、あんた、どないする？」

「へえ、いい話。何処の人？」

「一寸遠いんやけどネ、たしか浜松の方やっ

たかな。行く気やったら、東名高速道路利用したらわけないけど、わざわざ出掛けていって、若しスッポカされでもしたら、目もあてられんやろ。あんたが今、ハント女性に行き詰まってるのやったら、どうか思えていうてみたんやけど」

「そら、新しい子やったら何ぼでも撮りたいけど、その人いくつぐらい？」

「手紙には二十八才とか書いてたけど、文面から察すると、どうやら人妻らしい。かなり積極的やで」

「人妻の、被虐へのよろめきかも知れませんが

な。私ぐらいの年配には、もってこいのところやけど、浜松となると一寸、遠いしね。この近くやったら、忽ち飛んで行きたいんやが……それで返事、出しておいたの？」

「いや、まだその俤ほってあるんやけど、あんたの意向きいた上でとおもて」

「どうも済みません。さあ？ どうしようかしら。何しろ今はこの間のハントの原稿の方で、手一杯やしね」

「あんまり気乗りせん様子やなあ。先日岡本嬰子が、よっぽどよかったんやろ。何なら一度こっちへ出てこいていうてみようか」

「そら、それにこしたことはないけど……」

「電話口で彼女の手紙よんでたら、時間かかるさかいやめとくけど、かなり興味あること書いてあるのや。実の処、私も大分、食指が動くんやけどね」

「どんなこと？」

「といわれても一口ではいわれへんが、この人自身ホン（奇ク）の読者で、店頭買いつてるらしいが、旦那の方は全然SM気なしで、一カ月のうち殆ど家をあけていて、数日しか戻ってこない仕事らしい。まあいうなら、物足りんのやろな、生活が単調すぎて」

「話きいてたら、こっちまでムズムズしてき

たがな。どう、早速こっちへ呼んで、箕田さん撮らない？ 私は助手でオブザーバーでよろしいから」

「そら、それでもいいけど、兎も角、彼女どういうか返事出しとくわ。それにしても、あんたも大分、変わったもんや。昔やったら、モデルいうと、すぐ飛びついたんやがなあ」

慨嘆口調に、チョッピリ皮肉をこめて、箕田氏の電話はきれた。私は苦笑しながら受話器をおく。彼の長年に亘る積極的な好意がなければSMカメラ・ハントが到底つづかないことは、私自身一番よく知っていた。いわれるまでもなく、数年前の私なら、緊縛モデル

なうSMプレイによって、女心がどのように変化して行くかといった方に、むしろ激しい興味を抱いている風であった。

プレイに直面して、うら若いハタチそこそこの娘が、意外に泰然自若としていたり、既に異性との交渉を数々持った、被虐の歓びを存分に知っているはずの人妻が、思いもかけず羞恥に身をくねらせ、頬をこわばらせたりする、妖しい動揺が見受けられたりして、そうした折ふし、刹那的に私の嗜虐の血は、ひとしきりかき立てられるのであった。私自身のハイド氏の嗜虐を求める心が、少々の刺激には、すっかり慢性化していて、相当強烈なものでない限り、燃え上らなくなっているのかも知れなかった。

箕田氏から電話のあった時も、私の心は正直いって、あと半月に近づいた長女の結婚のことと、締切りぎりぎりの間際なのに未だ脱稿していないSMカメラ・ハントの原稿のこととで頭が一杯で、そのモデル女性のことは、須臾にして忘却の彼方へ押しやってしまった。多忙で、カメラ・ハントも、或いは欠稿になりそうな慌しさであったのに、読者通信のモデル志望女性、岡本要子さんの突然の出現で、そこは好きな道、忙中閑の一日、彼



女をハントするや、すぐさま書き始め、舌足らずの拙稿を、締切りを数日延ばしてもらって、やっと滑り込ませたのが、十月号の「お気に召すまま」であった。

人妻のモデル女性のことを電話で聞いたのは、慌しく岡本要子の、ハント用フォトを作製した翌日であったのを憶えている。

箕田氏数度の往簡で、川路叢子遂に意を決して呼び寄せに応ずるくんだり

十一月上旬のある日、御存知箕田氏より電話がかかってきた。私のハントに電話がよく出てくるので、書く私自身、かなり気にしているのであるから、お読みの方は又かと思われても、至極当然であるが、年と共に出不精になった箕田氏や私、大抵のことは電話ですませてしまうので、それが事実だから一つ御勘弁願いたいのである。

用件はというと、次号のトップ記事に、私のことを大いに書き立ててくれた、義憤生氏の投稿で、「一寸一言」という一文を掲載するので、人間辻村隆のナマの顔をのせたいから、フォト二、三葉送ってくれないかということであった。擦ったいような気持の反面、やっぱり内心は嬉しいらしい。十月二十八日

夜のイレブンPMで、素顔をすっかり曝け出しているから、今更この拙いツラ隠してみても始まらないと、早速、空缶に放り込んであるフォト掻き廻し、こうなりや一蓮托生とばかり、サンケイホールで立川談志師匠と並んだヤツ、熱海のホテル前で団鬼六氏と浴衣姿で並んだ夜のもの、東映撮影所のスタジオで尼に扮した賀川雪絵さんと並んだ処の三葉を送ることにした。ごく最近のものなら、イレブンPM出演中のフォトが、よみうりテレビから送っていただいているので、それがいいのだが、生憎の『禁転載』では、無断でのせも出来ないから諦めた。先月号の『楽我記』に発表したイレブンのフォトは、連れていった私の末娘が、リハーサルの折、傍らからパチリとやったもので、これは『禁転載』には引っかけられないシロモノである。よく似たフォトで大した違いもないんだが規則は規則。

どうせ三葉送っても、掲載されるのは一葉に過ぎないのであろう。

当面の用件が終わったあと、箕田氏は思出したように例のモデル女性の件を伝えてくれた。あれから数回電話があったのに、一向にその件に触れないので、私も半ばあきらめ、いつしか忘れていたのであった。彼女のこと

を始めて聞いたあの電話から、既に二カ月半は経過していたのである。しかしその間、箕田氏は数度手紙を往復させて、こまめに彼女と連絡をとってくれていたらしかった。綿々と訴えてくる被虐願望の人妻の便りに、彼自身かなり心を動かされていることは事実であった。彼は人妻との秘かなる愉しみを独り占めにせず、誠に律気にも私に知らせてくれるのであった。先方に電話連絡の出来ないのが不自由だとこぼしながら、

「こちらまで出てくるのに、かなり時間がかかるので、大分、出渋っていたんやけど、強引に押しきったら、遂々出てくる気になりましたよ。彼女の住んでる処が、浜松北部の天竜市という所で、私もよう知らんが、何んでも東名高速の、浜松インターから十四キロばかり奥らしいということや。兎も角、新幹線に乗って出てくるそうやから、勿論あんたハントしに来るやろ？」

「えらい気をつかわして済みませんなあ。御邪魔やなかったら、是非……」

「書いてもらわんならんから、エライ気をつかうわ」

箕田氏の声は笑っていた。二十数年来のつき合いだから、お互いの気心は分かり過ぎる

程、分かっている。まるで濡手で粟の掴みどりみたいな調子で、彼のいろいろお膳立てしてくれたごちそうを、そっくり頂こうという寸法だから、誠に虫のいい話であった。それを何とか筆にするのが、私の彼に酬いる唯一の手段であったのである。

「ところで彼女、日帰り出来るんやろか」

「さあそのことや。ダンナの方は心配ないらしいけど、外泊するわけにもいかんやろからなるべく早いめに会って、パッパッと早いところ撮りまくって、帰さんとしようないやろな」

「それなら新大阪より、京都の方が一寸でも早いやろね」

「幾らも変わらんと思うけど、往復四十分は浮いてくるやろね。せやけど、近頃のアんたのハント、えらい京都づいてるな。どうなってるの？」

「こうも車が混んでくると、一寸遠いようでも、京都の方が市中走るのラクやさかい、自然そうなるのやろね。取締りも、大阪の方が厳しいから……」

「まあええわ。ほんなら、あんた好みで京都にしときましょ。それでいつ頃がええの？」

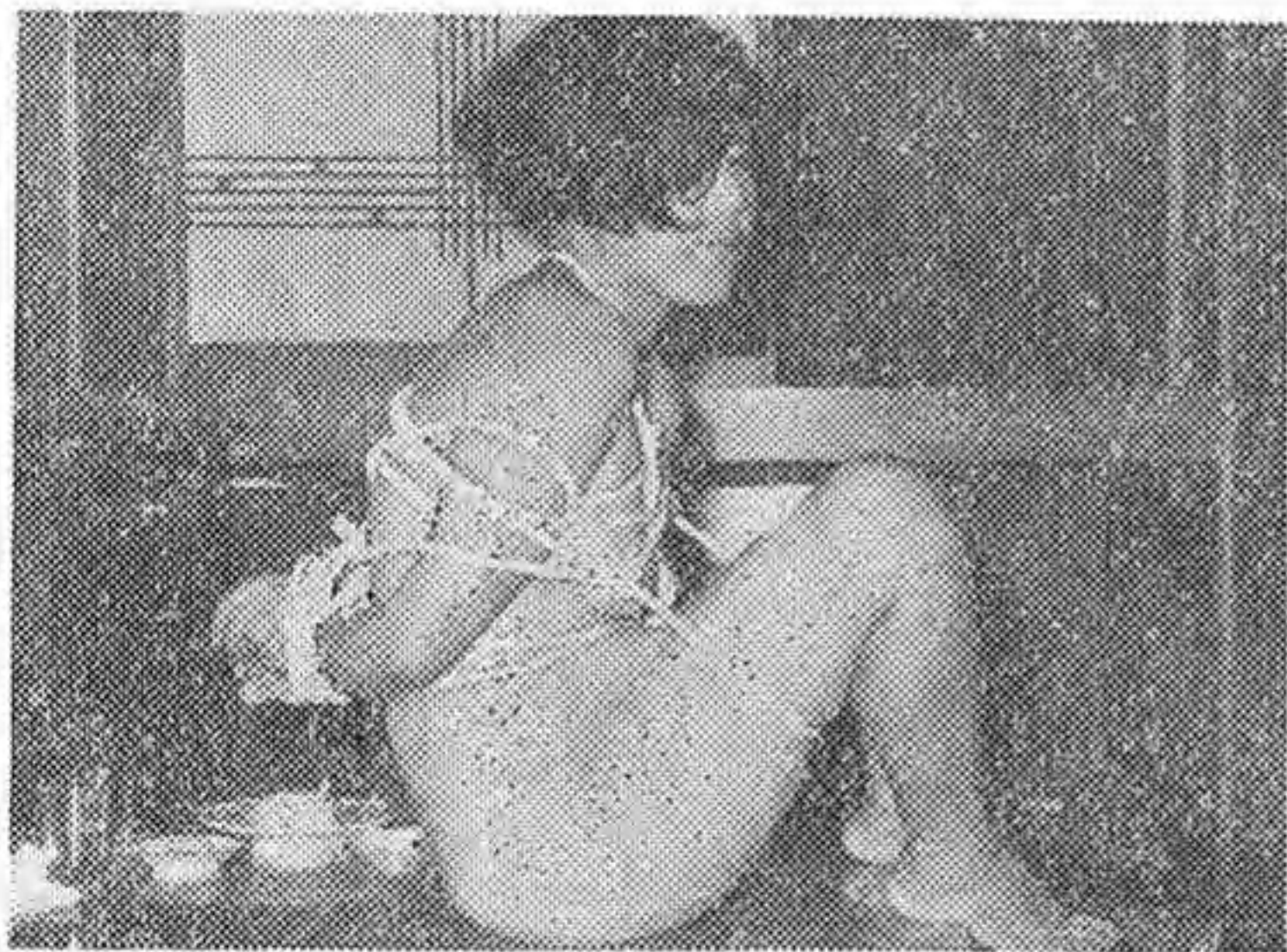
「私はいつでもいいけど、なるべく、土、日

曜を避けた方がラクでしょう。混雑しないから」

「勿論そうしましょう。生理が月の始め頃やそうやから、上旬は除いて、十一月の二十日はどう？」

「締切近くで、ハントの原稿書くの忙しいでしょう」

「そうか、又おくれおくれになって、編集部



から、やいやい言われそうやな。ほんなら十四日の金曜日にしようか。この日はこれといった用事もないし、今からすぐ連絡の手紙書いたら、十分、間に合うからな」

「いいでしょう。じゃあ十二時迄、京都駅ということで……。それで私に何か準備するものある？」

「いいやろ別段。私が全部、持ってゆくさかい、まあ、あんたの好きなブルルンでも持ってきたらどう。新幹線の時間しらべて、彼女に連絡したら、又返事するからね」

電話で、彼女の片鱗だに伺い知ることの出来ない筈、この日はハントの日取りだけで終始してしまった。私は久し振りに、箕田氏と一緒に撮ること気がラクであった。彼に随伴した場合、私はカメラの準備だけでよかったからである。大型の旅行鞆一杯に、雑多なプレイ用具をぎっしり詰めこんで、車のトランクに放り込んでくる彼に、すべてを任せておけばいいのであった。彼と一緒に撮る場合、分譲フォトを依頼される必要もなく、彼の撮る合間を窺っては、私好みのオモロイ肢態だけをカメラに納めておれば、すべてはコト足れりであった。ホテル代、モデルの謝礼、食事万端、彼が面倒みてくれるので、その点でも

誠に気楽であった。不満といえば、分譲フト向きでない、露出一辺倒のポーズを彼は避けるので、それだけが、物足りないといえ言えるかも知れない。

翌日彼から、京都駅十二時半過ぎという確定的な電話があつて、私はいそいそと、軽い気持で応諾したのであるが、その時点では、彼女の氏名はおろか、その容貌、特徴、風体など、何一つ知らない筈、すべてを箕田氏に任せきっていたのである。

さて、その当日。箕田氏とイスカの嘴の喰い違いで会えぬまま、川路叢子と二人途方にくれること

季節用語をもってすれば、秋肅条の候、野も山も霜枯れて、吹く風もうすら寒いという十一月中旬であるのに、どういう風の吹き廻しの馬鹿陽気か、まるで十月初旬のような暖かさで、車を運転していても、ジツトリと汗ばむ程であった。

いつもなら、箕田氏の車に同乗するところだが、彼は外出したついでに、印刷所と出版社へ廻る気になって、かなり早いめに出るといので、己むを得ず私達は別行動になって京都駅の新幹線のホームで、十二時過ぎ落ち

合う約束になっていた。

お互いに時間厳守の方だから、待たせても悪い気持が先に立って、十時半頃出発したが車の場合、かなりの余裕をみないと、交通の混雑する折柄、約束通りには到着しない。

未知の人妻の容貌や、被虐の痴態を想像して、私の胸はいつしか熱く燃え始めつつあった。彼の手紙にも、私という人間が一緒であることを書いてくれたはずだから、すべては承知の上であろうし、奇クを愛読しているほどの女性なら、私という存在も、ある程度は知っているに違ひあるまい。果たして始めてのプレイが、どこまでエスカレートしてゆくか、それはその場の風次第で、予想は立たないといはうものの、箕田氏の言葉の端々から彼女が相当、被虐願望の女性であるときいていただけに、未知への期待は、急速に膨れ上って行くのであった。と共に、箕田氏と一緒に場合、度ぎつい個人プレイは、或いは無理かも知れないという、一抹の物足りなさも脳裡のハシをかすめるのであった。

京都駅が新幹線の停車駅になってから、駅裏の出入口であった八条口が、にわかにクローゾアップされ、もとの正面の駅から、長々と跨線橋を渡ってくる必要もなく、車を乗降

して、じかに新幹線に乗れるので、利用客の大半は、この八条口から乗降するようになっていた。短時間なら駅の正面に車を駐車させておけるのが便利で、私は近頃、ハント女性との待合わせに、しばしばこの八条口を利用していた。

十二時を少し廻った頃、予定通り到着すると、新幹線のホームへの入場券を買って昇ってゆく。あたりを見廻してみたが、肝心の箕田氏の姿は、まだ見当たらない。

約束の、こだま号が滑り込んでくる。彼は依然として姿を現わさない。次第に私の心は不安と焦燥にかられ始める。

乗客が列車から吐き出されてきても、私には当の彼女自身が、全く分からないのであった。こだま号が静かに、終着駅の新大阪へ向かって走り出し、疎らになった人影を求めて私は血眼になって、未知の女性と、箕田氏の姿を求めて、ホームを走った。キヨロキヨロと右顧左眄する私の視線に、下降階段口に行む一人の女性の姿が突きささった。もう外に人影もなかった。約束通りの列車にのって到着しておれば、まぎれもなく彼女に違いなかった。しかし尚も数分、箕田氏を待ちながら私は離れた処から、彼女の動静を注目してい

た。ホームに残ったのは私と、佇む彼女だけになってしまった。女性は、しきりに時計をながめては、階段の下に眼をやっていた。そろそろ、次の列車の乗客が、まばらに昇ってきつつあった。肝心かなめの箕田氏の姿は未だホームに現われなかった。印刷所か出版社での所用が長びいて、遅延していることは間違いないかった。

暫く躊躇^{ためら}っていた私は、遂に勇を鼓して女性に近づいていった。振り向いた彼女の視線が、私をみつけると、ハッとしたように表情を硬ばらせた。直感的に何かひらめいたので

あろうか。

「あのう、失礼ですが、曉出版の箕田さんをお待ちではないんでしょうか？」

「ハイ」

うなずいた途端、女性は真赤になって、うつむいてしまった。

「ああ、よかった。私、辻村ですが……」

「ええ、存じ上げております。でも、おたくさま、お一人なんでしょう？」

恥じいるようなおもてを上げて、いぶかしげな女性の表情は、ややとまどったように小声で呟くようにいったあと、そっと視線をそらした。

「いえ、箕田氏とここで落ち合う約束なんです。時間が遅れているのか、姿をみかけないんですよ」

「じゃあ、もう少し待ってみましょう。きっと、いらっしゃるはずですよ」

「ええ、きっと来るはずなんです」

対話が途切れて、私

達は手持不沙汰な恰好でホームの隅から隅までを見廻わしていた。

「降りて改札口の方へ行って待ってみましょう。その方が、わざわざホームまで昇ってくる手間が省けますから……」

うなずいて彼女は、私のうしろに随ってきた。髪をセシルカットに刈り上げた、小柄な、いかにもおとなしそうなタイプの女性である。人妻の落ちつきが、そこはかとなく、その容姿に込みでていた。名前すら知らぬ未知の女性を逸早く発見出来た欲びに、私は幸先のよさを感じた。八条口の改札を出て、すぐそばの待合ベンチに腰を降ろして、私は、しきりと駐車場の辺りに目をやって、今か今かと箕田氏の車を待ち求めている。立ったり坐ったり、心も落着かず、私は人眼にもソワソワしているかに見えていたことだろう。

二十分——三十分——時間は刻々と容赦なく経ってゆく。流石に彼女の表情にも失望と焦燥の暗い翳がみえ始め、構内の大時計と、腕の時計を交互にみやっては、不安の色を泛かべていた。

「どうしたのしょうね、彼……」

「よく、こんなことあるんですの？」

「いえ、約束した以上、滅多に来ないなんて



ことはないんです。ひょっとしたら事故でも起こしたのじゃないかと心配してるんです」

先程から、もう二度ばかり、市外公衆電話で編集部へ連絡したのだが、いつも電話口へ出る受付のK嬢の返事は、私との会合で京都へ出掛けたということで、彼自身よりの連絡はなかった。駅の改札口で待っているからと依頼しておいて電話をきるより仕方がない。

箕田氏の車が途中で故障したのか、或いは交通停滞で動けないのか、事故でもあったのか、そんな不安ばかりが走るのであった。

遂に私達は一時間、待った。その間、二度ばかり編集部へ連絡したが、矢張り梨の礫である。一体どうしたというのだろう。箕田氏から再三、促されて、やっと出てくる気になった彼女は、見るも気の毒なくらい、ションポリとうなだれて、思案にくれているようであった。もうこれ以上、私は待っているわけにもゆかなくなった。既に無為の時間が一時間以上、経過しているのである。

私は腹をきめざるを得なかった。未練げにもう一度、駐車場の群れを見廻したあと、

「仕方ありませんねえ、もうこれ以上——、兎も角、食事しましょう。あなた、まだなんでしょう？」

力なくうなづく彼女をうながして、構内の食道街へ並んで歩く。食堂で寿司を注文したが、心が暗く閉ざされているのか、箸をとる手も重たげであった。始めてのプレイに、肝心の箕田氏のいないことは、彼女にとってショックに違いなかった。心細げなまなざしが折ふしチラリと私をみた。それ以上に私は内心、困惑していた。箕田氏にすべてを頼っていたので、実の処、持ち合わせが誠に乏しかったのである。現在、手持ちの金で、彼女の交通費、謝礼、ホテルの費用が、果たして賄いきれるかどうか——。一対一で、こんな心細いことは近來にない事であった。京都の知友を頼って、今更、金子拝借に出掛けるほどの時間の余裕も今はなかった。

モデルを志望して、遙々天竜市より出てきた彼女にしても、被虐の願望もさることながら、やはりそこにはプレイの報酬が絡んでいることは当然であった。しかも、この日に限って、カメラ道具の外はパイプ一丁という、日頃に似げない支度で、生憎と一本の縄の準備すらなかった。

早々に寿司を喰べ終わって、食堂から編集部へ又しても連絡してみたが、依然として消息がないという、K嬢の気の毒そうな声が、

むなしく返ってくるばかりであった。もうどうしようもない気持で、やっと私の腹は、ひとときのプレイへと走る。何とかギリギリ一杯でやれるだろう。なる様になれという気持になると、反って幾らか気分がラクになる。「どうします。全然、連絡がつきませんが、この俚ムザムザとも帰れないでしょう」「ええ、私、やっと無理して出てきたんですもの。困ったですわ」

「私と二人きりでもよかったら、どっかへ行きましょう。愚図々々しては、どんどん時間が経つばかりですからね」

「ええ、でも……」

モジモジと指先のハンカチをまさぐっていたが、やっと意を決したかのように、「じゃあ、そうします。でも辻村さん、余りきつくなさらないでね。生まれて始めての体験なんです。いつもお書きになってるようなことなさっちゃ、いやよ」

「ああ、ハント読んでられるのですね。あれは多少、オーバーですよ」

「でも、本当なんですよ。ウソや出鱈目であんなに精しく書けませんわ」

私は苦笑して、どっちつかずにうなずくと伝票を擲んで立ち上る。きまっとなると、

もう一分一秒も惜しいような気がしてきたのである。

「何時頃まで、いいんでしょうか。」

「早く帰れるに越したことはありませんけど、予定が狂いましたので、少し遅れても仕方ありませんわ」

「じゃあ、兎も角、何処かへ落着くことにしましょう」

プレイに逸り始めた思いとは別に、敬愛措く能わざる箕田氏の身辺に、一方ならぬ不安の心を走らせ乍らも、私は車を京の市中へと向けていた。岡崎公園目指して走る途中も、古めいた街並みの店舗にチラチラ眼をやりつつ、縄を売る店を探し求めている。せめて幾許かの縄を求めぬことには、緊縛のプレイは出来なかったのである。運よく道路に面した一軒の荒物雑貨の店が眼についた。あわてて車を止めて白い綿ロープ二本を買い求める。ビニール袋の上からの感触でも、真新しいゴワゴワした固さが感じられた。この固さでは恐らく強烈な緊縛は、所詮、無理かも知れなかった。縄束をカメラの革袋に入れるのを、彼女は面映ゆげな表情でみつめていた。その唇は、何か物問いたげに動いた。縄を買い求めた私の行為に対する疑問だろうか。それと

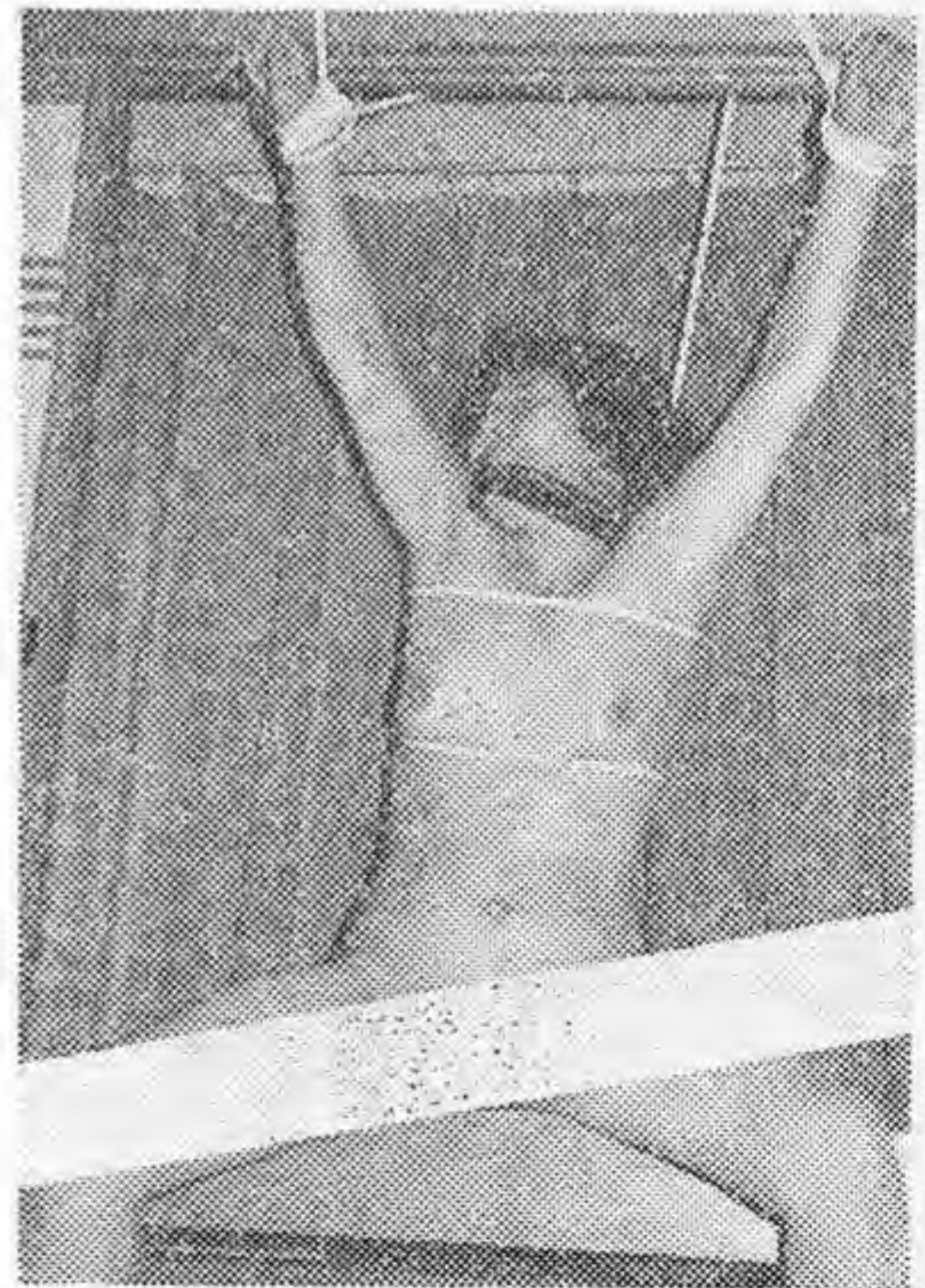
察して、

「変に思っているらっしゃるようです。実は箕田氏に頼っていましたから、カメラだけで縄は一本も持って来なかったのです。新しいので固そうだけど、我慢して下さい。手加減しますから。こんなことは滅多にないんですがね」

「そうでしょうね。ハント読ませていただいてますが、こんなシーンは出てまいりませんわ。なにかもハプニングですわね」

にと珍しく笑った口許から、真白い綺麗な歯並びが覗けて、彼女の清潔さがチラリと光った。地味な紺地の、テーラールックのスーツが、一見して彼女を教養ある先生タイプにみせていた。彼女の服装や容貌から推測すれば、恐らく誰しも、この女性が、被虐願望のモデルとして、遥々、その目的のためのみで訪れた人には見えなかったに違いない。

出会ってから、既に一時間半も経っているというのに、箕田氏を求めて狂奔していたので、私はまだ彼女の素性を何一つ聞いていなかったし、私自身のことを話す機会も全然な



かった。

一時間半前までは、ゆきずりの赤の他人の未知であった二人が、奇しき縁で、今こうして一つの目的を求めて、何一つ知らぬ同志のまま、妖しい猟奇の世界へ、没入しようとしているのであった。

分かっていることといえば、彼女がかなり教養のある人妻らしいということぐらいであるが、彼女にしても、私という人間が、雑文を書く辻村隆という人物であるということだけであった。

思いもよらぬハプニングで、奇妙な感情の錯綜する一組のカップルは、岡崎公園のOホ

テルの駐車場へと辿りついたのである。

いざというとき、思いもかけず身も世もあらず、羞恥にたゆたう川

路叢子

ホテルの一室に案内されると、早々に編集部へ電話して、ホテルの名と電話番号を告げておく。万一を期待しての連絡であった。

狭い和室で、机を隔てて坐った時、彼女は自分から口を切った。

「辻村さんは私の名前、御存知ですか？」

「いや、知りません」

「のんきですこと。箕田さん、仰有らなかつ

た？」

「ええ、一緒に来るつもりでしたから、聞くこともなく、唯、浜松附近に住む人妻だと、その程度きいていたんです」

「川路叢子（かわじむらこ）と申します。どうぞよろしくね。辻村さんのお名刺いただけないでしょうか」

うなずいて名刺をとり出す間、彼女はチツポケな手帖をハンドバッグからとり出して、スラスラと住所、氏名を鉛筆書きすると、ピリッと破いて私に差出した。一瞥してポケットに入れると、

「今日の場合、箕田さんが主で、私は刺身のツマのつもりでついてきたので、思いがけぬことになってさぞ物足りないでしょう」
なだめるような口調で言う
と、あっさり、うなずいて、
「ええ、正直いって箕田さんにお目にかかりたかったですわ。度々お手紙いただいたし奇クの経営者ときいてたもんですから、いろいろとお伺い出来るとうれしみにしていたんです。本当にどうしたのですし

ようね」

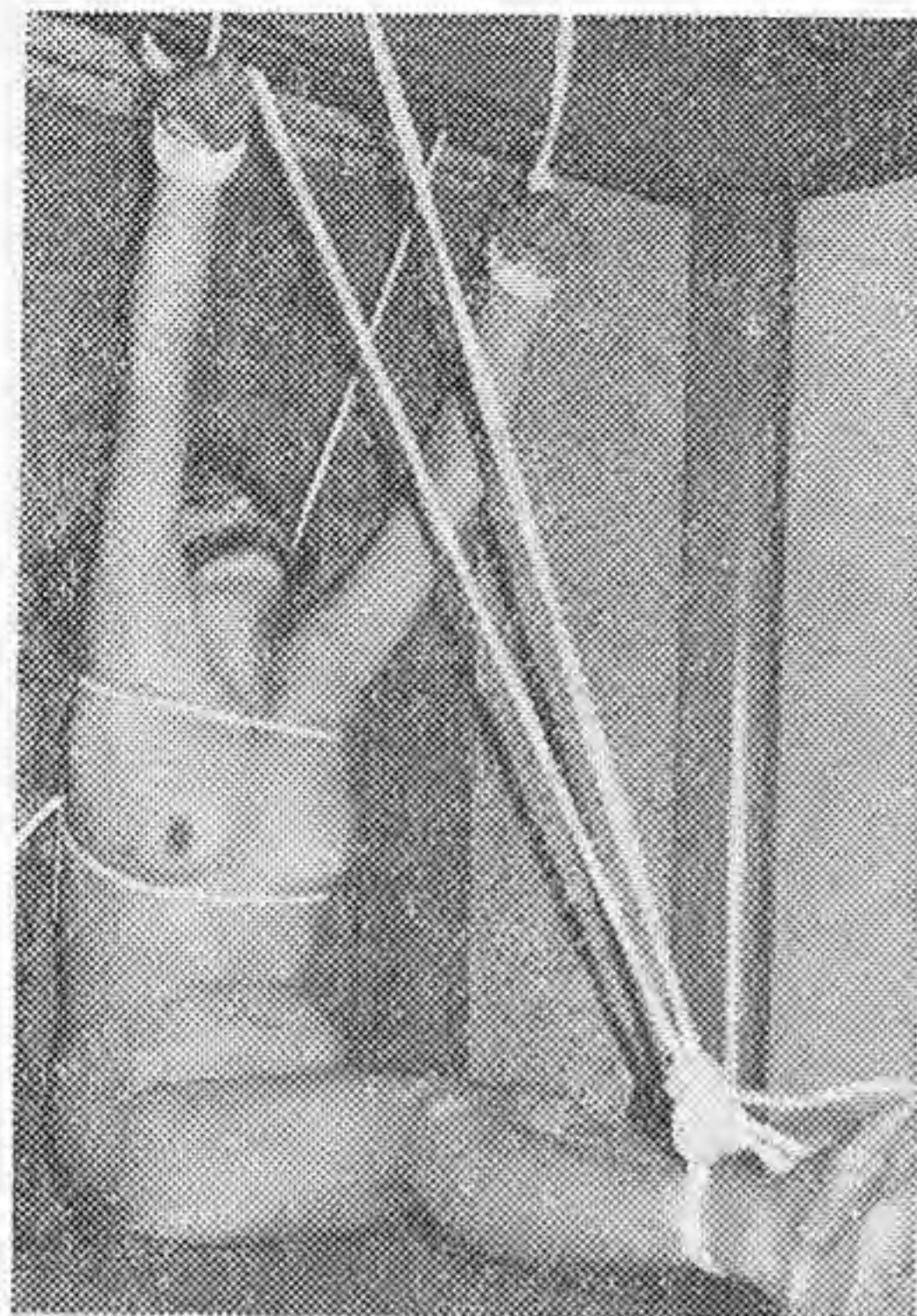
そう言ったものの、彼女の表情から、不安と緊張感はいっしか消えて、柔和になごやんでいた。

「ここに居ることを連絡しておきましたから電話かかるかも知れません。しかしもう、今回は恐らく無理でしょう」

いつになく私は勝手が悪かった。ゲストか助手の心づもりが、思いがけぬ成行で、コトを運ぶ次第になったからである。咄嗟に構成も思案も浮かばぬ俚、行き当たりバッタリで進めるより仕方がなかった。ゆっくりと時間の余裕があれば、一応型通り、川路叢子の希望なり、被虐願望など聞き出したかったのであるが、追い立てられるような気持にかられて、その暇もなく、早速プレイの実行にとりかかるより仕方がなかった。既に午後二時半に近い時計の針が、心なくも私の気持をせき立てていたのである。最初から強烈なプレイの出来ようはずもなく、かてて加えて新しい二本の縄が、私の緊縛意欲を、かなり弱めていた。

「湯を出しておきましたから、お風呂へいってらっしゃいよ」

兎も角、型通り契めると、むら子はハッと



したように面を伏せて、モジモジし出した。委細構わず、カメラをとり出して準備にかかると。ストロボ装填だけで、大した手間暇もとらない早さであった。

二、三度利用したこのホテルの、値段の安さに安心して選んだ部屋だが、プレイには狭いアベック向きの小部屋である。襖を隔てた隣室には、ダブルの布団が部屋の大半を占めて敷かれてあり、バス、トイレを筒一杯に造作してあるから、脱衣する別間ともなかった。机の前で、デンと坐っている私の面前で



脱衣もしかねるのかと気づき、「やあどうも。なんなら隣の部屋へ消えましょうか」

と、慌てて立上りかけると、この人妻は急に狼狽して、

「あッ、いいんです……あのう、やはりなさるんでしょうか？」

必死に哀願するような眼ざしで、むら子は消えも入りたげに肩を落とすのであった。これは又、何という豹変——、咄嗟には相手の気持をはかりかねて、

「えッ、今になって、又どうして？」

「どうしてでも——、私、何だか急に恥かしくなってきましたの。それに……」

「それに？」

「やはり主人に悪いような気がして」

「……」

被虐によるめこうとする人妻の、それは最後の良心であろうか。私は沈黙してじっと彼女の様子を見守っているより、すべもなかった。

た。唖れた声で女は呟くようにいう。

「あのう、ハダカになるのでしょうかね」

「そりゃ、なっていただかないと……」

「恥かしいんです。私、もう余り若くないし体の線くずれているんですもの」

「そんなこと気にしていませんよ。箕田さんならやる気で、急に私になったから気が変わったとでも仰有るんですか」

「でも、辻村さんのハントされる方、みんな若くて綺麗なんでしょう。私なんか……きつとガツカリなさいますわ」

（箕田氏だって、結構、若い女性を撮っていますよ）と言おうとしたが口をつぐんだ。それを言ったとて、羞恥に身をくねらせるむら子の心を変える、最良の手段ともいえなかった。私は今、珍しい女性を見出した思いで、じっと立ちすくんだ俤、消え入りたげにうすぐまる川路叢子の洋服姿を半ばあっけにとられた思いで、じっと見守っていたのである。

全身に羞恥をただよわせていた彼女は、やっとうなじを挙げて、私の様子を上眼づかいに窺った。無理につくろうとする笑顔が強張り、まるでベソを掻いたように歪んで、ハツと眼を伏せると、身のおきどころもない風情で、独り身悶えしているのがあった。

遙々天竜市から、覚悟の上でやってきて、何もかも承知の上で、さてこれからという時、まるで人が変わったように一変した、不可思議な女心の豹変ぶりを、一体、何と説明すればよいのであろうか。

すべてが細づくりの、眉、瞳、鼻、唇のつくりが、顔の中心にかたまつたような表情になって、羞恥の苦悩をありありと泛かべて、何ゆえともなく困惑しきっているのである。

私が入浴をすすめたことが、彼女にどんな意味を与えたのだろうか。むしろ、困惑するのは私の方であった。手を拱ねいて、しばらく静観していたが、次第にプレイの意欲が、心から遠のいてゆくのを覚えた。

「じゃあ、いいですよ。何ならよろしゅうか。お話でもして、この僥倖つても構いませんよ」

私の淡白な言葉に、ハッとしたように顔を上げた川路叢子は、縋りつくような眼差しでイヤイヤという風に首を振ると、何と云ったか、黙々と服を脱ぎ始めた。脱ぎ始めたことはプレイを許容したシルシであった。

やれやれ、何ということだろう。千変万化する、むら子の妖しい心の動揺に、私は少々ウンザリしてきた。(どうせやる気なら、さ

っさと、やれッ)と、今若し、きつい言葉のひとつも投げかけたら、きっと彼女は泣き出すに違いない。自分自身ですら納得のゆかぬ激しい心のゆらめきに、むら子自身、まるで夢遊病者のように、眼に見えぬ糸にでも操られているような動作であった。

新縄二本の緊縛では、どうせ数多くもとれそうになかった。それでいてフィルムだけは期待して相当多く持参してきている。詮方なく、日頃は余り撮らないスナップながら、豹変する女心にピントを合わせる気持で、むら子の脱衣の、羞恥の風情に私は黙ってカメラを向けていた。

若い娘ならテキパキと脱いでゆくところをこの人妻は、さながら一時代前の処女の如く男の視線をしきりに気にしながら、身をくねらせて、一枚一枚、身を切られるようにとっていった。それは久しく忘れていた、女らしさの象徴のように私には感じられた。

想像の世界の、被虐の願望に逸って、遂に現実の事実の直前まで来て、いざとなったギリギリの刹那、女の心に淡い悔恨と、未知の男性の眼前に曝す露出の羞恥が、火花のように激しく交錯したのであろう。

入浴寸前の脱衣に、かくも羞恥を示した女

性は、ついぞ思い出せない。その脱衣の羞恥は、そのあとに続くSMプレイに、まぎれもなく直結していて、入浴がプレイの前哨戦のように思えたに違いなかった。

私は、このさして面白くもない脱衣の推移を、もの珍しいものでもみる思いで、次々とカメラに納めていった。

脱衣そのものより、むら子の羞恥の表情にむしろカメラは働いていたといった方が適切であるかも知れない。この女の羞恥を剥がすことが、残酷めいた興味となって、私の嗜虐の胸の炎を燃やし始めていた。

やっこのことでむら子は、ブラジャーとパンティだけになると、体を精一杯かがめて、狭い部屋のおちこちを見廻している。湯上りの浴衣を求めていることは、あきらかであった。果たして消え入りたげな声で、

「あのう、なにか身に引掛けるものないんでしょうか？」

「多分その隅の、観音開きの中にでも入っているんでしょう。でも私は、あんたの裸がみたくなった」

「もうこれ以上許して……恥かしいですわ」「恥かしいって、そのハダカを自由に縛るんですよ、これから——」



「だって、いきなり……私、今日が生まれて始めてなんですよ。主人以外の男の方に、肌をおみせするの」

「でも最初から、その気で来られたのではありませんか？」

「ひどく後悔してますわ」

「じゃあ、今からでもおそくないですよ」

「まあ、ひどい——」

むら子は恨めしげに、うるんだ瞳で私をみつめていたが、蚊のなくような声で、

「とてもお見せするような躰じゃないんです。私、自分の肉体に自信があったら、もっと潔ぎよく脱いでいますわ。だから羞かしいんです。分かって下さいますわね」

女心のデリケートな心理であった。被虐への一途な願望と、肉体に対する劣等感はその詮、別ものであったのだろう。

羞恥にまみれ乍ら、むら子はあきらめたようにブラジャーを外した。乳房はかすかに垂れていて、豊饒な乳液を出し尽したあとのしぼみがわずかに感じられた。つい思い切ったのか、さっとパンティをとると両脇を狭めて乳房を押しつけるようにし、両手で前部を蔽って、私の眼前に全裸を曝したのであった。

満面にはじらいを泛かべ、頬を赤らめて、身をすくませて立つ川路叢子の全身に、人妻なればこそよぎる、初々しい羞恥の色彩が、ムラムラと濃く立ちこめていたのである。乳首の黒ずみと腹部のたるみは、彼女が既に妊娠したことを如実に示していた。数度このヌードに閃光を走らせ終ると、さりげなく私はきいた。

「お子さんあるんですよ」

「分かります？」

「ああ、大体過去の経験でね」

「私の体、くずれているからでしょう。隠しても仕方ありませんわ。三才になる男の子が一人いるんです。それに二度ばかり中絶しました」

「そのお子さんをどうしてこられたのです」

「主人の母が近くに住んでいるものですから預けてきました。主人の両親と別居して、近くで暮しているのです」

「御主人は不在がちなんですってね」

「貿易関係の仕事で、一カ月のうち、殆ど全国を歩き廻っています。来年の春頃、海外へ出張するかも知れませんが。別居の原因もそのためなんです」

「それで閨の淋しさに耐えかねた挙句、奇クを読んで、ついアバンチュールに身を委ねてみようという気になった……」

裸身が大きく、うなずく。

「想像が現実となった時、急に不安と背信と羞恥にさいなまれて、どうしようもなく、あがいている」

むら子は、いきなり観音開きの、嵌め込みの洋タンスにかけよると、さっと開いて、脱衣籠の、よく糊のきいた浴衣を音を立てて拵げると、慌しく裸身に纏って腰紐をしめた。

振り返った顔に、ほんの数分前までのこわばりが消えて、安堵の蘇った軽い微笑みが浮かび上っていた。

机の前に坐ると、黙って私のハイライトを一本、抜きとって火をつけた。そのしぐさの中に、むら子の退屈している日常がフット覗いていた。

「大分、心が落ち着いてきましたわ。さきほどは、もう、どうしようかと思いました」

「奥さんはウブなんですね。近頃の風潮で、テレビやカメラの前で、さっさと裸になる今の若い娘にくらべて、その初々しさは貴いですよ。何だか私の方が照れちゃった」

「こんなこと生まれて始めてなんですもの。」

第一、他の男の方とホテルへ一緒に入るなんてことも、今日が始めてですよ。箕田さんに手紙を出す時、いつもこうした時の事を想像して、すぐくためらうんです。そのくせ、この全身一杯の羞かしさを、ズタズタにふみにじられて、男の強い力で、有無をいわせず縛られて、数々の辱かしめを受けている自分の姿を臉に浮かべると、カッと心が燃えて、もう我を忘れて、猥らがましい手紙を書いてしまうのです。私の心の中に潜んでいる悪魔が、私を悪い妻へ、悪い妻へと誘い込むのに

どう抵抗しようもない弱い私なんです」

「箕田氏に心を許して、既に筆の姦淫を犯して、あなたの願望のすべてを告白したのに、事實は思いもかけぬ私の登場で、このハプニングに途惑ったのでしょうか。随分、深刻そうでしたよ」

「ええ、プレイは箕田さんと二人きりだと思います」



っていましたのに、あの方のお返事で、辻村さんも御一緒だと知って、本当はすぐくためらったのです。箕田さんだけでも恥かしい気持でしたのに、二人の男の方の前で恥かしいめに会うのかと思うと、もうお断わりしようかと思っただけでした。でも思い直して、自分の心を自分で納得させて、やっと出てくる気になったのです。妙なものですわ。今の心境なら、箕田さんのおられない方が、反って気分がラクなんです。結果において一対一ですから」

喋り出すと、川路叢子は雄弁だった。綾に妖しき女心の微妙な心理を、むら子は適確に説明していた。心に溜っていたものを、どつと吐き出すように喋り、も早、入浴すること忘れて、一しきり私のプライベートなことをききたがった。刻々と過ぎゆく無為の時間が気になったが、打ち解けるには絶好のポイントであった。差支えない程度で、私は自分を語る。

退屈まぎれに、彼女は毎朝のテレビ欄を丹念に眼を通すくせがついていた。私の氏名をイレブンの欄に発見してドキリとしたそうである。勿論その夜のイレブンPMは全部みていた。だから京都の新幹線ホームで、私の顔

を見た時、すぐ分かったというのであった。

東映の映画のこと、ハント女性のこと、S Mの想念、奇巧の噂など、むら子はまるで人が変わったように、熱心に眼を輝かせてきてくるのである。相手になっていると、時を忘れてキリがないように思え、私は口数を少なくして、話が途切れた時、

「まあ、プレイし乍ら、この話の続きをしましょう。兎も角、お風呂に入っていっちゃい。湯が溢れているかも知れませんよ」

「ああ、そうでしたわね。でも辻村さんは殿方だから、お先きにお入りになったら」この古めかしい謙譲の美徳に苦笑して、私はいいからと、尚も奨めると、むら子はもう拒まなかった。勢いよく立上って、脱衣籠をとり出すと、先程とはまるで別人のように、さっと浴衣を脱ぎ捨て、裸身の背を私に向けて首をねじってチラッと一瞥すると、まるで私を誘うかのような妖しい笑みを残して、バスへ消えたのであった。

濡れぬ先こそ露をもちとえの、むら子緊縛プレイの激しいいきさつ

「あつ、いや。ゆるしてえ。ヒーッ」

両手を背後に縛られたまま、私の手をすり

抜けると、必死に軀をくねらせ、縄尻を引きずって逃れようとする、むら子の髪をぐいと引摺み、俄破とタタミの上へ押えつける。

バスから上ってきて、まだプレイへの心の準備の出来ていない処を、いきなり襲われて彼女は動転しているようであった。秋山美智夫氏直伝の早縄で、さっと近づくなり、有無を云わせず、片手首に縄をかけて背後にねじあげ、あつという間の早業であった。

私の腕の下で、むら子はジタバタもがいていた。私は大きく息を吸い込むと、両手首を縛った縄で、彼女の上半身を無茶苦茶にしめあげていった。縄尻をぐいと引いて、俯伏した、驚愕に慄えるむら子の体を起こそうとする。ごつごつした縄目の痛さに耐えかねて、じりじりと尻を浮かせ、中腰になったむら子を押すようにして机上にドスンと坐らせる。

「ひどいわ、ひどいわ……いきなり」

口の中で呟くように抗議していた、むら子は、やっと観念したのかおとなしくなった。ピリピリと体が細かく慄えているのは、いきなり襲った緊縛の暴力に、何をされるのだらうかと不安におののき、ヒタヒタと裸身をしめる縄目の束縛に、早くも被虐の血を急激に疼かせ始めているせいかも知れなかった。そ

のくせ、自由な下半身の両腿に力を一杯にこめて、むら子は羞恥を懸命に隠蔽しようとしていた。

しかし動作とはウラハラに内実は、突如として前触れもなく始まったプレイに、むしろ彼女は内心、ホッとしていたのではなからうか。被虐の願望は入浴中に、十分胚胎していた筈である。バスから上って来た彼女に対して、諒解を求めた上、縄をかけようとすれば彼女は又ぞろ、身を踴め、軀をくねらせ、羞恥を全身にみなぎらせて、おいそれとみずから靡けなかったに違いない。それは愛する人に対して、女性の方から告白出来ぬ心理に共通しているように思われるのであった。半ば暴力をもって、手籠め同様に緊縛された方が逸早く被虐の想念に飛び込めるというのも、愛人に強引にキスを奪われ、急速に傾斜する愛情の発露に似ていた。恐らくは、むら子自身、そうした私の行為を、心底待ち受けていたかも知れなかった。その証拠には、刹那よぎった羞恥の表情が、忽ちに消えて、放心状態にも似た、淡い悦楽の様相が、そこはかとなく、しめりを帯びた瞳の奥に漂い始めていたからである。この際、なまじ声をかけることによって、むら子の心を羞かしくするかも



知れないと悟った私は無言の俤で、もう一本の縄をとり上げ、今度は、ややゆっくりと首からかけて、胸で振って交叉させ、強く絡み合わす股の間を直降して、左右に分けると、両腿をきつく縛り合わせた。股に縄を通す時腿の力の抵抗を指に感じたが、それも束の間すっと力を抜くと、むら子は私の作業を許容していた。人妻という一片の枷が、自から身を投げ出したのではなく、相手によって、強制されたのだという、心の言い訳がつくれたことによって、尚更に気を楽にさせた様であった。彼女は、もう私の為すが俤になっていた。縛り終って、

「どこか痛い？」

ときくと、微かに首を振る。念願叶ってMの願望をジーンと心にしみ入る思いで噛みしめ、熱い悦虐の妄想にかき立てられているように見えた。真新しい縄だけに、肌をしめつける感触は、よく使い馴れた縄にくらべて、確かに緊縛の快感は滅殺されているはずであった。それは例えるならば一番風呂の、さら湯の肌を刺すイライラした熱さと、しまい湯のほのぼのしたぬくもりとの違いに似ていた。にもかかわらず、むら子は、しびれる緊縛の辱かしめを、夢にまでみた被虐の願望に連結させて、じっと眼を同じ縄目の苦痛を心秘かに愉しんでいるかのようであった。

被虐を屈辱に転向させるため、私は思い切ったポーズに変えるべく、両腿の縄を解くと自由になった両脚の踵を机上にのせさせた。開股位をとらすべく、両股に力をこめて引き裂くように抜けようとしたが、

「いや、いやです。それだけは……お願い、

みないで」

むら子は激しく首を振って、体をゆすり拒否した。拒否されればされるほど、私の心はアニマルの本能に疼き、腿に縄を通すと、力をこめて背後に引き寄せ、開股に努力した。完全に一杯に拡がりきれなかったが、兎も角所期の目的を達して、余った縄を両手首にぐるぐる巻きに巻きつける。拡がった腿を精一杯縮めようとしてむら子は、果敢ない抵抗をくり返していた。

「ああ、はずかしいわ。いやよ、いやよ」

いやもクソもあるものかと、それに向かつて私のカメラは、近々と閃光を放っていた。その猥らなポーズの俤、両脚を引きずるようにして、ドシンとタタミに落とすと、ポンと足蹴にして転ばす。横ざまに倒れて、縄のどの部分かが変則的に締まったのか、

「あッ、いたた……痛いわ、ああ起こして……」

縛られた体を懸命によじって、むら子は叫んだ。仰向きにして、頭の方に両足を握って屈曲させると、机上で圧迫されて薄赤く色づいた双臀が揺れ、否応なく、私の直視する瞳の奥に、灼きつくように突きささってくるのであった。熟視した私の眼が満足して、両足を離してやる。タタミに擦れた手首が痛む

のか、全体で加減をとって、ゴロリと俯伏せになると、腰をくねらせて、微かな苦悶の呻きを女は、そっと洩らしていた。抱き起こして直立させ、よくしまった堅い縄をといてやる。ありありと柔肌に、縄目が縞模様をつくり、鮮烈なデザインが、全身を赤く染め出して彩っていた。

「乱暴だわ、辻村さん」

「それを望んでいたのでしょう」

「でも、いきなり縛って、あんなことするなんて、いくら何でも……」

縄目で凹んだ個所を撫でさすり乍ら、むら子は怨むような瞳で私をにらむと、そのくせすぐそのあとからニッと笑ってみせた。既に羞恥の姿態をまざまざと見せつけた今、もうむら子にとって隠す必要は全然なかった。それが人妻を大胆にし放恣にさせたのか、裸体を惜しげもなく曝して、彼女は長々と私の眼前に、両脚をやや開き気味に伸ばして寝そべっていた。

「大分、痛かったようだね。何しろ縄が買いたてのホヤホヤだから、ゆるく縛ったつもりなんだけど、あんなに暴れるから締まってしまった」

「ゆるいから、尚更しまるのでしょ」

「じゃあ思い切って、きつく縛ってやろう。泣いたって知らないよ」

それに応えず、むら子は立上ると、小部屋の窓の障子を開き、さっとカーテンを引くと窓枠にヒョイとはずみをつけて、のっかって凭れた。カーテンの背後に、もう一枚アルミサッシの窓枠がはまっているから、凭れる



のに都合がよかった。その態度は、とりようによっては、もうどうにでも好きなようにしてくれという、挑戦的なポーズのように受けとれるのであった。足をぶらぶら、ぶらつかせて、

「ねえ辻村さん、みんなにどんなことをして虐めるの？ もっと教えて。ねえ」

まるで次のプレイに誘いこもうとするかのように、そんな猥らごとを甘い声できくのであった。

「虐めてほしいんだね」

「ええ、何だか……」

「まるで、先程のあんなとは、人が変わったみたいだ」

「勇気が出てきましたの。すっかり見られちゃったら、羞かしさがどっかへ消えたの」

「いよいよ、本性を発揮したね」

「まあ、本性だなんて」

人妻は若やいだ調子で、おうむ返しにいてペロリと舌を出した。Mのアバンチュールを求めて、彼女の胸は疼きに疼いているのであろうか。なまめいた笑みがこぼれて、嗜虐心をそそろうとしていた。

恰度いい。窓枠に腰を降ろしたこのポーズのまま縛ってやろう。そう腹をきめると、や

おら立上ると縄を握って、むら子に近づく。
「そこへ坐った俚、両手を挙げてごらん」
「こう？」

易々と高々とかがけて、女の眼はキラリと期待に輝く。それぞれの手首が、鴨居にかけた縄を通して、ぐっと高く吊り上がる。余った縄を胸へ回して止める。ずり落ちそうになった臀部を抱えて、窓枠の敷居に横坐りに坐らせて、素早く私はカメラを構えた。これだけでは、なんの変哲もない平凡なポーズであった。もっと強烈なものを望む私は、むら子の両手を、万才をするように徐々に開かせる。と、ともすれば、ずり落ちそうになるお尻をぐいと押して、敷居と窓枠の隙間へ据えさせ両腿を精一杯に開かせようとした。もう腿に抵抗の力は全然なく、むしろ彼女は自分の意志で、これみよがしに協力するのであった。女心の妖しい豹変を、まざまざと眼前に見て私は、めくるめく思いで、矢継ぎ早やにカメラのシャッターをきっていた。

そうした露出の極の体位をとること自体によって、願望は増強して昂まってゆくのか、早くも彼女の吐息は、甘く淫らに弾み出していた。

女は既に淫情をほとばしらせて、快虐を欲

しているのであった。こころが潮時と、本日唯一のプレイ用具の小型パイプを持ち出してくると、そっと乳首の先端に震動を与えた。

瞬間、あっと驚く、激しい悲鳴にも似た、耐えきれぬような嬌声が挙げた。まるで声を立てるチャンスを得らなくてもいたかのように女のさがを剥き出しにして、むら子は、けたたましく歓び、次第に辺り憚らず泣き喚くような歓声は、密室にワーンと反響を起して、溜っていたものを、一気に、どっと吐き出した勢いであつた。動物の咆哮めいた、すさまじい悦楽の声の壮大さに、私は辟易してパイプをとめる。何ということだろう。この人妻の感情の起伏の激しさに、私は唯、啞然とするばかりであつた。入浴をすすめると極度に羞恥に悶えたかと思うと、乳首にそっと押しあてただけで絶叫を発するむら子に、私は世にも不可思議な人妻の生態を発見した思いであつた。

余りにも物凄い歓喜の交響楽に、私は些か度胆をぬかれて、しばし、持て余していた。近頃流行の盗聴器がなくても、この声の大きさは、完全に隣室に、筒抜けにきこえているかも知れなかった。

今迄、こらえにこらえていたものを、一気

に爆発させた悦楽の激しさは、あたかもダムをきった怒濤の奔流が、一時にどっと溢れ出した勢いにも似ていた。羞恥も人一倍なら、快楽指数も亦、人並以上のむら子にとって、羞恥と快楽は、正に紙一重の差で隣り合わせているようであつた。

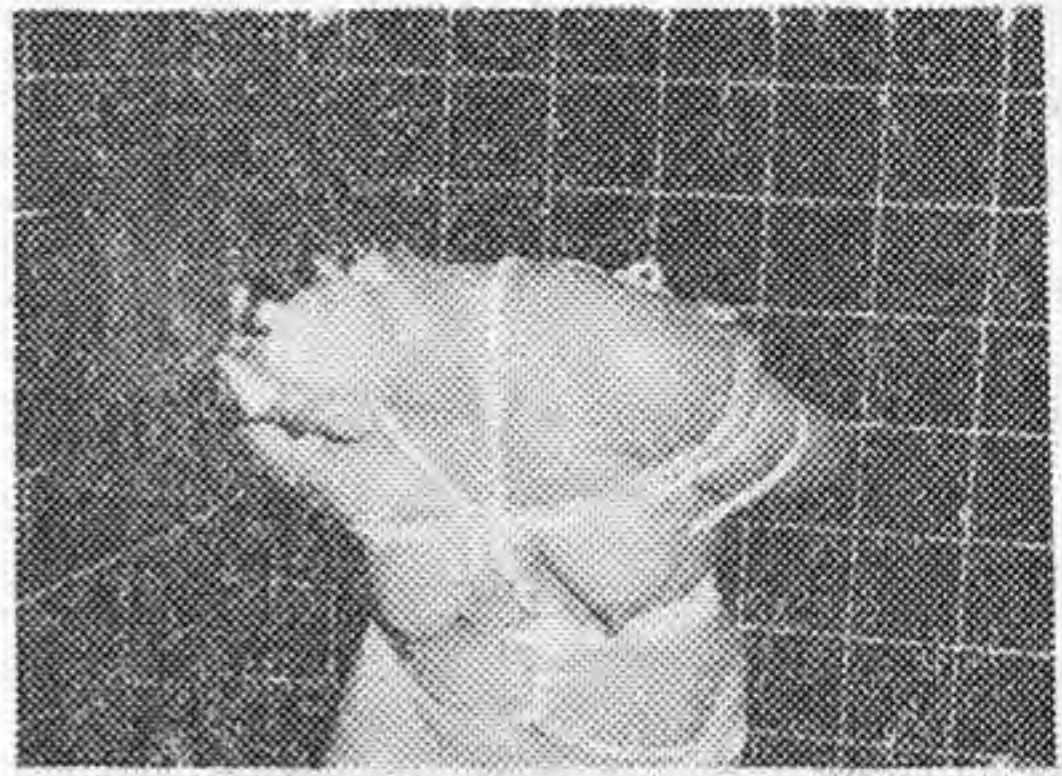
乳首への軽いマッサージで、かくも快楽に歓びするのなら、徐々に下降した場合、どのように強烈きわまる反応を起こすだろうか考えた時、私の嗜虐心は、急激に一足飛びに燃え上ってきたのである。

私はこの時、直感的にハッと悟った。この快楽の強大な呻き声こそ、何を隠そう、むら子が心裏、憧れに憧れ、待ちに待った、プレイのM願望の現われの、何よりの証左であることを――。

いざプレイを開始しようとした時、あれ程迄に羞恥に悶えたのは、その秘めた願望が、条件反射となって、むら子自身の脳神経を強く支配していたに外ならないことを、私はこの刹那、はっきり知ったのであった。

羞恥の度が激しければ激しい程、願望も又人一倍、強いということを、川路叢子という一人の人妻によって確かめ得たのである。

夫不在の閨の淋しさのつれづれに、悶々と



して秘めて持ち続けていたこの願望——。

乳房への接触は、一性感帯への操りに過ぎなくても、最も恥かしい痴態を曝して縛られているという条件が、操りの反応に、強く作用していることは、まぎれもない事実であった。

私は彼女の眼前で、服を脱ぎ、ズボンをぬぎ、下着だけになっていった。それを見守るむら子の眼に、何かを期待する恍惚の流れがあった。靴下をぬいで丸めると、顎に力をこめて唇を大きく開かせ、足むれして微かな異臭の漂う無地の靴下を、深々と口中に押し込んでいった。その上から浴衣の腰紐で、しっ

かりと猿轡をかませた。

余りにも激しい喚声を殺すための措置を講じて、私は再びパイプレーターをとりあげた。不安定な腰のあたりを、なまめかしくゆらめかせて、この人妻は悦虐の期待に胸を躍らせ、淫らにうるんだまなこをパイプに走らせていた。

パイプの物頼い電動音がむら子の両腋下を——乳房を——次第に下降していくように撫でて行く。人妻は身も世もあらぬ痴態を全身にみながらせて、狂おしくのたうち、猿轡をしても尚、くぐもる歓喜の呻きと悦楽の喚きは、耳朵を激しく撃った。

微かに電動音が響いている。今私は、むら子の両脚をぐっと締めつけるようにして揃え両足首に縄して、鴨居に吊り下げていた。すらりと伸びた脚線が水平思考して、彎曲してくびれた胴が激しく波打つが如くケイレンしている。それはこの人妻が、飽くなき執念をもって追求し、願望しつづけてきた、生々しい被虐の快楽の極みの、報酬の姿であった。

絶叫のくぐもり声が、私の耳朵をするどく突きぬけた時、高々とかがげた両手の指がダラリと延びて、むら子の体から、ガクリと力が抜け果てていた。

ドッキリカメラも、あっとおどろく、川路叢子の痴態のかずかず

シーツの乱れや汚れを懼れて、布団と共にまくり上げ、ウレタンのマットレス一枚にした上に、犂々と海老責めに縛り上げたむら子が、息もたえだえに転がっている。苦しいポーズで女を七転八倒させた私の姿も、いつしかパンツ一枚に変わっていて、それでもひたから汗がにじみ出ている激しいプレイが繰り返されていた。

むら子の要求は激しさを増す一方で、全身悦虐の肉塊に変貌して快楽を彷徨していた。さながら、過去に思い悩みつづけてきた、願望の累積を、一挙に燃焼し尽そうとしているかのようであった。セシルカットは乱れに乱れ、べったりと汗ばんだ女のひたいに藻となつてへばりついている。海老縛りの姿で横ざまに倒れたむら子の顔を、投げ出した足指で蹴りつつ、私はハイライトに火をつけて、深々と吸い込む。

むら子の先刻の、思いつめたような言葉が再び心に蘇るのであった。

半時間許り前、つめたく白く変じた両手を鴨居から外し、

「もう四時だが、どうする？」

と、彼女の去就を訊ねた時、激情にうるんだ瞳を凝固させて、ヒタと私の胸に体を埋めながら、

「いいんです、もっと虐めて——。そう度々は出てこれないんですもの。若し遅くなるようでしたら、今夜は泊っても構いませんことよ。寝なくてもいいんです」

「えッ、泊るって！」

ドキリとする。人妻の発言としては、あっとおどろくタメゴロー……。正に意表をつく言葉であった。しかも始めて数時間前出会った許りの私に、この人妻は身も心も捧げ尽くすというのか——。

「だって仕方ないでしょう。始めるのがおそくなったのですもの、もっともっと愉しみたいわ。ねえ、いいでしょう」

なまめいた眼が、私をじっと見上げて、決断を迫るように、妖しく頬を歪めて笑った。

「大胆ですねえ」

「そうでしょうか。どうせ万一の場合、その

覚悟して出てきたのです。私のすべてをお見せした今となつては、もう同じことですわ」

「しかし……」

私は絶叫する。身を投げ出してきた人妻と仮寝の一夜を、思いのままにプレイ出来ようというのに、据膳を喰えぬもどかしさは、私の懐工合にあった。せめて聖徳太子もう一枚あれば、この際、なる様になる気で、或いは私の心は、大きく傾斜していったかも知れない。それを自制させたのは、外ならぬ乏しい懐にあったのは皮肉であった。

泊った場合、彼女にプレイの代償は当然払えなかった。喰い逃げのようなことは、私の矜持が許さなかった。

泊る心づもりのむら子に對して、はつきり返事を与えぬ俛、その言葉が私を刺激して、まくり上げてマットレス一枚にした上へ、女を突き倒し、犇々と海老縛りの緊縛を行なったのであった。蹴倒し、転がし、反転させ、洩らす疼痛の呻き声すら、私には甘くきこえていた。



かくもプレイがエスカレートしてくると、

私には、種々のプレイ用具のないのがつくづく恨めしかった。ローソクよし、浣腸ポンプも拒みはせぬだろうし、更には大型パイプや大人の玩具の喜び品のさまざまを使って、この女をのた打ち廻らせ得たであろうにと思うと、たった二本の縄と小型パイプ一挺が、いかに貧弱、単調で、且は変化に乏しいかをつくづくと思い知らされるのであった。

女の指先は、又しても感覚を失って、冷たくなっていた。固い縄目が、二の腕を犇と締め上げていて、血液の交流を渋滞させ、既に知覚も麻痺していると思われ、

「痛いだろう、解いてやろうか？」

ときいてやると、

「ウウン、大丈夫——。もっと、もっと激しくいじめて……」

と、再度に亘るエクスタシーを求めて、心は疼きに疼いているさまであった。

抱き起こして頭をかかえ、苦しげに引きつっている顔をぐいとのけぞらせると、激しく唇を吸った。カラカラになった咽喉の奥からはのなまぐさい息が、女の欲情の反応をまざまざと示して私の口腔を通り抜けていった。

まさぐろうとする私の手は、縄で遮られて窮屈であった。海老縛りは、頭を倒して逆立ちさせるように腰高に露出する場合は恰好のポーズでも

愛撫には不適當であった。

むら子は、孤閨の欲求不満をむき出しにして、愛撫の手段を、露骨な言葉で、うわごとのように吐きちらしていた。人妻になって六年の歳月の経過は、知性に溢れた、先生然とした彼女に、かくも生々しい、度ぎつい強烈な言葉を吐かすよ

うになるのだろうか。

今やむら子は被虐の頂点にあって、それを求めていた。あれ程にも羞恥にまみれた彼女が、一度豹変すると、性のスラングとして、男だに顔を赤らめる卑猥な言葉を、女の口からたわ言のように洩れるのをきいて、映画「昼顔」の女主人公の妖しい心理がフト理解出来たのであった。云われる俚に私は、遂にハダカになってしまった。

足を解くと、その縄を跨間にかけて渡し、尚も腹部をくびれる程にしめつけていった。

最早、女の関心はカメラの埒外であった。ハントのフोटを考えて、冷静にポーズをと



らせても、それはむら子にとって、むしろ盛り上っている興趣に水をさすような行為でしかなかった。フोटとプレイの両立しないことを、又してもつくづく感じる私であった。むら子にとっては、もうカメラなどどうでもよいのである。ひたすらに快虐を求めて、喰い込む縄目すらも、そこはかとなく快感にながっていたようである。

自からマットレスの上に仰向けに倒れると眼が私を招き、果ては

「ねえ、早くこっちへ来て……」

と、切なげに誘い呼ぶのであった。

緊縛の女体を抱擁しても、ほんの今迄、カメラに走っていた私の心は、一向にふるい立たなかった。全然無為といえは嘘になる。男性であれば、こうしたプレイに直面して、当然起こり得る現象を、私自身も問題的には示していた。一挙に没入してしまえばそれ迄であるが、時に応じチャンスに向かって、フトよぎるカメラへの執念が、途端に大脳神経をその方へ働かせる結果、再三に亘って元の木阿弥に還元するのであった。プレイの数々が疲労の蓄積となった今、底なし沼のような餓えた女体を抱いた時、反って反射的に、より萎縮して行く情なさであった。フェラチオや

クニリングスを、はしたない言葉で迫られてむしろタジタジとしているのは私の方であった。むら子のように大きく豹変出来ぬ己れの心と金銭的な気掛りが、燃え立たねばならぬはずの私の欲情の、大きなブレーキとなっていたことは事実であった。

しかし私は、むら子の乱れに乱れた悦虐の陶醉を続けてやるために、ひたすらに努力していた。私の唇が、指先が、指圧のツボを心得て、適確に捉えていった。

激しい歓喜が叫喚となって、絶叫におののく唇をふさぐように、私は俄破とむら子の顔に馬乗りになると、息もとまれとばかり圧迫していった。激しいケイレンの根源の、微かな震動音が底辺から洩れていた。

濡れにぞ濡れて、女体は揺れている。台風一過したあと、犇々と喰い込む縄目のまま、むら子はうつろな眼を見開いて、死んだように動かなかった。

その時、ドキリとする電話のベルの音。懐かしい箕田氏の声、無事平穏な調子で響いてきた。

「どこにいたのや、一生懸命探したのに」
「そら、私がいう台詞や、彼女と二人、一時間半も待ったのに——」

「京都の新幹線のホームで待合わす約束やっ
たやろ。十分ほどおくれて、大急ぎで、長い
跨線橋渡ってホームにいったら、あんたらの
姿見えへん。スピーカーでも呼び出してもら
ったんやで」

きけば、彼は京都の地の理にうとく、京都駅の正面入口に駐車して、一番端っこの、新幹線ホームまで、汗をかいて走ってきたというのであった。私は新幹線の場合、てっきり八条口の方だと頭からきめてかかっていたので、前述の通り改札口付近で待っていたし、彼は彼で、正面入口で、一時間近く探したということであつた。詮方なく編集室へ引返して、連絡の電話を知って掛けてきたのであった。本命の箕田氏が待ち呆けになって、ゲストの私が、プレイ進行中とは、皮肉な運命の悪戯であつた。

「それで今、プレイ中？」と彼。

「ああ彼女、草臥れて寝そべっていますよ。電話代りましょうか——。しかし縛った儂なので、ここまで引きずってきますよ」

むら子を電話口まで抱きかかえてきて、受話器を耳にあてがってやる。

何かしきりに、ええ、ええとうなずいては笑いを含んでいる。電話はどうやら箕田氏の

方からきれたらしい。折角ここまで奔走してスッポカシを喰っては、彼としても阿呆くさくて、いい気もしなかったであろう。私の早計で、思わぬ手違いになって、確かに箕田氏には気の毒なことをしてしまった。

「何いってたの彼？」

「私より辻村ダンナの方がいいだろうって
たわ。うんと虐めて貰って、愉しんだら
いって……。でもいい人ね、今度は箕田さん
と二人っきりでプレイしたくなっちゃった」

「こいつ！」

ピシヤリとおしりを叩くと、それをシオに急にモジモジして、

「ああ、急にオシッコしたくなったわ。ねえ
ゆかせてえ」

「うん、じゃあ解いてやろう」

いたわりをこめて、縄を解こうとすると、
急いでカブリを振り、

「いやーん、この儂連れてってえ」

甘えた声で、みち足りた表情が私に絡みつ
く。

「だって、それじゃ、縄が濡れるし、出来に
くいよ」

「ううん、出来るわ。濡れたっていいんでし
よう」

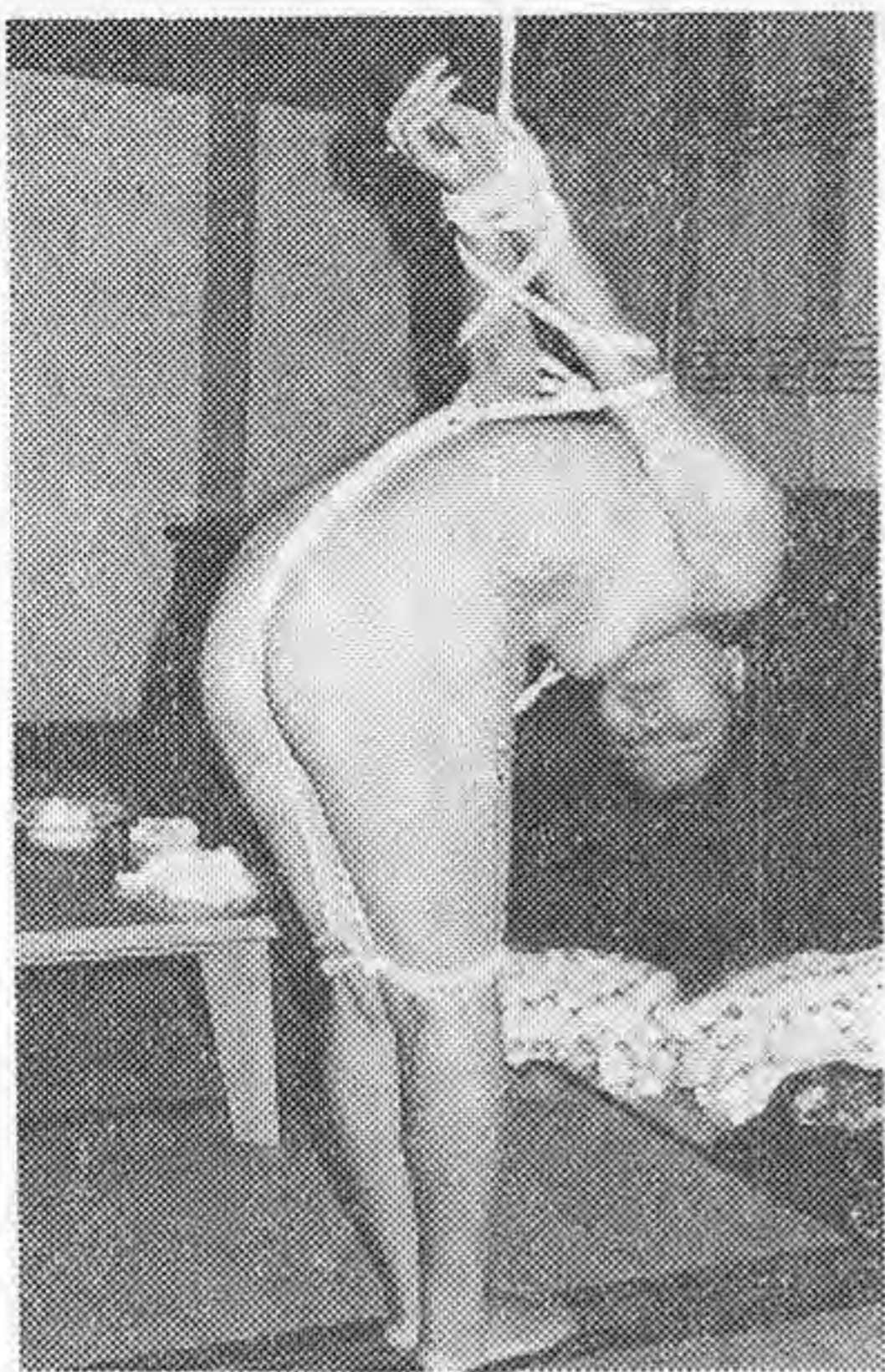
悦楽にのたうち廻ったむら子は、すべての羞恥のヴェールをかなぐり捨てて、そうした赤裸々を、むしろみずから望んでいるのであった。胸の疼く風景がフト私の心をよぎる。苦笑して、後手の縄を握り、押すようにしてトイレへと連行して行く。

「さあ、連れてきてやったよ」

白い便器に跨がせて、流石に遠慮してドアをしめようとする、

「いっちゃいやーん、私のこの浅ましい姿みていてえ」

と、淫らな声が、私の足をとめるのであった。今のむら子にとっては、すべての行為が



快楽と愉悅に繋がっているらしかった。あれもない姿をみせつけて、尚も私の意欲を、昂進させようとしているのであろうか――。

縄目が強くしまり、彼女はかがみ込めなかった。中腰のまま、最早耐え性もなく、しぶきを燦然と辺りに撒き散らして、激しい白い奔流が、直線となって、私の眼を強烈に射ぬいていった。

沛然と落下した水流が、しずくを垂らしてミニの夕立が上っても、中腰のまま、じっとしているむら子に、私はカメラを逸早く構えた。撮り終わってから彼女は無言の俛、じっとしていた。私に跡始末しろというのだろうか――。

光栄の突き当たりもいとところだと悦に入り乍ら、ロールペーパーを長々と切り裂く。

狭いトイレの踏台の前にしゃがみ込む私に、その俛、白い女体が、支えようもなく凭れこんできたのであった。

今日九重に、濡れにぞ濡れる人妻が、最後に求めたものは？

嗜虐者は能動し、被虐者は受身と相場のきまったものが、今や正に主客は転倒しつつあった。もうそろそろ止めようという私を叱咤激励して、川路叢子の飽くなき被虐の願望はもっとももっと、プレイを押しつけてくるのであった。

「ねえ、私のオシリぶたないの？ ハントでいつも外の女の人をしているように、私にもしてエ」

甘えるMの欲求が、私の体を這いずり廻りとりもちのようにべったりと粘っこく絡みついて離れないのであった。

「もっと、ぶちやすい恰好に縛って――ねえったら」

見栄も外聞もなく、ひたすら恍惚と陶醉を求めて狂奔するむら子は、一匹の牝獣と化して、私の全精力をしゃぶりつくそうとするかのように、まだらの裸身をすりつけてくる。「だってもう五時過ぎだよ。そろそろ帰らないと」

「だから泊るっていつてるでしょう」

「これで泊ったら、私の体がもたない。もう

「へトへトなんだ」

「いくじなしねえ、女一人欲ばすことが出来ないの」

「随分と欲んだじゃないの」

「これからよ。ねえったら、縛ってオシリぶってえ。ねえ、もっと虐めてよう」

「仕方がない、よしッ、思い切りぶちのめしてやる」

「いやーん、いい気持になるようぶってくれなきあ」

「ああ、じゃあ手加減するよ」

むら子の貪婪なまでに昂進したマゾ性は、もはや止どまるところを知らなかった。私の心に「淫乱症」という、イヤな言葉がフトよぎった。あの動物的な叫喚といい、今又打擲の要求といい、これは年来、鬱々として内潜して持ち続けてきたマゾ性の圧縮を、時と処を得て、一度にどっと放出した、すさまじい勢いに外ならなかった。

偽善の女のたしなみが、累積する被虐本能を、羞恥というヴェールでカバーしていた結果、極度に膨満していたマゾの願望を一層募らせていたのが、今ここに時を得た吐け口を見出して、岩を噛む激流さながらに、一挙にどっと私に襲いかかってきたようであった。

のろのろと立上った私は、喜々とする女の

両手を背後で締め上げるようにして、二の腕を絞り上げて縛ってゆき、腕の附根ぎりぎりまで持ち上げた苦しい姿勢で、鴨居に逆手に吊り下げたのであった。別の縄を首にかけ、跨間を通して、腕の縄に連結させ、頭をさげた俚身動きの出来ないようにして、ズボンの革バンドを引抜いてくる。剥き出しの双臂が打擲に都合のよい位置に突き出ていた。

平手でパチパチと数度叩くと、それだけでむら子はもう、ハッハッと、恍惚の熱い溜息を洩らした。

ピシリと、革ムチに変じたバンドが、むら子の肉づきのよい臀部に飛ぶ。指が虚空にのけぞって呀っと小さい悲鳴があがり、二度、三度つづけて打つうちに、女のひたいに脂汗がにじみ出て、激しい呻きに陶酔がからまって、一入、大きくなっていった。

「どう、痛いだろう」

「痛いけど……たまらない」

「始めてなんだろう」

「ええ勿論よ、でもいつも夢にみたの。こうしてぶたれるシーンを——」

「もう、よそうか」

「頭に血が下ったみたいで、少し苦しいの。」

変わった縛り方で、もっとぶってもいいわ」

苦痛を快楽に昇華させて、むら子は尚もプレイしたがっていた。一旦、火がついた場合の彼女の欲求の激しさには、SM気のない夫は恐らく困惑し、辟易し、それが殆ど家をおける原因になっているのではなからうか。そんな想念をフト走らせ、或いはむら子の欲望の強さに、夫がついてゆけないのではないかと思われるのであった。

縄をとくと、休む間もなく彼女の希望通り幾分ラクなポーズを考えて、両手を縛って鴨居に吊り下げてみた。それだけでは変化に乏しいので、片脚吊りにして、パシリと尻を打つと、一本足の彼女は、左右によるめき、体が半廻転して、不安定にゆらいだ。

打ち振うムチの激しさが増してくると共にむら子の絶叫は昂まり、さながら誰憚ることもなく、一閃ごとに魂切る悲鳴が、部屋の空気をビリビリと震わせるのであった。

声の大きさにヒヤリとして、頬がくびれるほどに強く猿轡をはめて、阿鼻叫喚を防ぎ、掛声をエーイ、エイとかけながら、これでもか、これでもかと、激しく臀部や、太腿や、跨間をとこ嫌わず打ちつづけていた。

快楽より苦痛がオーバーした場合、最早や

苦痛は快楽に結びにつかなくなるもので、激痛だけが体を支配してしまうものである。

絶叫のくぐもり声の中に苦悶が流れ、むら子の眼から恍惚が消え去ったのを知った時、私はバンドを投げ捨てた。双臀や脇腹が赤く腫れ上り、下腹に赤い筋がくっきりと浮き上って数条のみみず腫れが下半身を彩どって、ムチの激しさをありありと物語っていた。

猿轡を外し片脚を降ろした時ポロポロと涙が玉になってむら子の頬を伝わっておちた。大きく息をついて、

「ああ、すごく痛かったわ、体中ズタズタに切りさかれたみたい——。いたい、いたい。ひどくぶったのね」

「ああ最後にはね。あんたにもうプレイやめさせる気だったのさ」

「ひどいわ、プレイのルール違反よ。余り痛かったので、快感がどこかへ飛んじやった。

折角いい気持でいたのに……」

むら子は真赤になった肌のあちこちを、しきりに撫でていた。

愛咬も甘い鞭も、エクスタシーの状態に於てのみ、昂進を助長させる手段であって、それが伴わない時は、単なる苦痛に過ぎないことを私は過去の経験から知りつくしていた。

私の打振うムチが、むら子の快虐の限界を、ある瞬間に越えたのであった。しかしその時点では苦痛であってもマゾ性の人は、それを追憶の彼方へ押しやった時、いつしか又、甘い悦楽に変化して、プレイの往時を恋しがるのであった。

むら子の場合、苦痛を快楽の追憶に転化するのには余りにも早すぎた様であった。全裸の肌に、灼けつくような、熱いほてりと疼痛を感じ乍ら、それがマゾの快虐に通じるのか、私が縄やカメラを片づけ始めた時、さも未練ありげに、そっと背後からよりそい、ねとつくような甘い口調で

「お願い——まだやめないで——」

と囁きかけるのであった。

「随分執念深いね。まだそれでも虐めてほしいのかい？」

半ばあきれ、辟易めいた口調で応えたと、

「でも後味が悪いわ。ねえお願い、もう一度だけ私の夢を叶えて……」



「どういうこと？」

「この鴨居に私を吊れないかしら？」

「とてもダメだ、私一人の力では……。それに縄が少ないよ」

「何とか吊ってほしいのよ。元気出して下さい。ねえ、吊られる私がこんなに希んでいるというのに——」

「じゃあ、吊ったら終わりにするんだね」

「ええ、私一度でいいから、吊られてみたかったの。逆吊りでも、猪吊りでも、何でも……吊られたらどんな気持か、試してみたいのよう」

女性の方からこれ程までに要求されたことは、谷山久美子を除いては、川路叢子が始め



てであった。しかも初対面からである。心裏
懼れをなした乍らも、私はやっとうなずく。私
の現在の体力をもってしては、プレイ時間が
長すぎるのであった。ホテルへ入ってから、
もう四時間になんなんとしているのである。

一番簡単な吊りを試みるべく、むら子の両
手を腰紐で縛ると、鴨居にしっかり固定し、
両足首は、ホテル備付けの、婦人用の伊達じ
めで縛った上から縄をまきつけ、可能性をた
しかめるべく、両足の縄を徐々に引き揚げて
みたのであった。むら子の脚線が直角に曲っ
て宙に浮上する。ぐーんと両腕が垂直に伸び
て、手首に全重量の強い力がかかっていた。

「辛抱出来る？」

「ええ、出来そうよ」

「足をもっと引上げるから、いいね」

むら子はかなり痛そうで、顔を心持ちしか
めていたが、肉体の苦痛よりも、被虐の想念
の方が、遥かに女の心を支配しているようだ
であった。今や私のプレイは、むら子を欲ばせ
るためのものではあったが、流石に吊りと
なると、私の疲労困憊した氣力を振るい立た
せ、刹那的にでも意欲の盛り上りを感じるの
であった。プレイの同好者からみれば、ぜい
たくこの上もない、プレイ冥加につきるよう
な私の立場であった。

鴨居に高々と吊り下った
むら子の体を、私はまるで
ブランコでも押すような軽
い気持でゆさぶり始めた。
鴨居がギギツときしんで、
ゆらゆらと大きく、女体は
左右に激しく揺れていた。
揺れた女体がめがけて、ネク
タイで力任せにところ嫌わ
ず叩きのめした。快楽の呻
きは急速に昂まり、喘ぎが
愉悦の悶えをよんで、声は

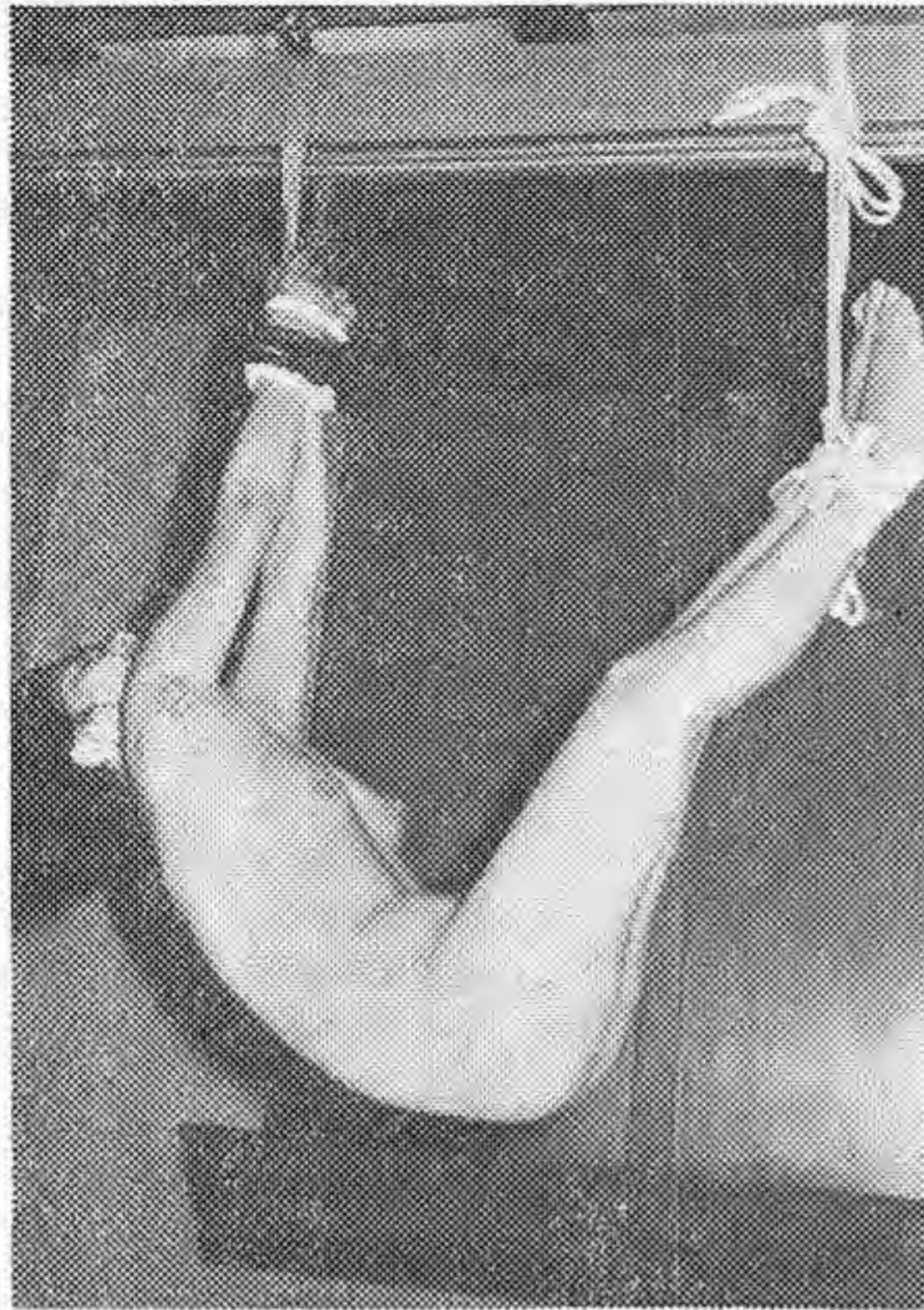
一入高まっていった。最後の悦楽を与えるべ
く、パイプが微かに鳴りひびき、ネクタイの
甘いムチは絶え間なくふり降ろされて恍惚へ
と導いていった。

呻かば呻け！ 喚かば喚け！ 咆えろ——
哭け。もう今の私には、この悦虐にのたうつ
人妻を、トコトンまで、快楽の淵の底深く沈
めこまさればおかぬ気で、沸々と嗜虐の血を
たぎらせて、ジーンと痛み始めた後頭部の、
いつもの鈍痛をこらえ乍ら、やみくもにネク
タイをふりつづけ、女体をゆさぶりつづけて
いたのであった。

「ギューッ」と一声。うばたまの闇に舞う、
けたたましい怪鳥の叫びに似た、裂けた悲鳴
をあげたかと思うと、女体は宙にくらくらと
ゆらめいた後、ダラリとのびて、意識を失っ
ていたのである。

そうして二人に何が起こったか？
やがて晴ればれと、川路叢子は夜
行列車に消えてゆく——

越えずに済まそうと思った一線を、思いが
けぬ仕儀でこえてしまい、ほろ苦く、甘酸っ
ぱい淡い悔恨を抱きしめて、私は独りぬるい
風呂にじっとつかっていた。



果てもなく遠い被虐の旅路を歩き疲れて、川路叢子は、たまゆらの忘れ得ぬひとときのあと味を噛みしめながら、寝床に長々と寝そべっているはずであった。

失神という悦虐の最高事態が突発して、それが私の神経を、意外にも強烈にかき立てる結果となったのであった。

慌てて鴨居より降りし抱きかかえて寝床に横たえても、この人妻は容易に失神からさめず、冷たい脂汗をひたいに泛かべて、微かな呼吸を切迫させ、蒼白の俣ぐったりとしてい

た。狼狽が走り、恐怖と不安に包まれて、胸の隆起をなでさすり、頬を激しくパチパチと叩いた時、ずっと血の気が蘇って、やっと彼女は正気づいたのであった。虚ろな眼が徐々に焦点を合わせて、近々と寄せた私の顔を見定めると、ゆるやかに動き始めた手が、私の首に巻きついてきた。人妻はうっすらと涙を泛かべて哀願するように私を求めている。思わず安堵の吐息と共に、私は縋りつく女の体を力一杯、抱きしめていったのである。

バスから上って裸のまま寝室へ入った時、

人妻は床に起き上ってボンヤリと放心状態であらぬ方をみつめていた。私の姿にハッとした様に居ずまいを直したが、まるでオコリがおちたように、ふっきれた願望の終着駅に、再び羞恥が蘇ってきたらしかった。素肌を抱きしめるようにして、私の傍らをかけぬけると、そわそわと身支度を整え始めたのであっ

た。それにつられて、私も無言の俣、服を身につけ始める。

時間は午後七時を廻っていた。延々五時間近く、私達はこの狭い密室で、汗みどろになって、肉体の相剋を繰り返していたのであるうか。

「御免なさい、無理ばかりいって——でも後悔していませんわ。嬉しかったのよ、ただそれだけ……」

辺りを手早く片付けて、電話で勘定を頼み終わった時、満面に羞恥を泛かべてむら子は囁くようにさういうと、私の顔に熱っぽい頬を寄せて、最後のくちづけを求めて来た。キラキラと黒耀石のように光る眸が、柔和に微笑んで、こよなく美しいものに映った。強く抱きしめて熱い二つの唇が重なっていた。ドアのノックで私達は、やっと唇を離れた。

× × ×

日中は暖かすぎた中秋の一日も、夜になると流石に冷え込んでいた。

無理に握らせた、被虐への報酬と交通費を手渡すと、私のズボンのポケットには、数枚の硬貨が、佗しくカチャついているに過ぎなかった。これから天竜市まで帰ろうとする川路叢子と、一席の夕餉すら持てぬのが淋しか

った。

「本当にいいんですのよ、無理しなくても」

一度は押し返したむら子は、私の乏しい懷中に気づいているらしかった。

私は頭をかかざるを得ない。

「ご承知通りの手違いで、……」

隠したところで仕方がなかった。察しをつけられるだけ、私のええカッコぶりが板についていなかったわけで、つまりそれだけ人間が正直で素直なのだから、この際、その長所を活かすほうが誠実というものである。

「夕飯分が不足ですので、ごちそうはお預けということにします」

「ワンといいましうか、それともチンチンしましうか？」

彼女はさも可笑しように、含み笑いで受け流してくれた。

地味な紺地のツーピースにくるまった素肌には、満身創夷の打擲の鞭あとが、生々しく痕跡を留めていても、今こうして外見するむら子は、最早教養ある先生タイプの、おとなしい人妻として、楚々と振舞って、痴態に惑溺した気振りは微塵も覗けなかった。

私が嗜虐を好む、ジキル博士とハイド氏な

らば、この目立たぬ可愛い人妻も亦、ジキル夫人とミセス・ハイドの二つの心を持ち合わせていた。

自由席は買い求めたが、もう新幹線は最終に近い。浜松まで辿りついて、さてそれからどうするであろうか。如何ともしがたく、きいても詮ないことと知りつつも、気になる余り、

「お家まで帰れるんですか？」

と不安気に訊ねると、ニツと笑って、

「何とかありますわ、御心配しないで……」。

又、会って下さいますわね、いつか——」

「会いたいと思います。是非……」

「嬉しいですわ、それをおききして。箕田さんによろしく仰有って下さいね。でも最初の予定通り、箕田さんも御一緒なら、お互いを索制して、こんな愉しいひとときはきっと持てなかったと思いますわ。こんなこというと箕田さんに叱られるかしら」

吹き抜けるホームの冷たい風を避けて、階段の下により添い、どちらからともなく手を握り交していた。

人妻のよろめき——そのような単純な言葉は、むら子の場合には当て嵌らないかも知れない。夫をこよなく愛しながらも、尚且、ミセ

ス・ハイドの、妖しくもめくるめく誘惑に勝てなかったのだから——。

又しても単調につづく、日々の生業なりわいの合間に、川路叢子の脳裡をよぎるものは、被虐に激しく傾斜した、十一月十四日、金曜日の爛れたような、めまぐるしいひとときではなからうか。

これも所詮は、SMカメラ・ハントのうたかたのプレイであるかも知れない。しかし私にとっても、余りにも強烈すぎる印象であった。会いは別れの始めと人は云う——それでいいのかも知れない。

響音が近づいてくる。新大阪発の列車が、人影疎らな京都駅に滑り込んでくる。

ぐっと力強く握りしめた手を離すと、川路叢子は熱いまなざしに万感をこめて、思い切ったようにデッキを踏んだ。自由席を求めて列車から列車へとわたってゆく、彼女の行手に自由の空席はなかった。彼女の姿を求めて車窓から私は追う。発車する車の中から、川路叢子は淋しい笑みを泛かべて、通路に佇んだ。そっと投げキスを送った。私の体に風が激しく舞ってそれも忽ちに消えていった。

(終)



自由と飢餓の混在

石井健次

一流商社である三井物産の課長が町へ買物にきた少女を旅館へ連れ込んだという事件は、まだ読者の方に耳新しいことであろう。

幸いにして旅館の女中が怪しんで警察へ通報したため少女は危うく難を逃れ、そのエリート紳士は逮捕されてしまった。しかし、その後の報道によると、そのエロ紳士は少女の両親に金を積んで示談にしたということである。

この事件で私は考えなければならぬ種々の問題点に気づいた。

最近の週刊誌は勿論のこと、月刊誌や観光新聞にも穴場めぐりとか遊び場紹介とか女地図とかいった記事が必ずといってよい位載っている。こんな記事を読んでいると、都会には金で自由になる女や安くて女遊びの出来る場所がごろごろ転っているように思える。

簡単にガールハントが出来、行きずりでかりそめの恋が忽ちにして成立したように書いてある。前記の三井物産の課長紳士も街へ行って安易なインスタントの女あさりが出来ると思って実行に移したのであるが五十面をさげて全く恥さらしなことをやったものだが一概に他人事として笑えない気がする。

久恵ちゃん殺しなどの例を挙げてもなく最近では女性に対する誘拐事件があつたと絶たない。しかし日本の性犯罪は昭和三十三年に劇的に急増し、それ以後すこしも減っていないという特異な現象が現在にまで続いているということに注目すべきことである。

というのは、この昭和三十三年という年は赤線の灯が消えた年である。売春禁止法という法律は、

それなりに施行される十分な理由があつたのであろうが、性犯罪の激増ということに対して果たして影響を及ぼしていなかったであろうか。もし仮りに影響があつたとしたら、どんな関係があつたのか改めて考えてみる必要はないであろうか。

現在では性の自由を叫ばれている時代である。たしかに一部の若者や金持ちは自由を謳歌しているであらうが、金のない者や要領の悪い者は、そのおこぼれすら頂けないのが実情ではないだろうか。

これがSMという狭き門になるとその困難さは幾層倍かする。現実にはまさに性に対する自由の謳歌と飢餓が背中合わせに存在しているといつてよいだろう。

昭和四十年代の温泉マークの蔭出は目に余るものがあるが、その繁栄はそれなりの需要があつたことである。夥しい数のバーやキャバレー、アルサロ、料亭などがひしめき合い、そこを職場とする夥しい数の若い女性群が、それらホテルの上得意であることは誰知らぬ者のない公然の秘密である。

それらの巷で多額の金銭を浪費出来る輩にとっては、即席の自由恋愛が法に触れない隠れ蓑となつ

ているのである。姦通罪の廃止された現在では、れっきとした人妻も昭和元禄の性の自由を満喫しているということである。

「他人に迷惑はかけないし相手不幸にしない」という性の倫理に則り自由奔放にふるまえる人を私は真実羨ましいと思う。殊にSMに強い関心を持つ自分としては、三井物産の課長紳士の行動を自らの不吉な影のように思えておびえる。時には十数人の若い女性を欺して結婚詐欺で訴えられた男性に對して羨望の念を抱く自分に嫌悪を覚えたこともあつた。

しかし、小心で人を欺すようなことはとても出来ない自分はSMに對して理解を持つ女性に對して、限らない憧憬の念を抱きつつも、何ら実際の行動に出ることは出来ないでいる。一度はそういう体験をしてみたいと願う私の妄想は日夜青白い燐光を放って陰気に燃え続けていくが、この飢餓状態はいつ果てるとも知れない。

週刊誌の情報を手にながら場末の街を彷徨したことも度々あったが、いつもむなしい失望の積み重ねでしかなかった。私達のように若くもなく憶病で金も力もない色男は一体どうしてこの飢餓状態を脱出すればよいのだろうか。

マルキ・ド・サドの「デステイヌ」



私がキャッチしたTV画面からの「縛り場面」スナップを紹介し

ブラウン管 ● ● の収獲

野津敏生



てみたいと思います。

撮った時には、ただ私自身が楽しむつもりで、別に紹介する目的もなかったのですが、題名とか女優名とかの記録はしていません。ただ後で思い出したもののだけしか「これはなんの映画のどれそれ」と明記出来ませんが、やはり記録は大切なものだと思います。

写真技術もあまり自慢出来るものではありません。ごらんの通りの不鮮明なものばかりですが、自分がひとり楽しむぶんには結構、回想のたすけになります。

デステイヌのロミナ・パウは、ナイトショーの紹介映画をキャッチしたものの。団

鬼六氏がゲスト出演されていた時です。余談ですが、団氏のお顔を拝見して、そのお若いのにびっくりしたものです。

この映画で受ける感じは、サディストの真の人間性をえがいているようです。

ナポレオン・ソロの場面は、二人の女性が遊びにきて事件のトパッチリを受け、間違いで捕まり、仲よく二人一緒に両手

両足を縛られているところだったと思います。

大原麗子さんの写真は、なんとこの映画だったのか題名が思い出せません。とにかく敵のアジトに潜入してみつかり、縛られた上、猿ぐつわをされてしまいます。後に仲間によって救われますが、この縛りはなかなかの緊縛感がありました。

彼女は、いかにも現代的な感じのする若々しい美人であるだけに、この縛られた姿は私に一段と見えたえのある素晴らしいさを、いかなく発揮してくれます。猿ぐつわを噛まされる情景があり、大急ぎで狙ったのですが、撮りそこねました。残念です。



ナポレオン・ソロ



大原麗子さん



—〈第六十八回〉—

辻村 隆

現在発売されている月刊雑誌・週刊誌の種類は莫大であるが、広告、CMの掲載していない雑誌はおそらく奇クぐらいではなからうか。同人雑誌すら資金源に広告をとっているのはザラで、奇クのように徹底的に広告のない本も珍しい。それだけに内容は充実しているといふこともいえるのである。

奇クと同型の風俗雑誌の中にも随分怪しげな広告が幅をきかせていて、大人の玩具的なものから、好奇心をそそるようなフィルムやフォト分譲まで多種多彩である。

それが大半は局留とか、私書函扱いで、いつか面白半分に一冊分のその種のを調べてみたら、曰く××社、曰く△△出版など宛名は変わっていても、局留が同様であったり、私書函が同一のもので五カ所ぐらいもあった。同好者の某が、奇ク以外の分譲フォトを求める気で、SMフォトと称するその一つに代金引換で依頼したら、何と送ってきたのが、奇クの方の分譲フォトの複写で、不鮮明なものを奇ク分譲フォトの倍近い値段で買わされたと憤慨していた。何といっても奇クはSMフォトの本家本元である。外にもないとは断言出来ないが、怪しげな広告のものを買うとひどいめに遭うから御用心御用心。箕田編集長の良心が、読者に迷惑をかけないために、種々依頼してくる広告や、同好者の文通交際欄といったものを一切断わっている現状である。

× × ×

風俗雑誌や、どぎついキワモノ週刊誌に、(SMに理解のある方求む)というのや、(紳士淑女のSM愛好会員来れ)というのが目立ち始めてきた。先日出演したイレブンPMでも、司会の藤本さんがSM時代到来とタイコもちし、

静かな潜行的ブームをよんでいるという風にPRしていたが、機をみるに敏なる連中が、SMの何ものかも解せず、金儲けの口実に使っているのが、かなりあるらしい様子である。会費をとるだけとて、そのうちSMショーをやるからと釣っておいて、どたん場で逃げてしまふ。東京にあったバーSMというのも、それに近いことをやって、客をつついていたそうである。会員の紳士諸君は、個人のプライバシーを傷つけられたくないから、結局、入会金や会費のとりれ損で、泣き寝入りになつてるそうである。欺す方が悪いのか、欺される方が莫迦なのか、それは論外として、広告したようなものは殆どといってよい程インチキが多い。SMのプレイは所詮はアングラ的なもので、おおっぴらに出来る性質のものではない。仮におおっぴらにやったとしても、それは恐らくSM愛好家の満足出来る露出状態では不可能である。私も過去数度そうした会合があるからと誘いを受けたが、いつも断わつて来た。無名のそんな会合よりも一匹狼の私の方が、SMプレイに関しては、幾分、造詣が深いという自負もあって、私自身、喰いものに

されそうな気持になるので、いつも消極的である。かつて数年前、女王と称するヒモつきの女が、Mの男性を甘言で釣って、次々多額の金を巻き上げ、M男性をして、キリキリ舞いさせて結局、何一つプレイらしきことをせず、世の被虐男性の盲点をついたことがあった。SM時代到来とはいえず、まだ公然のものではないことをお知り願って、この種の甘い陥穽にはおちいらないよう、くれぐれも気をつけられることである。

× × ×

とはいふものの、近頃のテレビCMに、SMずばりのシーンが登場してきた。某化粧品会社の男性化粧品の宣伝で、CMガールは、モイレッツの小川ローザ嬢である。粗々しい岩石にかこまれた水辺らしい野外で、鉄鎖で全身を縛られバツと千切れるとゴツツイと呼ぶ、既に御存知のCMである。夜の天気予報のバックシーンに、ヌード女性の鎖を絡ませたものをみせたりするかと思うと、天井桟敷劇団では、本職の彫もの師を舞台にのせて、ズブの素人の若い男の体にホンモノの刺青を彫ってゆくのを客席は固唾をのんで見守っているというのだからオソレイル。



イメージ画『カマキリの餌食』小川 茂正

刺青の公開実演なんて、恐らく空前絶後であろうか。天井機敷の客層が、いつも若い群れで占められているのに、噂をきいて中年層がドッとふえ出したとは、正に時代も変わったものだ、つくづく思うのである。

先日訪れた秋山氏にきいた本当の話だが、人間誰しも痴漢でなくとも、機会があれば、大なり小なり覗きには、興味をかられるもの

らしい。東京の某銭湯が、この覗き趣味で一儲けしようとして、検査されたのであるが、その銭湯は持主の自宅が隣り合せに建てられてあった。家と家との間に一米ばかりの境界があるが、それを塞いで、板敷きの細長い隠れ場所にすると、浴場の女湯にとりつけてある、坐って洗う前面の鏡を、全部マジックミラーにとり換えたのであった。浴槽は男湯と女湯を境界を隔ててしつらえてあるのが常石であって、何の変哲もないが、問題はタイルの壁面に面した、熱湯水のカランのついた、洗い場である。その裏側が、秘密の通路とは露知らぬから、女性に鏡に面して様々の姿態を自然に演じている。特に昼過ぎの、ホステスなどが入浴する時間は比較的空いていて、彼女達はここで体毛のムダ毛を剃ったり、ナルシズムに陥って、さまざまに演じてくれるそうであった。これはつくりものの露出のストリップショーよりは遥かに面白い。好き者がそれからそれへと連絡して、相当ボッタにもかわらず、押すな押すなの大繁昌で、風呂屋のオヤジすっかり悦に入っていたが、やはり、悪い事は出来ない。とかくこういうものは、秘密

であっても、秘密なればこそ尚更人に「しゃべるなよ」とダメを押してしゃべるものだ。ある美貌の人妻の秘所に、かなり大きなローマ字のイニシャルの刺青が彫られてあったのを、それをみた奴が、内緒で友人に喋ったものだ。友人が又友人に喋った処、彼は、当の人妻の亭主の友達であったところから、夫の耳に入ってしまった。夫と本人以外、絶対分かる筈のな

い秘所の刺青を、どうして知られたのかと、その夫カンカンになつて、噂の出所をたぐっていった処とうとう覗きの一件がばれてしまい、恐れ乍らと訴え出て、遂に御用になった次第——。

秋山氏のこの話をきいて、ああ惜しいことをしたと内心思ったのは、豈私一人ではなからう。刑法第一七四条に勿論抵触するが、けしからんオヤジだねと笑って喋りながらも、私自身、機会があればきくと覗きにいったに違いないと思う、自分の心を隠しようもなかった。聞言をきく盗聴器の流行もその一つなら、今もアベノ辺りの某所で、ホテルの襖開きの鏡がマジックミラーであるという噂もチラホラきくが、残念乍ら、その機会にはまだ恵まれていない。

一九七五年一月某日の日記

竹口三十一

マージャンをやめ、帰りじたくを始めたのは夕方六時であった。あいさつもそこそくに友人宅を出ると、僕の気持はマンションにじこめている奴隷妻のことではないになった。今日はがんじがらめの拘束はしていない。両手両足とも二十センチの自由のあるチェ



あらい・かず画

ーンの枷と犬の首輪だけである。素裸にこの三点のアクセサリーだけにしようかと思ったのだが、帰ってからレコードにあわせての雌犬のストリップを楽しむためにいつもの「奴隷解放タイム」なみに、ウールの着物の上に白の割烹着を着けることを許し、奴隷の仕事の、掃除、洗濯、炊事等をすることも許していた。

僕はマージャンに敗けた気持なんか吹き飛んでドアホーンを三つ続けて押した。御主人様のお帰りの合図である。ドアをすばやく開いて入る。

居間の方から妻が四つんばいになって走ってきた。「ただいま」雌犬は嬉しそうに、「ワンワン」と二回続けて鳴き、着物の裾が乱れ赤い腰巻と白いひざ小僧をのぞかせたまま、こっけいなチンチンをやらせてみる。

以前は、これがなかなかできなかったが、相当に上手になったと思う。雌犬は手を使わずに、靴ひもを解かねばならない。これも上手になった。頭をなでてやると、

アップにセットした、せっかくの髪が少し乱れた。

「どう、退屈だった？」

「いいえ。手枷と足枷だけですから、お仕事も一応やりました。もう許して！ 許して下さい。あのリサイタルは諦めました。はずして下さい」

「でも、今朝の反抗ぶりは、すごかったぞ」

「それは……。いや！ はずしてっ！ もうしませんから……解放して下さい」

「よし、許してやろう。僕も悪かったよ。君との約束を忘れて、ヤツらとマージャンの約束をしたんだからな。ゴメンヨネ。奴隷タイムを作りたかっただけ……。でもやっぱりゴメンネ」

錠を渡しながら、フェミニストの僕はあっさりと「奴隷タイム」を解除した。

このところ連日の調教でかなり従順になってきたことだし、今日の奴隷の反省ぶりもまずまずだし夕食前にとうとう許してやることにする。でも、ちよっぴり残念。手を使わず、顔中めしつぶだらけになって犬と同じように食事をさせるのも面白い調教の一つなのだから。でも今日はもう解放だ。し

てみると、今日の調教はゆるすぎたかな。でもいいや、明日があるもの。

これが僕の五年後の日記のある一日である。そして現在の僕は、若さのみの平均的独身サラリーマンの一人である。

一九六〇年代は「成長の時代」(週刊朝日参)だそうで、確かに僕のSM知識はかなりの進歩(?)をした。「縛られた女の人なんだから知らないが僕のハートにピリツとくるな」から「縛られた女の人でなければあ僕の心をゆさぶることはできないな」と、こういう具合である。

さて、七〇年。沖縄は手に入った(?)。次は、愛するM女性を手に入れねばならない。おとなしくて、やさしくて美人で、よく気がつくM女性はいないかな。ダークダックスも歌っている。

あんな娘がいいな。

お嫁さんにいいな。

.....

七〇年は行動の時代にしよう。どこまでも行こう。道は遠くとも。

私を奴隷にしてください

安 沢 達 子

奇ク誌を愛読している二六才の女性です。

ある商社に勤めておりますが、数年前よりマゾの性癖になやまされ、まだ独身でいる仕末です。恋人ぐらゐはおりますが、SやMには無関心なので、はりあいもなく一度、縛ってもらったぐらいで、それも、手加減されるのが味気なく、その後はデートしても望まなくなりしました。いっそ、奇ク誌のモデルにでもなつて、Sの男性を紹介してもらいたいなどとも思うのですが、やはり今の生活にも未練があり、勇気が出ないのです。私が望んでいるのは、ただのプレイだけではないやなのです。本当に、お金で売られるかして、一切の人格を剥奪された奴隷、しかも救い出される希望もなく生きていく生活、そんな夢にあこがれてしまふのです。

一人の男性だけに責められるのではなく、誰かヤクザの親分のような人に奴隷として買われ、大ぜいの子分に酷使されたり、ショーに出演させられたりしてみたい。昼間は、丸裸のまま、親分宅の掃除や食事の世話に働かされ、夜はマゾのシヨンの一室のヌードバーに就き、Sのお客の好みでいろいろな形に縛られたままサービスに努力し、それが終わるとSMショーの出演です。全裸の体を両手吊りにされ、足も大きく広げさせられて鞭を浴びます。お客に体の隅々までも検査せられ、野卑な言葉で批評され、笑われるのです。最後には、立ったままの浣腸、排泄シーンまでやらされて奴隷の一日を終るのです。

こんな生活にあこがれ、夢みている私。もし、本当に、こういう奴隷として買われたら、必ず次のような誓いをして、実行できると思うのです。

女奴隷達子の誓いの言葉

一、本日、金〇〇円也で買い上げいただきましうえは、以下のことをお誓い申し上げます。
二、私は本日にて人間としての資格を一切失いましたので、今後は番号などでお呼び下さい。私の番号は、乳房の間、内腿などの見え

ない部分に刺青で記入されても異議はありません。

三、今後、特にご命令により着用する以外は、昼夜、四季の別なく一切の衣服はいりません。

四、私の肉体はすべてご主人の所有ですので、いかにように使用をされ、苦痛を与えられてもかまいません。

五、私が生きていられるだけの食物をお与え下さい。ただし残飯その他の不要物でかまいません。

六、私を他人にお貸しになつても差支えありません。ご主人に対すると同様に奉仕いたします。

七、私を商売用に使われても異議はなく、その利益は全部ご主人の



..... イ メ ー ジ 画
「黒い影」 志羽 利也

ものとなります。どうか、ショーや、秘密クラブなどでお使い下さい。私の特技は、縛られたり、浣腸をされたりする程度ですが、その他のことも、沢山しつけて下さい。

八、ご不要になつた場合は、他人に譲渡されてもかまいません。

九、手足を失うなどの不具にされない限り、肉体に傷をつけられてもかまいません。鼻にリングをつけることも承諾いたします。

実際に実現不可能とは思いつつも、つい、こんなことを書いてしましました。

読者の方で興味をお持ちでしたら、おたよりをいただきたく思います。

変態（アブノーマル）

ということについて

井 上 久 雄

アブノーマルとはいったい何なのか。人は、男と男が、女と女が求めあったり、S的やM的であったり、いやそれだけではない、男性が特定でない多くの女性を求めたり、あるいは、その反対であったりしても、アブノーマルであるという。

つまり、これらのことは共通して、ただ一つの点に違反しているのである。すなわち、一般の常識——男と女は、互いにこよなく愛し、それも、互いに相手をやさしく愛撫し、ただセックスするだけという点に対してである。だからこの一般常識なるもの——もしくは道徳といってよからう。むしろその方がわかりいいと思うが——にのっとったものだけがノーマルとされ、それから少しでもはずれたものはアブノーマルだとされ、世間から嘲笑があげられるのである。

そこに生を見いだしている者もいるし、少なからぬ興味をいだいている者も多数いる。何故に、生を見いだすことができ、それほど興味を持つことができるのか。何故、単に意識的にそうするのではなく、無意識に、さらに、大きな共鳴をうけ、何かさけがたい力でもって、そこへそこへと、喜びを感じながら引かれていくのか。そのことは、それをアブノーマルと規定する唯一の規範たる、道徳というものの意味を考へることによって、解明されるのではないだろうか。以下においてそれを試みてみたい。

支配されているものにとって、支配者に対して、あれこれと貢物をさしだすことが何の喜びであろうか。同じ境遇の者どうしなら、互いに助けあえば、そこにまた喜びもあるうが……。

そして、この事は、権力をもった人間、支配している人間が一番よく知っているのである。一方、支配されているものは、その事を感じてはいても、決してそれを完全知っているとはいえない。それゆえ、権力をもったものはこの事を知らさないために、道徳という名の規範を、自己の権力を背景として、強圧的に執行するのである。そして人々をそのわく内にとどめることにより、自己の支配を完璧にやりぬき、ひいてはそれを合理化しようと目論むのである。そして、この道徳を植えつけるのが教育（現在の学校教育のみならず、年長者から年少者への教え、目上ものから目下ものへのそれを含む）なのである。だから自分は権力者のあるなしにかかわらず道徳的な観念を持っているという批判は当たらないのである。それが証拠に、赤ん坊や幼児が人前で、裸になったり、便をしたりするのをいやがるであろうか。

編集部だより

○十一月二十七日の11PMでロイズ秋山夫妻の八惨酷ショウVが公開され本誌の読者にも大きな反響があったようだ。全国を巡業している秋山夫妻のショウを見られた方もさぞかし多いことと思う。

○戦後二十五年目を迎えようとしているが、本誌も創刊以来ようやく四半世紀に近い年月を加え、感慨からぬものがある。ここで奇ク戦後緊縛写真史ともいふべき戦後二十五年間の代表的な緊縛写真を集大成した写真集の刊行を熱望する向きが少なくない。保存してあるネガを整理してみると夥しい数量に達し只々驚くばかり。なんとかこのまま埋れさせることなく陽の目を見せたいものだ。

○塚本鉄三氏からの連絡によると関谷富佐子さんを撮影する際の助手を探してほしいということである。カメラの操作に習熟しておれば尚結構であるが、その経験がなくとも吊り責め、鞭打ちなどの責め役を果たせる人という注文なので御希望の方は編集部気付にて通信を貰えれば幸いである。

イメージ画 『苦悦交錯』 辻 梶太郎



否である。大きくなると、それをいやがるようになるのは、母親のしつけであり、教育の成果であるにしかすぎないのである。

さらに、道徳が、以上で述べたように権力者の道具であるが故、きわめて相対的であることを述べれば、道徳なるものは、我々にとって全く価値を持たない、ただ単に破壊する対象でしかない事がはつきりすると思う。

まず、歴史的に見てみると、以前は、道徳的、非道徳的云々すら言われなかったことでも、現在では非道徳的とされている事がたくさんある。たとえば、近親結婚である。古代において、異母兄妹、オジと姪とのそれなどはごく普通のことであったのである。さらに地理的にみても、アジアの地域ではとても許されないことでも、北欧やアフリカでは許されたり、ある

いはその逆のことも往々にある。すなわち道徳なるものは、いまだかつてこれこそ、確固不動のものであると断定できるものは存在しなかったし、将来も存在しないであろう。否、その時々、その地域毎の権力を持つ者によって強制的に流布されるがゆえに、決して存在できないのである。

換言するならば、道徳の中に、我々の、全ての面における自由奔放さ、人間性は決して期待できないし、又決してその中にはないものである。権力者は、我々を鉄の壁の部屋の中へとじこめ、ただ一つの出口、彼らへの奉仕という出口のみをわずかに開け、そのことを強いるのである。

その鉄の壁を作り、奉仕を強いる精神的な、又それゆえ人間に与ってきわめて有効な素材として道徳が、過去からずっと今日に至るまで存在し、かつ、その効力をいかななく発揮しているのである。そのようなところになど、なにゆえに人間性が存在し得ようか。人間性とは、権力者の設定したあの鉄の壁の部屋の外にこそ、彼らの言う所の非道徳的な、アブノーマルの中にこそ存在するのである。アブノーマルこそ、人間性解放のたゆまない、表現なのである。

○雑誌の発行ばかりではなく『座談会』とか『撮影会』或は『寄稿家執筆者を囲む会』とかいった行事を主催してほしいという声が多外多い。従来誌上に発表するといふことを前提にしたそういった催しを度々開いたのだが最近は何々の支障のため誌上公開しない小人数のものに限って行なっている。

○いつも多くの原稿を投稿頂き厚く感謝している。只不採用の際は返戻してほしいという希望が時々あるのだが採否の決定には時日を要することもあるので、ご入用のものはコピーをとっておいて下さるようお願いしたい。

○掲載済の原稿に対する稿料は出来るだけ早く少なくとも発売と同時に送金するようにしているが住所不明のものがあるので若し一ヵ月後も未着の際は編集部宛一報を煩したい。

○従前この欄にて編集参考資料を高価にて求めたい旨を発表していたところ、その後大方の読者蒐集家の方から数々の貴重なコレクション提供の報に接したが今後も本誌の編集に参考となる資料をお持ちの方で分譲可能な向きは資料の内容並に譲渡しの希望条件など御一報賜れば幸いです。

見 た も の

A · Z

いささか旧聞に属するが、週刊読売五月九日号のグラビヤと、七月九日づけの東京中日新聞に、女性のプロジョッキー高橋優子さんのことが出ています。競馬は、馬術競技とことなり、外国でも女性のプロは珍しいとされており、わが国ではプロとしては、勿論はじめの由である。

言うまでもなく、ジョッキーの服装は、軽快であることが第一であり、乗馬スーツなどは着ないの、馬装マニアにはもの足りず、時にはいささか下品な印象さえも持たれている。が、他面、短時間に馬の能力を最大に発揮させるための「責め」「追い込み」の迫力は通常の馬術には見られないものがある。

ターしてゆく……」

○

写真によると、優子さんの手にしている鞭は、短くてかたい競馬用の鞭だが、それでも、通常のものよりはずっと細身に作られており、女らしさを示しているかのようである。白い歯を見せ、ややはずかしそうに、にっこり笑った馬上の優子さんは、可憐である。しかし、発馬前のひとときというのに彼女はもう鞭を逆手に持って、追い込みの際の鞭づかいを考えているかのようである。実にこの表情は、見る人に彼女のういういしさ、かわいらしさを、まず感じさせ、そしてこの少女ジョッキーがこれから見せるであろう追い込みの激しさを、想像させることに成功している。

東京中日新聞の記事には

「……向こう正面では最下位に落ちた。しかし、直線コースに突如出てきた馬群の中で、激しくムチを入れて追い上げてきた優子さん……」とある。

ゴール前の熱っぽい興奮のなかで、勝ちたい一心の優子さんは、

「乗馬のスイス女性」 佐野 寿



馬の尻にちから一ぱいの鞭を何度もふりおろしたにちがいない。頬を高潮させた美少女騎手の鞭が、ひととき高くピシリッ、ピシリッと鳴ったことだろう。あつ、抜いた。上ってきた。またひと鞭、ふた鞭、ピシッ、ピシッ。ほら、もう一ふんばり、ピシリッ……

また、中日新聞によると

「……優子さんが起床するのは午前三時。それから『責め馬』が始まり、九時半ごろまで、続く」という。

朝もやの中で六時間も馬を責め続ける美少女の馬はピシピシ鞭打たれ、拍車を蹴りこまれては倒れる寸前まで走らされ、限界をためされるのである。

「責め馬」……それは、時には人と馬との残酷な出会いである。が「美女と野獣」の出会いとなるならば、そこに詩が生まれる。関係者の談によれば

「……女としての『やわ味』が、手綱に通うのか、馬が、なついて行く。この点では有利……」（中日）とのことである。

ひとたび、馬に跨った優子さんは馬にとって、なさけ容赦のない「責め手」であるに違いない。しかし、きびしいレース、激しい追い込み、そして毎朝のつらい責め馬で彼女の鞭や拍車に十分応えたあとには、きつと彼女と愛馬の間には、しみじみとした対話があるに違いない。

週刊読売のキャプションより

「……五頭のウマがゴールめざして疾走する。ピシッ、ピシッ、ムチが鋭くうなる。紅一点、K号の手綱を握る少女騎手の頬が、みるみる深紅に染まってゆく……」

「……ローカル色ゆたかな競馬場を、リリしい美少女騎手がキャン

腰巻の思い

早木夢二

何気なく外を眺めていると、近くの家のベランダに、ずらっと並んだ洗濯物の中に、腰巻がずしりとかがって、ゆらゆらとゆらいでいる。

ピンク色で上の方を白く縁どっている腰巻の、いかにも「ずしり」という感じであった。

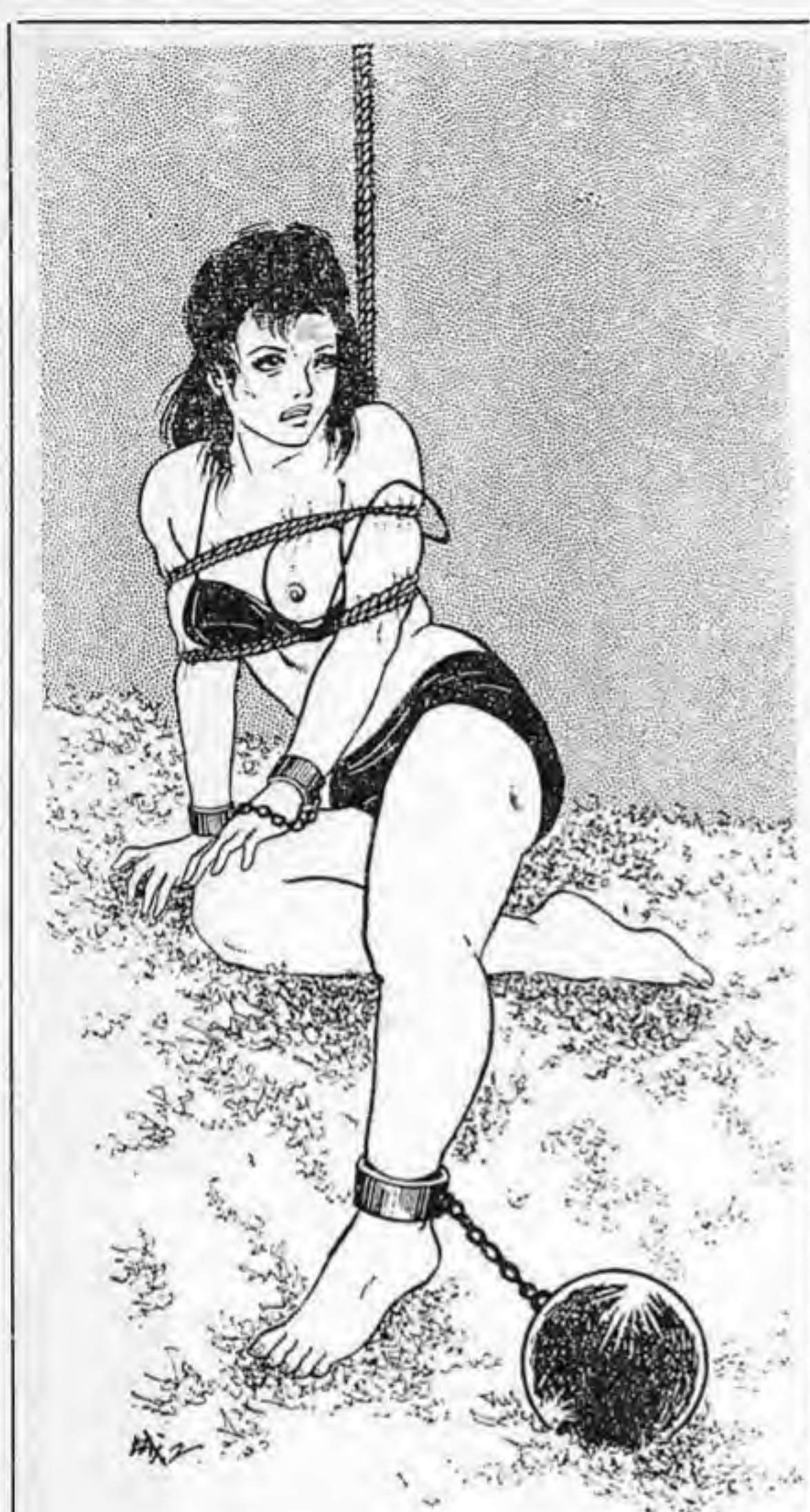
慶子も腰巻を持っているが、私たちの場合それは縛り専用といっ

白とやや濃いピンクで、いつも同じ恰好でもというので、時々それをつけてお縄を受ける訳だ。もっとも、縄がけが終って、責めに入ると、いつかやはり取って仕舞って、部屋の片隅に丸めて放り投げられているという結末となるのが大体のオチであるが……。

昔、若かった時、下宿屋のオールドミスの腰巻が浴室に渡された紐にぶら下っているのに手を触れたり、顔を埋めたりして、未婚の女の肌ずれの香に、やり切れない憧れを発散させていた頃の、腰巻へのロマンチシズムなどはもう私にはない。

秋の天気が不順なので、腰巻は二日ほど干竿に吊るされていた。私は暇があると、窓越しに眺めて、どんな佳人がそれをしめているのか興味を抱いた。

ひいき目に、私たちと同じように、その佳人も、それをつけて縄がけをされているのではなからうか、と思ったりした。



S コ レ ク シ ョ ン

『奴 隷 候 補 生』

豪 城 二

自分が失ってしまったロマンチシズムを、たっぷり満喫しているのかと思って、ちょっと妬ましくなったりした。

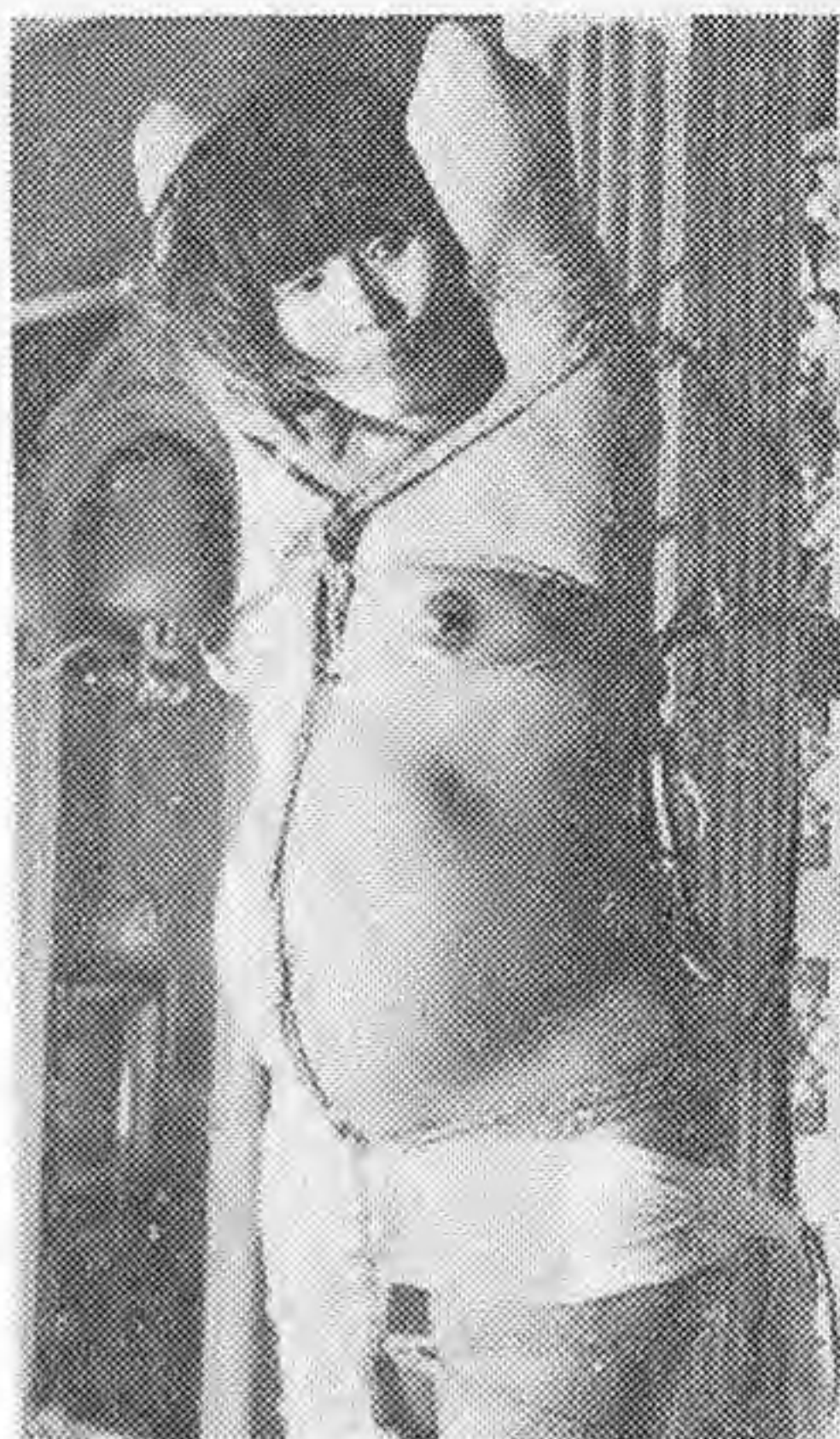
思えば、腰巻一つの美が、私の縛りの幻想の中で、最高のものであった時代もあった。それが慶子とのプレイの中で、もっと進んだ姿で縛りを楽しめるようになった。今となっては、それはもう私にとっては一つのバラエティにすぎなくなっている。

だが、あの腰巻をまもって、菱縄をぎっちりかけられ、拷問プレイに悶えている佳人の姿を想像すると、それはそれで、何か大きな落し物を発見したような淋しさを否めないのだった。

ましてや、あの腰巻が、私たちと同じように、縛り専用になっているかも知れないと思うと、ゆらゆらゆれいている腰巻は今どんな秘密を秘めているのか……。

しかし私は、まもなく安心したような落胆したような、空虚感を覚えることとなった。

その佳人が、腰巻をとり入れているのだった。ずんぐりして、色あせたワンピースを着て髪は風に乱れて、遠目ではあったが、お顔のほども私を安心？ させるものであった。



『皆さん、今日は』

木戸悦子

子供に手が余りかからなくなつてくると、またまた家にばかりいるのが、退屈になってきて、もう一度モデルとなって縛られたり、写真を撮られたりしてみたいと思うようになります。

本や雑誌を読むのが好きで、暇があれば手当たり次第に読み漁るのですが、その中でも奇クなどは私の夢を育ててくれるので、読みすてにしないで保存しています。妊娠という生まれて初めての生

理的变化を体験し、それがきっかけとなってモデル志願という突飛な行動に出た私ですが、やはりこうしたことに強い関心をいだいていたからでしょう。写真撮影の際カメラマンの方にそのことを申しましたら、貴女が楽しみにして読んでいるんだったら、嫌いなんじゃないんでしょ、という返事でした。

縛りとか浣腸とかに、ほのかな憧憬のようなものをいだいている私は、そういったプレイめいたものをやってみたいと思っっているのですが、モデル志願というのも、そうした憧憬へのきっかけとあればと願っております。

短信往来

東区の女王様へ

五木雅樹

毎月、女王様の投稿を待ち望みながら、そのお言葉を嬉しく拝見させて頂いている当年24才の若輩者です。

筆により、思う存分君臨されている女王様は、私の如きM的男にはかけがえのない心の安らぎであり、希望を与えてくださる貴重な存在です。きっと実際にも、私が長年探し求めていた憧れの女王様であると確信し、今日まで影ながらお慕いしてまいりました。

社会機構の大半が停止する夜間となると、私の心はM的性癖によって支配されます。その性癖が、私に筆をとらせ、勇気を与えて、**「女王様を求む」**の決まり文句を書かせている次第です。

女王様の尊いお尻の下で苦しみに喘ぎ、死ぬよりつらい残酷な責め、そして最大なる羞恥に対する空想は限りなく広がり、夢の中の欲望は止まるところを知りませんが、もし、幸いにして女王様の奴

隷として採用されましたら、実際に、誠心誠意、生ある限りお仕えする決心で居ります。

数多くの奴隷志願者の中で、果たして自分に白羽の矢が射られるかどうかは別問題として私は女王様のためなら、生命財産の総てを託して悔いはない覚悟です。

婚約までし、来春には人並みの幸せを約束されている私ですが、もし女王様のお声がかかり、一生奴隷として犬畜生の扱いをして下さるとあらば、一切の過去を水に流して、喜んで生涯を女王様に奉仕致します。

昼は、人の上にたち指導すべき人間が、女王様と対する時は虫ケラ同然の扱いをされ、ある時は女王様の不要物を米代りにし、お茶代りにする。モジモジすれば、ビシビシと容赦のない鞭が振り落ちてくる。……どんなに幸せな気分

に浸れることでしょう。全国のM男性から寄せられる数多くの奴隷志願の名文句に圧倒された思いで、今まで**「高嶺の花」**と、半ばあきらめていた私でありますが、この際、勇をこして奴隷志願者の一人として名乗りをあげたいと思います。

女王様の考えておられるあらゆ

秋山夫妻ショーを見る

帆 足 保 穂

先頃社用で千葉へ行きました際、木更津ミュージックで秋山夫妻の惨酷ショーが開演されていることを知りしました。奇ク（四十二年八月号）で紹介されてからは是非見たいと思いつながら機会に恵まれなかっただけに、待ちこがれていた恋人に逢った心境では非にと寸暇をさいて車をとばしました。

ショーは入って間もなくはじまりましたが、改造されたせまい室内で、すぐ目の前で見せられた秋山夫妻の熱演に思わず興奮してしまいました。こうしたまやかしのないものなら、いくら入場料（八〇〇円）が高くてよいと思いません。時間の都合でそのショーだ

けですぐ出ましたが、心の中ではほかのまじいストリップで、このふん囲気をこわされたくないという気持ちが強かったことは否定出来ません。それだけに未だにショーのこまこまが、まぶたに灼きついていきます。

たまたま帰りに東京浅草で買った奇ク一月号の末尾に香川氏の秋山夫妻残酷ショー見聞記がのって一層印象を深くしました。

そうしたことから急にローズ秋山の写真がほしくなり、前から見たいと思っていた幾つかを組合わせて注文することにしましたが、こうしたショーを有志で見る機会があればと希望します。



『強引な招待』

遠藤春一

る責め、羞恥責めを、犬畜生の私に施してみて下さい。どんな責めを受けましょうと、私は女王様の畜生として、残酷さが激しければ激しいほど嬉しく思う者です。それが私の、この世の生甲斐だと思っています。

どうぞ、このヤセ犬めに、女王様の特別なご慈悲をもちまして奴隷の役を仰せつけ下さい。女王様のお手により、いつ生命の灯を吹き消されましても本望と存じます。私は、嬉しさのあまり、オイオイ泣きながら昇天することでしょう。

女王様の神酒は、いついかなる

場合においても、犬畜生の私が処理することをお誓いします。

女王様のお手にある白羽の矢を立ててもらいたい為のメイ文句は尽きるところを知りません。この手紙をポストに投函した時点において、私はもはや、女王様の準所有物であり、準奴隷犬であるわけです。

そして、女王様のご返信に接した時、完全に私の生命が女王様のお手に握られることになるでしょう。一時的な感情でのお願いではありません。どうぞ、このヤセ犬のせつない訴えを聞き届けてやって下さい。



イメージ画

『腰掛け』

東京・赤ちゃん

映画鑑賞 「生まれる権利」

茂

野

礼

先日、映画「生まれる権利」を見たが、非常に感心させられる処があったので御紹介したい。

世界的問題になりつつある人口の抑制に関心のある家庭医と、施設の整った病院の医師が、人工妊娠中絶を許さぬ法の厳存する事実に社会的矛盾を感じ、これに関連する一つの事件を通じてドラマが流れる。……

この様な題材を扱うのに、非常に真摯な態度で、終始貫かれていくのに好感が持てる。スイス、ドイツの科学に対する底辺を見た思いがする。

その中の圧巻のいくつかの中の一つに、胎児の下降と心音聴取のためにカラーで見せた見事な腹部は、将に妊婦マニア垂涎のものであろう。奇々誌上では、美川芙美子さんの腹が話題になるが、私は見た事がないので比較は出来ないが、想像するに、映画の方は、分娩直前の異物(?) 充実感と熱気に溢れたものであり、また形について言っても、少しゆがみの目立つ程であるから、唯単に、丸く大

きいだけのスベスベした腹部では圧倒感において相当な差があるのではなかろうか。

カラー撮影による帝王切開場面もあり、非常に良く表現されているが、これは従来から多くのものに紹介されているものと、大差ないと思われる。

何と言っても分娩の状況を、深く折り曲げた右側の側から厳肅に見せたのは特筆に値する。

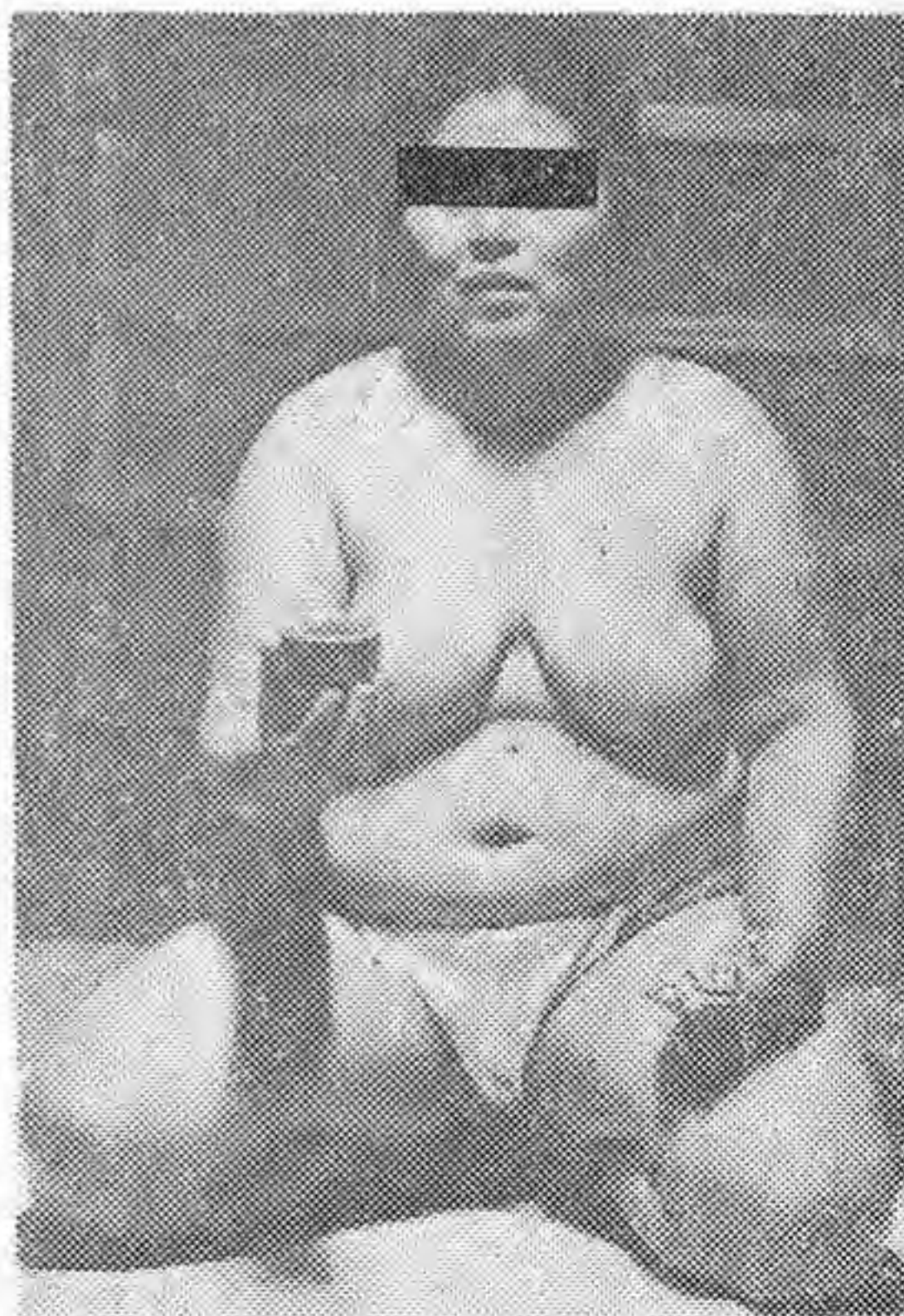
勿論普通通産であるから、多くの人が経験するのと同じ程度の苦痛の下にあるのは当然だが、助産婦が妊婦の後頭部に腕を深く差し入れ、顎が胸に付く程、首を前に曲げさせ、腹圧を禁じ短速呼吸を行なわせている。

若さに光っているが、あどけない顔が、何一つ聞き逃すまいと瞳孔をうるませながら指導の通りにいきみ、又、息を切っている。

ややあって、画面は、極度に引伸ばされ膨隆した会陰から大陰唇部のアップに移る。と言っても、児頭が産道に固定したあたりである。

「さあ、どんときな」

赤畑修造



しかし、私が想像していた以上の大きさになっており、スクリーンの上にそれを見ても、アツケラカンとした感じはするが、それ以上の感覚は湧いてこない。

発露から頭部の娩出。血や羊水が飛び散る。肛門から押し出されたものもある。画面上部で見えたものは小水であろうか。娩出が続き、長く太い臍の緒と共に産まれ出る。……産道附近も伸張から解放され収縮を始める。産まれましたよと告げられた産

婦は、安堵の大歎息をつく、再び後産にいきむ。新生児の産ぶ声を聞けば、こみ上げて来る様な幸福感が顔一杯に広がりと共に、疲労の回復が急速に始まる。

試写でこれを見た若い女性のアンケートによれば、殆どの人が感動的であると答えた様だが、この映画に関しては当を得ていると言えよう。

その他、新生児の蘇生などの場面があるが、全巻を通じて科学的態度に終始し、清潔な映画と言えらると思う。

新年号への讃美と欲求抄

九 鬼 好 太 郎

新年号に「花と蛇」が休載となり、甚だ遺憾に思ったが、これを埋めようと努力したのか、なかなか欲求不満を発散させ得る頁が多く、嬉しく拝見した。

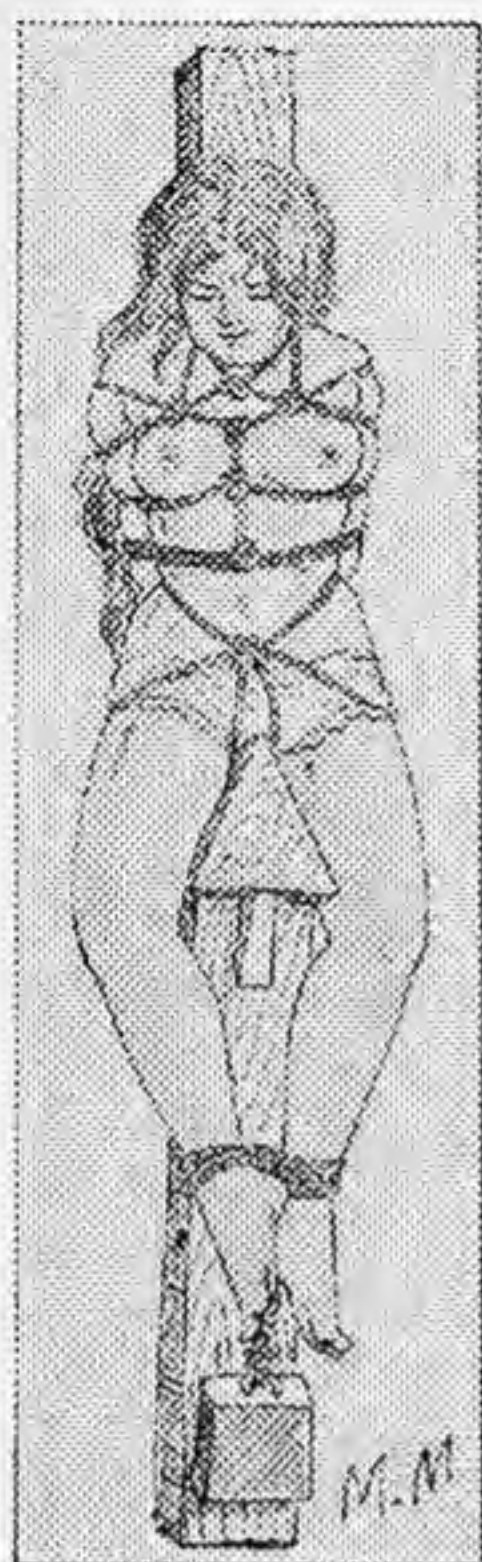
SM的性向のある男は、案外に内向的性向を有している場合が多いのでは？ と思う。内向性という奴は、余りに内に焚きこめるとへんな方向で爆発し、それがS的要素を内燃させている際は面白くない結果さえ生じかねない。多少自分自身無理をしても、云ってしまふ方が良く私は考える。

しかし、云ってしまえと云っても、神酒を飲みたいなどとやたらに云えるものではない。取扱い内容がアブだから、つい現象面から逃避して、自分を誤魔化したくなる。否、それだけではなく、他人

に迷惑をかけないように、マニヤの場が必要となるから難しい。そこに奇クの存在があると云いたい。

マニヤは奇クを讃美しつつ、各人好みの欲求を訴えたいと望む。新年号は、讃美と欲求の混然としたSMマニヤの心情を如実に現わしていると思える。

豪城二氏東京赤ちゃん等、一連の常連画家の絵も、一段と冴えをみせ、辻村氏も最高の耽美を抉った。芳野眉美氏の健筆もいつに交わらず満足できたが「地獄への売身」の横浜好男氏は、さすが懸賞入選創作と肯けるに値した。新人を欲して止まぬ読者のために、今後の精進を期待したい人だ。サロンや読者通信は現代の抑圧された欲求を発散させるに最適の



宮 城 昌 子

場として、これほど楽しい場は外にない。読者通信に藤田春枝氏を始めとして女性の投稿が新年号には特に多かったが、これも現代風俗の一端として解すべきだろう。M女史は躊躇せず、サロンやハン ト頁に裸身を晒すべきだ。見せて減るものでもなし、後難を怖れるなら顔をそむけたら良い。浅田守氏のペット嬢の如く、ポーズさえ熟慮すれば充分に絵になることが立証されている。

新年号の面目躍如たらしめたのはSMハントのミキとマキ君だと私は信じるが、現代娘らしい潑刺たる美しい容貌と裸体を見せて呉れた上、洋式便器に跨った姿態は秀逸だった。さぞ、あの軽い独得の香気が、甘酸っぱく漂ったことだろう。

豪城二氏のイメージ画も、実にSMの根源を羞恥の中に見出そうと真剣に取り組んでおり、耽美に尽きる。片肢を高々と吊り挙げられた丸裸の娘が涎を垂らし、臀部の近くに並べられた注入済らしき空の浣腸器二本が、これからの世界一の愉しいショーを暗示している。更に天井から下がった録音マイク、狙いをつけたカメラや照明具、そして、長尺フィルムをセッ

トした映写機、正にSM羞恥美讃歌の絶唱である。

私は豪氏の絵に羞恥の固型が蜷巻きの姿を現わし、カメラハントには続々と新人が現われて白い陶器に跨ることを欲し求めている。又、ミキとマキの如く、親友同志では飽きたらぬ故、ミキと金原奈加子と云うが如くに、全く初対面の異質の女性を裸で正面や後向き等々、種々の型で連縛し、羞かしがる二人の表情肢態の中に、SMの美德を洞察したい。ミキ達二人がかりで孕女を囀るの図は、私の夢であるが、旧性左近麻里子はそるそる夫の種を宿した頃と思う。彼女は人一倍臀部や太腿の美しい女だっただけに、結婚後の羞恥あふれる肢体を大の字に緊縛され、膨んだ腹部を、若いミキ達の好奇の目に晒し、悶えるフォトを鑑賞したい。

SMの悦虐の内部にエロスの女神を探求し、女体に未だ見出し得ぬ美しさを覗きの中にひきずり出して剥き出させ、その羞恥の状況に次元の異った耽美の真実を求めたい。残された課題は多い。新年号にみせたミキの献身的ポーズに力を得て、羞恥の中に真の女の美しさを発見できることを祈る。

S M 時評

雑感「鬼女」を見る 木本良夫

奇ク十二月号を開く。久し振りに団先生のシナリオ、思わず快哉を叫ぶ。タイミング良く、この映画「女が鞭で鞭する時」東京はOPチエーンの封切が、十一月二十八日であった。早速都内B劇場で鑑賞した。映画の出来映えは、まあまあ他のピンクプロと大同小異というところ。監督が武田有生ということとで、かなり期待したのだが、「好色一代無法松」や「色道二十八人衆」より劣る。映画を見てからシナリオを読み返したが多少内容が変わっていたのは残念。例えばシナリオ15では、いきなり和子が素裸で両手吊りのシーンになっていて、裸にされ縛られる過程が省略されている。48でも同じことが云える。124頁、126頁のスナップのシーンがなかったのも残念。ケチをつけて悪いのだがキャストも気に入らない。浜村久美（春子）、お色気さっぱりでムードがない。この役はかえって、香取環（美也子）か、谷ナオミ、林美樹、珠留美の方が良かったのではないか。

紅真知子（和子）は新人ながら体当たり演技で熱演である。脱ぎっぷりも良くカラーの全裸シーンではヒップがとても可愛い。久し振りに香取環を見たが、全盛期の豊満な容姿はなかった。でも女サディストの美也子の役は、無難にこなしていた。男優の方は五社映画にも出ている山本昌平が美也子に仕える変質的な番頭（中山）に扮して好演。港雄一（義雄）は数多くのピンク作品に出ているが、この映画では可もなく不可もなし。緊縛シーンで一番良かったのはシナリオ15の和子が両手吊りで鞭打たれるシーン。とても迫力があつた。もう一つシナリオ48で春子が腰の物一つで両手吊りにされ、鞭られるシーン。中山が日本刀の先で、春子の乳首をいたぶる。悲鳴を上げてうめく春子。さらに中山は日本刀を湯もじの中へ差し込み、ぐりぐりといっためつける。（117頁スナップ）最後にこの映画の題名は、シナ

縛り映画鑑賞……………

私の採点

岡田康彦

「日本性犯罪史」裸女盗人

ある小島に隠れ住むセムシ男の逃げた妻（女達）への復讐物語。

第一の女は、長襦袢一枚で丸太組の檻の中で食糧責め？にされていびられるが、女優のポリューム不足が惜しまれる。第二の女はブラパンススタイルの監禁で、水欲しさに男の小便まで飲む。そして脱出に失敗し、大の字に縛られて全身をナイフで切り裂かれたりするが、少し殺伐すぎて色気にとぼしい。ムードサディズムの味がほしい題材です。（七〇点）

「乳房狂乱」二宮次郎

結婚間近の婚約者（辰巳典子）の自殺に不審を抱いた男（里見孝二）の復讐物語。レスビアングループ（相原香織、清水世津、美矢



かほる、林美樹）に捕えられた辰巳典子が、パンティ一枚で高手小手に縛られ、バイブレーターで責められたり、鞭打ちや擦り責めにされる。又、肘掛椅子に開股縛りで太腿に刺青をされるシーンのあと、里見君の復讐場面に移る。

順々に捕えられた女達の責めは後手縛りの鞭打ちあり、木の枝への両手吊りでの鞭り責めあり、高手小手の吊り責めありで、仲々の大サービス。（八〇点）

「桃色秘密ルート」

誘拐された娘達が、死のギャンブルと称する秘密ショーで、賭の対象として次々に殺されてゆくというお話。パンティ一枚で両手吊りにされた娘に、玩具のミサイル発射台にとりつけたナイフを向け

リオ通り「鬼女」とした方が良かったと思う。この映画は鬼プロの第一回の作品だと思いが、第二回以降の団先生に期待すること大である。

○
十月二十八日の11PMを途中から見る。

初めて辻村先生の素顔を拝見。お年に似合わず（失礼！）若々しく見え、話し振りに好感が持てた。（前回出られた時は、黒眼鏡で素顔を見られなかった）



『いたぶりを待つおんな』

神戸・狂四郎

一番見ものだったのは、秋山夫妻の残酷ショウであった。初めて見ただけに強烈且つ妖美でさえあった。縛り方も堂に入ったもので後手縛りから股縄まで、実にあざやかである。奥さんの衣裳はブラジャーとパンティの上に総タイツという姿で、ヌードよりも悩ましく、むち打たれ、悲鳴を上げ恍惚の状態となる様は、正に一幅のSM画であった。藤本義一との座談でも気どったところがなく、ごく普通の夫婦の様で好感が持てた。

て、何発目が命中するかとの賭。裸で縛りつけた娘を的に、回転式ピストルに一発だけ入れた弾丸が何回目の引き金でとび出すかという賭。机の上に縛りつけた娘の腕から徐々に血液を抜き取り、何ccの量で死に至るか賭等々、あのテこのテを使うのだが、私には、最後のヒロイン？ が、両手両足を大の字に縛られ、乳房の上下から下腹部にまで縄掛けされたうえにダイナマイトを仕掛けられ、導火線に火が点けられて恐怖するおのきの表情が印象深く、よかったですと思う。（七〇点）

「異常集団」

冒頭の、男（二階堂浩）が、手足を枷で拘束され、首環をはめられてクサリで引かれながら、女に鞭打たれるシーンに度胆を抜かれる。女が責められる場面は四回あり、それぞれ女優は変わる。

第一番目Ⅱ捕えられた興信所の女助手が、不能者の男が見ている前で着衣強奪されて犯される。次には頭上で両手を吊られ、洗濯バサミで全身をはさまれる。

第二番目Ⅱ町医者（妻がマンションに連れこまれて、サド男にいたぶられるのだが、男に着物を奪われたうえで、両手の親指を括ら

れて暴行され、自転車のサドルに縛りつけられたり、後輪を利用して、縛りつけた内腿をタイヤでコスリまわすという方法でいじめ抜かれる。

第三番目Ⅱ捕えられた女が、サジストの女の餌食になる。鞭で追われながら部屋中引きずり廻されたり、両手を広げて棒に括りつけられ、マッサージ椅子に反対向きに縛りつけられて、乳房と腹部をマッサージ責めにつけられながら鞭打たれる。

第四番目Ⅱ同じくサド女に捕えられた、興信所の女所長（清水世津）が、鞭にいたぶられながら、自慰の真似をさせられたり、着ているものを一枚ずつ脱がされたりする。そしてパンティ一枚で四つ這いにさせられ、背中に女を乗せて這い廻ることを強要される。

題名通り、異常ぶりのよせ集めの映画。（九〇点）

「好色二十八人衆」

奇ク9月号、鬼六談義で団先生が紹介された作品。二人の女が後手に縛り合わされたり、縛られたまま風呂につけられたり、両手吊りで鞭や日本刀で刺されたりするが、少々マンネリの感ありというところ。（六〇点）

〔秘蔵版特選 S M 資料〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

入墨女賊仰向け木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よひV

全裸入墨女賊拷問折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よせV

女賊笞打ち白洲糾問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よゆV

入墨女賊ハリツケ拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よめV

入墨女賊海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よすV

入墨女賊全裸四這い木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よもV

入墨女賊逆さ吊り仕置

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よきV

女賊全裸大の字磔処刑

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よさV

女囚拷問木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もとV

女囚石抱き算盤責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もへV

美人女囚海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もにV

白洲女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もちV

美人女囚笞打ち折檻

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もほV

女囚開股羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もぬV

美貌女囚土壇で胴斬り

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もりV

艶美女囚白洲に悶える

大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もはV

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なのV

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なむV

女奴隷を弄ぶ二人の女

大手札八枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△きあV

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚・東浦 略号△きすV

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚・東浦 略号△きせV

豊満な乳房を責める女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きそV

女奴隷を飼育する美女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きてV

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きとV

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚・東浦 略号△きなV

可憐な牝犬の調教

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めあV

足舐めをたのしむマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めくV

足舐めを強要されたマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めゆV

足舐め訓練を受ける牝犬

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めやV

愛玩用牝犬の生態

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めえV

足首縛りの表情美

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△めひV

美しき足首の縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△めはV

素足を縛られる快味

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△めふV

生ゴムの猿ぐつわに喘ぐ

大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めこV

股間縛り恍惚境界面

大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△めねV

鼻責めいたぶられ集

大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号△るえV

首縄股間膝頭縛り

大手札五枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るそV

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△はねV

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原清子外一名 略号△はたV

乳房責め五態

大手札五枚一組 六〇〇円
山原 清子 略号△てらV

全裸女麻縄強烈縛り

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号△いねV

刺青裸女を踏みにじる

大手札八枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△いつV

洋髪全裸刺青強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いこV

可憐島田髻全裸縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いみV

黒フンドシ高手小手縛り

大手札八枚一組 一二〇〇円
山原 清子 略号△ひるV

刺青女体エビ責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほかV

文身女体股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほきV

「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組百態

大手札型印画紙(9×13種) 極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚 五〇〇〇円

十組十枚 一〇〇〇〇円

二十組二十枚 一八〇〇〇円

五十組五十枚 四〇〇〇〇円

百組百枚 七〇〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号
天星社宛お申込み下さい。

☆

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴らしい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

☆

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
3 八の字の開股縛(左近麻里子)
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
8 白肌輝く股間責(山原 清子)
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
16 縛の全裸を見て(金原奈加子)
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
20 後手縛を見せる(川越美佐子)
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
26 湯責めにあう女(山原 清子)
27 変型高手小手縛(川越美佐子)
28 洋子をいじめて(木村 洋子)
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
31 均斉のとれた体(佐々木真弓)
32 蠟涙責めの熱演(ローズ秋山)
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
41 責め抜いた挙句(安井喜久子)
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
43 全裸の股間縛り(山原 清子)
44 黒縋ゴム衣縛り(木村 洋子)
45 パンティを剥く(大塚 啓子)
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
50 後手の徹重縛り(左近麻里子)
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
53 剥がされた布片(金原奈加子)
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
55 髪吊りの擦り責(ローズ秋山)
56 高手小手の裸女(左近麻里子)
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
59 悶える全身縛り(一宮百合子)
60 伸びやかな素足(一宮百合子)
61 卓上の人身御供(左近麻里子)
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
67 全裸をもがく女(ローズ秋山)
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
71 縄のブラジャー(左近麻里子)
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
73 逆エビで責める(ローズ秋山)
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
79 あどけなき表情(金原奈加子)
80 厳しい縄目の肌(金原奈加子)
81 白肌にむごき縄(左近麻里子)
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
89 股裂きで責める(ローズ秋山)
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)

〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号(むら) 五〇〇円

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号(あけ) 四〇〇円

猪 吊り三態

梨花悠紀子 略号(いの) 四〇〇円

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号(せめ) 四〇〇円

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号(ねむ) 四〇〇円

後手首の高縛り

大手札三枚一組 略号(ねへ) 四〇〇円

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号(ねと) 四〇〇円

全裸脚挙げ縛り

大手札三枚一組 略号(てい) 四〇〇円

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 略号(てへ) 四〇〇円

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号(てほ) 四〇〇円

強烈エビ責め

松本アサ子 略号(まと) 四〇〇円

吊り打ち

大手札三枚一組 略号(やり) 四〇〇円

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号(ぬこ) 四〇〇円

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号(りこ) 四〇〇円

月経帯のまま縛り

遠藤百合子 略号(ゆす) 四〇〇円

縄目に悶える夫人

大手札三枚一組 略号(ほく) 四〇〇円

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号(ほむ) 四〇〇円

膨満正面縛り

大手札三枚一組 略号(へな) 四〇〇円

マニヤ全裸緊縛フット

栗本ミチ子 略号(いな) 四〇〇円

強烈エビ縛り

大手札三枚一組 略号(もい) 四〇〇円

乳房責めの苦悶

関谷富佐子 略号(もろ) 三〇〇円

全裸ムチ打ち

大手札四枚一組 略号(もた) 五〇〇円

強打に泣く裸身

関谷富佐子 略号(むち) 五〇〇円

裸身の晒し

大手札三枚一組 略号(わあ) 四〇〇円

全裸股間縛り

関谷富佐子 略号(せら) 五〇〇円

双胸の強調縛り

大手札三枚一組 略号(そう) 四〇〇円

動感海老責地獄

大手札三枚一組 略号(とう) 四〇〇円

色禪の開股縛り

長野 良子 略号(いふ) 四〇〇円

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号(はす) 四〇〇円

乳房しばり

大手札三枚一組 略号(うは) 四〇〇円

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 略号(うい) 六〇〇円

木馬責三態

大手札三枚一組 略号(もく) 四〇〇円

椅子責めの果て

大手札二枚一組 略号(いす) 四〇〇円

檻に入れられた女

山原 清子 略号(もの) 四〇〇円

浴室の全裸刺青

山原 清子 略号(よな) 六〇〇円

鼻いじめ三態

山原 清子 略号(はね) 四〇〇円

鼻責め万華鏡

山原・鈴木 略号(はた) 一二〇〇円

碧玉裸身緊縛

刑部 典子 略号(のん) 四〇〇円

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 略号(きす) 四〇〇円

灼熱の蠟燭責め

大手札四枚一組 略号(きせ) 五〇〇円

豊満な乳房を責める

大手札五枚一組 略号(きそ) 七〇〇円

女奴隷を飼育する

大塚・東浦 略号(きて) 七〇〇円

凌辱されるマゾ女

大塚・東浦 略号(きと) 七〇〇円

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 略号(きな) 三〇〇円

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 略号(なの) 四〇〇円

猿くつわにあえぐ裸女

東浦ひかる 略号(なむ) 四〇〇円

全裸の緊縛姿態開陳

遠藤百合子 略号(ゆり) 五〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号(かみ) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号(かく) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号(かな) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号(かむ) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号(れち) 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号(きか) 四〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号(いるり) 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号(かふ) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(ゆか) 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 略号(ほの) 四〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号(るい) 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号(るは) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号(ほは) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号(ほい) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号(へき) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号(へか) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号(かる) 四〇〇円
山原 清子 略号(かる)

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号(かへ) 一三〇〇円
山原 清子 略号(かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号(かに) 一二〇〇円
山原 清子 略号(かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号(けか) 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けか)

オシメと下着着脱

大手札五枚一組 略号(けひ) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(けひ)

オシメとカバー

大手札五枚一組 略号(けふ) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(けふ)

オシメの中へ排便

大手札五枚一組 略号(けま) 七〇〇円
大塚 啓子 略号(けま)

浣腸後カバー装着

大手札五枚一組 略号(けさ) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(けさ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号(のけ) 四〇〇円
遠藤百合子 略号(のけ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号(むい) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号(むは) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号(むろ) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(ゆか) 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号(ちぬ) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(ちり) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号(ちら) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号(かね) 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号(かて) 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かて)

シリントールにて浣腸

大手札六枚一組 略号(かた) 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かた)

イルリガートル嘴管捜入

大手札六枚一組 略号(かち) 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(かち)

アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号(かの) 七〇〇円
山原・東浦 略号(かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号(うも) 五〇〇円
山原 清子 略号(うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号(うわ) 五〇〇円
山原 清子 略号(うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号(ぬる) 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号(ぬか) 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬか)

捜入された嘴管

大手札四枚一組 略号(るて) 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号(るち) 三〇〇円
大塚 啓子 略号(るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号(ると) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ると)

読者通信



御誌は、いつも楽しく拝見させて頂いております。家は和歌山県の海南市で勤めの帰りに偶然、和歌山市の書店で求めてより愛読者になってしまいました。私の身体の中に御誌に馴染めるような素質が、きっとあったのでしょね。神戸市内の或る商社で英文タイピストをしておりますが、毎日の通勤に時間がかかりますし疲れもします。現在マンションを借りて一人住まいをしております。母は家から通うようにと、やかましく申しますが、通勤時間に替る余暇を利用してアルバイトをしますと、マンションの家賃以上の収入

入がありますので、自由気ままな生活を楽しんでおります。朝は六甲の山々が朝日に映えてすがすがしいです。夜は目の下の神戸市街や港の光の渦が素晴らしいです。ポートタワーが闇の中に浮かんでいるのは、ちょっとロマンチックです。勤め先は外国系なので時間はやかましいのですが、プライベートなことには一切とやかく言いませんので自由の時間は最大限に活用して生活をエンジョイしております。一度、辻村先生のモデルになつてみたいと思ったりしますが私は、あまり若くないので、お呼び下さらないかと、案じております。OL生活が五年、本年で二十

六才になっていきます。辻村先生がお忙しくて駄目でしたらS傾向の紳士を御紹介頂ければ幸いです。私は体験はありませんが自分ではM傾向だと思っています。

○(神戸市・伊藤圭子)

沢山の方々からお便り有難うございました。お蔭さまで適当な方と親しくなれて彼女と共にドライブを楽しんでおります。いずれ近況を、ご報告したいと思っております。

○(森川信也)

横浜のM茂男様。ご返事も、差し上げませんで、お許し下さい。

第一、横浜と熊本では地理的に実現困難ではないかと思いますが、ぼく自身は歓迎するところです。

仮に実現しても「男性虐待」には間に合いそうもなかったし、今後の作品のカット写真に使いたいと期待しています。ただ問題なのは九州までおいで願うのも大変だろうと考えますが、その点どうしたものでしょうか。東区の女王様。貴女に一目お会いしたい。「男性虐待」にも何人かのモデルを登場させましたが、ぜひ、ぼくの書く小説のモデルになって頂きたいのです。豊富な体験からくる自信と気位の高さは、ご立派というほかはありません。貴女は奴隷を飼育する現代の貴婦人です。その意味で美の女神として小説に書きたいのです。一度、お会い下さるなら、ありがたいのです。誌上通信で、ご返事下さい。(熊本・馬族保)

○ゴムマニヤの皆様、お元気のことと拝察します。相変わらずゴムのオムツカバーを愛用、毎日、仕事に精を出しております。厳しい現実の裏に人知れず楽しみを享受している我々には、この性癖のな

い人にくらべ、数段、幸せといふべきではないでしょうか。我々は女性に対するあこがれという一般的本能以外に、メンスバンド、オシメカバー、ゴムズロース等、もう一つ同等のあこがれを持ち、しかも裏切られることなしにこれらを愛することができるので。私は昨日、ゴムマニヤならどなたもご承知の、ニューポート社の渋谷店を訪れました。ショーウインドーには所せましと許りハレンチな婦人肌着が飾られていました。そして非常に品のよい中年の女性が店番をしていました。私は、何か別世界にきたような気分になり人前では口に出せない、ゴムのパンティ、ゴムの生理バンド等、数々の質問を出し、品物も色々見ました。その人は本当に親切に相手をしてくれました。数ある中で特に気に入ったのは、ピンクの薄ゴムで特別に作ったズロース型の月経帯と全部アメゴムで前開きスナップ止めに作った月経帯でした。ピンクのアンネバンドの中は二重ゴムで特に工夫しており、ゴムの感触をばく前から感じとり、心が躍るような気持ちでした。大変失礼なことと申訳けないと思いますが、この中年の婦人に強制され命令さ

れて身につけるような錯覚を自分に強いた次第です。もう一つの気に入ったアメゴムバンドの方を、ゆっくり見せてもらう時間がなかったのは、甚だ心残りでした。でも、もしその誘惑に負けていたら帰りの列車に乗り遅れるところでした。また、特急寝台の中でオシメを当てたり、オムツカバーを着脱するのは、本当に楽しいものです。(山口県徳山市・安田隆夫)

私の恋人は紐である。中年すぎの男が、このように馬鹿げたことを言えるから、奇クの存在が尊いのだ。現代のストレスなんか、くそ喰らえと、私は紐を愛する。私のSMの気質は思春期にすでに芽ばえ、夢想家の私が描いた夢は、一風変わっていった。深井戸に吊り下ろされて踏みしめる底は糞尿の溜り場であり、助けを求めて見上

〓御送金についてお願い〓
現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願ひ致します。他に、振替等の方法もあります。ご利用下さる方も封書の場合には切手代用で結構ですが、なるべく小額切手に願ひます。

げる入口には、美少女が次々と現われ、美しい顔を嘲笑にゆがめながら、雨あられと降らすのは、まがいなき品物である。やがて量を増した糞尿の池は私の頸にまで増水し、あえぐ私を美少女達が喜びあうという如き夢想が多かったようである。その私が初めて官能の叫びを知ったのは紐の力で、自縛がこうじて、肝心なものを紐で力一杯、ぐるぐる巻きに縛り上げたことがある。それから紐は私の愛人となり、色々な緊縛を楽しんできた。最近では、生ゴムの紐を手に入れてしめ上げており、その断末魔をトルコ娘などに鑑賞して貰ったこともある。男も女もSM気のある人なら一度私の生ゴム特製紐の縛りに涎を流してみることだ。(大阪市・変な男)

同好の諸氏諸嬢お元気ですか。小生は男女を問わず若い世代からのSMプレーへの協力を望んでいる一老人です。老人は老人なりの感慨も深く、二十年近く本誌を愛読して参ったわけですが、十七年ぐらい前までは、しばしば女郎の私刑の話や告白が散見され、やがてはズロースなる語がパンティに変わり、ミニスカが現われる等々

蔭の女風俗誌の面目躍如として、奇クの穩健着実なる歩みを振りかえらざるを得ないと共に、貴重な資料としての旧誌の高値も肯ずかされる思いになります。しかしそのように考える一方、近頃特に自肅が自縮になったように思われてならない気も生じさせられてならず、心配しております。例を挙げると、乗馬ズボンで馬に跨った女が奇クの写真なら、素裸の女が大型の玩具の馬にがっぽりと股を

喰い込ませて跨った写真が他誌なのです。また一方、中学一年の少女のヌードがN書房から発刊されるとかです。奇クが、その目まぐるしさについていけないでいると小生は断言します。しかし、その反面、一、二、ほめさせていただきますと、先ず花と蛇は、なかなか結構です。つぎに、何々夫人のヌードという奴は楽しい限り。できるだけ足を開いて夫以外の人の目を楽しませてほしいものです。

△飼育の愉しみ▽小池美喜嬢分譲写真

本誌九月号のSMカメラハント紹介された純情可憐な小池美喜嬢での緊縛姿態を好事家に限りごらんにいれます。女優とかヌードダンサーにない素人じみた初々しさを彼女の中から見つけて下さい。

後手首を縛られて

大手札三枚一組 四〇〇円

小池美喜 略号ハレヘ

生れて初めて縛られる高手小手に後手首を高々と掲げながら、むちむちとした全裸の肌を染めた。

全裸正面の縄掛け

大手札三枚一組 四〇〇円

小池美喜 略号ハレヘ

羞らうを含んだ幼い膨らみに情容赦なく縄目が喰い込んで素肌がわなわなとふるえている。

飼育された美少女

大手札一組 四〇〇円

小池美喜 略号ハレと

柔肌の高手小手縛

大手札三枚一組 四〇〇円

小池美喜 略号ハレヘ

自分の裸身を縛られるという好奇心がいつとはない興味に変化してきた美喜嬢の縛られ姿態。

若人よりの協力を求めます。

(西宮市・SM老人)

大阪の朝田久美子様へ。十二月号でのお呼びかけ、ありがとうございます。ございます。嬉しく拝読させていたいただきました。まるで砂漠を行くキヤラパンがオアシスに遭遇したような気持です。これが果て知らぬしん気楼ではないことを願っております。また、そうしてはならぬとも思っています。具体的な調教方法については割愛いたしますが最初のプレイは馴らし程度にして強烈な責めは一切しません。縛りは苦痛を味あわせるためのものではなく、自由を束縛することにより一層の羞恥、悶えを伴わせるためです。そして貴女とのプレイの洗礼は浣腸責めからにいたしましょう。あのヒヤリと冷たいガラスの器具により浣腸して差上げましょう。ただし貴女の自由は一切奪います。反抗は許されません。でも、ご安心下さい。騎士の精神で(柔道は初段、剣道は神道無念流初段です。これで十分、ナイトの資格はあるでしょう)プレイいたします。次第次第に羞恥責めを加え、静子夫人の如くMの恍惚境を知るまでに調教して差上げましょ

う。しかし私達は現代社会を生きるエリート・ビジネスマンでありレディでなければなりません。従って秘密はお互いに守り、他人に迷惑をかけないように気をつけましょう。それでは私の良きパートナー、プレイ・メイト、モデルとなり、晴れて私の許へ来て下さることを鶴首しております。

(京都市・葉月由紀夫)

小杉千恵さん、あなたがこの欄で、多くの読者から呼びかけられておいでのことは知っております。た。その、いわば人気者(と申し上げてはお怒りになるかもしれませんが)であるあなたが、たとえば(わづかにせよ、わたくしの画に興味を持ってくださるうとは、全く夢にも思い及びませんでした。早速、西洋流に「この作品を小杉千恵さんに捧げる」と申し上げられらるならば、どんなにか嬉しいことでしょう。しかし、それが今すぐには出来ないのです。わたくしには「これが私の作品だ」と自信を持って言えるようなものがありません。お情けで本誌に採用いただけ二、三の画も、すべてが失敗作であることは、誰よりもわたくし自身が、よく知っております。

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フोट

開股羞恥責めの姿態

安井喜久子 略号 五〇〇円

髪吊りで強烈ムチ打ち

安井喜久子 略号 五〇〇円

片足首引きつけ縛り

安井喜久子 略号 五〇〇円

尻立て鞭打ち艶姿

安井喜久子 略号 五〇〇円

柔肌に炸裂するムチ

安井喜久子 略号 五〇〇円

エビ縛りの鞭打ち

安井喜久子 略号 五〇〇円

貞操帯着用鞭打ち

安井喜久子 略号 五〇〇円

痛打にもかく美女体

安井喜久子 略号 五〇〇円

あぐら縛りの羞恥責

安井喜久子 略号 五〇〇円

片脚挙げで晒す裸身

中河 恵子 略号 四〇〇円

強烈エビ縛りで苦悶

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

膝頭縛り開股竹棒責め

中河 恵子 略号 四〇〇円

竹棒開股足首縛り

中河 恵子 略号 四〇〇円

股間縛りの裸身表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

菱縄縛り狭くつわの表情

中河 恵子 略号 四〇〇円

乱痴戯騒ぎの結末

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

菱縄縛りで床に喘ぐ

中河 恵子 略号 四〇〇円

浣腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

浣腸液の注入直後

中河 恵子 略号 四〇〇円

強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

浣腸責め的美態開陳

中河 恵子 略号 四〇〇円

浣腸を待つポーズ

中河 恵子 略号 四〇〇円

現在のわたくしは、技術修得の途上にあるのです。未熟な作を本誌に提出するのも、もし採用されるなら、それがはげみになって制作の意欲を高め、おのずと技術も上達するだろうと思うからにはかなりません。しかし、あなたからの呼びかけにより、新たな力が湧いてきました。しばらく中止していた本格的な羞恥責めの画も、今度はどうやら描けそうな気がいたします。もし満足する作品が出来なかつとも、それが現時点に於ける、わたくしの最高の力なのだと思えます。何カ月かかるかわかりませんが、あなたは待っていて下さるでしょうか。最後に一言。わたくしの想像する小杉千恵なる女性、他の投稿者が考える、あなたとは、かなり異っておりまう。なぜかは分かりませんが、多分、あなたの文体から受ける感じがそうさせるのでしょうか。どうか御自愛ください。(東京・辻島太郎)

十二月号の賛縄武史氏へ。和子夫人の緊縛フォト、楽しく拝見いたしました。特に背後よりの和子夫人のお美しいこと、羨ましく限りです。貴殿の御説の通り、肩の丸味、くびれた腰等、美しい女の

後部は羞恥を美しく表現するものです。今後とも美しい奥様を撮影の上、ご発表下さい。そして私達マニヤの目を楽しませて下さい。私も荷物の如く緊縛された女体は好みませんが、もう少しくらいは羞恥責めのための緊縛やスチュウエーションに凝って頂きたいと思っています。たとえば縦縄に大きな結び目を二カ所作って、夫々の要所にはめ込み強く股間縛りを行ない撮影するのです。勿論、はめ込まれた様子は誌上には発表できませんが、きつく尻や股に喰いこんだ縄と、奥様の耽美につきる羞恥あふれる美しい表情で、最高のフォトがででき上ると思います。要するに、あんなきれいな奥様を、そつとしておくのはもったいないと思います。しかし、さるぐつわだけ止めて下さい。美しい和子夫人が駄目になります。私は和子夫人に魅せられました。美しき和子夫人のフォトが続々と載せられることを祈り筆を置きます。

(芦屋市・野見鯛造)

ゴムマニヤの皆様、本当に長らく御無沙汰いたしました。朝夕、肌寒い季節になりました。御交わりくださいませ。その後、相変

可憐表情の全裸縛り	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	被虐に燃える全裸妊婦	大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子	略号 八ゆめ	中河恵子	略号 八ゆめ
立縛り正面裸晒し	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	尚も見せたい妊婦腹	大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子	略号 八ゆえ	中河恵子	略号 八ゆる
両手吊り全裸晒し	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	股間縛り首縄正面	大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子	略号 八ゆひ	長井葉津子	略号 八よれ
雁字搦目後手縛り	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	両手吊り正面晒し	大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子	略号 八ゆあ	長井葉津子	略号 八よそ
股間縛り柔肌責め	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	全裸高手小手の麗身	大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子	略号 八ゆも	長井葉津子	略号 八よの
猿ぐつわ開股責め	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	全裸股間縛りの媚態	大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子	略号 八ゆに	長井葉津子	略号 八よや
豊満な臀部強烈責め	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	強烈な変型エビ縛り	大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子	略号 八ゆほ	長井葉津子	略号 八よい
強制全裸開股責め	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	正座猿ぐつわの仕置	大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子	略号 八ゆみ	長井葉津子	略号 八よふ
股間縛りで悶える	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	妻絶海老責め地獄	大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子	略号 八ゆる	長井葉津子	略号 八よえ
全裸縛りに羞らう	大手札三枚一組 略号 四〇〇円	女体二つ折り縛り	大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子	略号 八ゆへ	長井葉津子	略号 八よぬ
私の妊娠腹を見てね	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	あぐら縛り全裸晒し	大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河恵子	略号 八ゆわ	長井葉津子	略号 八よあ
縛られた妊婦横臥す	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	イルリの浣腸責め	大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河恵子	略号 八ゆよ	長井葉津子	略号 八よた

わらず私はゴムのとりこになって暮しています。週刊誌で東京のニューポート社でゴム肌着が発売されて、知っているのを知り、カタログをとり寄せ、全商品を次々と買い集めました。美しい仕上げの純生ゴム製下着の数々に私は本当に満足しています。今まで生理日の月経帯は黒木綿に一面に広く薄い黄色のゴムを貼付けたものを使用していました。ニューポート社から総型が発売になって以来、総生ゴム製を使用しています。生ゴムはムレて不衛生になるので、今は八枚のゴムバンドで毎日交換して使用しています。また薄い総ゴムのラテックスパンティも幾枚も揃え、平素、下着に使っています。半透明のゴムでできていますので、ピタリと腰にフィットし、体の線を美しくします。一日中、着用しています。このように日常、女性同志なら、人前であっても決して恥ずかしくない美しいゴム製下着が発売になり満足しています。ブラジャーもスリッパもゴム製です。男性用も各種あることを、カタログで知りました。楽しい時代になりましたわね。今、大変、人気を

呼んでいるフンドシ（越中輝）について、最近女性用も注文オーダーで、百貨店にまで売られるようになったと聞いていますが、ゴム肌着について色々悩みの男性の方は、ニューポート社にでもご依頼されて、量感があって存分にゴムの感触を楽しめるような、ゴム面積の広い、たっぷりとしたゴムを使用した、ゴムだけの越中ふんどしを発売されるよう、お願いをなさったら如何でしょう。ふんどしという特殊感覚に、それが総ゴム製という肉感的セクシャルの相乗効果で、強烈な下着の実現となりまた、ふんどしである以上、人前で日常、平然と使用し満足できると思えます。ニューポート社には現在、男女、色々のゴム下着が売られておるにもかかわらず、ゴムのふんどしが無い様子です。そんなものも、きっと希望量次第で発売になることでしょう。どうかゴムマニヤの方々、希望して下さい。最近女性ふんどしが流行している時代です。私もぜひ日常着の一つに加えてみたいと思います。ゴム感触を充分に味わうことができるために、使用するゴムは巾広く、大面積がゴムづくめのものを特に希望します。また日常、

大手札印画紙焼付
〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もゆ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴ネ
大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌に炸裂する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もろ▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もみ▽

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はゆ▽

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はの▽

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はひ▽

何の気なしに愛用できる、ゴム製のサロンエプロン等、お勝手をしながら楽しめるもの、それと人にわからないよう気を配る心配もなく堂々と使えるものを、色々と考え、ゴムマニヤのための商品を多く世に送り出して下さるよう、マニヤの方々のご尽力を私は心から希望申し上げ筆をおきます。

(神戸市・大西良子)

ぼくは最近、はじめて奇クを拝見したのですが、このような素晴らしい世界のあったことに驚きの目をみはっています。以来、がぜん奇クのファンになり、何回か便りを書こうと思ったのですが、躊躇する気持があって果たせずにいました。そして今度、思いきって便りを出した次第。それは日一日と奇クに対する関心が深まったからです。男女ともSM性のない人はいないと、ぼくは信じます。ぼくも、がぜん心をひかれました。ところでぼくは現在三十才ですが、骨折で長い病床生活をおくっていたため、未だに彼女すらない、ていたらくです。こんなぼくを指導あるいは、つきあって下さる方がおられましたら幸せです。年上の人でも年下の人でも結構、全国の

女性奇クファンの方々の便りを首を長くして待っています。

(京都市・中川昌吉)

東区の女王様、その後、お元気ですか。私は女王様と同じ大阪に住む者です。私は以前から貴女のような方を求めていました。どうか私を女王様の犬にしてやると言っして下さい。犬は人間でありませんから、女王様のベッドの足元で生活させてもらいたいです。実は私、最近ふとしたことから同じ大学に行っている女性のサンダルを手に入れました。それを女王様のサンダルだと思って一生けん命に奉仕しました。こんな犬を女王様はお笑いになるでしょう。私を女王様の奴隷にしてください。ただただ女王様の便器、トイレットペーパーとして奉仕いたします。またムチで打って下さい。犬は喜びで失神するでしょう。どうか私を呼びつけて下さい。お待ちしています。

(枚方市・伊藤)

親愛なる梅川幸子様へ。十二月のプレイフォト「ゴムマント」で陶酔感に満ちた素晴らしいフォトを拝見しました。再三に亘るお願い

開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はわV

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はふV

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はほV

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はあV

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はうV

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はさV

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はめV

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はしV

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はもV

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△はむV

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△はめV

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△はもV

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△はさV

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△はしV

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△はすV

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
大島 照代 略号△はせV

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△はゆV

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大島 照代 略号△はたV

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△はちV

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△はつV

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△はてV

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△はとV

私の趣味は詩、音楽、卓球、釣、読書等です。貴女の御趣味もお知らせ下されば幸いに思います。さて、美川さんの悲痛な呼びかけの記事を読んで、私の考えを卒直に申しますと、貴女が自分が肥満体だという理由だけで、自ら最も不幸な状態に陥ろうとしている点、私は貴女のお考えが納得できません。なぜなら、貴女のような肥満された方は、私のような骨皮筋衛門には憧れの的で、貴女のプレーをお受けして、貴女の大きな乳房やお腹で思いきり苛めていただきたいと願っているからです。また体調が不可解だといって、牛乳を一気に四本も飲むなんて無茶過ぎます。牛乳の成分の中には、たん白質など多く含んでいますので消化に悪いし、胃拡張や内臓疾患を招くことになります。どうか自分が健在であってこそ、すべての者に愛されるのだという自信をお持ちになつて、お暮しになれば、目の前が明るくなつて愉快に過ごせることができると思います。いわば、貴女は私たちにとりまして、重要な役割を果たしていると申しても、決してオーバーなことではないと思います。貴女御自身も、肥満体だから、という実にく

だらな理由で健康をそこなうようなプレーを望まないでほしいのです。貴女御自身がお持ちになっている個性や能力を発揮してしかるべきだと、かように思います。それによって人間愛に結びつくものと信じております。愛と言えは一般的にはセックス用語と思われ勝ちですが、親切、思いやり、情け、献身、犠牲、というものが、すべてに現われることだと私は考えています。私は、いたらない者だけにどのくらい貴女が満足されるかわかりませんが、未知の貴女に対して、私の学んだ一切のものを示して行きたいと思つています。本格的な冬を迎えますが、どうぞ身体を御自愛の程、貴女の上に豊かな恵みがありますようにお祈りいたします。

(大阪・中野幸平)

東京の桜井さんや三田市の谷さんなど、わたしの使用済みのパットを拝受したいと言われるMの方々がでてきましたので、とてもいい気持です。わたしは肉体的にはすごく健康で、まだヴァージンですから、あなた達が拝受した現物は、すっかり喰べちゃっても大丈夫なことよ。でも現物を送ってか

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れやV

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れゆV

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れえV

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 一〇〇〇円
中河恵子 略号八れぬV

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号八れねV

開股された股間縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号八れのV

豆絞りの猿くつわ縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号八れむV

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やかV

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やきV

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やくV

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やもV

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やしV

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号八やみV

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 五〇〇〇円
大塚・東浦 略号八なるV

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 二〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬめV

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 二〇〇〇円
中河恵子 略号八ぬねV

八の字の開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しいV

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しみV

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しけV

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しこV

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しらV

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しれV

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号八しわV

お申込みは大阪阿倍野局私書箱第14号天星社宛へ願います。

ら気がついたのですが、申し込んだ、あなたたちは送料や包装料を同封したかしら？ あんな汚れたものを取扱うのは編集部でもほんとうに不愉快だろうと思います。もう一度、現物を送りますから、希望する方は編集部に礼をつくして申し込みなさい。それから現物を拝受したあなたは、わたしの遠隔操作によって？ 残忍で浅ましい責め苦を甘受し、その結果を詳細に誌上にご報告申し上げなさい。わたしの在学している大学の女の子たちの中にも、意外とS傾向の同志がいるようよ。全国のS女性の方々、大いにはり切ってM男どもを徹底的に恥かしめ責めさいな。ストレスを解消しないこと？ 目下のわたしは「鬼女の会」でもつくって、バシバシM男どもを征服したい気持よ。どうお、最高と思わないこと。

(東京・春川さと子)

秋冷の候、貴社益々御清栄の御事と存じ上げます。私は、ここ数年、貴誌を愛読している者ですが初めて投稿しました。十一月号にゴム製下着に関しての投稿がございましたが、私もゴム、レザー等の下着に関しては強い興味があ

り同種製品を扱っている店を探し数軒の店を知っていますが、先日たまたま商用で、おかち町へ行ったところ、面白い店を発見いたしましたので御紹介いたします。それは上野松坂屋の駐車場の直ぐ近くの松坂屋裏通りにあって（おかち町駅より五分ぐらい）アテナ上野店という看板の店ですが、他店にあるようなSMのゴム、レザー製品は一応、全部揃っていますしオリジナル物も十数点あり、変型セクシー下着とともに目を楽しませてくれました。（一番あとから開店したので、全部の店をまわってその製品と同じものは全部、作ったそうです）宣伝を殆どしていないので余り知られていないようですが、品数が豊富なこと、独創的なことでは東京で一番だと思えますし、店員も東京には珍しく親切でサービスが良く、どんなオーダーでも受けるそうです。奇く読者の一見をおすすめする次第です。

(東京・大沢生)

余田暁子様。十二月号でのお呼びかけを拝見。奇くによって貴女の人生の中に、ひそかな幸せの世界を見出された御様子。若くてチャイミングな素晴らしい友人をお

全裸後手柔肌縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こよ	△
乳房強烈膨隆責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こわ	△
海老責めに苦悶する	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こお	△
全裸の緊縛全身晒し	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こる	△
煙草責めに喘ぐ女	大手札二枚一組	略号	三〇〇円
佐々木真弓	略号	△こぬ	△
緊縛麗姿に映えるライト	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こほ	△
臀部強調後手縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こる	△
羞恥に悶える全裸緊縛	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こに	△
ホステスの緊縛姿態	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こち	△
二つ折りで責める女体	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こへ	△
脈打つ全裸の臨月腹	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
中河恵子	略号	△こふ	△
臨月腹の革紐股間縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
中河恵子	略号	△こや	△
猿轡の臨月妊婦腹縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
中河恵子	略号	△この	△
卓上の股間縛り狂態	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	△こそ	△
羞恥の足挙げ責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	△これ	△
悦虐責めの女体終着駅	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	△こた	△
片足挙げる鞭打ち責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
関谷富佐子	略号	△こら	△
柔肌に弾ける惨酷な答	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
関谷富佐子	略号	△こな	△
あぐら縛りの女体鑑賞	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐近麻里子	略号	△こえ	△
対談用に縛られた女	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
左近麻里子	略号	△こて	△

迎えした喜びで小生は一杯です。初めて奇くを手にしたときの「ハッ」とした気持。続いてこみ上げるワクワクとした胸のときめき。のぼせる頭で「自分の仲間がいる

！」と思う嬉しさが、熱いものとなつて体の中に拡がっていく。誰しも、そうした経験があるのだと思います。けれど、若い女性の貴女、そして四年もの間、表面的

には幸せな夫婦生活の奥で、心に悩み充たされたいものを持ち続けてきた貴女にとって、不感症？とまで自分を疑った「そのこと」が世の中の多くの人たちの間ではもうずっと以前から、知らないことが罪なのだという位に、最高の素敵な方法でエンジョイされているということ——つまり人間の長い長い歴史の中で生み出され発達してきた色々な智慧と技術とを自由に使うことを知っている男女たちは、自分たちの人生にいつでも素晴らしい夢の花園を創り出しているのだ、ということが発見されたのですから、早く「自分でも体験してみたい」という思いが日に日につのり、「胸がしめつけられそうに苦しい思い」をされるのは、本当に無理のないことと、お察しします。小生が奇クの愛読者になって、もう十年。小生もまた当時三十そこそこの年令で、病がちの妻との充たされぬ夫婦生活から奇クによって新しい光明を得、かねてから心にひそめていた願望を、奇クの道しるべによって少しずつ満たす方法を知り、その後、元氣になった妻や、時には同好のM女性との激しく又、優しいプレイの交歓によって、SMの楽しみ

や喜びの経験と研究を重ねながら私なりに豊かで美しい世界を切り開いてきました。SMのプレイが人間に教えるものは、結局、美しい人間愛の創造だと思っています。そして、それは無限の拡がりを持った人間の本性の現われなのです。ですから、お互いの意思を尊重する限り、人間、誰でもエンジョイする権利がある筈です。貴女のお便りは、その権利を貴女なりに、切ない心で主張されているのだと思います。さあ、香り高いバラの花びらのしとねに、貴女の桜色に火照った豊かな肢体を埋め、SMという名の蝶の甘美な戯れに身を委ねて御覧なさい。

(東京・北畠劔二)

奇譚クラブは不思議な迫力と感動を読者に伝えてくる。本誌の主役は「SMカメラハント」の筆者辻村隆その人である。彼の文章は落ちついた渋さの中にピリリと小味をきかしたところがあり、なかなかスマートで読みやすい。心理描写の第一人者である団鬼六の存在は奇クにとって確かに大きい。名随筆「鬼六談義」には、粋な秀作が多い。ところで、SM作家として異色の才能の冴えを発揮して

私達を魅了する清原麻耶の作品が少ないのは淋しいことである。彼女は完成された美しい文体を持っている。彼女自身の個性を的確に表現する優秀な描写力と文章の美しい流れの中に繊細な女らしさを匂うばかりに表現できる、洗練されたセンスは、とても貴重な存在である。彼女の若々しい新鮮なタッチの文体が、今までにない新しい感動を読者に感じさせずにはおかない。レスビアンを描かせて、彼女の右に出る者は、今のところ見当たらない。「魅惑の新人」清原麻耶を常連作家の一人に加えていただきたいものである。彼女はベテラン辻村隆と好対称の高い資質の持主で両者とも、ことS・Mに関しては命がけのところがあるようだ。それだけに文章の内容もずっしりとした重みを感じさせる純度の高いものとなっている。

(青柳劔作)

十二月号は本当に嬉しうございました。だって菅原敏夫様の力作「雨の昼下り」と「私のプレイ・フォト、ゴムマント」が載っているのですもの。「雨の昼下り」はゴム装束にゴムマント姿の京子がドブ川に腰まで浸っているところ

や、池の中に首まで浸って体を動かしている場面など、まるで私のプレイを自分で鏡にうつして見ているような思いでした。一気に読み終えた私は、十月も終りというのに、裸になって素肌に婦人用ゴム・レインコートをまとい、その上から男物総ゴム合羽を重ね着して、足には腰まであるゴム長（爪先が地下足袋のようなもの）をはき、両手には大きなゴム手袋をはめ、その上から特大の男物ゴムマントを羽織ってフードを真深にかぶり、まだ沸いていないお風呂にザブザブと身を沈め、目と同じお湯の中で身も心も陶醉いたしました。皆様、ゴムマントに関する思い出なり、プレイの方法について、どしどし発表して下さい。また私は当年四十五才のゴムマニヤですが、私が調教したレイ子というお手伝いさんと二人で暮しています。どなたか私たちと一しょにゴムプレイを楽しんで下さる奇特な方はいらっしゃいませんか？二人ともマゾ趣味でレスビアンですが、ゴム装束の異性に存分に恥ずかしめていただきたいと思いが、満たされない日々を過ごしています。では皆様のご一報をお待ちしております。菅原様、京都

次号（三月号）は一月二十五日に発売いたします

にお越しの節は、ぜひぜひお立ち寄り下さいませ。私とレイ子と貴方様と三人で存分にプレイが楽しみたいと思っています。

（京都市右京区・梅川幸子）

このたび奇クを初めて読み、意外とMS愛好者の多いことに勇気を、お便りする事にしました。

私は神田に事務所を持ち、小さいながらも自分で商売をやっている三十二才の男性で、身長一六五センチ、体重五七キロです。いつの頃からか自分の身体を痛めつけることに何ともいえない快楽を覚えるようになり、ときどき野外に行

っては、自分の身体にムチをあてて楽しんでおります。ピシッと身体に巻きつくムチの冴えた音。肉に食い込む革ムチは全身に電気が走るような気持です。そして重ねるうちに恍惚の世界に誘導されるような、何ともたまらない気持ちにかられます。どなたか私の肉体にあつい、おいしいムチを与えて下さい。見晴らしのいい浜辺などで一糸まとわぬ自然の姿で吊り下げ血がにじむような強烈なムチを全

身にあてて下さったら、どんなに楽しく、私のこのほてった身体も満足することでしょう。私は商売柄、全国たいいていのところは年三回は出張します。お便り下さればどこへでも飛んで行きます。これからは寒くなりますが、私の身体は寒いほど、しげきがあつていいと思います。ときには沼の氷を割って泳ぐことなどあるくらいです。から。全国の女性からのお便りをお待ちしています。

（東京・関口四郎）

私は戦時中に、先輩の軍人にすすめられて六尺、越中、もっこフンドシを使用したのがきっかけでそれ以来、男性的な緊縛美の持つ魅力に、すっかりひきつけられ、常用するようになってから、もう二十数年になります。すべての軍隊、徴用工、疎開者などに共通のひどい苦しみも恥かしめも舐めましたが、戦時中、坊主頭でフンドシ姿の大半をここで過ごした私には、またなつかしい思い出も沢山あります。私は、かつての軍隊の私刑や素裸で行なわれた徴兵検査

等の男の責めと羞恥をかきたてるような集団生活を望んでいます。兵隊が上官の命令で素裸にされてうける責めが公然と行なわれた旧軍隊の生活は、マゾ的な私にとってもう一度、経験したい世界であり、また、この頃の青年に味あわせたい体験です。昔から奇ク誌上には、しばしば戦時中の少年被虐物や軍隊ものが載って満足させてくれましたが、もっといろいろな体験の人が多いと思います。徴兵検査、軍隊の私刑を中心とした読物、さし絵、グラビア写真などを多く載せて下さい。男性ヌードも徴兵検査の光景など、どうでしょうか。また私の六尺細姿か、男性ヌードの緊縛ポーズをカメラで撮って下されば、大変嬉しいと思います。

（東京・中田繁雄）

余田曉子様、貴女の十二月号、読者通信を拝見いたしました。私は東京都墨田区に住む五十四才の公務員で、妻は四十三才、なかなかのグラマーです。私たちは、月に二回ぐらい、ムードのあるモーターで全裸縛りの羞恥責めをして楽しんでます。特に妻は縄によって始めて女の喜びを知ったといっています。ぜひ貴女様と御こん

意になり、ともに縛られてみたいなどと申しています。お互いに秘密を守りSMプレイをして楽しみたいと思いますので、よろしかったら、お便り下さい。お待ちしております。

（東京・水川理太郎）

名古屋に住んでいる三十二才の男性ですが、気の弱さから、なかなかお便りができず今日に至りました。私は奇クを愛読して三年余になります。特に花と蛇のファンで、毎日楽しく読んで空想の中でプレイを続けていました。最近になって現実のプレイをしたいと思うようになりました。プレイといっても一度も経験がないので花と蛇の特集号を教科書にして、私が川田、鬼源……等に、女性が静子、小夜子、京子……等になった気で、一つ一つのプレイをしたいと思っています。花と蛇のファンの中には多くの女性の方もおられると思いますので、私の考えに同意して下さい方は、お便り下さい。プレイを通じて新しい世界が見たいものです。

（名古屋・山本）

奇クの女性愛読者の皆様へ、お便りいたします。私はカメラハン

ト、花と蛇を特に愛読しております

す。この世の中で最も美しいものは、女性が裸身で開股責め、海老責め、その他、羞恥責めにあって悶えている姿ではないかと思つています。貴女の満足のいく責め方で責め抜いて、夢の国へ案内してあげたいと思つております。私とプレイして下さる女性の方、ぜひお便り下さい。まだ見ぬ貴女よりのお便りをお待ちしています。

(東京・美樹夫)

奇ク一月号、まあまあ出来ばえです。斎藤夜居氏の珍書解題を楽しみに毎月、講読していますが

一月号の美人十二支は特に珍しく拝見しました。著者が折角、添付されたという「秘巻美人十二支」の全図写真が割愛されたことは、かえすがえすも残念です。中康弘通の切腹百年史もなかなか熱意のある調査で、只々敬服の他ありません。こうした斎藤、中康両氏の執筆態度を見ると、他の人々のペンは先からヒネリ出した小説類は影が薄くなります。真実とフィクションの差ですネ。切腹百年史、男性篇を期待しています。斎藤氏の解題ものも、ぜひ、お願いいたします。

(東京・小山蒙堂)

小生、数年来より貴誌を愛読いたしておりますが、相変わらずS女性の活躍が少なく残念です。一月号では数通の顔面騎乗を待望するM男性の文が載りましたが真のS女性とM男性のプレイは、やはり腕力によるS女性の男性支配だと思ひます。私のイメージは次のようなものです。柔道着をつけたS女性と柔道の乱取りのスタイルで組み合い、互いにわざをかけた合いながら必死に闘います。そしてわざのすぐれた女性がかけた腰投げがきまり、どっと倒れた男性

の上に素早く馬乗りになり組み敷いてしまいます。まず男性の両手は張りつけにして胴じめにして責めつけます。「さあ、どうだ」と言つて上から見下ろしながら、馬乗りを楽しんでいる女性は、Sの最高だと思ひます。こうして何回も格闘を繰りかえし、男性をグロッキーにし、最後には男性の胸の上に跨り、実力による男性支配を行ないます。S女性で私を實力で支配して下さい方の出現をお待ちしております。

(東京・青木雄三郎)

本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫の僅少ななものもありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三カ月以上予約御注文以外(既刊号は含まず)は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は△小包▽にて発送申し上げます。

在庫一覽表

既刊雜誌在庫案内

昭和40年6月号	昭和40年7月号	昭和40年8月号	昭和40年9月号	昭和40年10月号	昭和40年11月号	昭和40年12月号	昭和41年1月号	昭和41年2月号	昭和41年3月号	昭和41年4月号	昭和41年5月号
(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)

昭和41年6月号	昭和41年7月号	昭和41年8月号	昭和41年9月号	昭和41年10月号	昭和41年11月号	昭和41年12月号	昭和42年1月号	昭和42年2月号	昭和42年3月号	昭和42年4月号	昭和42年5月号	昭和42年6月号	昭和42年7月号	昭和42年8月号	昭和42年9月号	昭和42年10月号	昭和42年11月号	昭和42年12月号	昭和43年1月号	昭和43年2月号	昭和43年3月号	昭和43年4月号	昭和43年5月号	昭和43年6月号
(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)	(送共三二〇円)

昭和43年6月号	昭和43年7月号	昭和43年8月号	昭和43年9月号	昭和43年10月号	昭和43年11月号	昭和43年12月号	昭和44年1月号	昭和44年2月号	昭和44年3月号	昭和44年4月号	昭和44年5月号	昭和44年6月号	昭和44年7月号	昭和44年8月号	昭和44年9月号	昭和44年10月号	昭和44年11月号	昭和44年12月号	昭和45年1月号	昭和45年2月号	昭和45年3月号	昭和45年4月号	昭和45年5月号	昭和45年6月号
(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)	(送共三七〇円)

編集後記

○いづれ、なんらかの反論があるのでは？
とは思っていましたが、やっぱり……の感を抱きながら組ませてもらったのが、巻頭掲載の「一寸一言」△義憤生▽。人それぞれの好みによることは当然でしょうが、ずいぶん受けとり方も違うものですね。同じ愛好者の中ですらこうだもの、無理ないことでしょうか。よネ、怖いオバさん連と我々のギャップは。○松山壮吉氏「生理めプレイ」体験記。イヤやるもんですなあ、マツタク。プレイ自体は共鳴者のみに通じることでしょうが、そこまでの理解と協力？の出来る奥さんに恵まれていられることにこそ、ヨダレを流すヒトもあるんじゃないでしょうか。……そのうえ

まだ、夫婦交換プレイを望むなんてゼイタク……なんていうのはだれです！嫉かない嫉かない。人間とは、より高く、より深く、求めるが故に尊し……とか。イヤ、厄介なことでありますナア。
○短篇創作「蒼い陽」△堀尾和高▽「わるいヤツ」△予世場良三▽の二篇は、従来の大方のものとは異質の感じ。小説としては、多少舌足らずのソシリは免れ得ないが、そこがそれアマチュアのいいところ？云わんとするところはわかりますナア、ホノボノと……。○団鬼六先生のご身辺俄かに多忙を極めた由で、不本意ながら休載の「花と蛇」。来号には百枚を約束するとの連絡を戴いた。二号続いた穴を一举に埋めて余りあるものをとのことですので、ファンの皆様、ご期待下さい。

「懸賞原稿募集」

△体験、告白、手記▽

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけ、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千元以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語▽

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

△感想、論評、批判▽

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

△（映画、雑誌）通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

発表作品に限ります。これはと思う作品は必ず誌上に取り上げます。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万元迄贈呈。

処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千元以上の賞金贈呈。

◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに依じないことになっております。故悪しからず御諒承願います。◎本文記事中に各種の「懸賞原稿募集」を致してあります。故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

△読者通信原稿▽

巻末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放してあります。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆ 本誌御購読の榮 ☆

に限り 予約
一月分(1冊)三五〇円△送20円▽
三月分(3冊)一〇五〇円△送共▽
半年分(6冊)二一〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

二月号 (第二十四巻第二号)
(通刊第二百六十二号)

昭和四十五年一月二十日 印刷
昭和四十五年二月一日 発行

編集人 杉原虹児
発行人 北村俊夫
印刷人 村俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

郵便番号558
△振替口座大阪四二七八三番
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大塚特別投承認雑誌第二二〇号

☆ 書店の皆様方へお願い ☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に注意して編集いたしております。いような充分に注意して編集いたしております。すが、本来成人向として発行を企図しておりませんが、関係上、十八才未満の方には絶対販売下されませんよう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。